宮城県文化財調査報告書第146集

下草古城跡ほか

平成4年3月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序　　文

近年、各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、それを地域づくりの拠点として整備し活用していこうといった考え方を持つところが多くなってきております。

宮城県としても本間知事の提唱により平成2年度から「われらみやぎの東北学おこし事業」を実施するなど、国際化の推進や産業経済の発展の基盤となる歴史と風土に根ざした東北の「地域らしさ」の確立に努め、21世紀に向けた新たな県土づくりに取り組んでいるところであります。

一方、近年の本県における各種開発事業の活発化には目を見張るものがあります。道路建設や圃場整備など生活関連事業をはじめ、ゴルフ場などの大規模なレジャー施設や工場団地・住宅団地の進出が著しく、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊の危機にさらされる場合が多くなってきています。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を即物的に解明することが出来る貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものであります。まさに「東北学」を考える上での最も基本となる資料と言えます。

しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであるため、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき平成3年度に当教育委員会が行った発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のため役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘作業にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成4年3月

宮城県教育委員会教育長　**大立目　謙 直**

目　　次

平成 3 年度発掘調査の概要 1
下草古城跡 ..... エラー! ブックマークが定義されていません。
新谷地北遺跡 ..... エラー! ブックマークが定義されていません。
尾田峰貝塚 103
椿貝塚 125
諏訪館前遺跡 165
中屋敷前遺跡 175
伊治城跡 193
赤井遺跡 201

例　　言

1　本書は宮城県が平成 3 年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査等の調査報告書である。

2　各遺跡の発掘調査から調査報告書作成にいたる一連の作業は、調査の原因となった開発行為に関わる機関の委託を受けて文化財保護課が行ったものである。

3　各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては各開発担当部局や地元教育委員会等から多大な協力を頂いた。

4　本書に使用した土色については「新版標準土色帖」（1973）を参照した。

5　本書に各遺跡の位置図として掲載した地形図は建設省国土地理院発行の 1/25,000 もしくは 1/50,000 の地図を複製して使用した。

6　本書は調査員全員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。

発掘調査の概要－小井川和夫、下草古城跡－須田良平、新谷地北遺跡－木皿直幸・早川英紀、尾田峰貝塚－茂木好光（石巻工業高校）・菅原弘樹、椿貝塚－菅原弘樹・天野順陽、諏訪館前遺跡－森貢喜（蔵王町教育委員会）、中屋敷前遺跡－佐々木安彦（大河原町教育委員会）、伊治城跡－佐藤則之、赤井遺跡－阿部博志

7　発掘調査で出土した遺物および調査記録類などは宮城県教育委員会ないし地元市町村教育委員会で保管している。

平成3年度発掘調査の概要

〔下草古城跡〕

大和町南部・吉田川の支流竹林川流域の沖積地土に立地する城跡で、伊達政宗の 3 男宗清が慶長 16(1613)年入府し、元和 21(1616)年吉岡に移るまでの居城とされる。現状でも、本丸・二ノ丸と伝えられる中枢部は周囲より一段高い部分として残り、またそれらを区画する堀跡も明瞭に確認できるなど、平城としては県内でも保存状況の良い城跡の一つといえる。さらに明治期の地籍図では城跡の東・南部の平地にも縦横に堀状に水路が配されていたことが窺われ、城下町が存在していたことも想定できる。

昭和 63 年この地域一帯が県営圃場整備事業計画地域に含まれたが、以来城跡の取扱について協議を重ね、地形的な高まりとして認識される城跡部分は付属する堀跡も含めて事業計画から除外されることとなった。今回の調査は周囲に展開する平地部分を対象とした遺構確認調査である。

〔新谷地北遺跡〕

古川市西部の丘陵上に立地する遺跡で、県営圃場整備事業実施に伴って調査したものである。この遺跡は当初は周知されていなかったが、古墳時代後期の日光山古墳群の隣接地であることから県農政部の要請を受けて遺構確認調査を実施した。調査は水稲・大豆等の作付け地を避けた部分的なものであったが、丘陵斜面下部において平安時代の竪穴住居跡数棟が検出された。この部分については協議の結果、計画変更によって盛土下に保存されることになった。

稲刈り後、確認が不充分であった地区について再び調査を実施したところ、前回の調査で大きく削平を受けていると判断した丘陵頂部で、古墳の痕跡及び土壙群などが検出され、削平されてはいるもののなお遺構が残存していることが明らかになった。しかし、この時点で圃場整備事業は遺跡範囲外の各所で進行中であり計画変更は困難な段階にあったことから、この地区については事前調査を実施することとした。

〔尾田峰貝塚〕

女川町西部・万石浦に注ぐ沢筋に形成された縄文時代後・晩期の貝塚である。昭和 40 年代に一部発掘調査が行われ、大型の遮光器土偶が出土したことで良く知られている。現状は、遺跡の主体部と思われる部分は畑地として旧状を留めているとみられるが、周辺は宅地化が進行し貝層の位置も明確でない。今回の調査は畑地部分において個人住宅建設計画が提示されたことに対応しての遺構確認調査であるが、あわせて貝層位置の確認もおこなった。

〔樽貝塚〕

亘理町北部の台地上に立地する、仙台湾南部における代表的な貝塚の一つである。高さ5～6mの台地の縁辺に環状に貝層が形成されており、過去の調査で縄文後期中葉・晩期後葉の地点が確認されている。今回の調査は、平成2年夏の大雨の際、台地縁辺の一部が崩れ崖面に貝層が露出したことから、その保全を行うとともに露出した貝層の時期や内容を確認するために実施したものである。

〔諏訪館前遺跡〕

蔵王町北部・円田盆地西縁の丘陵上に立地する縄文時代から古代に亘る遺跡である。昭和63年には幼稚園建設に先立つ発掘調査によって古墳前・中期の竪穴住居跡13棟など多くの遺構が検出されている。本調査は、平成3年11月、遺跡のほぼ中央部地点で個人住宅建設についての協議があったことから地下遺構のありかたを確認するために実施したものである。

〔中屋敷前遺跡〕

大河原町南部の自然堤防上に立地し、県内では数少ない平安時代中頃の瓦が出土する遺跡として知られている。平成2年、個人住宅建設計画に伴って遺構確認調査が実施され、礎石式の建物跡2棟の存在が明らかになった。しかし、期間の制約があり調査範囲が全域におよばなかったことから今年度も引き続き調査を実施したものである。

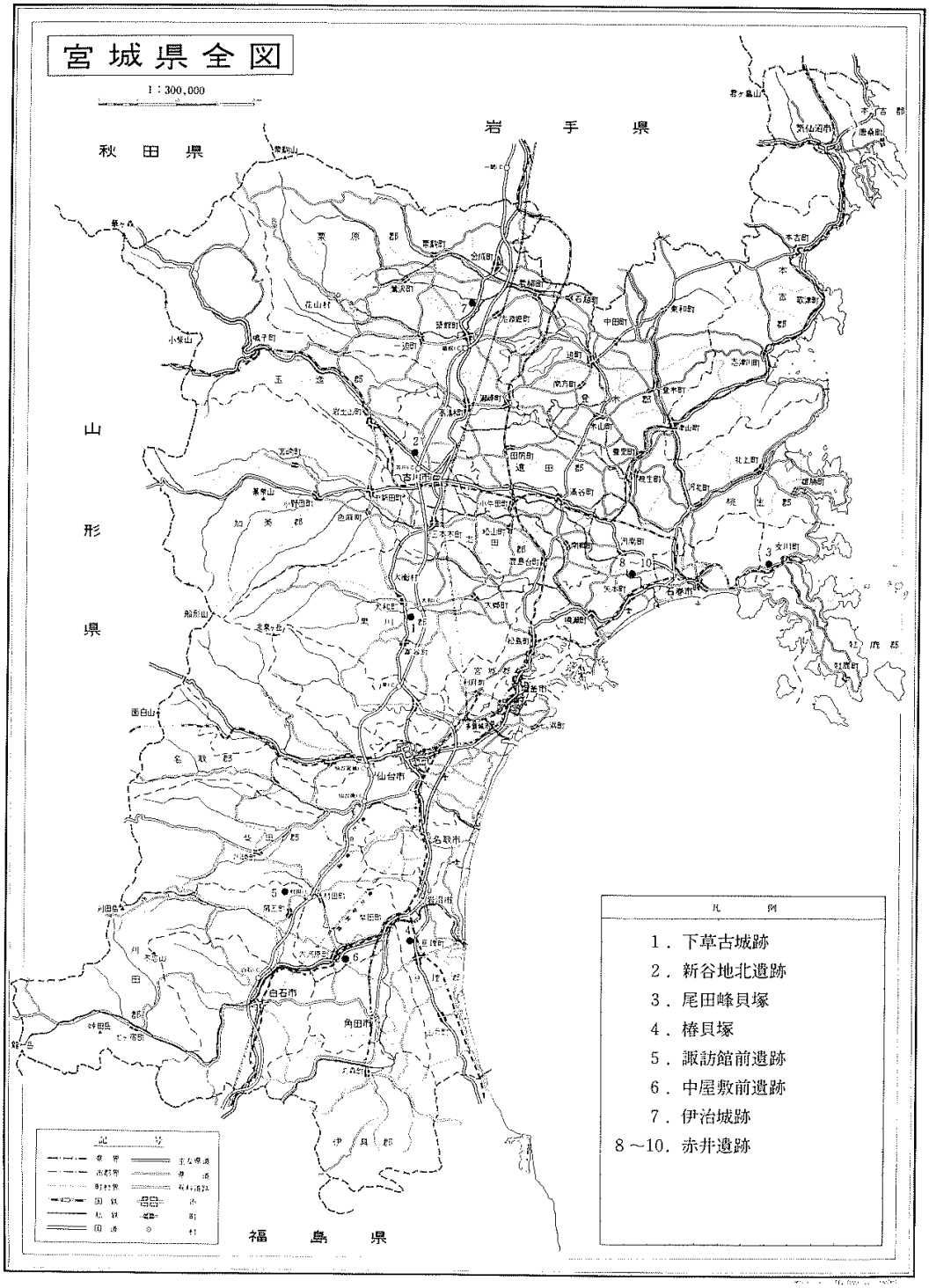
〔伊治城跡〕

伊治城は奈良時代の神護景雲元(767)年に、現在の築館町城生野地区に設置された古代城柵である。昭和52年以来、一時の中断はあるものの、ほぼ継続的に調査がおこなわれ、その内容が次第に明らかになってきている。今回の調査は個人住宅建設計画に伴うものである。調査地点は外郭北辺の区画施設とみられる大溝の外側にあたるが、地形的にも連続する隣接地であることから調査を実施した。

〔赤井遺跡〕

矢本町北部の自然堤防上に東西3.5km・南北1kmの範囲で展開する遺跡である。「舎人」と書かれた須恵器が採集され、また昭和61年に行われた発掘調査では奈良時代の掘立柱建物跡や材木塀跡が検出されたことから、牡鹿柵跡、牡鹿郡衙跡、ないしは豪族道嶋一族の居館跡と推定されている。今回の調査は遺跡内において2件の個人住宅建設計画が提示されたことに対応しての遺構確認調査である。

No.	遺跡名	所在地	開発事業の種別	開発担当部局	備考
1	下草古城跡	大和町鶴巣	県営圃場整備	仙台土地改良事務所	近世の掘立柱建物・井戸・溝跡・平安時代の住居跡発見
2	新谷地北遺跡	古川市宮沢小林字新塚原	県営圃場整備	古川土地改良事務所	土壙墓多数・住居・溝跡・古墳等発見
3	尾田峰貝塚	女川町浦宿浜字尾田峰	住宅建設	個人	縄文時代の貝層発見
4	椿貝塚	亘理町逢隈上郡字椿	貝層保護		縄文時代後期の貝塚
5	諏訪館前遺跡	蔵王町大字平沢字上ノ台	住宅建設	個人	古墳時代の土壙発見
6	中屋敷前遺跡	大河原町字広瀬町	住宅建設	個人	平安時代の礎石建物跡発見
7	伊治城跡	築館町城生野	住宅建設	個人	古墳時代の区画溝・土壙等発見
8	赤井遺跡	矢本町赤井字寺	住宅建設	個人	遺構・遺物なし
9	赤井遺跡	矢本町赤井字照井中	畜舎建設	個人	柱穴・溝跡等多数発見
10	赤井遺跡	矢本町赤井字照井中	住宅建設	個人	古代の住居跡・土壙等発見
11	木戸脇裏遺跡	岩出山町南沢字木戸脇裏	貯木場建設	宮城県森林組合連合会	遺構・遺物なし
12	亀岡遺跡	大衡村大衡字亀岡	住宅建設	個人	遺構・遺物なし
13	品濃遺跡	角田市枝野字品裏	住宅建設	個人	時期不明の土壙・ピット発見
14	念南寺古墳群	色麻町四釜字東原	地形図作成		前方後円墳・円墳


宮城県全図
1：300,000
岩手県
秋田県
山形県
福島県
凡例
1．下草古城跡
2．新谷地北遺跡
3．尾田峰貝塚
4．椿貝塚
5．諏訪館前遺跡
6．中屋敷前遺跡
7．伊治城跡
8～10．赤井遺跡

下草古城跡（しもくさこじょうあと）

目　　次

第１章　遺跡の位置と環境 ……7
　1．遺跡の位置 ……7
　2．遺跡の現状と推定される城郭構造……7
　3．歴史的背景と周辺の遺跡 ……9
　4．文献上の下草古城跡 ……9
第２章　調査の目的と方法・経過 ……10
　1．調査の目的 ……10
　2．調査の方法と経過 ……10
第３章　発見された遺構と遺物 ……13
　1．トレンチ調査 ……13
　2．整地Ｃ区 ……17
第４章　考察 ……30
　1．古代の遺構と遺物 ……30
　2．中世以降の遺構と遺物 ……31
第５章　まとめ ……34
　引用・参考文献 ……34

調 査 要 項

遺　跡　名：下草古城跡（しもくさこじょうあと）
　　宮城県遺跡地名表記載番号 260
遺 跡 記 号：ＯＧ
遺跡所在地：宮城県黒川郡大和町鶴巣下草
調 査 原 因：県営ほ場整備事業
発 掘 面 積：約 6000 ㎡
調 査 期 間：1991 年 9 月 9 日～11 月 6 日
調 査 主 体：宮城県教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：佐藤則之、須田良平、吾妻俊典、窪田忍
調 査 協 力：大和町教育委員会・宮城県仙台土地改良事務所・大和東部土地改良区

下　草　古　城　跡

第1章　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置（第1図）

下草古城跡は、黒川郡大和町鶴巣下草に所在する。大和町の中心部、吉岡から南東に 3km 程のところに位置する。

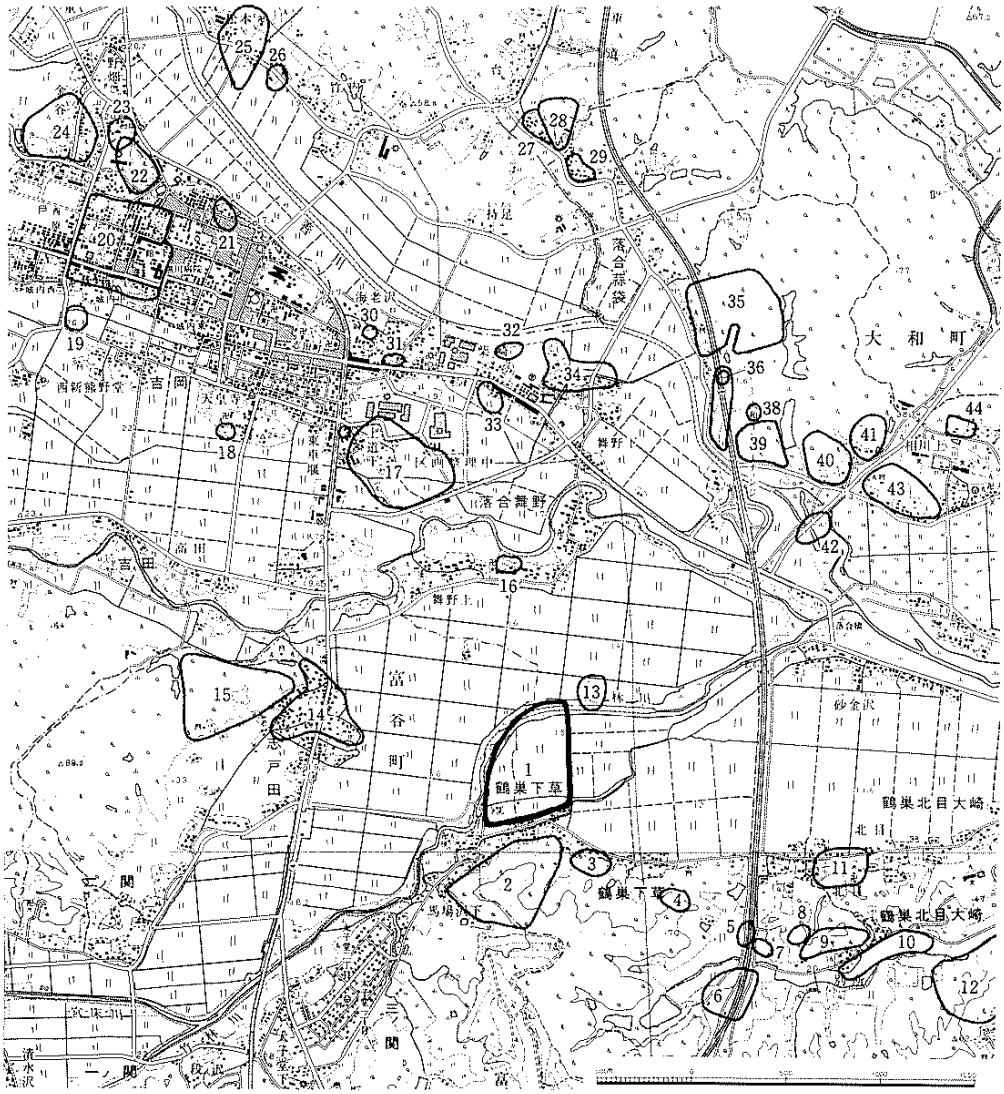
奥羽山脈・船形連峰に端を発した吉田川とその支流である善川、竹林川は、徐々に高度を下げ周辺を開析しながら東流する。大和町の中心部・吉岡から舞野、下草付近では、吉田川に北西から善川、南西から竹林川が合流しており、広く沖積平野が広がっている。遺跡は竹林川が合流する地点から 1.5km 程上流にあり、標高 13～15ｍの沖積地中の自然堤防とその周辺に立地する。

2．遺跡の現状と推定される城郭構造（第2・3図）

遺跡の範囲は東西 500ｍ以上、南北約 600ｍで、北西隅の欠けた長方形を呈する。遺跡の北と西は竹林川に区画され、竹林川に沿った部分は河川改修によって原形を失っている。南は鶴巣館の立地する丘陵に接している。一方、東側は沖積地が広がり、圃場整備のため遺跡の範囲は明瞭ではない。遺跡の現状は水田や畑であり、標高の低い部分は水田、それよりも一段高い平坦な部分は畑として利用されている。

これらを詳細に見てみると、遺跡の南側は水田が広範囲に広がっているのに対して、北側は一段高い畑の部分が広がり、それらを二重に取り囲むように細長い水田部分が認められる(第 3 図)。これは城跡の地割を反映するものであり、高い部分は本丸や二の丸、低い部分は堀という、北端中央の畑部分を中心とした城郭配置の様子が明瞭に残存しているものと考えられる。

こういった構造については、渡辺・大藤両氏が『大和町史』において明治 19 年の地籍図(以下地籍図と略記)をもとに推定復元している。それによれば、北端中央のほぼ正方形を呈する畑部分が本丸、これを囲み堀と考えられる水田部分があり、その外側に「コ」の字状を呈する二の丸と考えられる部分が認められる。このさらに外側に外堀と考えられる水田がある。ここまでが城の郭内と推定しており、現状も当時とはほとんど変わっていない。郭外とされた東側、南側には、地籍図によると堀（水田）によって細かく区割りされた部分が広がり、侍屋敷跡と推定されている。しかし現状では高い部分は島状に散在するのみであり、後世削平されて水田として利用されている。この南側の水田範囲では、細長い水田の形から堀と推定可能なところもあるが、内側の堀ほど明確なものではない。



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	下草古城跡	集落跡・城跡	古代・中世	16	上舞野B遺跡	包含地	古代	31	糸繰遺跡	包含地	縄文・古代
2	鶴巣館跡	城跡	中世	17	一里塚遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	32	西涌田遺跡	包含地	平安
3	道遺跡	包含地	古代	18	天皇寺遺跡	包含地	平安	33	柴崎遺跡	包含地	奈良
4	観音堂小塚群	小塚	中世・近世	19	東遺跡	包含地	古代	34	古川遺跡	包含地	古代
5	日光山遺跡	墓・祭祀遺跡	奈良・平安・中世・近世	20	吉岡城跡	城跡	江戸	35	御所館跡	城跡	中世
6	跡負沢遺跡	包含地	縄文中・平安	21	安楽院遺跡	包含地	縄文中・後	36	新田古墳 1・2号	古墳	古墳後
7	日光山西小塚	小塚		22	中興寺遺跡	包含地	縄文・晩	37	八谷館跡	城跡	中世
8	日光山小塚群	小塚	中世	23	石神沢遺跡	包含地	旧石器・縄文晩・平安	38	新田古墳 3号	古墳	古墳後
9	別所横穴古墳群	古墳	古墳	24	金谷遺跡	包含地	旧石器・縄文中～晩	39	八谷古城跡	城跡	中世
10	別所遺跡	包含地	古代	25	松本遺跡	包含地	縄文・古代	40	大沢遺跡	包含地	古代
11	寺東遺跡	包含地	古代	26	要害遺跡	包含地	古代	41	上ノ山遺跡	包含地	平安
12	天神館跡	包含地・城跡	縄文・中世	27	下屋敷遺跡	包含地	古代	42	相川堤防遺跡	包含地	縄文・古代
13	上舞野A遺跡	包含地	縄文・古代	28	鞍館跡	城跡	中世	43	熊野遺跡	包含地	古代
14	三ヶ森遺跡	包含地	奈良・平安	29	岩下遺跡	包含地	古代	44	塚越遺跡	包含地	古代
15	馳取遺跡	城跡	中世	30	海老沢遺跡	包含地	縄文中				

第1図　周辺の遺跡

以上のように当遺跡は、平野部に築かれた城としては現状からも当時の様子が推定できる、県内でも唯一といえる保存状態の良好な遺跡である。

3．歴史的背景と周辺の遺跡（第1図）

鶴巣下草地区は、古代には多賀城から大崎地方に抜ける重要な駅路に当たり、一説にはこの付近に黒川駅屋があったともいわれている。

中世においても、吉岡から東の吉田川の両側に広がる平野部は黒川郡の中心に位置し、依然として交通の要所でもあり、非常に重要な地域であった。この平野部の周辺の丘陵上には 10 以上の館跡が知られている。それらのうち特に御所館、鶴巣館は、中世から戦国時代にかけて黒川郡一帯を支配した黒川氏の居城として有名である。

御所館は北側の丘陵上に位置し、南ににらみを利かせた立地である。発掘調査の結果、20 程の平場と大規模な堀などを配する東西 300m、南北 400m程の規模をもつ室町時代後半の城郭であることが確認された。またこの館跡が黒川氏前期の本城であり、黒川氏が大崎氏に属して南の伊達氏への守りを固めていた時代のものであることを明らかにしている。御所館のすぐ南側には幅 30m程の沢を挟んで八谷館がある。黒川氏の系列に属するという八谷氏が居住したといわれており、発掘調査の結果、規模は小さいものの御所館と同じ時期で、同様に伊達氏に備えたのものと考えられている。

これらに対して鶴巣館は、下草古城跡の南側の丘陵上に位置し、北ににらみを利かせた立地である。測量調査と本丸部の一部が発掘調査され、この館跡の一端が明らかになっている。館跡の範囲は東西 550m、南北 300mで、本丸から七の丸までの多数の平場や腰郭状の数段の細長い平場、空堀、土塁を備えた、県内でも有数の規模を誇る城郭である。黒川氏最後の晴氏を三代さかのぼる景氏が伊達側についたときに、北（大崎氏）に対する構えとして御所館から移ってきたもので、築城年代は 1540 年代といわれ、黒川氏最後の館として 1500 年代の末まで機能していたと考えられている。黒川氏の居城が鶴巣館に移ったことで、下草付近には寺院や町場などが形成されたと推定される。しかしその位置や規模、配置などは定かではない。

4．文献上の下草古城跡

『仙台領古城書立之覚』には、

平　古城　東西四十六間、南北六十八間。但四方ニ土手形上口八間之堀アリ西北ハ川東南ハ幅四間長二百八十間ノ掘アリ

とある。ここに記された城の規模をメートルに直すと、東西 82.8m、南北 122.4m、四方に巡らされた堀の幅は 14.4m、南の堀は幅 7.2m、長さ 504mである。これは現在の本丸とそれを囲む堀と推定される部分、そして南の堀を二の丸の外側を巡る堀と推定すると、

その堀の総延長とほぼ一致する。

城主及び年代については『下草村風土記御用書出』には、

御城主伊達河内守宗清様慶長年中御取立八九年御居城被遊元和二年（1616 年）今村吉岡へ御取移被成置候事

とあり、伊達政宗の三男で、伊達家の重臣であった飯坂家の後を継いだ宗清が一時期居城したという。飯坂家の牌所で、現在吉岡にある天皇寺の『書上』によると、この寺は飯坂家に従って伊達郡飯坂村（福島県）から宮城郡松森村に移り、さらに宗清の移動にともない、慶長十六年（1611 年）に下草に移ったという。そして元和二年に吉岡に移ったとあり、下草古城跡の年代を裏付けている。

以上のように下草古城跡は、文献に記された城の規模とほぼ一致し、記録では 17 世紀初頭のほんの数年の間宗清が居城していたことが知られているだけである。

第2章　調査の目的と方法・経過

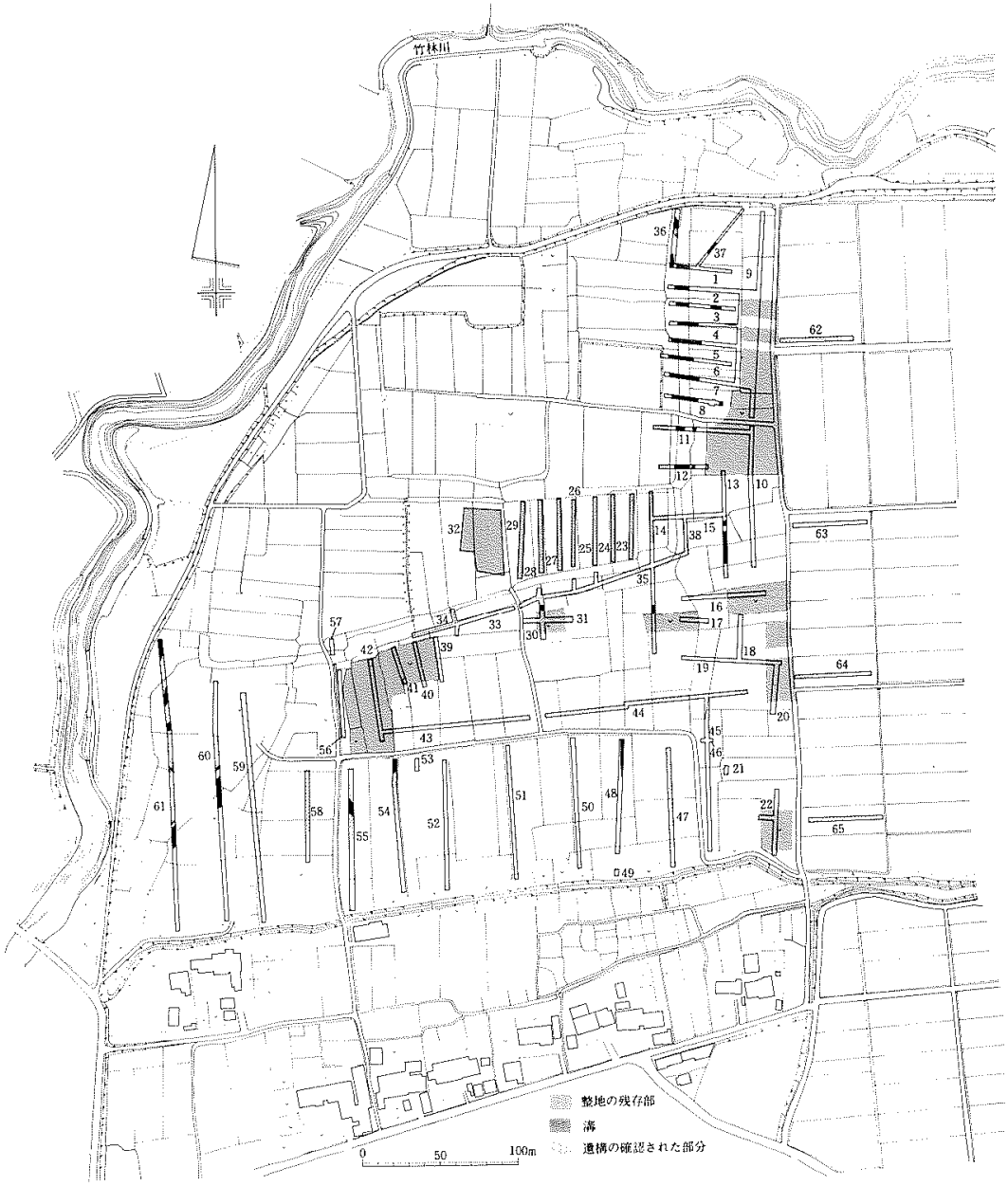
1．調査の目的

今回の調査の対象地域は、先に二の丸と推定した地域よりも外側、遺跡範囲の東側と南側に当たる。この地域には水田の形から堀と推定される部分や、建物などが建っていた可能性のある一段高い部分が散在している。今回の調査は、この地域の遺構の有無や配置などを確認することを目的とした。

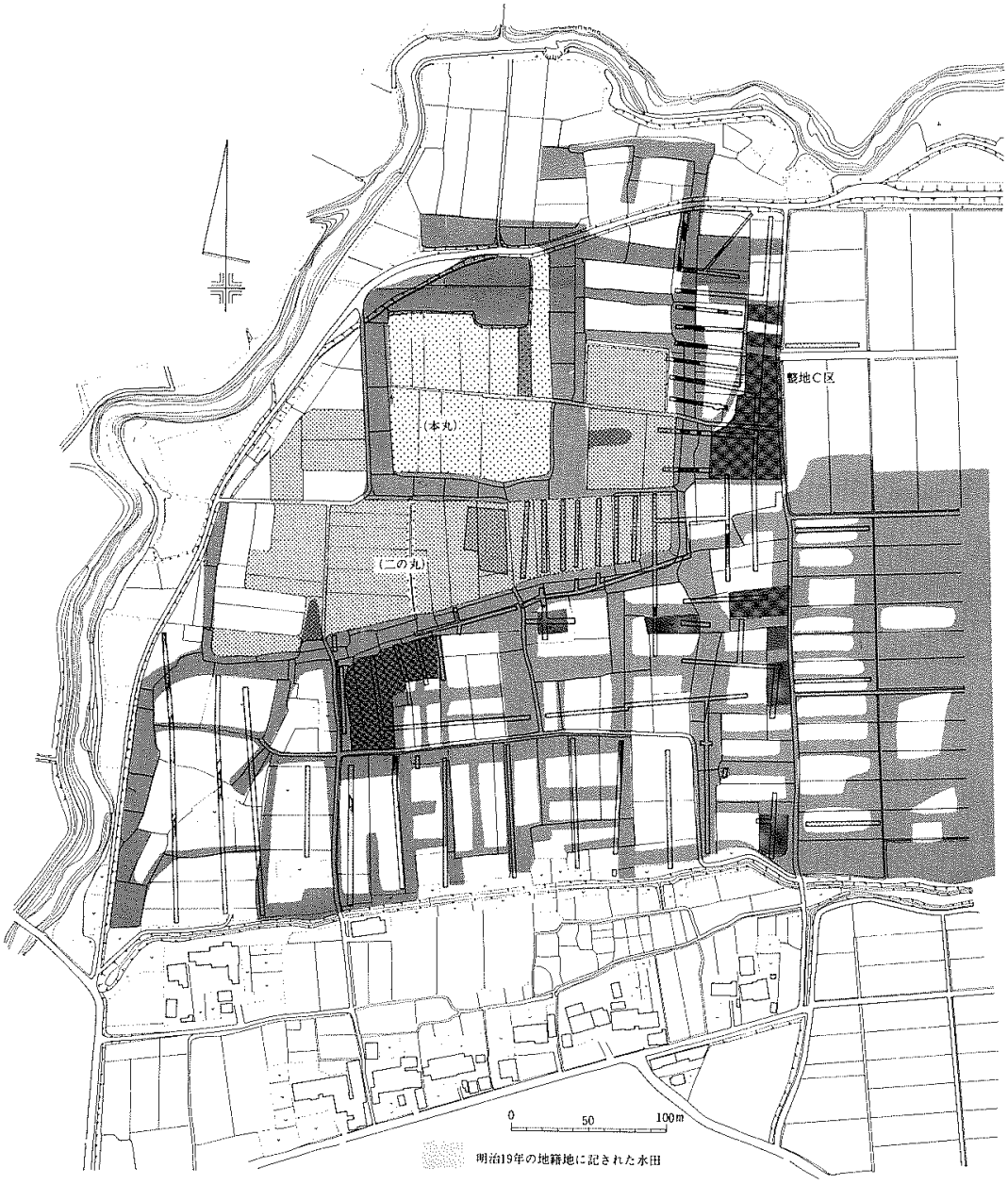
2．調査の方法と経過

調査は 9 月 9 日に開始し、上記の目的に沿って、地形、水田の形態などを考慮しながら、適宜トレンチを配して行なった。そして遺跡の北東部において、良好な整地層が 3 か所確認されたためこの範囲を拡張し、広がりを確認するとともに、C 区とした整地層の一部を発掘した。平行して行なったトレンチ調査は合計 65 本、5000 ㎡である。また整地層の調査の結果、従来の遺跡範囲の東端となっていた南北道路よりもさらに東に遺構が延びる可能性がでてきたため、地権者の同意を得て 4 本のトレンチを設けて遺跡の東側部分の確認調査を行なった。11 月 2 日には一般の人々を対象とした現地説明会を開催し、11 月 6 日に調査を終了した。

トレンチ調査部分と整地層の遺構については、簡易遣り方・平板測量による平面図を作成し、精査した遺構については必要に応じて断面図を作成した。写真記録については 35㎜白黒写真、カラー・リバーサル写真によって行なった。



第２図　遺跡の地形とトレンチ配置図



第3図　遺跡全体図

第3章　発見された遺構と遺物

1．トレンチ調査（第2・3・4図）

合計 65 本のトレンチを設定し遺構の確認調査を行なった。以下にその概要を述べる。

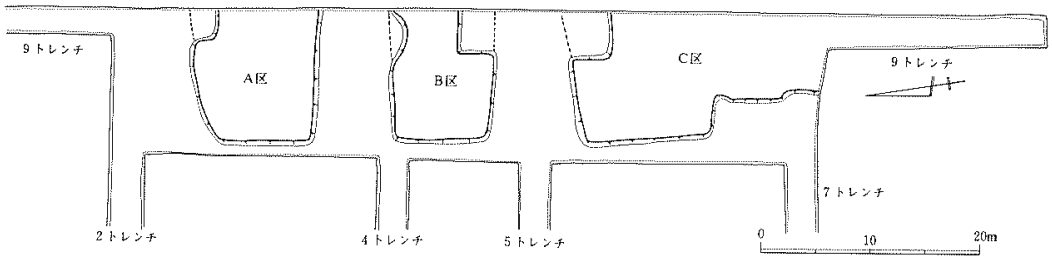
[整地]南北方向に設定した 9 トレンチにおいて東西に延びる 3 か所の整地区が確認され、北からＡ～Ｃ区とした。(第 4 図)いずれも周囲を後世に削平され、構築時の状態を残していない。確認段階での規模は、南北がＡ区 6m、Ｂ区 5mで東西はいずれも 6m以上の方形を基調とした平面形を呈する。Ｃ区は 10・11 トレンチで確認された整地に続き、南北 52m東西 45m以上の範囲であったと推定される。いずれの整地も灰白色火山灰の上に堆積した旧表土の上に土を盛って形成されており、最大厚 50cm 程である。

14･23～29･32 トレンチは二の丸と推定される部分であり、ここでも整地が確認された。

この他、16 トレンチ、14・17 トレンチ、19・20 トレンチ、22 トレンチ、30・31 トレンチ、39～42 トレンチにおいても旧表土に盛土した整地が確認された。これらもすべて周囲を後世に削平され、構築時の状態を残していない。

以上は現状でも畑として利用されている高い部分であり、地籍図で高い部分とされた範囲が削られて、かろうじて残存したところである。また、他の現状で高い部分は、確認調査ができなかったところを除き、後世盛土されたものである。

[溝]1～8 トレンチでは最大幅約 40mの大溝が確認された。南北に延び、二の丸の外堀と推定される。ただし 11 トレンチでは東に幅約 3m、西に幅約 7mの溝が、12 トレンチでも同様に幅約 2m、幅約 10mの溝が確認され、南北溝が二つに分かれている。2・3・4・9 トレンチでは連続すると考えられる幅約 7mのＬ字型の溝、36・37 トレンチでも連続すると考えられる幅約 9mの北西－南東溝が確認された。15・33・34・35・38 トレンチでは、出水のため範囲は確認できなかったが、二の丸の外堀と考えられる溝が確認された。14 トレンチでは整地の北側に幅約 6mの東西溝、13 トレンチでは北から幅約 3m、幅約 40m2 条の東西溝、48 トレンチ北側では幅 2m以上の南北溝、54 トレンチ北側では幅 10m以上の東西溝、55 トレンチ北側では幅約 6mの北西－南東溝、60 トレンチ中央では北から幅約 2m、幅



第 4 図　整地平面図

約 8m以上の 2 条の北東－南西溝、61 トレンチ南側ではこれと連続すると考えられる北から幅約 2m、幅約 10mの 2 条の北東－南西溝、また同じく 61 トレンチ中央部から北側にかけては、北から幅 8m以上、幅約 5m、幅約 4m幅約 1mの 3 条の北東－南西溝が確認された。

55 トレンチ北側および 61 トレンチ中央部から北側にかけて確認された溝以外は、地籍図で水田と記された範囲と一致する。確認された溝の幅は約 40mの大溝と幅約 2m～10mのものがあり、大溝は二の丸の外堀にほぼ限定できそうである。

［土壙・ピット］整地以外の部分においても、水田床土直下の地山砂層面で土壙やピットを確認した。今回はこれらの分布範囲を確認することに主眼を置いたため、土壙やピットの細かな特徴は明確ではない。62 トレンチは整地Ｂ区の東に位置し、ここで確認された土壙やピットは、本来存在したと思われる整地Ｂ区の東側の延長部分の上面から掘り込まれたと推定される。64・65 トレンチも同様である。43 トレンチ西側、44 トレンチ東側はそれぞれ近くの整地が削られた部分と考えられる。また 44・47・50・52・54・55・58・60・61 トレンチで確認された土壙・ピットの分布範囲も整地が削られた部分と推定され、いずれも地籍図の高い部分と一致する。62・64・65 トレンチの調査結果は、従来の遺跡範囲よりもさらに東にも整地が延びていたことを明らかにしている。

二の丸と推定される 25 トレンチでは焼土を伴う鍛治遺構が確認された。

［竪穴住居跡］8 トレンチの地山の砂層上面において竪穴住居跡を確認した（ＳＩ13）。床面の直上ほぼ全面に炭化物層が分布し、焼失した住居と考えられる。以下にその概要を記す。

〔平面形・規模〕方形を基調とし、規模は長軸 3.8m、短軸 3.4mである。

〔堆積土〕シルトもしくは粘土質シルト層が三層堆積している。南側にしか残存していないが、全面に堆積していたと思われる 1 層、厚さ数 cm でほぼ全面に広がる炭化物層の 2 層、壁際に堆積している 3 層が認められる。1・3 層は自然堆積層である。

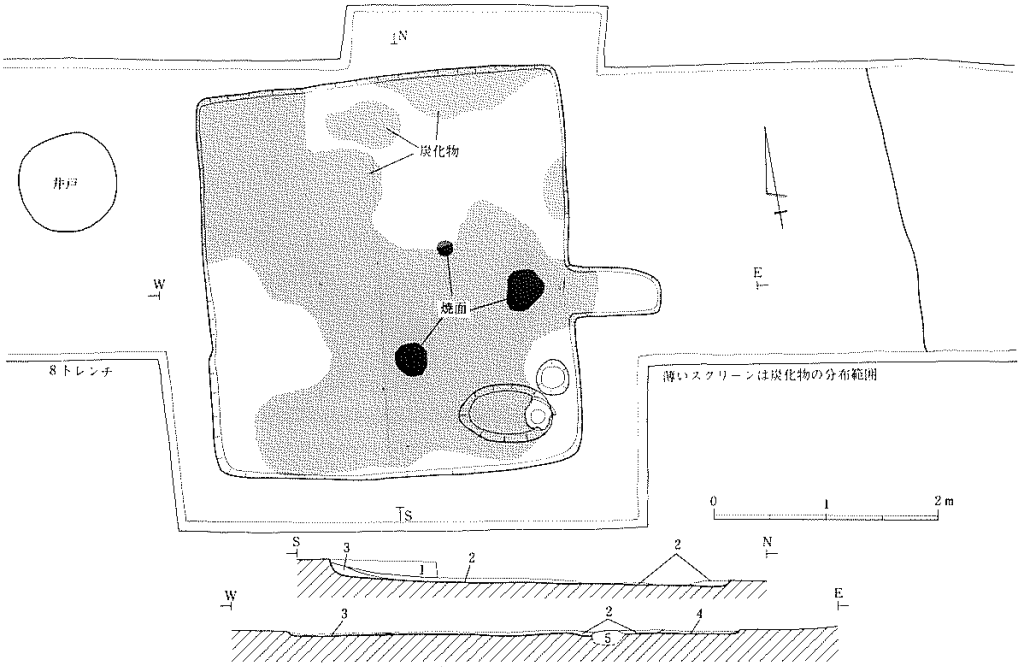
〔壁〕地山を壁としている。傾斜をもち、上方に向かって開くように立ち上がる。壁の高さは最も深い南壁で 16cm である。

〔床面〕地山を床とし、やや凹凸がある。床面中央東よりに直径 15cm、南よりに直径 30cm の焼け面が認められる。

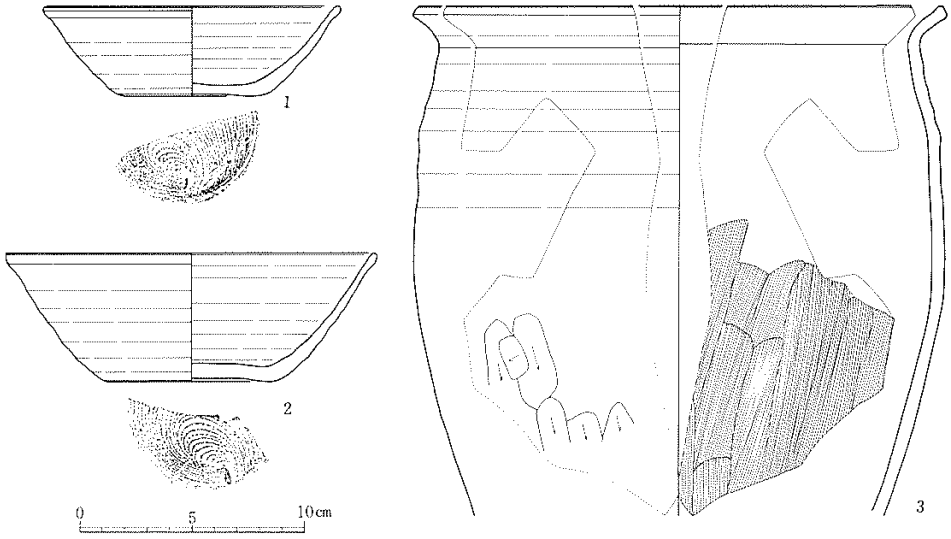
〔柱穴〕確認されなかった。

〔カマド〕東壁中央やや南よりに、40×30cm の楕円形の堅く締まった焼け面が認められ、この部分がカマドであったと思われる。袖は残存していない。煙道は燃焼部底面から段差なく、外側に 80cm 程延びる。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの右隣において確認され、長軸 80cm、短軸 50cm の楕円形を呈

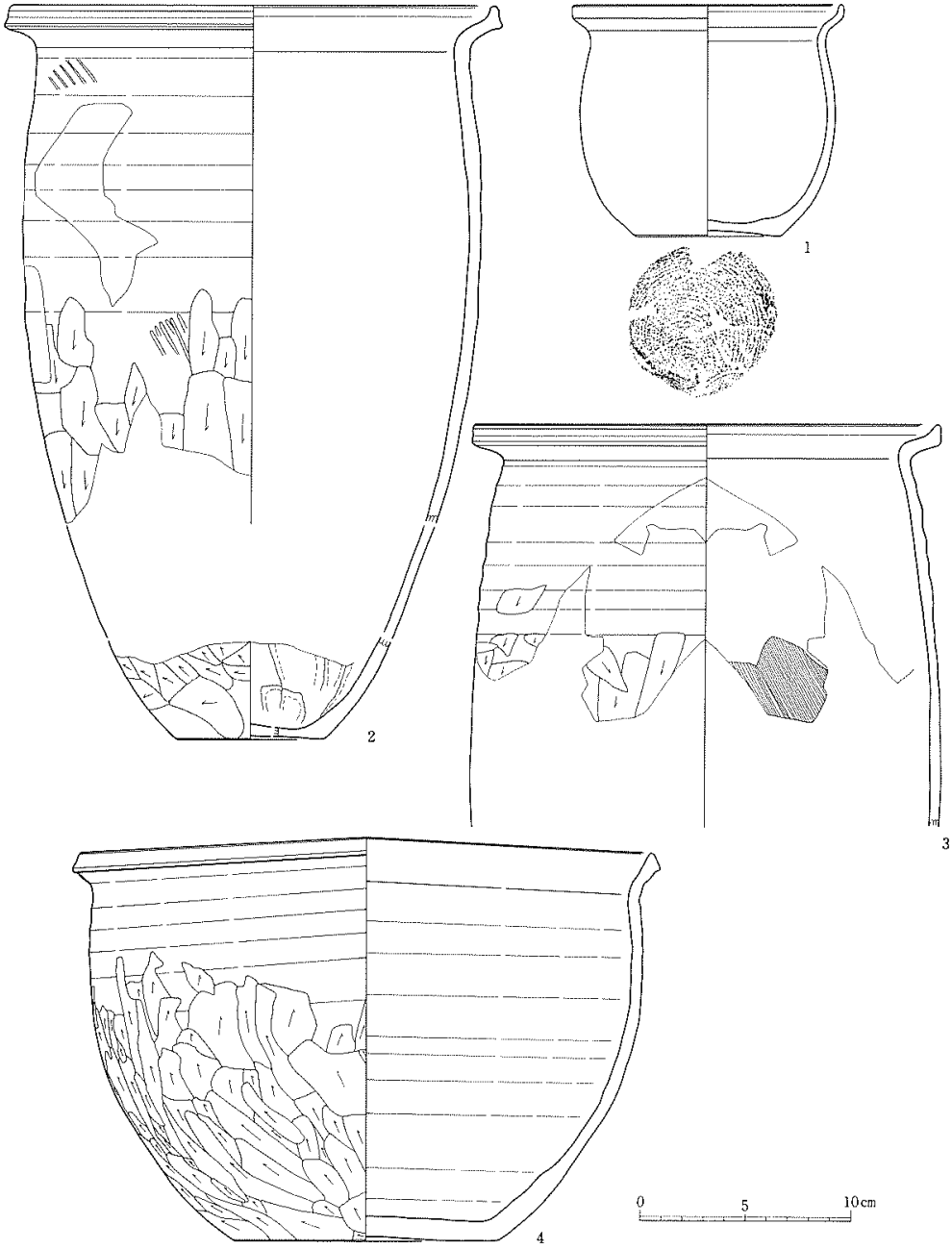


層位	土　　色	土　性	備　　考
1	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	粘土質シルト	炭・焼土を含む。
2	黒　(7.5YR 2/1)	シルト	炭を多量に含む。
3	灰黄褐色(10YR 4/2)	粘土質シルト	生活層
4	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	粘土質シルト	煙道内堆積土
5	橙　色(10YR 6/8)	シルト	かたくしまっている。　焼け面（カマド）



番号	出土位置	種　類	器高cm	口径cm	底径cm	内面調査	外面調査	備　考	図版
1	床面	須恵器・坏	4.0	13.3	6.4	ロクロ調整	ロクロ調整・底部回転糸切り		4－1
2	床面	須恵器・坏	5.7	16.5	7.5	ロクロ調整	ロクロ調整・底部回転糸切り		4－2
3	床面	土師器・甕		23.7		ロクロ→ナデ	ロクロ→ヘラケズリ		

第５図　ＳＩ13住居跡と出土土器(1)



番号	出土位置	種　類	器高cm	口径cm	底径cm	内面調整	外面調整	備考	図版
1	床面	土師器・甕	11.0	12.9	7.0	ロクロ調整？	ロクロ調整・底部回転糸切り	残存率30%	
2	カマド	土師器・甕	(35)	23.6	7.0	ロクロ→ナデ	ロクロ→ヘラケズリ		4－4
3	床面	土師器・甕		26.2		ロクロ→ナデ	ロクロ→ヘラケズリ		
4	貯蔵穴	須恵器・甕	19.2	27.8	12.4	ロクロ調整	ロクロ→ヘラケズリ		4－3

第6図　S I 13住居跡出土土器(2)

する。深さは10cm程で、粘質土が自然堆積している。ピット東側からは流れ込んだ状態で須恵器の甕が出土した。

〔出土遺物〕床面から須恵器坏が2点（第5図1・2）、土師器甕が3点（第5図3、第6図1・3）、砥石が1点（第14図1）、カマド焼け面から土師器甕が1点（第6図2）、貯蔵穴状ピットから須恵器甕が1点（第6図4）出土している。

［中世以降の遺物］（第11～15図）

出土した遺物は陶磁器、鉄製品、銅製品、古銭、石製品、土製品、瓦などがある。

｛陶磁器｝陶磁器には、無釉陶器、施釉陶器、染付磁器がある。

無釉陶器（第11・12図）　7は土師質の皿、12は瓦質の香炉で型押しの雷文が施文されている。20の鉢は瓦質で、体部は急に立ち上がり、口縁部は頚部で外側に屈曲する。いずれも55トレンチの溝の堆積土から出土している。19は瓦質の片口で31トレンチで出土している。摺鉢の可能性もある。摺鉢は3点出土している。55トレンチの溝の堆積土から出土したものは、瓦質で筋目が離れている。16 は大甕の体部破片、15 はルツボで、口径 7cm弱と推定される。ひび割れが激しく、内面に黒色の付着物が認められる。いずれも9トレンチから出土している。

施釉陶器（第11図）　細かい破片が多く、器種を同定できるものはほんの僅かである。6は54トレンチの溝の堆積土から出土した美濃の皿である。器種は不明であるが、志野の底部が54トレンチの溝の堆積土から出土している。その他、産地不明の灰釉、鉄釉の施された陶器が出土している。

染付磁器（第11図）　これも細かい破片が多く、器種を同定できるものはほんの僅かである。1は20トレンチから出土した中国産の皿と思われる口縁部破片である。3は広東碗の底部で9トレンチから出土している。その他、青磁の細かい破片も出土している。

｛銅製品｝（第13図）　9トレンチからは装飾品と考えられる円形のもの、16トレンチからは取っ手状のものが出土している。

｛古銭｝（第15図）　9トレンチからは永楽通宝が5点、48トレンチからは元豊通宝が1点、50トレンチの溝の堆積土からは咸平元宝が1点出土している。

｛石製品｝（第12・15図）硯の破片が14トレンチから出土している。9トレンチからは直径30cm弱の石鉢が出土している。攪乱から軽石製の石錘が出土している。

｛土製品｝（第15図）　43トレンチから、着物姿の女性の後ろ半分が出土している。乳白色の胎土で型押しで作られており、中空である。産地不明。

2．整地Ｃ区（第7図）

以下では精査を行なったＣ区の北東隅の状況について説明を行なう。検出された遺構は

整地地業、掘立柱建物跡、井戸、土壙、溝などである。

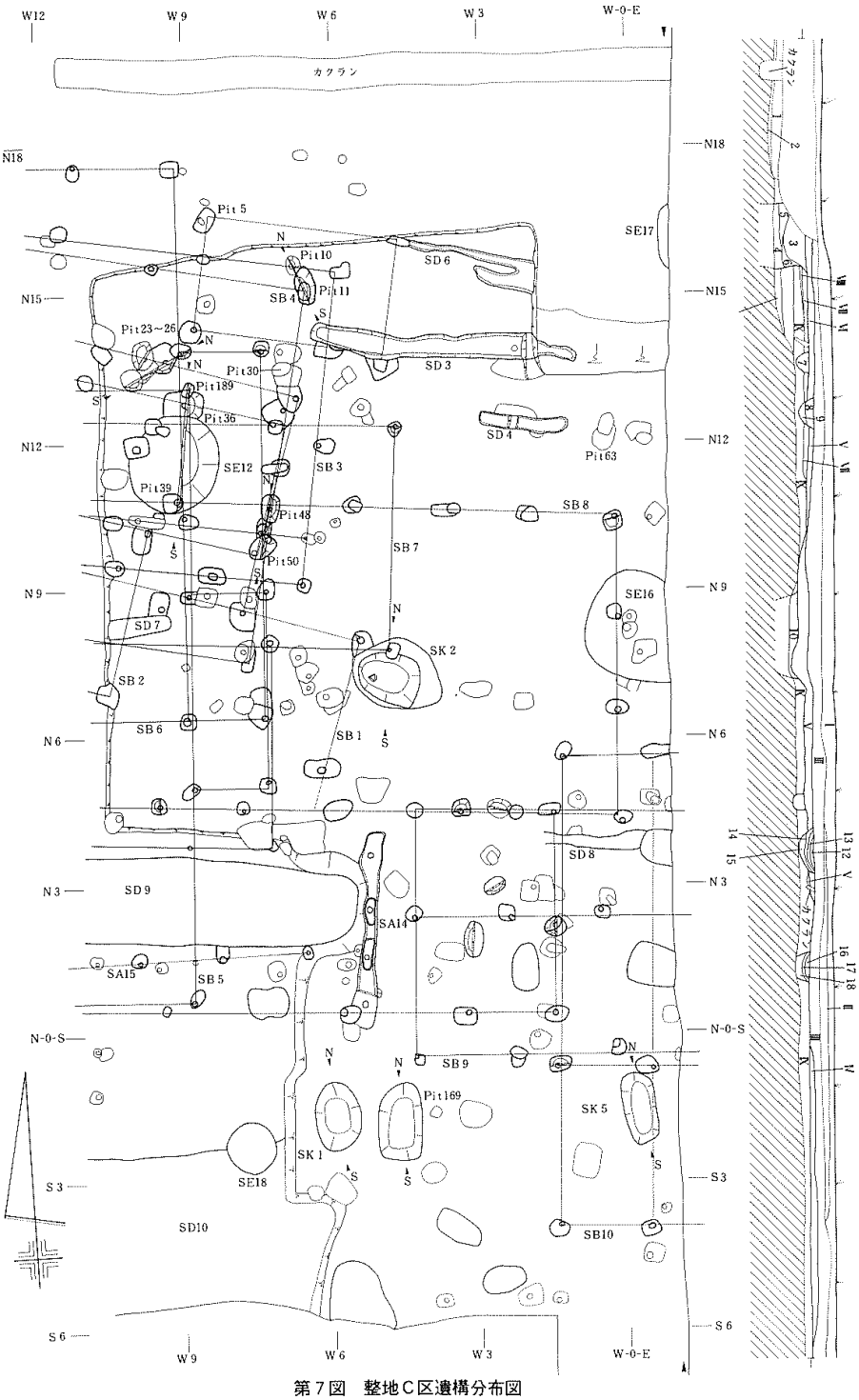
［整地地業］ＳＸ19（Ｃ区）は断面の観察により新旧二時期（Ａ期・Ｂ期）にわたって構築されたことが確認された。古いほうのＡ期では、灰白色火山灰の上に堆積した旧表土の上に土を盛って平坦面を形成している。旧地形が西へ傾斜しているため西側が厚く、最も厚い部分で約 30cm である。盛土は土質の違いにより 3 枚の層に分けられた。新しいＢ期ではその上にさらに盛土して平坦面を形成しており、上面は削平されているが最も厚い部分で約 15cm である。盛土は土質の違いにより 2 枚の層に分けられたが整地区全面に盛土は認められず、北側に粘土質シルト（Ⅴ層）、南側に砂質シルト（Ⅳ層）を主体とした盛土が認められる。

［掘立柱建物跡］（第 8 図）整地Ｃ区ではピットが 200 弱確認された。その多くは掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。これらは整地層の上面で検出されたが、旧表土上で確認されたものも多く、確認面が不明確なものが多い。また今回は確認調査ということで、すべてのピットについて十分な検討を加えておらず、また面積も限られたものであるため、以下に述べる掘立柱建物跡は必ずしも確定したものではない。

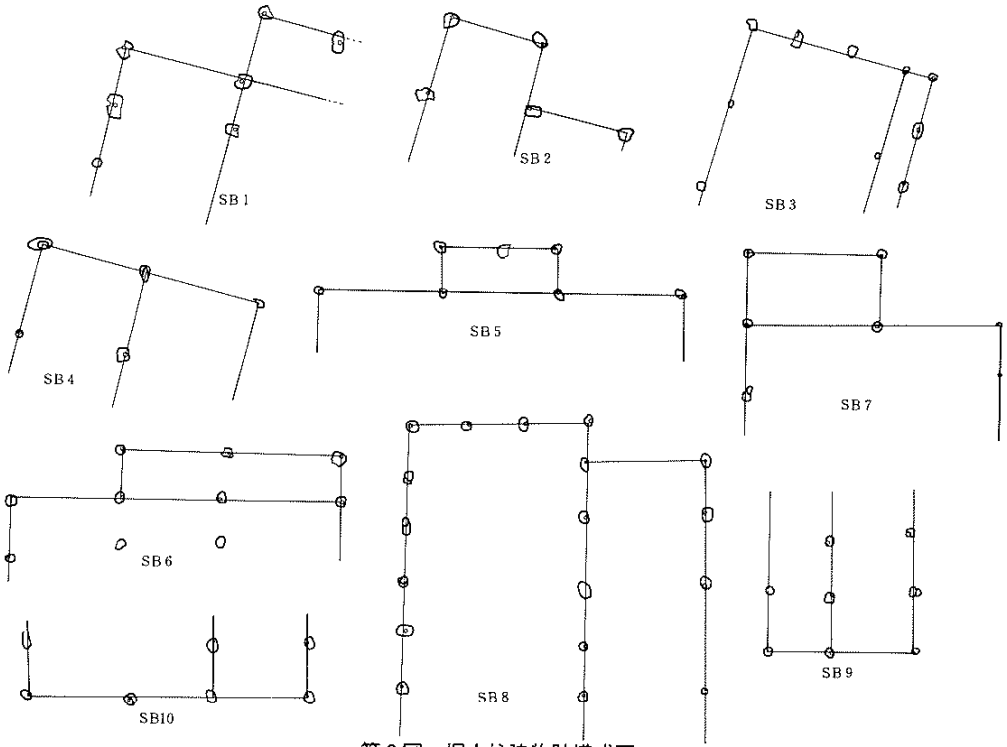
｛ＳＢ21 建物跡｝東に張り出しを持つ東西 3 間以上×南北 2 間以上の建物跡である。ＳＢ22～29 建物跡、ＳＫ2 土壙、ＳＤ7 溝、ＳＥ12 井戸と重複しており、ＳＢ22・25・27 建物跡、ＳＫ2 土壙、ＳＤ7 溝、ＳＥ12 井戸のいずれよりも古いが、ＳＢ23・24・26・28・29 建物跡との関係は不明である。柱間は身舎の北側柱列、東側柱列でいずれも 2.0m、張り出し部の柱間は北側で 2.4m、東側で 2.8m である。建物の方向は東側柱列で真北に対し東に 14.5 度偏している。柱穴は長軸 60～80cm、短軸 50～60cm であり、長方形を基調とする。深さは Pit36 で 40cm、柱痕跡は直径 12cm 程の円形である。また Pit36 の柱痕跡から鉄製の釘、埋土か

層位	土色	土性	備考
Ⅰ			表土
Ⅱ			最初の盛土
Ⅲ			最初の盛土
Ⅳ	にぶい 黄褐色(10YR 4/3)	砂質シルト	整地層 新
Ⅴ	にぶい 黄褐色(10YR 5/3)	粘土質シルト	整地層 新 灰白色火山灰を大量に含む。
Ⅵ	暗 褐 色 (10YR 3/3)	シルト	整地層 新 炭・焼土を微量含む。
Ⅶ	褐 色 (10YR 4/4)	砂質シルト	整地層 旧 焼土を微量含む。
Ⅷ	にぶい 黄褐色(10YR 4/3)	粘土質シルト	整地層 旧
Ⅸ	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	整地層 旧 炭・焼土を微量含む。
Ⅹ	黒 褐 色 (10YR 2/2)	粘土質シルト	旧表土
Ⅺ			灰白色火山灰

層位	土色	土性	備考
1	黄 灰 色 (2.5Y 5/1)	粘土	水田耕作土
2	暗灰黄色 (2.5Y 4/2)	粘土	水田耕作土
SE17 3	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	
4	褐 灰 色 (10YR 4/1)	シルト	
5	褐 灰 色 (10YR 4/1)	シルト	
6	褐 灰 色 (10YR 5/1)	シルト	
Pit 7	褐 色 (10YR 4/6)	シルト	
Pit 8	褐 色 (10YR 4/6)	砂質シルト	
9	褐 色 (10YR 4/4)	シルト	
SE16 10	褐 色 (10YR 3/3)	シルト	
Pit 11	暗 褐 色 (10YR 3/4)	シルト	
Pit 12	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	
13	褐 色 (10YR 4/4)	シルト	
14	黒 褐 色 (10YR 2/3)	シルト	
15	黒 色 (10YR 3/1)	シルト	
Pit 16	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	
17	灰黄褐色 (10YR 5/2)	シルト	
18	褐 灰 色 (10YR 4/1)	シルト	
Pit 19	極暗赤褐色(10YR 2/3)	シルト	



第７図　整地Ｃ区遺構分布図



第８図　掘立柱建物跡模式図

ら鉄鏃と不明古銭が出土している。

{ＳＢ22 建物跡} 南に張り出しを持つ東西 2 間以上×南北 1 間の建物跡である。ＳＢ21・23～29 建物跡、ＳＤ7 溝、ＳＥ12 井戸と重複しており、柱穴の切り合いからＳＢ21 建物跡よりも新しく、ＳＢ26 建物跡よりも古いが、ＳＢ23～25・27～29 建物跡、ＳＤ7 溝、ＳＥ12 井戸との関係は不明である。柱間は身舎の北側柱列で 2.8m、東側柱列で 2.8m、張り出し部の柱間は東側柱列で 3.2mである。建物の方向は東側柱列で真北に対し東に 17 度偏している。柱穴は長軸 50cm、短軸 40～60cm の長方形を基調とする。深さは Pit25 で 56cm、柱痕跡は直径 12cm 程の円形である。柱埋土に焼土が認められるものもある。

{ＳＢ23 建物跡} 桁行 2 間以上×梁行 3 間の東西棟建物跡で、南に廂を持つ。ＳＢ21・22・24～29 建物跡、ＳＤ3 溝、ＳＤ6 溝、ＳＥ12 井戸と重複しており、ＳＤ3 溝、ＳＤ6 溝よりも古いが、ＳＢ1・2・4～9 建物跡、ＳＥ12 井戸との関係は不明である。柱間は身舎の北側柱列でそれぞれ 2.8m、東側柱列で北から 1.6m、2.0m、2.0m、廂の柱間は東側が 1.0m、南側柱列でそれぞれ 1.8mである。建物の方向は東側柱列で真北に対し東に 16 度偏している。柱穴は長軸 25～60cm、短軸 15～35cm の長方形もしくは長円形を基調とする。柱埋土に焼土が認められるものもある。Pit5 の埋土から石臼の破片が出土している。

{ＳＢ24 建物跡} 東西 2 間以上×南北 2 間の建物跡である。ＳＢ21～23・25～29 建物跡、ＳＤ7 溝、ＳＥ12 井戸と重複しており、ＳＥ12 井戸よりも新しいが、ＳＢ21～23・25～29 建物跡、ＳＤ7 溝との関係は不明である。柱間は北側柱列で 3.2m、東側柱列でそれぞれ 3.6mである。建物の方向は東側柱列で真北に対し東に 13 度偏している。柱穴は長軸 20～60cm、短軸 20～40cm の長方形もしくは長円形を基調とする。深さは Pit11 で 44cm、柱痕跡は Pit8 で一辺 10cm 程の正方形である。柱埋土に焼土が認められるものや柱抜き取り穴が認められるものがある。

{ＳＢ25 建物跡} 東に張り出しを持つ東西 1 間以上×南北 3 間の建物跡である。ＳＢ21～24・26～29 建物跡、ＳＤ7 溝、ＳＥ12 井戸と重複しており、ＳＢ21 建物跡よりも新しく、ＳＢ26 建物跡よりも古いが、ＳＢ22～24・27～29 建物跡、ＳＤ7 溝、ＳＥ12 井戸との関係は不明である。柱間は身舎の東傾柱列で北から 4.2m、4.0m、4.2m、張り出し部は北側柱列で 1.6m、東側柱列で北から 2.2m、1.8mである。建物の方向は東側柱列で真北に対し東に 3.5 度偏している。柱穴は長軸 30～40cm、短軸 10～40cm の長方形もしくは長円形を基調とする。深さは Pit189 で 22cm である。柱埋土に焼土が認められるものもある。また Pit189 の柱痕跡から摺鉢の破片が出土している。

{ＳＢ26 建物跡} 東に張り出しを持つ東西 1 間以上×南北 3 間の建物跡である。ＳＢ21～25・27～29 建物跡、ＳＤ7 溝、ＳＥ12 井戸と重複しており、ＳＢ22 建物跡よりも新しいが、ＳＢ21・23～25・27～29 建物跡、ＳＤ7 溝、ＳＥ12 井戸との関係は不明である。柱間は身舎の北側柱列で 2.0m、東側柱列で北から 3.6m、3.8m、4.0m、張り出し部は北側柱列で 1.6m、東側柱列でそれぞれ 3.6mである。建物の方向は東側柱列で真北に対し東に 3.5 度偏している。柱穴は長軸 30～40cm、短軸 25～30cm の方形を基調とする。深さは Pit26 で 70cm、柱痕跡は直径 8cm 程の円形である。柱埋土に焼土が認められるものもある。また Pit12 の埋土から洪武通宝が 1 点出土している。

{ＳＢ27 建物跡} 東に張り出しを持つ東西 1 間以上×南北 2 間の建物である。ＳＢ21～26・28・29 建物跡、ＳＫ2 土壙、ＳＤ7 溝、ＳＥ12 井戸と重複しており、ＳＢ1 建物跡、ＳＫ2 土壙、ＳＥ12 井戸よりも新しいが、ＳＢ22～26・28・29 建物跡、ＳＤ7 溝との関係は不明である。柱間は身舎の北側柱列で 2.4m、東側柱列でそれぞれ 4.4m、張り出し部は北側柱列で 2.4m、東側柱列で 4.4mである。建物の方向は東側柱列で真北に対し東に 3.5 度偏している。柱穴は一辺 30cm 程の方形を基調とする。深さは Pit59 で 48cm、柱痕跡は直径 8cm 程の円形である。柱埋土に焼土が認められるものや柱抜き取り穴が認められるものがある。

{ＳＢ28 建物跡} 桁行 6 間以上×梁行 3 間の東西棟建物跡で、南に張り出し部が認められる。ＳＸ19Ｂ整地地業の上面で検出した。ＳＢ21～27・29・30 建物跡、ＳＡ14・15 塀跡、ＳＫ2 土

壙、ＳＤ7・8・9 溝、ＳＥ12・16 井戸と重複しており、ＳＥ12・16 井戸よりも新しいが、ＳＢ21～27・29・30 建物跡、ＳＡ14・15 塀跡、ＳＫ2 土壙、ＳＤ7・8・9 溝との関係は不明である。柱間は身舎の北側柱列で 2.0ｍもしくは 1.6ｍ、東側柱列で 2.0～2.2ｍ、張り出し部は南側柱列で 1.6～2.4ｍ、東側柱列で 4.0ｍである。建物の方向は東側柱列で真北に対し東に 3.5 度偏している。柱穴は長軸 20～45cm、短軸 20～40cm の長方形もしくは長円形を基調とする。深さは Pit48 で 68cm、柱痕跡は直径 10cm の円形である。柱埋土に焼土が認められるものや柱抜き取り穴が認められるものがある。また Pit39 の柱痕跡から洪武通宝が 1 点、埋土から成和通宝が 1 点出土している。

{ＳＢ29 建物跡} 北に張り出しを持つ桁行 3 間以上×梁行 1 間の東西棟建物跡である。ＳＢ28・30 建物跡、ＳＤ8 溝と重複しているが、前後関係は不明である。柱間は身舎の南側柱列でそれぞれ 2.0ｍ、西側柱列で 2.8ｍ、張り出し部の柱間は北側柱列、西側柱列ともに 2.0ｍである。建物の方向は西側柱列で真北に対し東に 3.5 度偏している。柱穴は一辺あるいは直径 25～30cm の方形もしくは円形を基調とする。柱埋土に焼土が認められるものや柱抜き取り穴が認められるものがある。

{ＳＢ30 建物跡} 桁行 2 間以上×梁行 2 間の東西棟で、南側に廂をもつ建物跡と推定される。ＳＢ28・29 建物跡、ＳＫ5 土壙、ＳＤ8 溝と重複しているが、前後関係は不明である。柱間は身舎の西側柱列で北から 3.4ｍ、2.8ｍ、南側柱列で 1.8ｍ、廂の柱間は南側柱列が 1.8ｍ、西側柱列が 3.2ｍである。建物の方向は西側柱列で真北に対し東に 3.5 度偏している。柱穴は長軸 40cm、短軸 20cm の長方形もしくは長円形を基調とする。深さは Pit167 で 56cm、柱痕跡は直径 10cm の円形である。柱埋土に焼土が認められるものや柱抜き取り穴が認められるものがある。

[塀跡] 柱穴掘り方が布掘によるものと、柱穴が等間隔に並ぶものが認められる。

{ＳＡ14 塀跡}南北 3 間の一本柱列による塀跡である。ＳＢ28 建物跡と重複しておりこれよりも古い。方向は真北に対し 7 度東に偏っている。掘り方は長さ 4.0ｍ、幅 0.2ｍ～0.4ｍの布堀である。柱は 30cm 程掘られた布堀底面から、さらに長軸 60cm、短軸 20cm の楕円形に掘られた掘り方に据えられている。柱間は 1.0ｍ～1.1ｍ、柱痕跡は直径 10cm の円形である。

{ＳＡ15 塀跡}東西 2 間以上の一本柱列による塀跡である。ＳＢ25 建物跡、ＳＤ9 溝と重複し、ＳＤ9 溝よりも古い。方向はほぼ真東方向である。掘り方は長軸 30～35cm、短軸 20～25cm の楕円形を基調とする。柱間は 3.6ｍである。

[井戸]平面形から井戸と確認されたものは 4 基ある。このうち灰白色火山灰層上面で検出されたＳＥ18 井戸を除く 3 基はＳＸ19Ｂ整地地業によって覆われている。

{ＳＥ12 井戸}平面形は長軸 2.0m、短軸 1.9mの円形を呈し、深さ 60cm までは壁は緩やかであるが、それ以下は直径 80cm で垂直に落ちこむ。完掘していないため構造や深さは不明である。ＳＢ21～28 建物跡と重複し、ＳＢ21 建物跡よりも新しく、ＳＢ24・27・28 建物跡よりも古い。が、ＳＢ22・23・25・26 建物跡との関係は不明である。堆積土の上部は灰白色火山灰を多く含むシルト土で人為的に埋め戻されている。土師器や陶磁器の破片、不明古銭が少量出土している。

［土壙］ 土壙は 10 基余り確認された。いずれもＳＸ19Ｂ整地地業の上面で検出された。前述のように土壙は発掘区南側に集中する傾向がある。以下ではこれらのうち精査を行なった 4 基について記述する。

{ＳＫ1 土壙}長軸 1.4m、短軸 0.9m、深さ 0.3mの楕円形を呈する。堆積土には炭化物を含む砂、シルト、粘土が認められ、その状況から堆積時に水の影響を受けたと考えられる。遺物は出土していない。

{ＳＫ2 土壙}長軸 2.0m、短軸 1.5mの不整楕円形の、焼面を伴う土壙で、深さは完掘していないため不明である。堆積土 1 層の下面で焼け面が認められ、土壙を埋め戻して底面を作り、その上面で火を使用する作業が行われたと思われる。ＳＢ21・27・28 建物跡と重複し、ＳＢ21 建物跡よりも新しく、ＳＢ27 建物跡よりも古い。堆積土 1 層の下面から石臼の破片が出土している。

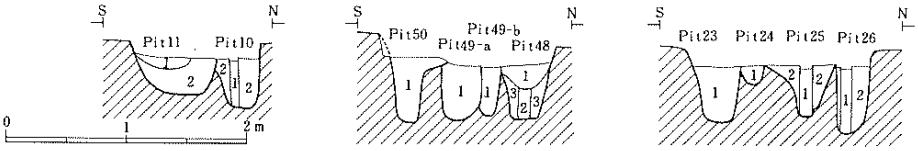
{ＳＫ5 土壙}長軸 1.4m、短軸 0.7m、深さ 0.5mの隅丸長方形を呈する。堆積土は 1・2 層が砂質シルトで、粘土質シルトの 4 層上面に厚さ数 cm の炭化物層（3 層）が認められる。炭化物層以外は自然堆積層である。土師器や陶磁器の破片が少量出土している。

{ＳＫ11 土壙}長軸 1.5m、短軸 0.9m、深さ 0.4mの隅丸長方形を呈する。堆積土は炭化物を含む、砂質シルト・シルト質粘土で、いずれも自然堆積層である。土師器や陶磁器の破片が少量出土している。

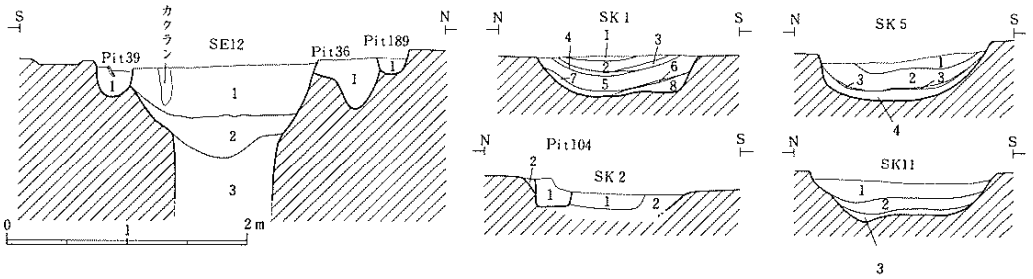
［溝］溝は合計 7 条確認されている。ＳＸ19Ａ整地地業に覆われているもの、ＳＸ19Ｂ整地地業の上面で検出されたものなど時期や規模は様々であるが、すべて東西方向に延びる。

{ＳＤ3 溝} ＳＸ19Ｂ整地地業の上面で検出された。東西に延び、ＳＤ4・6 溝と平行する。現存で長さ 5.4m、上幅 0.5m、下幅 0.3m、深さ 0.3m程である。堆積土には炭化物を含むシルト、砂質シルトが認められ、その状況から堆積時に水の影響を受けたと考えられる。ＳＢ23 建物跡と重複し、これよりも新しい。堆積土中から鉄製の釘などや土師器、陶磁器の破片が少量出土している。

{ＳＤ4 溝} ＳＸ19Ｂ整地地業の上面で検出された。東西に延び、ＳＤ3・6 溝と平行する。長さ 1.8m、上幅 0.3m、下幅 0.2m、深さ 0.1m程である。堆積土はシルト質砂が認められ、

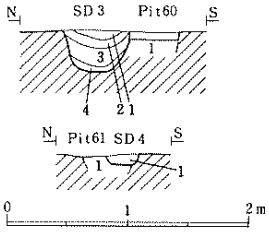


層	位	土色	土性	備考
Pit10	1	黒褐色 (10YR 3/1)	シルト	柱痕跡
	2	黄褐色 (10YR 5/6)	シルト	堆積土　炭・灰白色火山灰含む。
Pit11	1	褐色 (10YR 4/4)	シルト	抜取り穴　しまりなし　焼土・灰白色火山灰含む。
	2	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	堆積土　炭・灰白色火山灰含む。
Pit50	1	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	灰白色火山灰・炭を含む。
Pit49-b	1	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	灰白色火山灰をブロック状に多く含む。
Pit49-a	1	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	灰白色火山灰を含む。
Pit48	1	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	抜取り穴　灰白色火山灰・炭を含む。
	2	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	柱痕跡　灰白色火山灰を少し、炭を多く含む。
	3	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	堆積土　灰白色火山灰・炭を含む。
Pit23	1	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	炭・灰白色火山灰含む。
Pit24	1	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	柱痕跡
	2	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	堆積土　灰白色火山灰含む。
Pit25	1	褐色 (10YR 4/4)	シルト	炭・灰白色火山灰含む。
Pit26	1	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	柱痕痕　炭・焼土含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	堆積土　炭・灰白色火山灰含む。



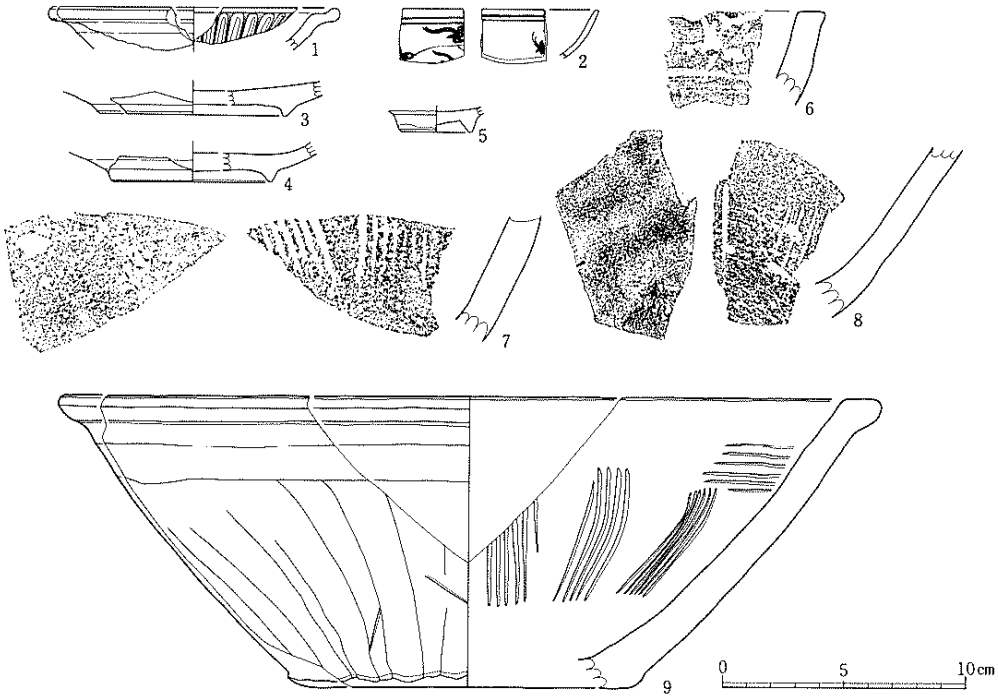
層	位	土色	土性	備考
Pit36	1	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	灰白色火山灰・炭を少し含む。
Pit39	1	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	灰白色火山灰を含む。
Pit189	1	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	灰白色火山灰を含む。
SE12	1	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	灰白色火山灰をブロック状に多く含む、炭を少量含む。
	2	緑褐色 (7.5GY2/1)	シルト	灰白色火山灰・酸化鉄を多く含む。
	3	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)	粘土質シルト	灰白色火山灰を多く含む。
SK1	1	オリーブ褐色 (2.5Y 4/3)	シルト	灰白色火山灰をブロック状に含む。
	2	褐色 (10YR 4/4)	シルト質砂	灰をわずかに含む。
	3	オリーブ褐色 (2.5Y 4/3)	シルト	灰白色火山灰をブロック状に含む。
	4	黄灰色 (2.5Y 4/1)	シルト質粘土	灰白色火山灰をわずかに含む。
	5	黒褐色 (2.5Y 3/2)	砂質粘土	灰をわずかに含む。
	6	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト質砂	
	7	黄灰色 (2.5Y 5/1)	シルト	炭・灰白色火山灰をわずかに含む。
	8	暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)	シルト質砂	灰白色火山灰をわずかに含む。
SK2	1	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	炭・焼土・灰白色火山灰をわずかに含む。
	2	灰黄褐色 (10YR 5/2)	シルト	灰白色火山灰を大量にブロック状に含む、炭・焼土をわずかに含む。
Pit104	1	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	炭・灰白色火山灰含む。
SK5	1	暗褐色 (7.5YR3/3)	砂質シルト	炭をブロック状に多く含む。
	2	黒褐色 (7.5YR2/2)	砂質シルト	
	3			炭化物層
	4	暗褐色 (10YR 3/3)	粘土質シルト	
SK11	1	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト質砂	炭・灰白色火山灰を含む。
	2	黒褐色 (10YR 3/2)	砂質シルト	炭・灰白色火山灰多くを含む。
	3	黒褐色 (10YR 3/2)	砂質シルト	2層に比べ粘性が強い。

第9図　ピット・土壙・井戸断面図



層	位	土色	土性	備考
SD3	1	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	
	2	暗褐色(10YR 3/3)	砂質シルト	
	3	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	炭を少量含む。
	4	黒褐色(10YR 2/2)	粘土質シルト	
Pit60	1	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	灰白色火山灰をブロック状に多く含む。
SD4	1	褐　色(10YR 4/4)	シルト質砂	
Pit61	1	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	灰白色火山灰を多く、炭を少量含む。

第10図　溝断面図

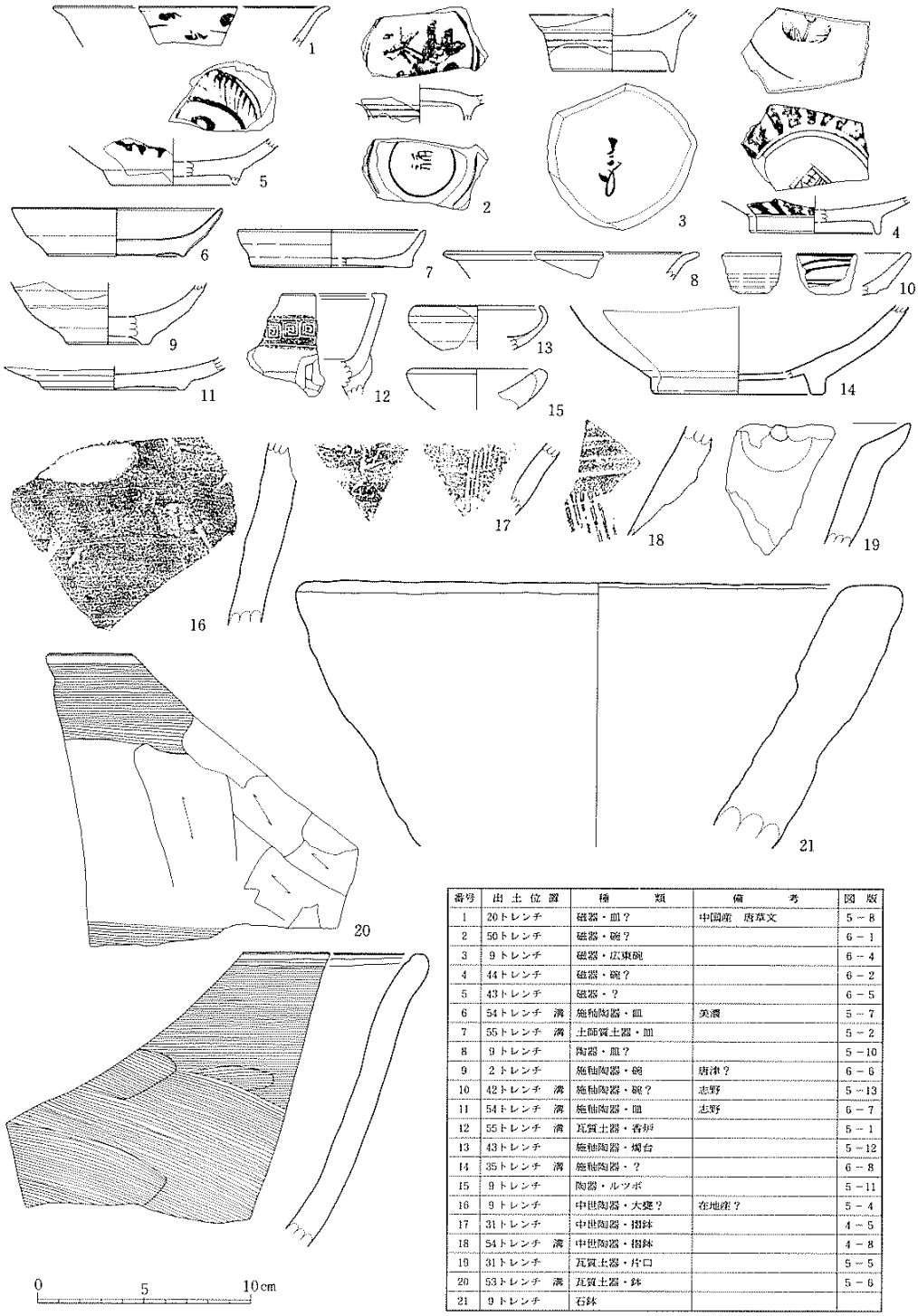


番号	出土位置	種類	備考	図版
1	整地C区　表土	施釉陶器・菊花皿	黄瀬戸	5－14
2	整地C区　Pit30 埋土	磁器・碗？	中国産？　唐草文	5－9
3	整地C区　SD3 埋土	施釉陶器		6－3
4	整地C区　SD3 埋土	施釉陶器・皿	美濃	6－9
5	整地C区　SD9 埋土	施釉陶器		6－10
6	整地C区　整地層	中世陶器・甕？		5－3
7	整地C区　表土	中世陶器・擂鉢		4－6
8	整地C区　Pit184　柱	中世陶器・擂鉢		4－7
9	55トレンチ　溝	瓦質土器・擂鉢	外面ヘラナデ	4－9

第11図　出土遺物

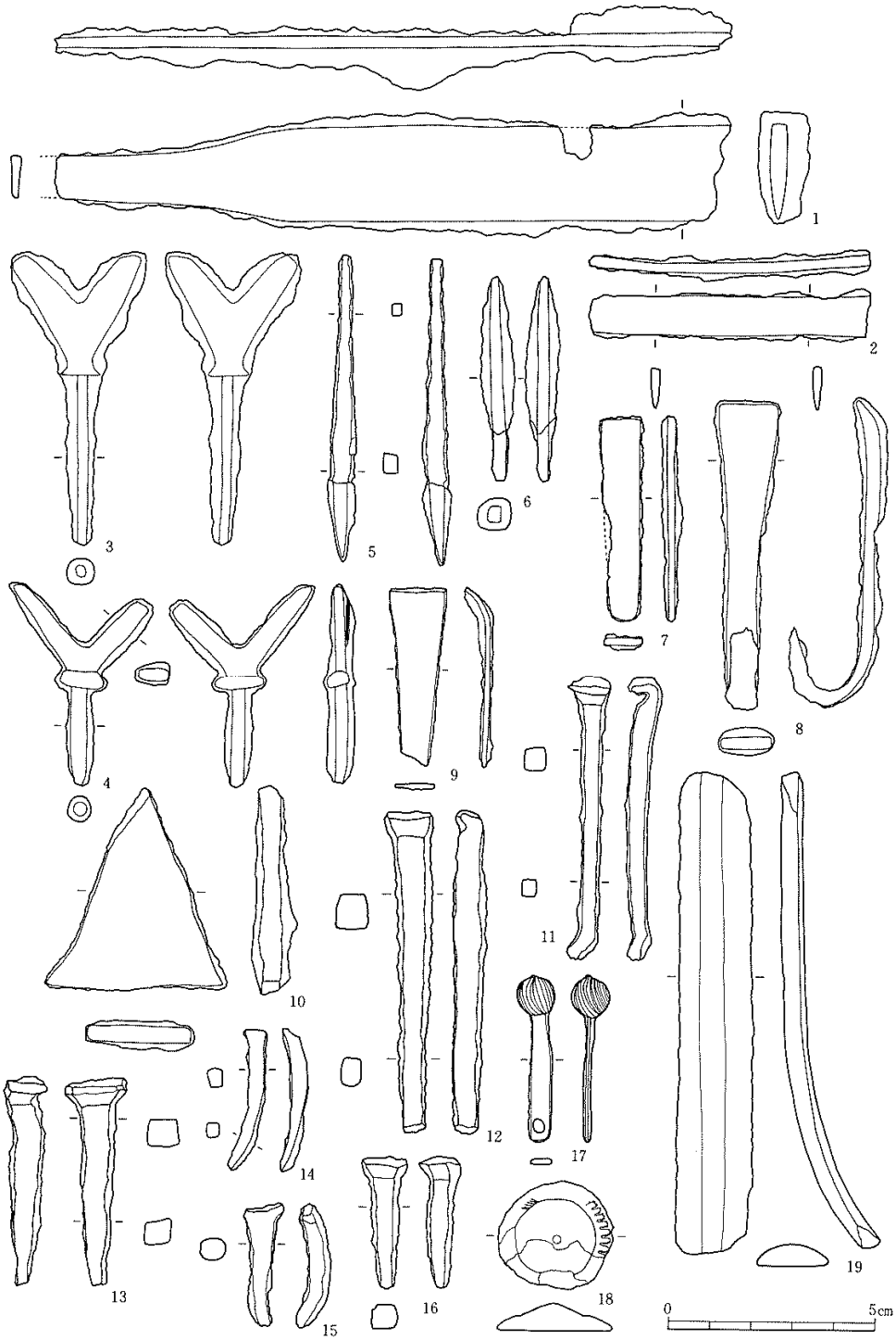
その状況から堆積時に水の影響を受けたと考えられる。土師器や陶磁器の破片が少量出土している。

{ＳＤ9 溝}灰白色火山灰層上面で検出された。東西に延び、ＳＤ10 溝と平行する。長さ 10 m以上、幅 1.7m程で、深さは完掘していないため不明である。ＳＢ25・28 建物跡、ＳＡ15 塀跡と重複し、ＳＡ15 塀跡よりも新しい。堆積土中から不明鉄製品や磁器の底部破片などが少

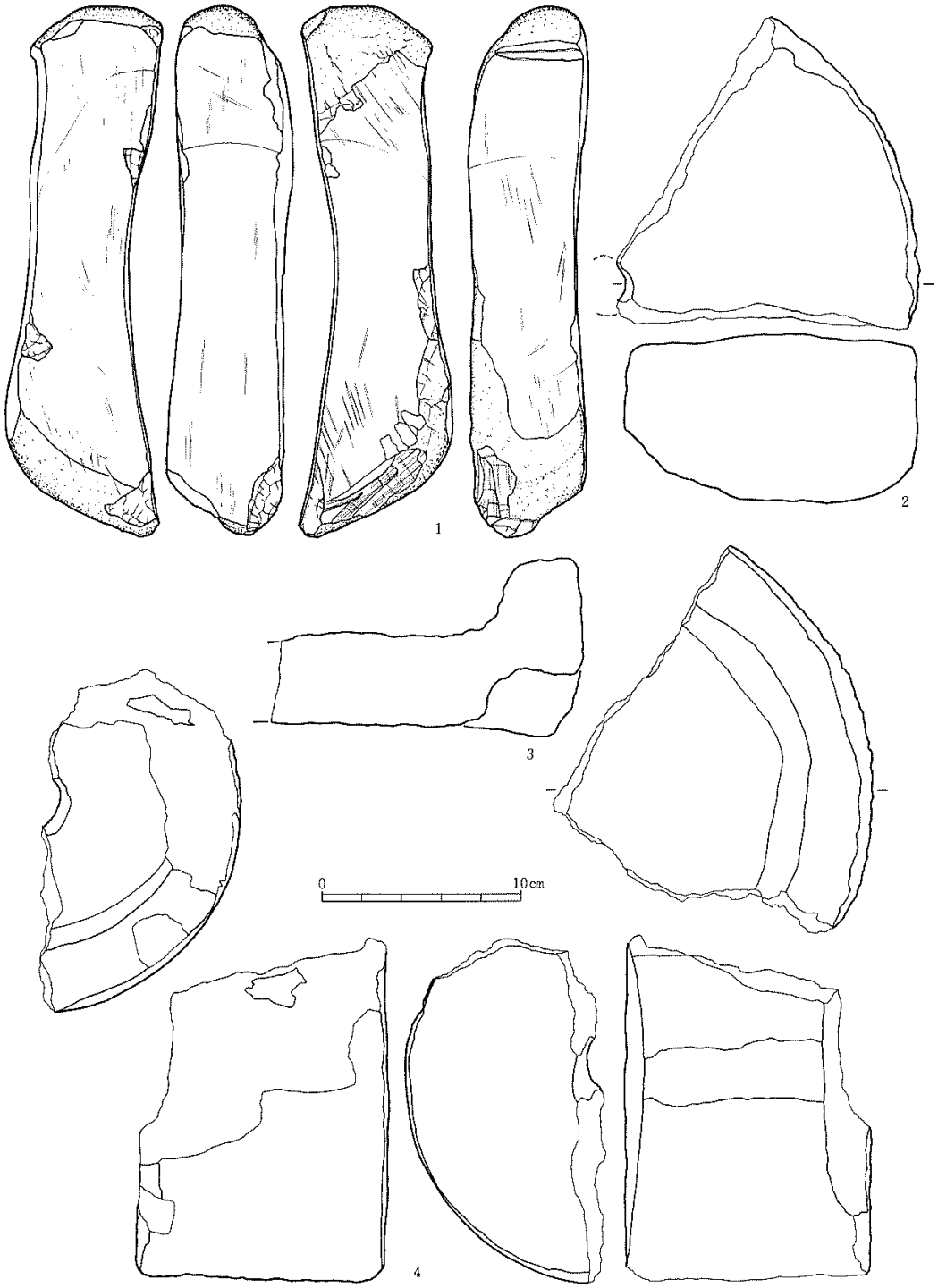


番号	出土位置	種類	備考	図版
1	20トレンチ	磁器・皿？	中国産　唐草文	5－8
2	50トレンチ	磁器・碗？		6－1
3	9トレンチ	磁器・広東碗		6－4
4	44トレンチ	磁器・碗？		6－2
5	43トレンチ	磁器・？		6－5
6	54トレンチ　溝	施釉陶器・皿	美濃	5－7
7	55トレンチ　溝	土師質土器・皿		5－2
8	9トレンチ	陶器・皿？		5－10
9	2トレンチ	施釉陶器・碗	唐津？	6－6
10	42トレンチ　溝	施釉陶器・碗？	志野	5－13
11	54トレンチ　溝	施釉陶器・皿	志野	6－7
12	55トレンチ　溝	瓦質土器・香炉		5－1
13	43トレンチ	施釉陶器・燭台		5－12
14	35トレンチ　溝	施釉陶器・？		6－8
15	9トレンチ	陶器・ルツボ		5－11
16	9トレンチ	中世陶器・大甕？	在地産？	5－4
17	31トレンチ	中世陶器・擂鉢		4－5
18	54トレンチ　溝	中世陶器・擂鉢		4－8
19	31トレンチ	瓦質土器・片口		5－5
20	53トレンチ　溝	瓦質土器・鉢		5－6
21	9トレンチ	石鉢		

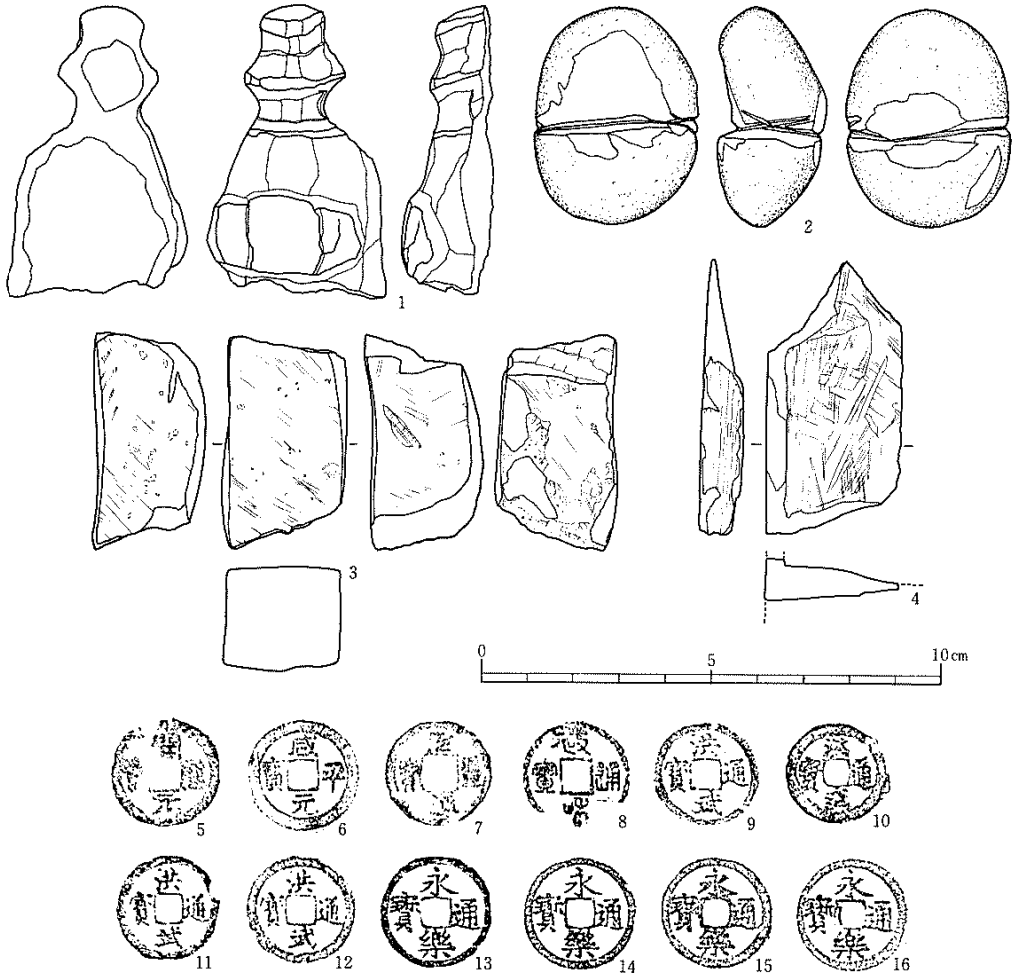
第12図　トレンチ調査出土遺物



第13図　鉄製品・銅製品



第14図　石製品



第13図

番号	出土位置	種類		備考	図版
1	整地C区　整地層	刀	鉄製品		7－13
2	整地C区　整地層	小刀？	鉄製品		7－6
3	整地C区　Pit36 埋土	鉄鏃	鉄製品		7－11
4	整地C区　表採	鉄鏃	鉄製品		7－12
5	整地C区　整地層	鉄鏃	鉄製品		7－9
6	整地C区　Pit169埋土	鉄鏃？	鉄製品		7－10
7	整地C区　整地層	楔？	鉄製品		7－14
8	整地C区　SD3 埋土	不明	鉄製品		7－15
9	整地C区　SD3 埋土	不明	鉄製品		7－17
10	整地C区　整地層	不明	鉄製品		7－8
11	整地C区　整地層	釘	鉄製品		7－21
12	整地C区　SD3 埋土	釘	鉄製品		7－22
13	整地C区　整地層	釘	鉄製品		7－19
14	整地C区　整地層	釘	鉄製品		
15	整地C区　整地層	釘	鉄製品		7－16
16	整地C区　Pit36 柱	釘	鉄製品		7－18
17	整地C区　整地層	不明	銅製品		7－24
18	9トレンチ	不明	銅製品		7－25
19	16トレンチ	不明	銅製品		7－23

第14図

番号	出土位置	種類	備考	図版
1	SH3　床面	砥石		
2	表採	石臼・下臼		
3	整地C区　SK2	石臼・上臼	スス付着	
4	整地C区　Pit5　埋土	石臼・茶臼・上臼	スス付着	

第15図

番号	出土位置	種類	備考	図版
1	43トレンチ	土人形		7－1
2	不明	石鐘	凝灰岩	7－4
3	整地C区　整地層	砥石	黒色安山岩	7－2
4	14トレンチ	硯	粘板岩	7－3
5	整地C区　整地層	開元通宝		7－29
6	50トレンチ　溝	咸平元宝		7－26
7	48トレンチ	元豊通宝		7－27
8	整地C区　Pit39 埋土	咸和通宝		7－28
9	整地C区　Pit39 柱	洪武通宝		7－30
10	整地C区　整地層	洪武通宝		7－37
11	整地C区　整地層	洪武通宝		7－33
12	整地C区　整地層	洪武通宝		7－34
13	整地C区　Pit63 抜	永楽通宝		7－32
14	整地C区　整地層	永楽通宝		7－39
15	整地C区　整地層	永楽通宝		7－38
16	表採	永楽通宝		7－31

第15図　土製品・石製品・古銭

量出土している。
{ＳＤ10 溝}ＳＸ19Ａ整地地業に覆われており、規模は不明である。東西に延び、幅は 3m 以上と大きい。ＳＤ9 溝と平行する。整地以前の遺構であり、精査は行っていない。
［ＳＸ19 整地地業の整地層出土遺物］（第 11～15 図）
ＳＸ19 整地地業の整地層中からは土師器、陶磁器、鉄製品、銅製品、古銭、石製品が出土している。これらの中で明らかに時期の異なる土師器を除いて以下に説明する。
{陶器} 1 は黄瀬戸の菊花皿の口縁部破片である。6 は大甕？の口縁部破片である。（第 11 図）
{鉄製品} 1 は刀の刀身と束の部分である。2 は刀子の刀身部と考えられる。5 は両端が尖り、基部近くに茎のある鉄鏃の可能性がある。7 は先端部がやや細くなり丸みを帯びる。楔と考えられる。11・13～15 は釘である。15 の断面はやや丸みを帯び、それ以外の断面は長方形である。10 は二等辺三角形を呈する不明鉄製品である。4 は整地Ｃ区付近の表土から出土した鉄鏃である。（第 13 図）
{銅製品} 17 は細かな沈刻の施された頂部のやや尖る球状部に長さ 3cm、幅 5mm、厚さ 2mm の板状部が接続している。板状部の先端には直径 3mm の穴が開いている。（第 13 図）
{古銭} 開元通宝、洪武通宝、永楽通宝、元豊通宝が出土している。（第 15 図）
{石製品} 3 は砥石の破片で、4 面とも使用されている。（第 15 図）
以上の他、染付の磁器の小破片も少数出土している。

第4章　考察

1．古代の遺構と遺物

8 トレンチでカマドを伴う焼失した竪穴住居跡・ＳＩ13 が 1 軒確認された。遺物はすべて床面もしくは貯蔵穴状ピットから出土した一括資料である。以下土師器、須恵器について分類・検討を行ない、年代を明らかにしたい。

ａ．土師器

甕が 4 点出土している。すべてロクロを使用し、大型で長胴形のものと小型のものがある。大型で長胴形のものは、口縁端部が上方につまみ出されるものと肥厚しないものがあり、調整は外面が体部下半からヘラケズリ、内面は体部下半からナデがなされる。小型のものは、体部の調整は摩滅が激しく不明であるが、底部は回転糸切りで無調整である。

ｂ．須恵器

坏が 2 点、甕が 1 点出土している。

坏は口径に比べて底径が小さく、体部が直線的に立ち上がるもので、底部は回転糸切り

で無調整である。甕は口径よりも器高が小さく、口縁部が頚部で屈曲し、端部が狭い縁帯状をなしている。調整は外面が体部下半からヘラケズリがなされる。

これらの土器群は、土師器坏は認められないものの須恵器坏の特徴から、色麻古墳群住居跡出土土器の第 2 グループとされた土器群や中峰Ａ遺跡住居跡出土土器の第一段階とされた土器群に類似性が認められる。これらの土器群の年代は 9 世紀中頃以降と考えられており、ＳＩ13 住居跡出土土器群の年代もそこに求められると思われる。

土師器、須恵器は遺跡の南側においても確認され、遺構は確認されなかったものの、この部分にも古代の遺構が分布する可能性が考えられる。

2．中世以降の遺構と遺物

ａ．トレンチ調査部分

トレンチ調査の結果、今回の調査対象範囲のほぼ全域に溝や土壙、ピットなどの遺構が分布することが明らかとなった。二の丸と推定される部分の外側には最大幅 40ｍの大溝が確認され、外堀と考えられる。そのほかの幅のやや狭い溝は地割りを区画する溝であり、その溝の周辺には土掘やピット類が分布する傾向が認められる。現在認められる高い部分には、整地されたものと後世盛土されたものがあることが明らかとなった。また水田床土直下で土壙やピットの確認された部分は本来整地があったところと推定される。溝の分布範囲は明治 19 年の地籍図における水田の分布とほぼ一致し、土壙、ピット類の分布範囲も同じく水田以外の分布とほぼ一致する。したがって明治 19 年の地籍図は当時の様子をかなり忠実に反映しているものと思われる。さらに、従来の遺跡範囲よりも東に遺構が延びることも明らかとなった。現在水田となっている東側と南側の広い平坦部分には、城の中心部を囲むように、溝により細かく区画された整地部分が分布していたと推定される。

ｂ．整地Ｃ区の遺構の変遷と特徴

整地Ｃ区では、新旧 2 時期の整地地業、10 棟の掘立柱建物跡、2 条の塀跡、4 基の井戸、10 基余りの土壙、7 条の溝、そして多数のピットが検出されている。調査は範囲、内容ともに部分的であったため不明な点も多い。したがって以下では、大まかな遺構の変遷とその年代について述べるにとどめ、詳細については今後の緻密な調査に譲りたい。

まず、主な遺構の特徴をまとめると以下の通りである。

[整地地業]新旧 2 時期ありいずれも盛土整地地業である。本遺跡は沖積地に立地しており、建物を建てるため、また水害対策のためにも地盤のかさ上げが目的であったと思われる。

[掘立柱建物跡] 全体の規模の分かるものはないが、構造的に張り出し部をもつもの（ＳＢ21・22・25・26・27・28 建物跡）が多く、廂をもつもの（ＳＢ23・29・30 建物跡）や切妻のもの（ＳＢ24 建物跡）も認められる。建物の方向を見てみると、真北方向に対して東へ

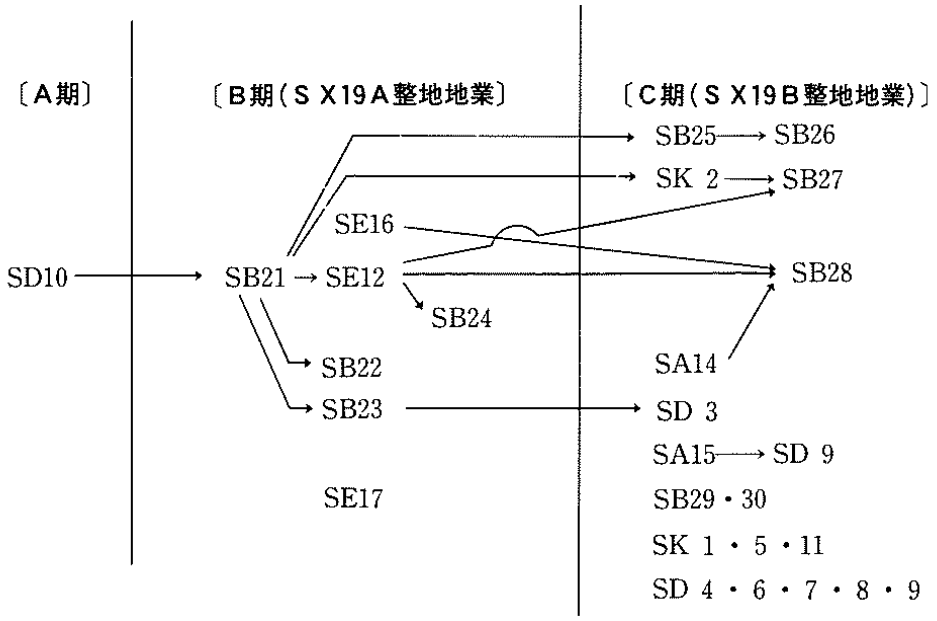
13～17 度程振れるもの（ＳＢ21～24 建物跡）と 3 度程振れるもの（ＳＢ25～30 建物跡）がある。柱穴の規模では、前者の柱穴が 60～80cm 前後と比較的大きいのに対して、後者は 30～40cm 前後と小さい。したがって掘立柱建物跡は、建物の方向と柱穴の規模から大きく二つのグループに分けられる。

[溝]ＳＸ整地地業よりも古いもの（ＳＤ10 溝）と新しいもの（ＳＤ3・4・6・7・8 溝）、不明なもの（ＳＤ9 溝）があり、規模は幅が 1.7mかそれ以上のもの（ＳＤ9・10 溝）と幅 0.5m程の小さなもの（ＳＤ3・4・6・7・8 溝）がある。このうちＳＤ9 溝はかつて水田として利用されており、方向がほぼ東西で西に延びて大溝と合流していた。これと同様な状況は整地Ａ区と整地Ｂ区､整地Ｂ区と整地Ｃ区の間に認められる｡つまりこれらの間には、かつて東西に細長い水田として利用されていた部分があり、特にＡ区とＢ区の間の水田の西延長上（4 トレンチ）には東西溝が確認された。これは地籍図に記された水田部分ともほぼ一致している。これらのことから、整地Ａ・Ｂ・Ｃ間はかつて溝によって区画されていた可能性が考えられ、ＳＤ9 溝も同様に区画のための溝と考えられる。以上より、本地区では＊整地以前の時期、＊Ａ・ＳＸ19Ａ整地地業の時期、＊Ｂ・ＳＸ19Ｂ整地地業の時期の 3 時期に大別できる。これらの遺構の重複状況をまとめると以下の通りである。

[整地以前]整地以前の時期でありＳＤ10 溝が認められる。規模は不明な点が多いが、幅は 3m以上と、大規模なものの可能性がある。年代は不明だが、灰白色火山灰の降下よりも新しく中世に降る可能性が考えられる。

[Ａ期]Ａ期の遺構はＳＸ19Ａ整地地業の時期である。この時期のＳＢ21～24 掘立柱建物跡は軸が真北方向から 10 数度振れ、柱の掘り方が 60～80cm 前後と大きく、柱間は 1.6m～3.2m前後と狭い傾向がある。また切り合いなどからＳＫ2 土壙、ＳＥ12 井戸もＡ期と考えられる。これらの遺構は発掘区の北西に集中する。この時期の中でもＳＢ21～24 掘立柱建物跡・ＳＥ12 井戸は同時には存在することは出来ず、最低 5 時期の変遷が考えられる。また最も古いＳＢ21 掘立柱建物跡を除いたすべての掘立柱建物跡の、一部の柱掘り方には焼土が認められる。したがってＳＢ21 掘立柱建物跡は火災にあっていると考えられる。

[Ｂ期] Ｂ期の遺構はＳＸ19Ｂ整地地業の時期である。ＳＢ25～28 掘立柱建物跡は軸が真北方向から 3.5 度振れ、柱の掘り方が 30～40cm 前後とＡ期に比べて小さく、柱間は 2.0m～4.2m前後と広い傾向がある。ＳＫ1・5・11 土壙やＳＤ3・4・7・8 溝の堆積土には砂が顕著に認められる。溝はほぼ東西方向に延び、土壙は長軸がほぼ真北方向に沿うものが多い。切り合いや軸方向などからＳＢ29・30 掘立柱建物跡、ＳＡ14・15 塀跡、ＳＤ9 溝もＢ期と考えられる。遺構は発掘区の東にも延びるようになる。この時期の中でもＳＢ25～28 掘立柱建物跡やＳＢ29 掘立柱建物跡とＳＢ29･30 掘立柱建物跡などは同時には存在するこ



とは出来ず、最低4時期の変遷が考えられる。

以上のように、整地C区では大きくは3段階、細かく見ると10段階以上の遺構の変遷がとらえられた。整地事業がなされてからでも大きくは2段階、細かくは9段階以上の遺構の変遷が認められ、かなり長期間に亘りこの面が利用されていたことが明らかとなった。次に整地C区とその周辺の性格であるが、この地区は下草古城の城郭の一画で、本丸・二の丸と推定される部分の東側にあたり、トレンチ調査で確認した大溝の外側に位置する。したがってここは、いわゆる「城内」ではなく「城下」にあたると考えられる。このことはこのあたりが「まちやしき」と通称されていることからもうかがえる。一般に「城下」には侍屋敷や職人、町人の居住地などがあったとされており、渡辺・大藤両氏はこの地区を侍屋敷の居住地と推定している。しかし今回の調査では、この地区について積極的にその性格を述べるに足る資料を得ることは出来なかった。

c．遺構と遺物の年代

今回の調査では陶磁器、鉄製品、銅製品、古銭、石製品、土製品が出土した。しかし、調査の性格上、出土遺物は質、量ともに非常に限られており、ここでは遺構、遺物の年代とその問題点について触れるにとどめる。

[陶磁器]陶磁器には、無釉陶器、施釉陶器、染付磁器がある。産地、時期の分かるものは少ないが、瀬戸・美濃産の施釉陶器や染付磁器などから、ほぼ16世紀中頃から17世紀初頭に位置づけられよう。

[古銭]開元通宝、洪武通宝、永楽通宝、元豊通宝、咸平元宝、成和通宝など、いずれも中

世に大陸から輸入されたもので、寛永通宝は1点も認められない。

以上のように、出土遺物はほぼ16世紀中頃から17世紀初頭に位置づけられ、遺構の多くもその時期に属すると考えられる。これは文献で記された下草古城跡の年代と下限は一致する。また、整地Ｃ区では細かく見ると10期以上の遺構の変遷がとらえられ、文献で示された宗清の居城したほんの 10 年足らずの間にこれらが構築されたものとは考えられない。遺物の年代から見ても、宗清居城の前にここになんらかの構造物があった可能性が高い。

今回の調査は確認調査ということで非常に限られたものであり、10期以上の遺構の変遷がとらえられたものの、宗清時代の遺構を限定することは出来なかった。宗清時代に限らず、当遺跡の遺構の初源から終末までの変遷や規模、構造、そしてそれらの性格などについて不明な点も多い。これらの点については今後の詳細な調査を待ちたい。

第5章　まとめ

今回の調査の成果をまとめると以下のようになる。

1　遺跡の東と南にあたる調査対象区から、下草古城に関する整地された部分や多くの溝、土壙、ピットなどが検出された。その状況から整地とそれを細かく区画した溝の存在が想定され、その様相の一端が明らかとなった。また遺跡の範囲も従来とらえられていたよりさらに東に延びることが明らかとなった。

2　整地Ｃ区では、多くの掘立柱建物跡や土壙、井戸、溝などがみつかり、10期以上の遺構の変遷がとらえられた。

3　発見された遺物の多くは16～17世紀・中世から近世にかけてと推定され、伊達宗清が住んだ時期にほぼ一致するが、遺構が10期以上に亘ることから、中にはそれ以前にさかのぼる可能性がある遺構もあると推定される。

4　平安時代の住居跡も検出され、当遺跡が平安時代にさかのぼることも明らかとなった。

引用・参考文献

伊藤嘉章「瀬戸・美濃における大窯生産」『岐阜市歴史博物館研究紀要』2　1988

遠藤巌・伊藤信他『大和町史』上巻　1975

紫桃正隆『史料　仙台領内古城・館』第三巻　1973

東北学院大学考古学研究部「鶴巣館発掘調査測量調査概要」『温故』10号　1974

浪岡町教育委員会『浪岡城跡Ｘ－内館調査の成果とまとめNo.1－』　1989

藤沼邦彦・小井川和夫他『日本城郭大系』3　1981

渡辺信夫・大藤修他『大和町史』下巻　1977

写　真　図　版

1．遺跡空撮北から

2．遺跡空撮北西から

3．大溝確認状況２トレンチ

図版１

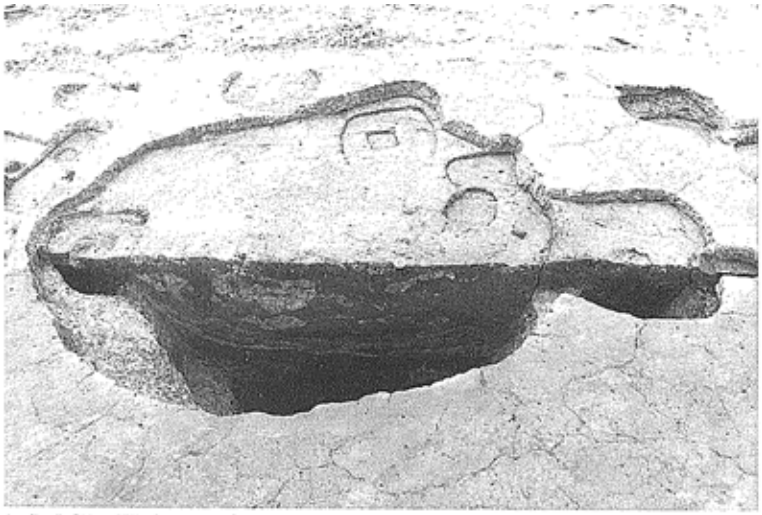
1．整地C区断面

2．整地C区遺構分布状況
西から

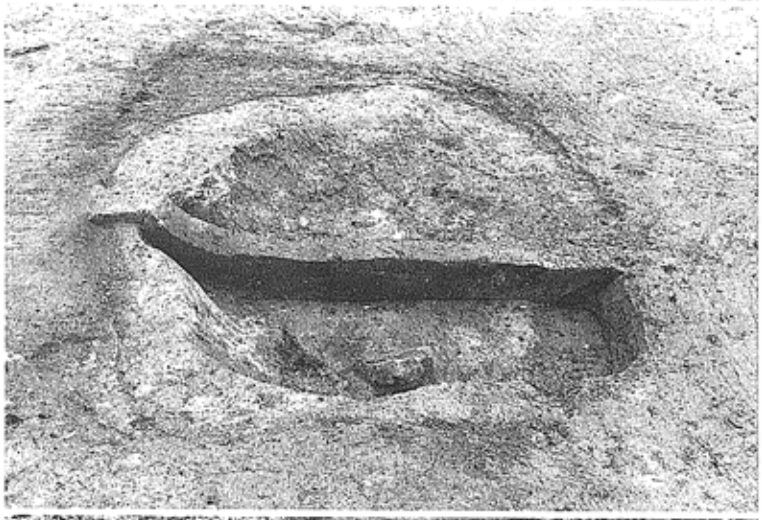
3．整地C区遺構分布状況
南から

図版2

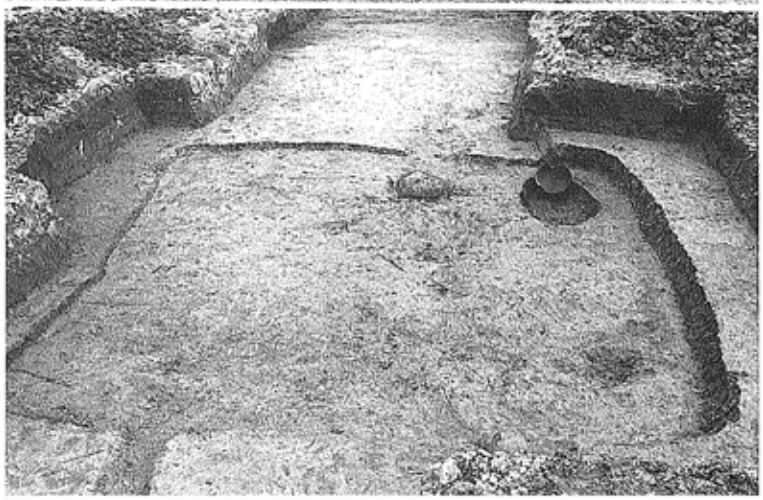
1．ＳＥ12井戸・Ｐｉｔ36・39・189断面



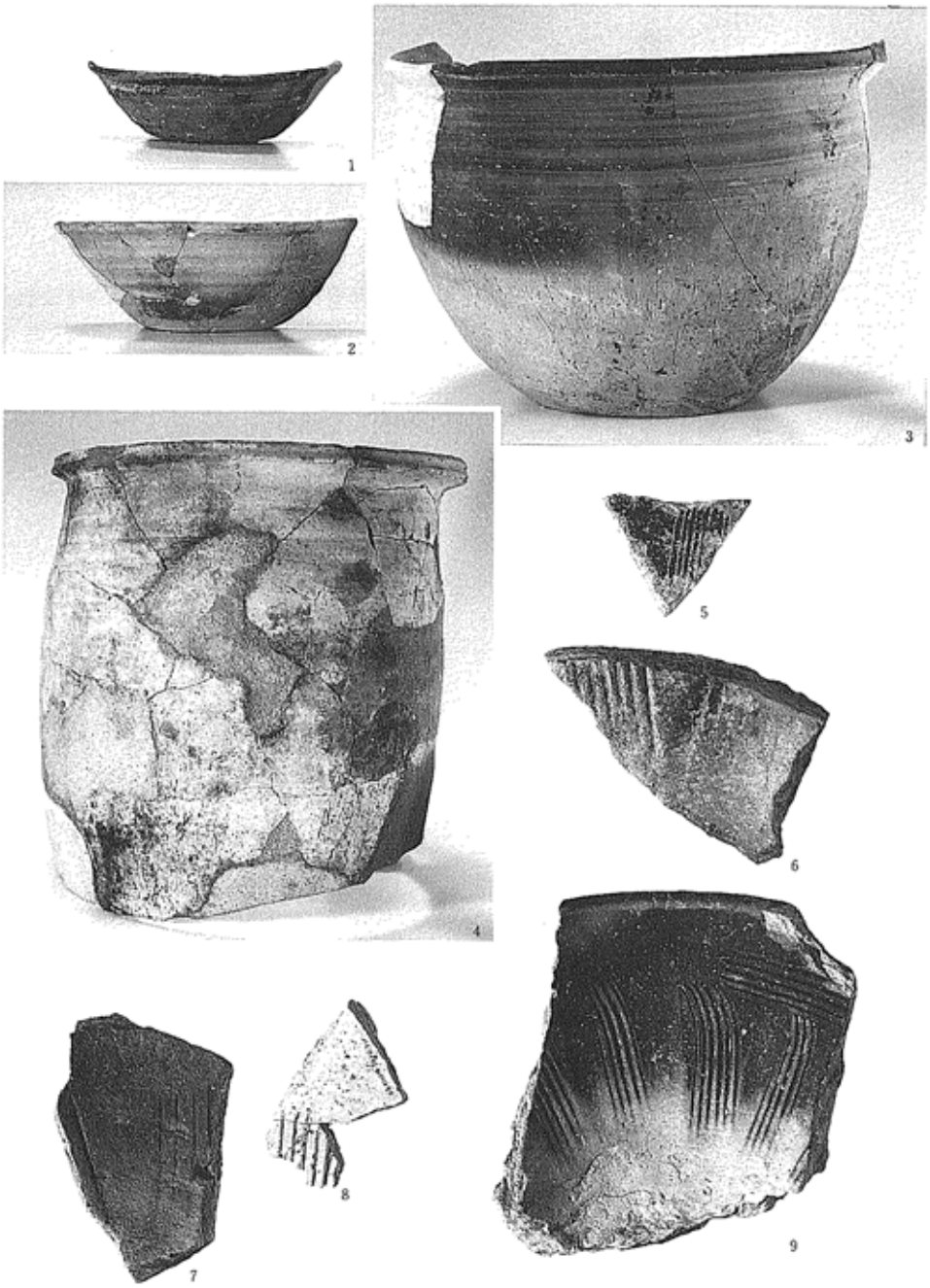
2．ＳＫ２土壙断面



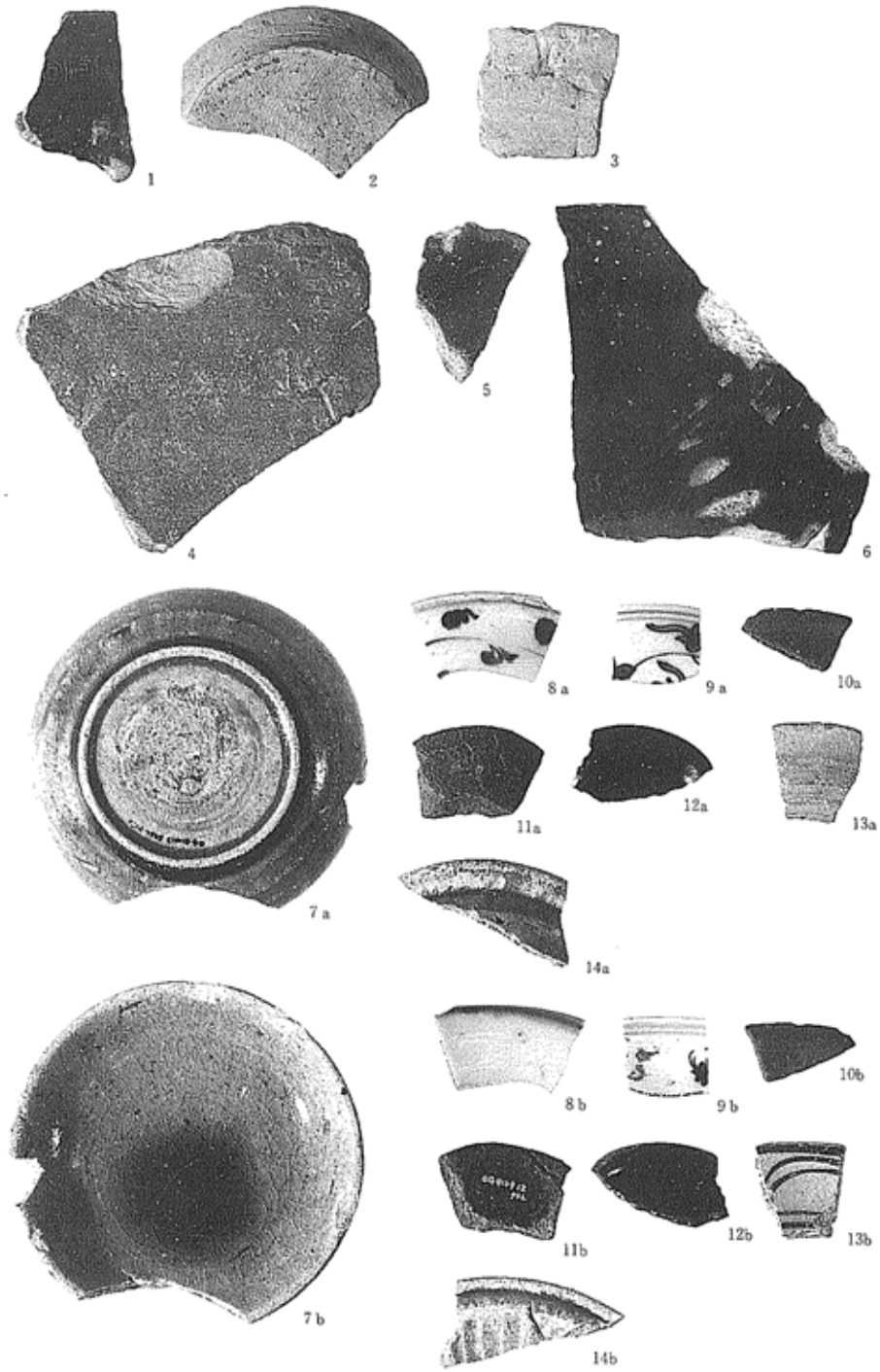
3．ＳＩ13住居跡



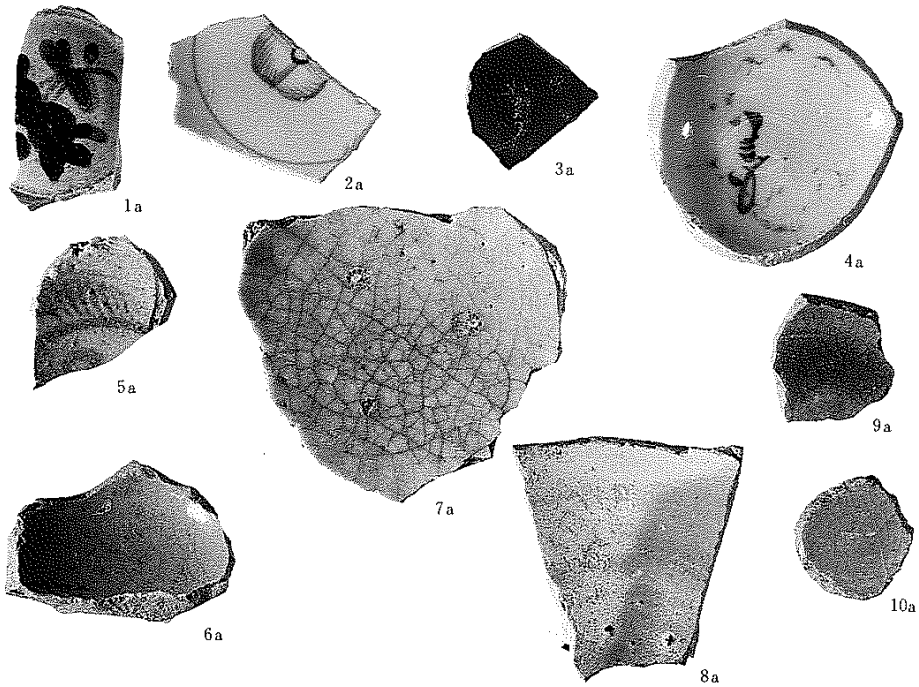
図版３

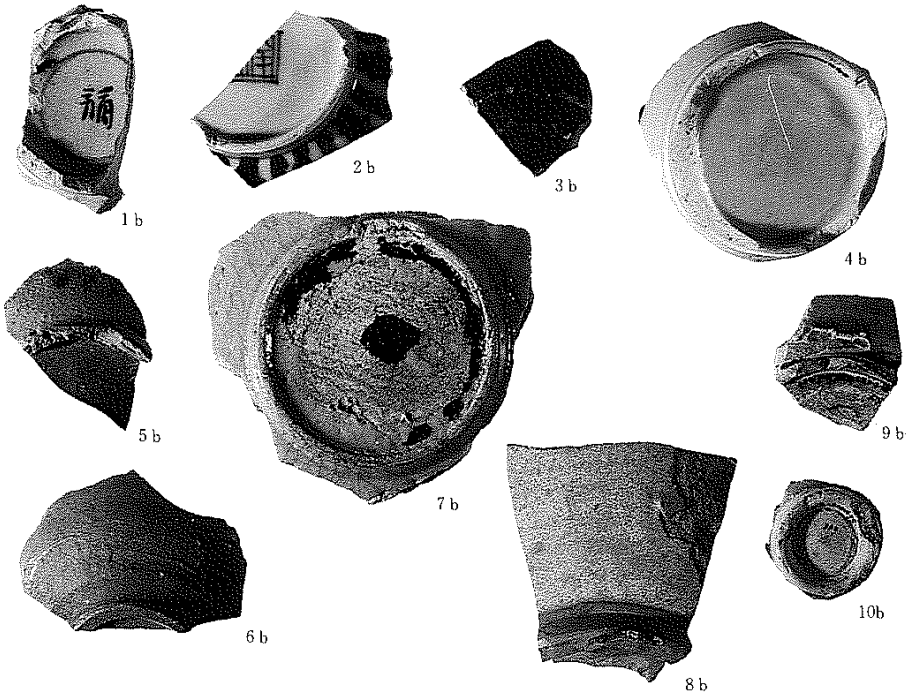


図版 4



図版 5





図版 6

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

図版 7

新谷地北遺跡（しんやちきたいせき）

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 ……47
Ⅱ　周辺の遺跡 ……47
Ⅲ　調査の方法と経過 ……48
Ⅳ　発見された遺構と出土遺物 ……55
　・竪穴住居跡・古墳・土壙・その他の遺構
Ⅴ　考　　察……80
Ⅵ　まとめ ……89
引用・参考文献 ……90
写真図版 ……91

調査要項

遺　跡　名：新谷地北遺跡
遺跡記号：ＯＫ
所　在　地：宮城県古川市小林字新塚原
調査原因：県営圃場整備
調査期間：平成３（1991）年８月５日～20 日、10 月 14 日～11 月２日
11 月 11 日～12 月４日
調査面積：約 13000 ㎡
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：小井川和夫・阿部博志・佐藤則之・菊地逸夫・古川一明・木皿直幸・佐藤憲幸・吾妻俊典・太田肇・早川英紀
調査参加者：朝倉のぶ子・永塚巌・永塚くみ子・永塚健悦・永塚文衛・片倉富寿夫
木村一郎・木村すみ子・木村ちえ子・後藤あや子・小林秀子・今野りつ子
斎藤のぶ子・坂井とみえ・坂井美津男・佐々木益雄・佐々木幸男・橋本熊治
三塚秀一・山口卯吉（敬称略・五十音順）

新谷地北遺跡

Ⅰ　遺跡の位置と環境

新谷地北遺跡は、東北自動車道古川インターチェンジの北西方向約 3.5km、宮城県古川市宮沢小林字新塚原に所在する。

本遺跡の所在する古川市は、宮城県の北西部に位置する。古川市の地形をみると、その大部分は江合川・鳴瀬川によって形成された宮城県を代表する穀倉地帯である大崎平野が広がっている。北部には、奥羽山脈から派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵が東西に延び、標高 30～60mのなだらかな丘陵地帯が形成されている。

新谷地北遺跡はこの丘陵地帯のほぼ南端､大崎平野に接する南西向きの斜面に立地する。本遺跡の位置する標高は約 37～41m、現状は水田および畑となっている。

Ⅱ　周辺の遺跡（第1図）

前述したように本遺跡は、大崎平野に接する丘陵の端部に位置している。大崎平野とそれをとり囲む丘陵地帯には数多くの遺跡が分布し、旧石器時代から中・近世にいたる各時代の遺跡の存在が知られている。特に、この地域は仙台・名取市付近と並ぶ宮城県の古墳文化の中心地のひとつでもある。以下、この地域から、本遺跡と関連があると考えられる古墳時代から奈良・平安時代の諸遺跡について概観したい。

古墳時代後期および奈良時代の遺跡として、高塚および横穴群集墳、官衙、寺院跡、窯跡などがある。

高塚群集墳は、大崎平野西部の丘陵・台地上にその分布が集中している。その主なものとして、色麻町色麻古墳群（古川：1981 他）、本遺跡に近接する古川市塚原古墳群（古川市教委：1970）、同じく日光山古墳群（古川市教委：1971）などがあげられる。これらのうち調査されたものはいずれも横穴式石室をもつ円墳である。とくに色麻古墳群は 7 世紀末から 8 世紀初頭にかけて造営された宮城県の代表的な群集墳の一つであり、推定総数約 500 基の小円墳が造られたと考えられている。その古墳の構造的な特徴と出土遺物に関東系の土器が含まれていることなどから、この古墳群の形成にあたって関東地方の人々が関与した可能性が指摘されている。

横穴古墳群は主に大崎平野北部、南部、東部の丘陵に分布している。その主なものは、朽木橋横穴古墳群を含む小野横穴古墳群（佐々木・阿部：1983）、数百基が分布する川北横穴古墳群（平・加藤・氏家：1970）などがあげられる。朽木橋横穴古墳群は 7 世紀後半か

ら平安時代後半まで及ぶもので、現在約 20 基確認されている。ここでも出土遺物に関東系の土器が含まれており、色麻古墳群と同様、関東地方の人々が関与した可能性が指摘されている。

官衙、寺院跡と考えられるものとして、本遺跡の西約 3km の台地上に名生館遺跡、さらにその南約 0.8km には付属寺院とされる伏見廃寺跡がある。名生館遺跡では多賀城創建以前の 7 世紀から、9 世紀にかけての掘立柱建物跡、一本柱列による塀跡、竪穴住居跡などが多数検出され、とくに 7 世紀末から 8 世紀初頭には瓦葺、四面廂付きの掘立柱建物が造営されていることが明らかにされている(多賀城跡調査研究所：1981 他)。また、名生館遺跡は古代の玉造郡内に所在することや、さらに竪穴住居跡から「玉厨」の墨書土器が出土したことなどから、玉造柵跡の有力な擬定地とされている。

本遺跡の東方約 2.5km には、東西約 1400m、南北約 850mの規模をもつ 8 世紀後半から平安時代にかけての城柵官衙遺跡である宮沢遺跡がある。調査は昭和 49（1974）年から 3 年間にわたって行われ、その結果、築地、土塁、大溝、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出された（宮城県教委：1980）。

その他、東方約 3.7km の地点には、平成 2 年の調査で掘立柱建物跡、塀跡などを検出した権現山遺跡、同じく掘立柱建物跡、塀跡、区画溝跡などを検出した新江川遺跡がある。これらは、官衙的な性格をもった遺跡であると推定されている。

窯跡としては、本遺跡の西方約 0.7km の丘陵上に大吉山瓦窯跡がある。この窯跡で産出された瓦は多賀城・多賀城廃寺に供給されたものとして著名である。

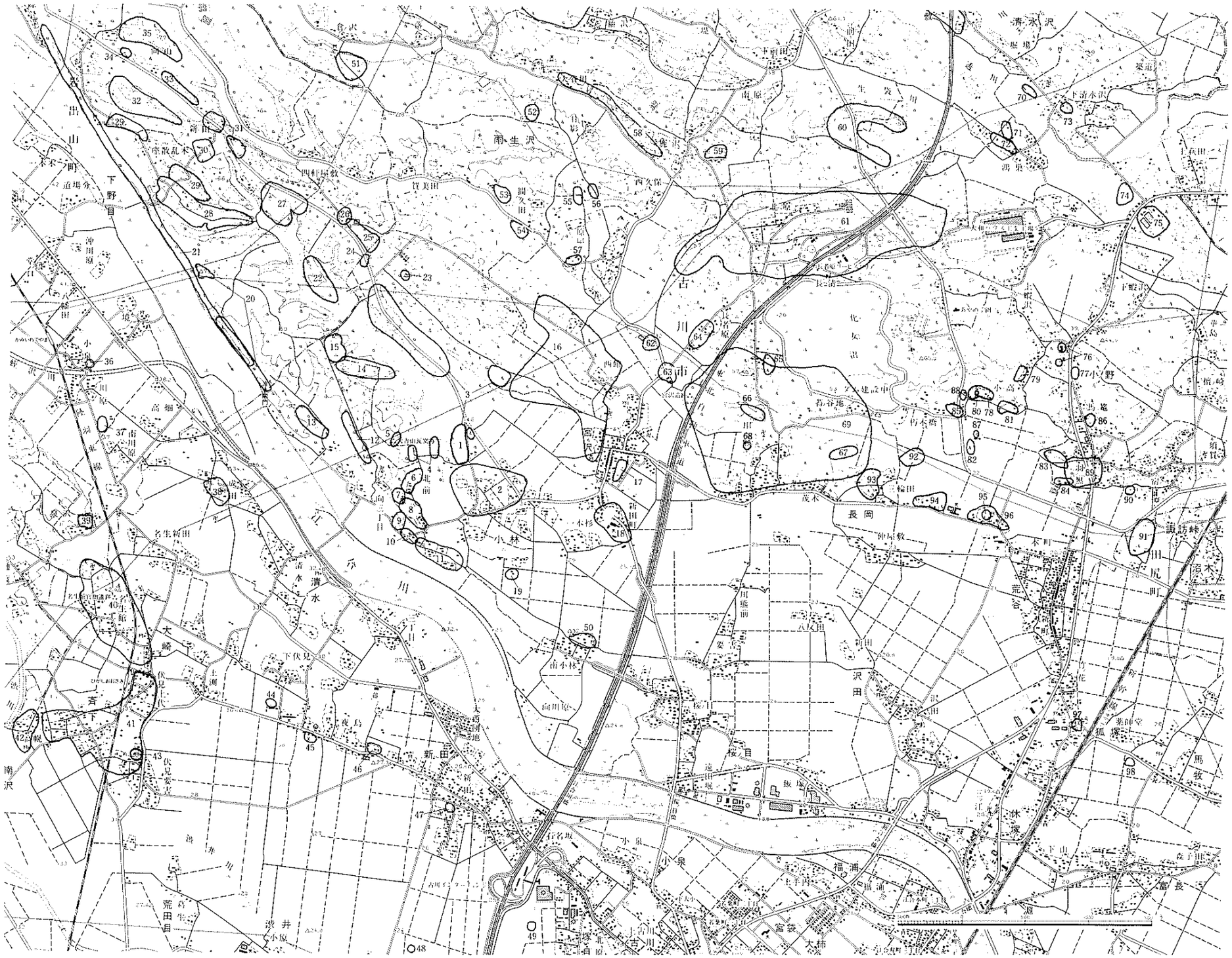
こうした遺跡間の関連性について、前述のように色麻古墳群や朽木橋横穴古墳群では関東系の土器が出土し、関東地方の人々との関連が指摘されているが、さらに、それらの周辺に位置する官衙遺跡である一の関遺跡（宮城県教委：1977）や名生館遺跡（多賀城跡調査研究所：1981 他）、宮沢遺跡(宮城県教委：1980)でも、同じく関東系の土器が出土していることから､これら官衙･寺院跡と高塚および横穴群集墳との関連性が指摘されている。

以上のように、大崎平野およびそれをとり囲む丘陵地帯に分布するこれらの諸遺跡は、位置的および 7 世紀から 8 世紀にかけての年代的に極めて密接な関係を持つものと考えられよう。

III　調査の方法と経過

本遺跡の調査は、宮沢地区県営圃場整備事業に係わるものである。

今回調査の対象となった地区は周知の遺跡である新谷地遺跡の隣接地にあたっており、まず、工事に先立って、この地区の遺跡の状況を把握するため、平成 3 年 8 月に確認調査



第１図　周辺の遺跡

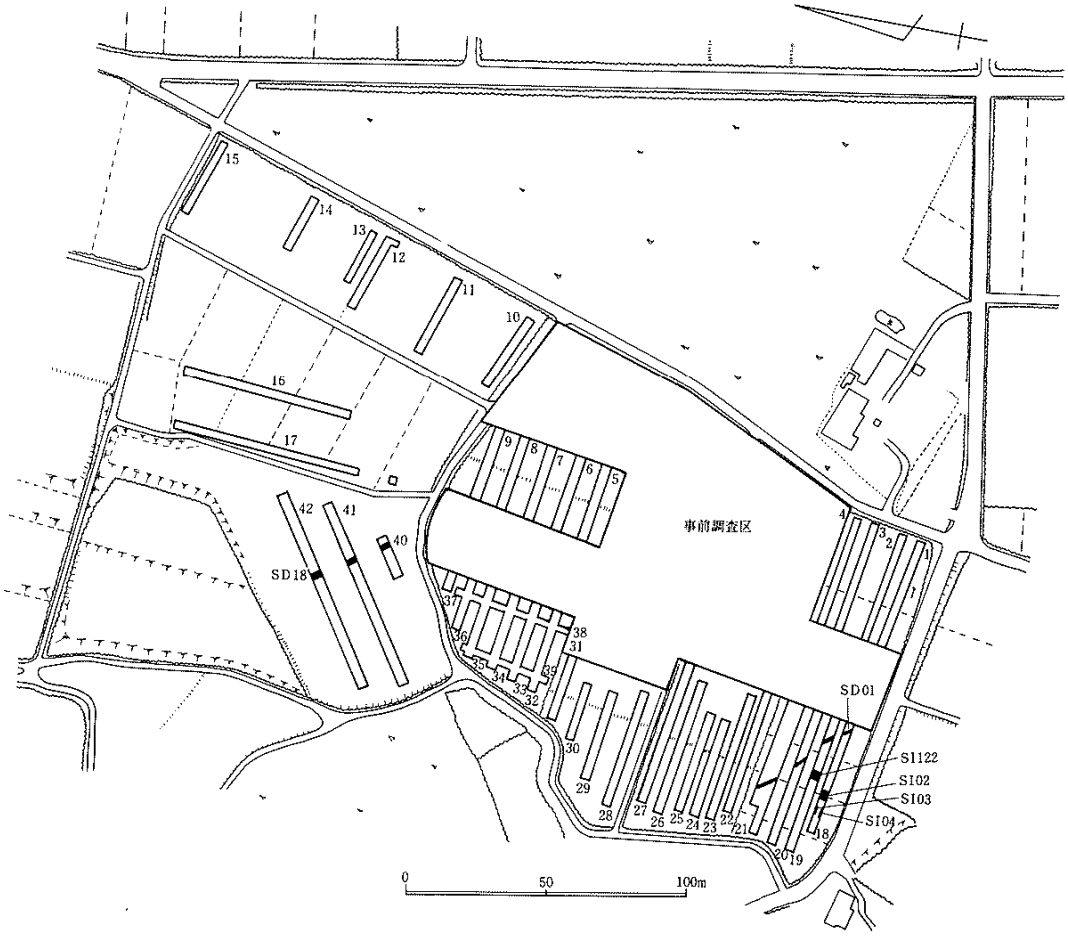
番号	遺　跡　名	種　別	時　代	番号	遺　跡　名	種　別	時　代
1	新谷地北遺跡	包含地・古墳	奈良・平安	50	南小林遺跡	包含地	古代
2	新谷地遺跡	包含地	古代	51	倉の沢B遺跡	包含地	縄文・古代
3	市史跡　塚原古墳群	円墳	古墳（後）	52	大谷川遺跡	包含地	縄文・奈良・平安
4	北の前遺跡	包含地・窯跡	縄文・古代	53	間久田遺跡	包含地	弥生・奈良・平安
5	国史跡　大吉山瓦窯跡	窯跡	奈良	54	間久田A遺跡	包含地	縄文・古代
6	杉ノ下遺跡	包含地	奈良・平安	55	逆沢A遺跡	包含地	縄文・古代
7	日光山古墳群（荘厳寺支群）	円墳	古墳	56	逆沢B遺跡	包含地	古墳
8	小林杉ノ下窯跡	瓦窯跡	平安	57	若林遺跡	包含地	古代
9	柳の関遺跡	包含地	平安	58	蛇沢遺跡	包含地	縄文・弥生・古代
10	道場囲遺跡	包含地	古代	59	城内遺跡	包含地	古代
11	抑の池囲遺跡	包含地	古代	60	畑谷地古墳群	円墳	古墳（後）
12	日光山古墳群（小寺囲支群）	方墳・円墳	古墳	61	長者原A遺跡	包含地	旧石器・縄文・奈良
13	日光山古墳群（成田支群）	方墳・円墳	古墳	62	宇南遺跡	包含地	奈良・平安
14	北馬場壇遺跡	包含地	旧石器～弥生・古墳	63	庚壇遺跡	包含地	古代
15	馬場壇A遺跡	方墳・円墳	旧石器～弥生・古墳	64	新庚壇遺跡	包含地	縄文・古代
16	西館遺跡	包含地	縄文・弥生・古代	65	長者原E遺跡	包含地	古代
17	下田遺跡	包含地	古代	66	山の上古墳群	方墳・円墳	古墳
18	新田町遺跡	包含地	弥生・古墳	67	岩井堂横穴古墳群	横穴古墳	古代
19	灰塚遺跡	包含地	縄文・古代・中世	68	長清古墳	円墳・塚	古墳
20	松森古墳群	方墳・円墳	古墳	69	国史跡　宮沢遺跡	官衙	弥生・奈良・平安
21	町史跡　川北横穴古墳群	横穴古墳	古墳（後）	70	堀場遺跡	包含地	古代
22	新田南遺跡	包含地	旧石器～古墳・古代	71	鴻の巣遺跡	包含地	
23	一の沢古墳	円墳	古墳	72	城内窯跡	窯跡	古代
24	一本松古墳群	円墳	古墳	73	堀崎遺跡	包含地	古代
25	一本松古墳群	円墳	古墳（後）	74	下沢田遺跡	包含地	奈良
26	一本松遺跡	包含地	旧石器～古墳・平安	75	一ノ坪遺跡	包含地.	古代
27	成田山遺跡	包含地	旧石器～古墳・奈良	76	新田古墳群	方墳・円墳	古墳
28	抑口遺跡	包含地	縄文～古墳・平安	77	馬場遺跡	包含地	縄文・古代
29	座敬乱木遺跡	包含地	旧石器～弥生・古代	78	小高遺跡	窯跡	古代
30	村山遺跡	包含地	旧石器～古墳・平安	79	小野横穴古墳群（新田支群）	横穴・円墳	古墳・古代
31	新田A遺跡	包含地・窯跡	旧石器～古墳・平安	80	小野横穴古墳群	横穴古墳	古墳（後）・古代
32	戦功壇遺跡	包含地	旧石器～古墳・平安	81	小野横穴古墳群（小高支群）	横穴古墳	古墳（後）・奈良
33	向山B遺跡	包含地	縄文（前）・古代	82	小野横穴古墳群（岩崎支群）	横穴古墳	古墳（後）・奈良
34	向山C遺跡	包含地	古代	83	小野横穴古墳群・(白山支群)	横穴古墳	古墳（後）・奈良
35	向山A遺跡	包含地	弥生・古墳	84	小野横穴古墳群（羽黒支群）	横穴古墳	古墳（後）・奈良
36	小泉遺跡	包含地	縄文・古代	85	小野横穴古墳群（栃木橋支群）	横穴古墳	古墳（後）・奈良
37	大下遺跡	包含地	古代	86	小野横穴古墳群（馬籠支群）	横穴古墳	古墳（後）・奈良
38	宮田天神遺跡	包含地	古代	87	岩崎古墳	円墳	古墳（後）
39	長者原B遺跡	包含地	旧石器・縄文・奈良	88	姥沢遺跡	包含地	奈良・平安
40	名生館遺跡	包含地・官衙	旧石器・古墳・古代	89	羽黒遺跡	包含地	古墳
41	上代遺跡	包含地	奈良・平安	90	一貫寺遺跡	包含地	奈良
42	高観遺跡	包含地	平安	91	天神山遺跡	包含地	古代
43	市史跡　伏見廃寺跡	包含地	古墳（後）	92	栃木橋遺跡	包含地	
44	朝日遺跡	包含地	古代	93	三輪田遺跡	包含地	
45	鹿島西遺跡	包含地	古代	94	権現山遺跡	包含地	
46	夜鳥前遺跡	包含地	古代	95	稲荷塚古墳	円墳	古墳（後）
47	南溝遺跡	包含地	古代	96	新江川遺跡	包含地	
48	月山囲遺跡	包含地	古代	97	稲荷遺跡	包含地	
49	境遺跡	包含地	古代	98	馬放B遺跡	包含地	

第1表　周辺の遺跡地名表

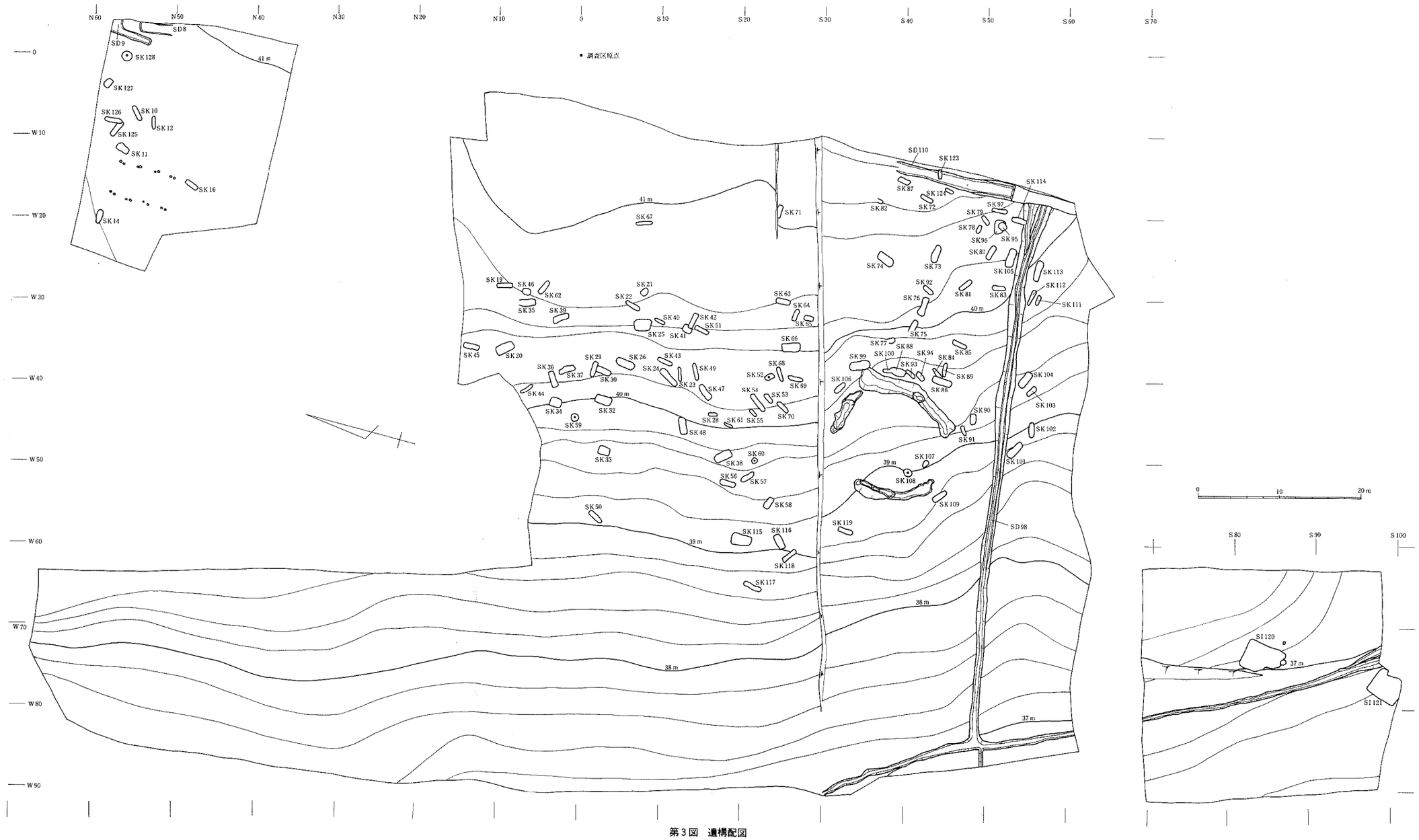
を行った。その結果、第18、19、20、21トレンチから竪穴住居跡・灰白色火山灰の入った溝跡・土壙などが確認され、それらの確認面から土師器・須恵器などが出土した。その後、8月に調査できなかった水田および畑部分の収穫を待って、平成3年10月から再び調査を行った。その結果、多数の土壙墓、古墳、竪穴住居跡、溝跡などが検出され、それら圃場整備によって削平される部分について事前調査を行った。なお、削平を受けない部分については、遺構の分布状況を把握するため、確認調査を行っている。

なお、調査に際しては、工事の際に基準となる排水４号杭を基準にして東西に発掘基準線を設定した。その際の原点の国家座標はＸ＝－153199.210、Ｙ＝8516.262 で、基準線は座標東から北に 15.8°偏している。

調査は、まず重機によって調査区の表土除去を行い、その後に遺構の精査を行った。調査で検出された遺構については、平板測量および 20 分の１の遣り方測量によって平面図を作成し、必要に応じて断面図も作成した。写真記録については、35ｍｍモノクロ写真・同カラーリバーサル写真、および航空写真によって行った。



第２図　トレンチ配置図


調査区原点
SD8
SD9
SK128
SK127
SK126
SK10
SK12
SK125
SK11
SK16
SK14
SK67
SK71
SK19
SK46
SK62
SK35
SK39
SK21
SK22
SK40
SK42
SK51
SK25
SK41
SK63
SK64
SK65
SK66
SK45
SK20
SK36
SK37
SK30
SK29
SK26
SK43
SK24
SK49
SK23
SK47
SK44
SK34
SK32
SK59
SK28
SK61
SK55
SK48
SK68
SK52
SK69
SK54
SK53
SK70
SK33
SK38
SK60
SK56
SK57
SK58
SK50
SK115
SK116
SK118
SK117
SK119
SK108
SK107
SK109
SD110
SK123
SK87
SK124
SK82
SK72
SK114
SK97
SK79
SK78
SK96
SK95
SK80
SK74
SK73
SK105
SK113
SK112
SK111
SK92
SK76
SK81
SK83
SK75
SK77
SK88
SK94
SK85
SK99
SK100
SK93
SK84
SK89
SK106
SK86
SK104
SK103
SK90
SK91
SK102
SK101
SD98
SI120
SI121
41 m
40 m
39 m
38 m
37 m
0
10
20 m
N60
N50
N40
N30
N20
N10
0
S10
S20
S30
S40
S50
S60
S70
S80
S90
S100
W10
W20
W30
W40
W50
W60
W70
W80
W90

第３図　遺構配図

Ⅳ　発見された遺構と出土遺物

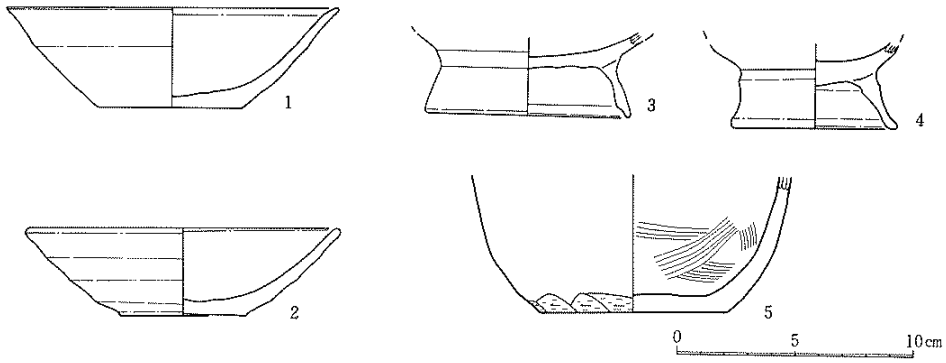
今回の調査で検出された遺構には、竪穴住居跡６軒（うち２軒精査）・古墳１基・土壙116 基（うち 108 基精査）・溝７条（うち６条精査）などがあり、それらの遺構や遺構外から、土師器、須恵器、石器、鉄製品などが出土している。

以下、順に記述していく。

竪穴住居跡と出土遺物（第 4～8 図）

今回の調査で６軒の竪穴住居跡が検出された。これらの住居跡はすべて調査区の南西部に位置している。これらの中で圃場整備事業による工事によって失われる２軒（ＳＩ120・121 号住居跡）については精査を行い、他の４軒は確認のみに留めた。概要は下記のとおりである。

ＳＩ02 号住居跡は、東壁と西壁の一部が検出されたのみで残存部から平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は東西約 4.5m、南北約 3m以上で、出土遺物には土師器坏１点がある。ＳＩ03 号住居跡は南側半分が検出され、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は東西約 2.8m、南北 1.5m以上で、出土遺物には須恵器甕１点がある。ＳＩ04 号住居跡は、北東隅の部分が検出されたのみで、平面形、規模などは不明である。出土遺物はない。ＳＩ122 号住居跡は東壁と西壁の一部が検出されたのみで、平面形は不明である。規模は東西約 2m、南北約 2.5m以上で、出土遺物は土師器甕 1 点、赤焼き土器 2 点、高台付坏３点がある。これらの遺物はすべて住居確認面から出土したものである（第４図）。



No.	器種	器形	層位	口	底	高	調整	図No.	登録	備考
1	赤焼土器	坏	確認面	14.0	6.0	4.2	内外：ロクロナデ、底：回転糸切り		22	
2	赤焼土器	坏	確認面	13.2	7.2	3.7	内外：ロクロナデ、底：回転糸切り	7－7	23	
3	赤焼土器	高台付坏	確認面		7.0		内外：ロクロナデ		24	
4	赤焼土器	高台付坏	確認面		8.7		内外：ロクロナデ	7－8	25	
5	土師器	土師器	確認面		7.8		外：ヘラケズリ、内：ヘラナデ	7－6	21	

第４図　ＳＩ122号住居跡出土遺物

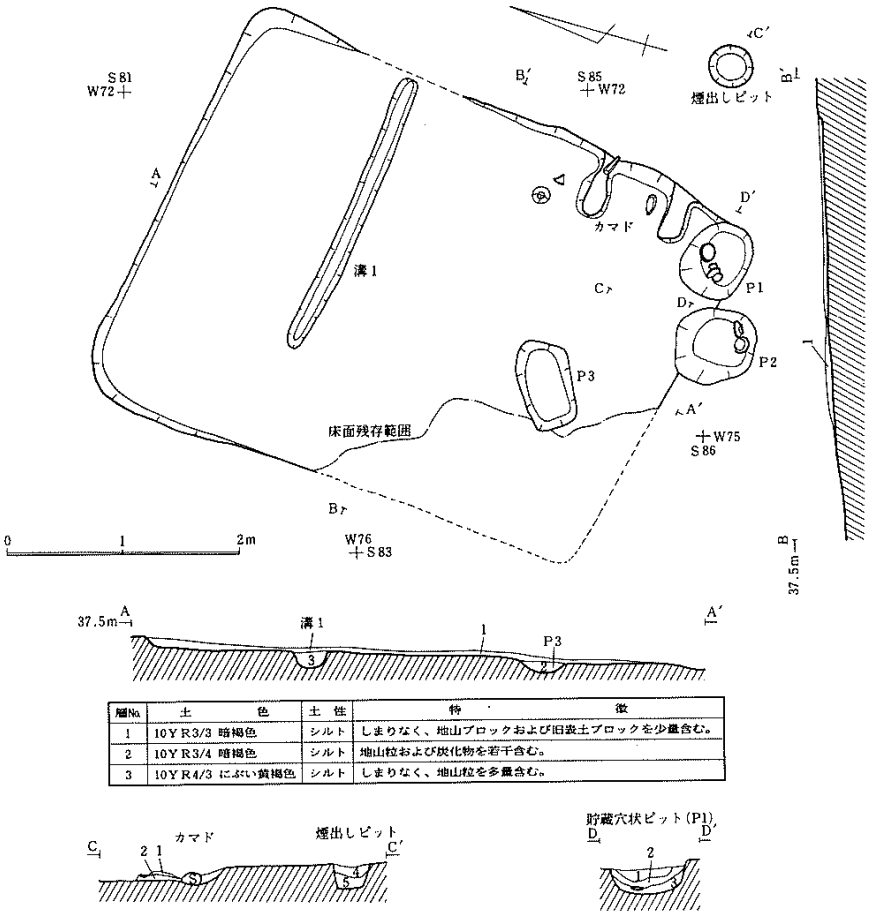
ＳＩ120 号住居跡

［遺構の確認］調査区の南側Ｗ－71～77、Ｓ－80～87 付近に位置し、地山面で確認された。南西隅の部分が削平を受けている。

［平面形・規模］平面形は長方形を呈し、規模は東西約 3.6m、南北約 4.6mである。

［堆積土］1 層のみである。地山のブロックや黒褐色のブロックを小量含むしまりのない暗褐色シルトが住居跡全体に薄く堆積している。

［床面・壁］掘り方底面をそのまま床面としている。床面は南西に向かって緩やかに傾斜しており、ほぼ平坦である。住居内南西部分の中央付近から南西隅にかけて不整形の堅くし

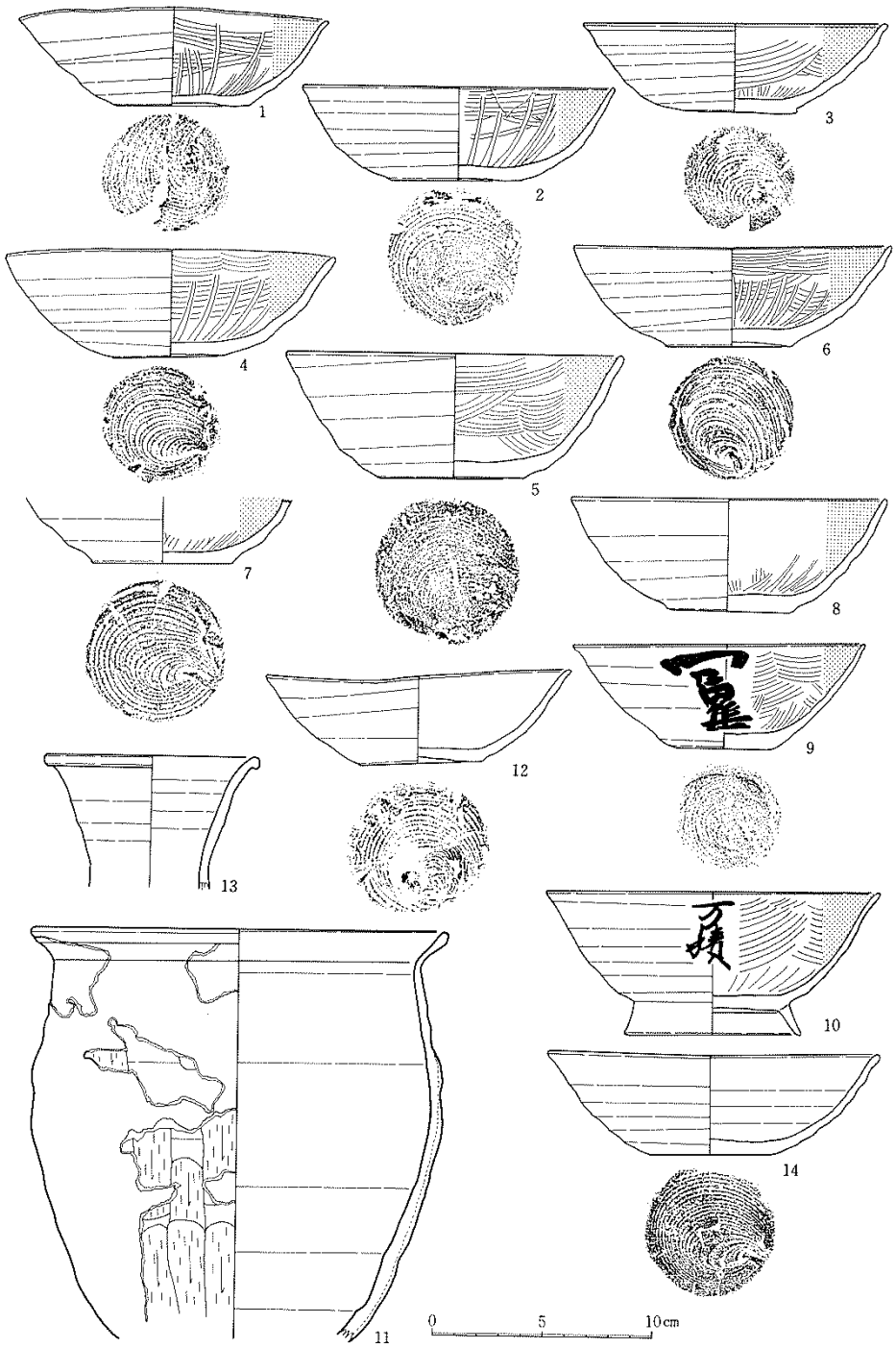


層No.	土色	土性	特徴
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	しまりなく、地山ブロックおよび旧表土ブロックを少量含む。
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山粒および炭化物を若干含む。
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	しまりなく、地山粒を多量含む。

層No.	土色	土性	特徴
1	10YR4/4 褐色	シルト	やや粘性があり、焼土を多量含む。
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	しまりなく、焼土および炭化物を若干含む。
3	10YR2/3 黒褐色	シルト	しまりなく、焼土および炭化物を微量含む。
4	10YR3/2 黒褐色	シルト	しまりなく、焼土をを若干、炭化物を微量含む。
5	10YR2/2 黒褐色	シルト	しまりなく、地山ブロックを若干、焼土、炭化物を微量含む。

層No.	土色	土性	特徴
1	10YR3/3 黒褐色	シルト	しまりなく、灰白色火山灰ブロックを若干、旧表土ブロックを少量、炭化物を微量含む。
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	しまりなく、焼土および炭化物を微量含む。
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	しまりなく、地山粒を若干、灰白色火山灰および炭化物を微量含む。

第５図　ＳＩ120号住居跡



第６図　ＳＩ120号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	層位	口	底	高	調整	図No.	登録	備考
1	土師器	坏	床面	15.0	5.7	4.5	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	6－1	1	
2	土師器	坏	カマド	14.2	5.9	4.3	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	6－2	7	
3	土師器	坏	床面	13.8	5.1	4.0	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	6－3	6	
4	土師器	坏	貯蔵穴1	14.9	5.2	4.9	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	6－4	11	
5	土師器	坏	貯蔵穴1	15.4	6.75	5.7	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	6－5	12	
6	土師器	坏	貯蔵穴1	14.4	5.7	4.6	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	6－6	10	
7	土師器	坏	カマド		6.4		外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理		8	
8	土師器	坏	カマド	14.4	5.6	5.2	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	6－7	9	
9	土師器	坏	カマド	13.3	4.4	4.8	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	6－8	3	墨書土器「宮□」
10	土師器	高台付坏	床面	15.2	8.0	6.5	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	6－9	4	墨書土器「万積」
11	土師器	甕	煙出しPit 1層	19.0			外：ロクロナデ+ヘラケズり、内：ロクロナデ		14	
12	赤焼土器	坏	貯蔵穴2	13.8	5.6	4.4	内外：ロクロナデ、底：回転糸切り	6－10	5	
13	須恵器	壺	床直	9.8			内外：ロクロナデ	6－12	2	
14	須恵器	坏	貯蔵穴1	15.1	5.8	4.7	内外：ロクロナデ、底：回転糸切り	6－11	13	

第2表　ＳＩ120号住居跡出土遺物観察表

まった部分がある。壁は床面から緩やかに立ち上がり、壁高は最も保存のよい北東隅部分で14cmある。

［カマド］東壁の南寄りに付設されている。燃焼部軸線上にあたる住居外約90cmのところに煙出しと考えられるピットがある。燃焼部側壁は凝灰岩の切り石を芯にして、それに黄褐色の粘土をはりつけて構築している。燃焼部底面のほぼ中央にはたて長の石を横に据えてあり、支脚と考えられる。煙出しピットは、直径約38cm・深さ約20cmである。なお、煙道部は検出されなかった。

［柱穴］検出されなかった。

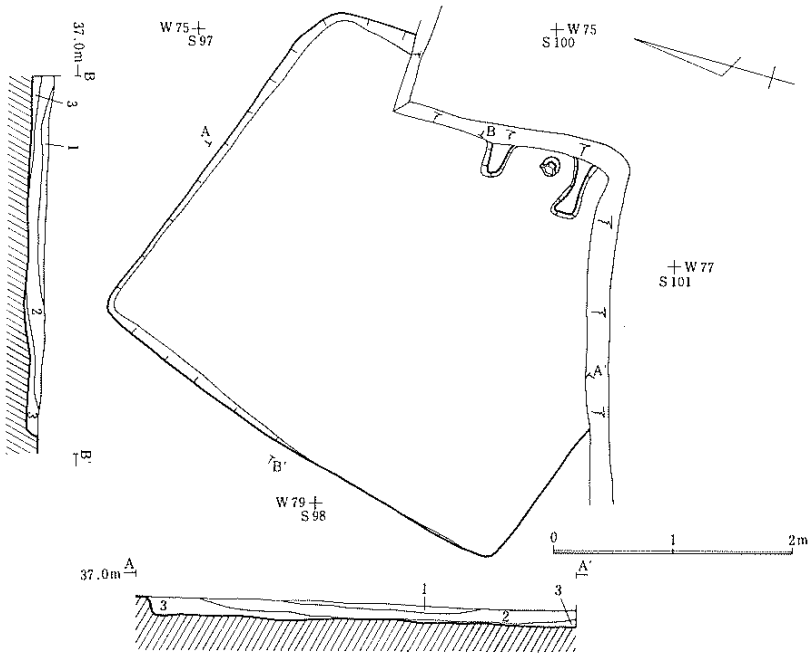
［床面の施設］カマド燃焼部右側から、長径約68cm・短径約46cm・深さ約24cmの楕円形のピット（Ｐ1）および、直径約70cm・短径約60cm・深さ約20cmの楕円形のピット（Ｐ2）が検出された。このうちＰ1からは土師器坏が重なったままの状態で出土した。遺物の出土状況や位置的な点からみて貯蔵穴と考えられる。他に、南側中央付近から縦約60cm・横約42cm・深さ約10cmのピット（Ｐ3）や、東壁の北側から西方向に直線的に延びる溝などが検出されたが、その性格は不明である。

［出土遺物］土師器坏、土師器甕、須恵器坏、須恵器壺、赤焼土器坏、などが出土している。これらのうち床面上およびピットから出土したものは住居に伴う遺物と考えられる。その中には「宮□」と墨書された土師器坏1点も含まれている。また、堆積土中から「万積」の墨書のある高台付坏が1点出土している（第6図）。

ＳＩ121号住居跡

［遺構の確認］調査区の南側Ｗ－74～80、Ｓ－96～102付近に位置し、地山面で確認された。南東隅は調査区外に延びている。

［平面形・規模］検出部分から平面形は長方形を呈するものと考えられる。規模は東西約3.3ｍ、南北約3.9ｍである。



層No.	土　　色	土　性	特　　徴
1	10YR2/1 黒色	シルト	しまりなく、パサパサしている。
2	10YR6/1 褐灰色	シルト	灰白色火山灰
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物および焼土を多量含む。

第７図　ＳＩ121号住居跡

[堆積土]3 層に大別され、いずれの層も自然流入土である。このうち第 2 層は灰白色火山灰層である。

[床面・壁]掘り方底面をそのまま床面としている。床面はほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最も保存のよい北東隅部分で 26cm ある。

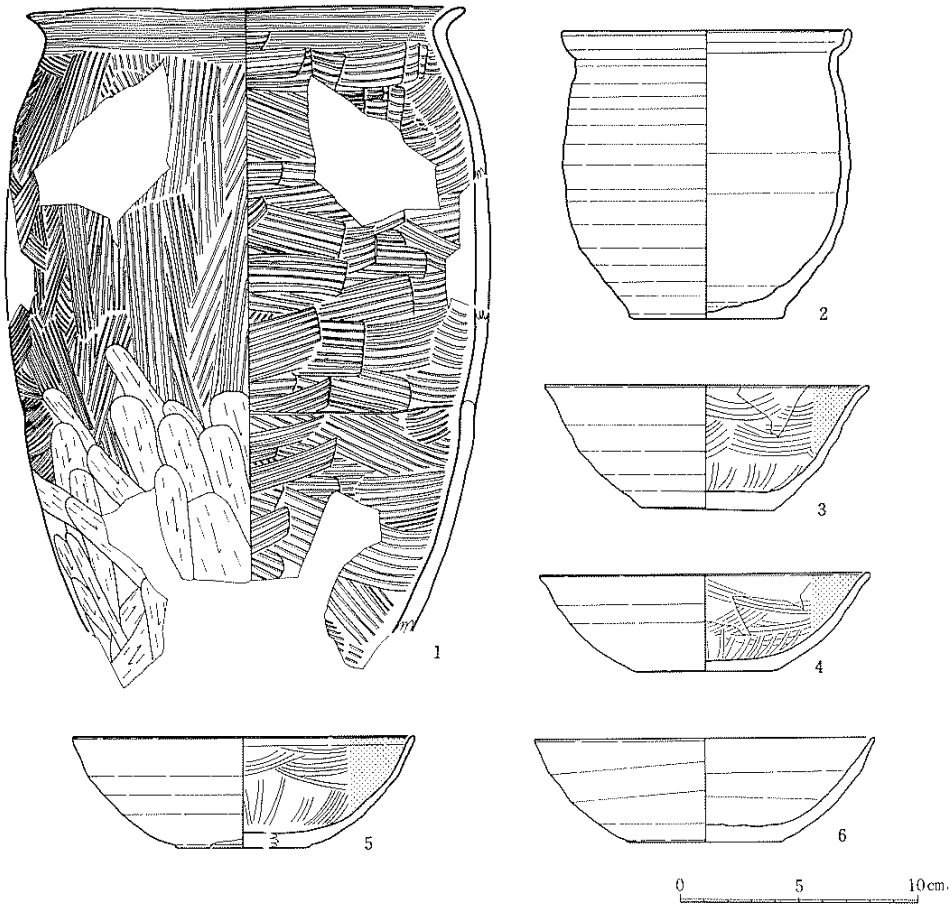
[カマド]東壁の中央やや南寄りに付設されており側壁部のみ検出した。側壁は粘土を積み上げて構築している。燃焼部中央には立石を据えその上に土師器坏が逆位にのせてあり、支脚と考えられる。

[柱穴] 検出されなかった。

[出土遺物]床面上から、土師器坏、土師器甕、須恵器坏、堆積土中から縄文土器片、土師器坏、土師器甕が出土している（第 8 図）。

古墳（第 9 図）

1 基検出した。古墳が位置するのはＳ33～45・W40～55 区の標高 39～39.6m付近の丘陵



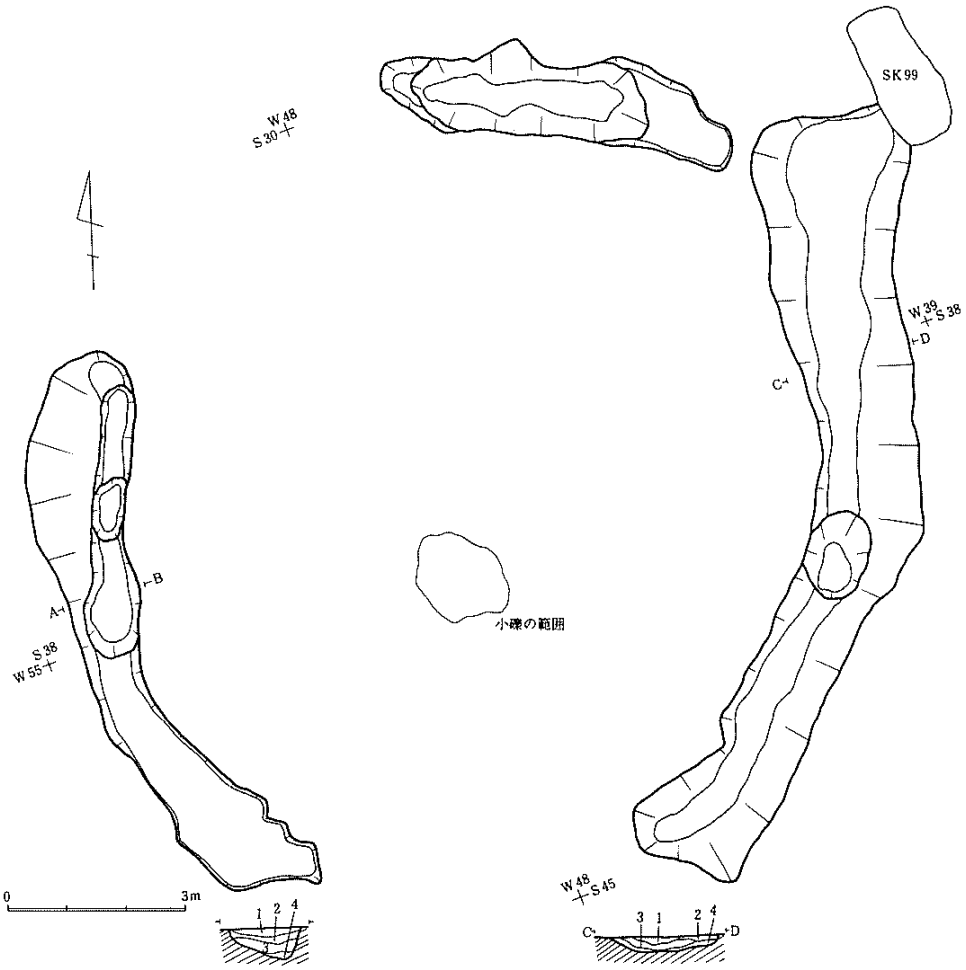
No.	器種	器形	層位	口	底	高	調整	図No.	登録	備考
1	土師器	甕	床面	18.4			外：ヨコナデ＋ハケ＋ヘラケズリ、内：ヨコナデ＋ハケ		15	
2	土師器	甕	堆積土３層	12.2	6.6	12.2	内外：ロクロナデ、底：回転糸切り	7－4	18	
3	土師器	坏	堆積土３層	13.7	6.5	5.3	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	7－1	16	
4	土師器	坏	堆積土３層	14.0	6.0	4.2	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	7－2	20	
5	土師器	坏	支脚	14.4	5.6	4.8	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、底：回転糸切り、黒色処理	7－3	19	
6	須恵器	坏	床面	14.4	6.4	4.9	内外：ロクロナデ、底：回転糸切り	7－5	17	

第８図　ＳＩ121号住居跡出土遺物

西斜面である。ほぼ半周するように残存しており、その残存状況から内周が直径約 12mで南に開く円墳と考えられる。

なお、ＳＫ99 号土壙と重複し、これに切られている。

墳丘自体は削平を受けており残存しておらず、周溝と石室の裏込め石と考えられる小礫群のみが検出されたが、これは原位置を留めていない。周溝は上端幅が 0.8～2.2m、下端幅が 0.4～1.2mで、断面形は古墳の内周側が直立気味に立ち上がり、外周側が緩やかに立ち上がる逆台形状を呈している。周溝の北東部、南東部の一部、北西部には一段深く掘込ま



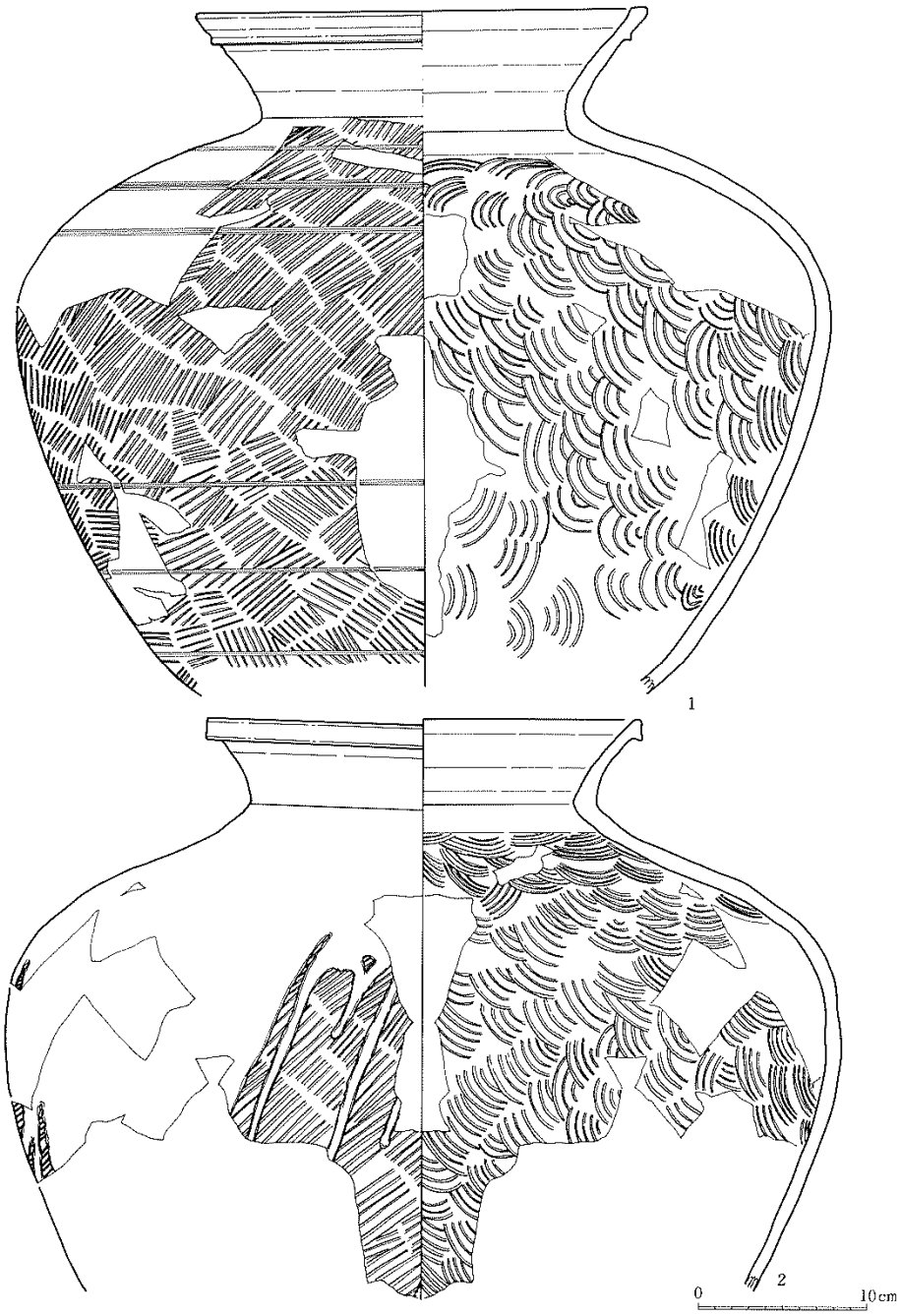
層No.	土　　色	土　性	特　　徴
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山ブロックを微量含む。
2	10YR2/3 暗褐色	シルト	地山ブロックを微量含む。
3	10YR2/3 暗褐色	シルト	地山ブロックを多量含む。
4	10YR4/4 褐色	シルト	地山ブロックを多量含む。

層No.	土　　色	土　性	特　　徴
1	10YR4/4 褐色	シルト	地山粒を多く含む。
2	10YR5/6 黄褐色	シルト	3 層のシルトを少量含む。
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	地山粒を微量含む。
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	地山ブロックを多く含む。

第9図　古　　墳

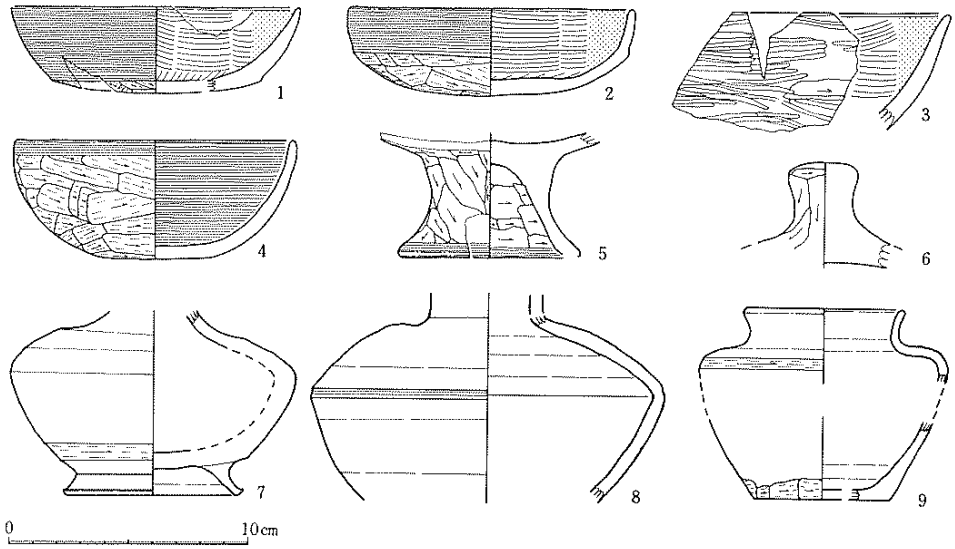
れている部分があり、北西部にはさらにもう一段深く堀込まれている部分がある。周溝底面は前述した部分以外はほぼ平坦で南に行くにつれて浅くなり南側で途切れており、前庭部と考えられる。

出土遺物には、前庭部付近の周溝南東部と周溝北東部の底面、堆積土から出土した土師器、須恵器があり、とくに前庭部付近で集中して出土した。また、小礫群の中からも若干の土師器、須恵器が出土している。図示できたものは土師器坏 4 点（第 11 図 1～4）、高坏 1 点（同 5）、須恵器壺 3 点（同 7～9）・甕 2 点（第 10 図 1・2）である。



No.	器種	器形	層位	口	底	高	調整	図No.	登録	備考
1	須恵器	甕		26.4			外：平行タタキ目、内：同心円状のオサエ	8－6	26	
2	須恵器	甕		25.6			外：平行タタキ目、内：同心円状のオサエ	8－7	27	自然釉

第10図　古墳周溝出土遺物（1）



No.	器種	器形	層位	口	底	高	調整	図No.	登録	備考
1	土師器	坏	2層	12.0	8.7	3.6	外：横ナデ、ヘラケズリ、内：ヘラミガキ、黒色処理、底：ヘラケズリ	8－1	28	外面下位に段
2	土師器	坏	3層	11.8	6.2	3.7	外：横ナデ、ヘラケズリ、内：ヘラミガキ、黒色処理、底：ヘラケズリ	8－2	29	外面中位に段
3	土師器	坏	2層				外：ヘラケズリ→ヘラミガキ、内：ヘラミガキ、黒色処理		30	
4	土師器	坏	3層	11.6	4.8	5.0	外：横ナデ、ヘラケズリ、内：ナデ、底：ヘラケズリ	8－3	31	
5	土師器	高坏	3層				外：ヘラケズリ、横ナデ、内：ヘラケズリ		32	
6	土器器	蓋	小鍵群				外：ヘラケズリ、内：黒色処理		33	
7	須恵器	壺	3層				外：ロクロナデ、体部下回転ヘラケズリ、内：ロクロナデ	8－4	34	
8	須恵器	壺	3層				外：ロクロナデ、内：ロクロナデ	8－5	35	
9	須恵器	壺	3層				外：ロクロナデ、体部下ヘラケズリ、内：ロクロナデ、底：静止ヘラ切り		36	

第11図　古墳周溝出土遺物（2）

土壙（第13～21図）

土壙は116基を検出し、108基を精査した。分布状況は遺構配図に示したとおりである。以下、精査した土壙について形態的な分類を行い、その後分類ごとに個別に説明を加えていく。なお、土壙全体についての形態、規模、分類、出土遺物などについては第2表にまとめた。

［土壙の形態分類］

検出された土壙について、平面形と断面形から形態分類を行う。

〈平面形〉

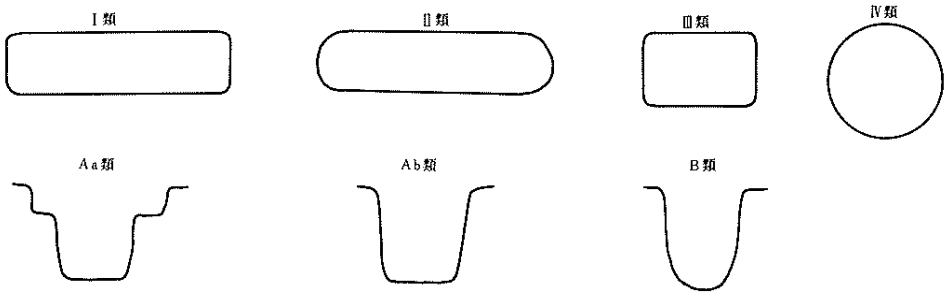
Ⅰ類：長方形を呈するもの（縦長で、土壙の隅が比較的明確なもの）

Ⅱ類：長楕円形を呈するもの（縦長で土壙の隅が明確でなく、比較的丸みをもつもの）

Ⅲ類：方形を呈するもの（Ⅰ類よりも長軸と短軸の比が小さく、土壙の隅が比較的明確なもの）

Ⅳ類：円形を呈するもの

Ⅴ類：不整形を呈するもの



第12図　土壙形態分類模式図

〈断面形〉

A類：「 ⊔ 」状を呈するもの（底面が平坦であり、壁の立ち上がりが明確で垂直に近いもの）

B類：「U」字状を呈するもの（底面が皿状を呈し、壁の立ち上がりが明確でなく比較的緩やかに立ち上がるもの）

なお、A類には底面から25～40cmほどのところに段を持つものがあり、段を持つものをＡａ類、段を持たないものをＡｂ類とする。Ｂ類には段を持つものはない。

以上のように分類でき、今回の調査では、ＩＡａ類、ＩＡｂ類、ＩＢ類、ⅡＡｂ類、ⅡＢ類、ⅢＡａ類、ⅢＡｂ類、ⅢＢ類、ⅣＡｂ類、Ｖｂ類の10類が検出されている。

以下、各土壙群について述べる。

ⅠＡａ類　平面形が長方形を呈し、底面が平らで段を持つもので、5 基検出された。規模は最大のＳＫ26 号土壙で236×102cm、最小がＳＫ56 号土壙の188×64cmで、深さはＳＫ26 号土壙の54cmが最も深い。

堆積土は全体的に地山ブロック・地山粒などの混入が見られ、人為堆積土と考えられるものである。とくにＳＫ26 号土壙やＳＫ56 号土壙をみると、第1層が自然堆積土で、その下層が人為堆積土という堆積状況を示している。

ＳＫ38 号土壙の底面から須恵器高台付坏の高台部分（第22図5）が出土している。

このＩＡａ類は他の土壙に比して規模が大きく、深さも深く、壁の立ち上がりがしっかりしている傾向が見られる。また、段は長辺にのみつくもの、長辺の片側にのみつくもの、四方に段がめぐるものがあり、短辺にのみつくものはない。

ⅠＡｂ類　今回検出された中で最も多い部類で、平面形が長方形を呈し、底面が平らで壁が直立気味に立ち上がるものである。44 基検出された。規模は最大がＳＫ86 号土壙で238×74

cm、最小がＳＫ55 号土壙の 114×39cm で、深さはＳＫ29 号土壙の 48cm が最も深い。ＳＫ51・104 号土壙のように、底面に溝状の落ち込みが見られる土壙もある。

堆積土は、ＩＡａ類と同様、人為堆積もしくは自然堆積＋人為堆積と考えられる。また、ＳＫ48 号土壙のように、第 1・2 層はしまりのない黒褐色の自然堆積土が落ち込んだような状態で堆積し、下層は人為堆積土が水平に堆積している状況を示す土壙も見られる。

遺物は、ＳＫ11 号土壙から縄文土器片、ＳＫ105 号土壙から土師器甕破片、ＳＫ29 号土壙から須恵器坏体部破片、ＳＫ35・39 号土壙から石鏃、ＳＫ11 号土壙から直刀、ＳＫ77・101 号土壙から刀子、ＳＫ16･86 号土壙から鉄鏃、ＳＫ95 号土壙から鉄釘が出土している。直刀（第 23 図 1）、刀子（同 2～6）はすべて土壙底面から出土しており、特にＳＫ86 号土壙で出土した鉄鏃（同 7～12）は、土壙の西壁に沿って束ねられたような状態で出土している。その他の土器、石製品は堆積土からの出土である。ＳＫ35 号土壙から出土した石鏃は無茎の石鏃で石材は頁岩、ＳＫ39 号土壙から出土した石鏃は基部に抉りを持つ所謂アメリカ式石鏃で、石材は黒曜石である。

Ⅰ Ｂ類 平面形が長方形を呈し､底面が皿状で壁が比較的緩やかに立ち上がるものである。17 基検出された。規模は最大のＳＫ24 号土壙で 270×68cm、最小がＳＫ124 号土壙の 112×40cm で、深さはＳＫ99 号土壙の 43cm が最も深い。ＳＫ99 号土壙の底面には溝状の落ち込みが数条見られた。

堆積土はすべて人為堆積と考えられる。その堆積状況は、ＳＫ24 号土壙のように落ち込んだような状態に堆積しているもの、ＳＫ102 号土壙のように不規則な堆積状況を示すものもある。

ＳＫ99 号土壙の底面から、須恵器坏（第 22 図 3）が正位の状態で出土している。

Ⅱ Ａｂ類 平面形が長楕円形を呈し､底面が平らで壁が直立気味に立ち上がるものである。7 基検出された。規模は最大のＳＫ112 号土壙で 196×48cm、最小がＳＫ28 号土壙の 108×40cm で、深さはＳＫ14 号土壙の 40cm が最も深い。

堆積土は人為堆積もしくはＩＡａ・ＩＡｂ類と同様に、自然堆積＋人為堆積という堆積状況を示す土壙がある。

ＳＫ83 号土壙の堆積土から土師器甕破片が出土している。

Ⅱ Ｂ類 平面形が長楕円形を呈し､底面が皿状で壁が比較的緩やかに立ち上がるものである。14 基検出された。規模は最大がＳＫ73 号土壙で 215×93cm、最小がＳＫ103 号土壙の 143×62cm で、深さはＳＫ37 号土壙の 35 cmが最も深い。

堆積土はすべて人為堆積土と考えられる。

ＳＫ88 号土壙の人為堆積土中から土師器坏(第 22 図 2)が、ＳＫ100 号土壙の底面から刀子

(第 23 図 2)が出土している。

Ⅲ Ａａ類　Ⅰ類よりも長軸と短軸の比が小さく、平面形が方形を呈し段を持つものである。3 基検出された。ＳＫ32・ＳＫ33・ＳＫ115 号土壙で、ＳＫ32 号土壙は規模が 198×100 ㎝で深さが 65㎝、ＳＫ33 号土壙は規模が 138×97㎝で深さが 37㎝、ＳＫ115 号土壙は規模が 246×140㎝で、深さが 63㎝である。ＳＫ33 号土壙は長辺に、ＳＫ115 号土壙には四方に段がめぐっている。

堆積土は人為堆積土もしくは自然堆積＋人為堆積と考えられる。なお、ＳＫ32 号土壙の堆積土中から土師器甕破片が出土している。

Ⅲ Ａｂ類　平面形が方形を呈し、底面が平らで壁が直立気味に立ち上がるものである。6 基検出された。規模は最大がＳＫ20 号土壙で 220×112㎝、最小がＳＫ90 号土壙で 122×64㎝で、深さはＳＫ34 号土壙の 42㎝が最も深い。

堆積土はすべて人為堆積と考えられる。

ＳＫ20 号土壙の上層から土師器坏（第 22 図 1）が出土している。

Ⅲ Ｂ類　平面形が方形を呈し、底面が皿状で壁が比較的緩やかに立ち上がるものである。3 基検出された。ＳＫ21・25・41 土壙で、ＳＫ21 号土壙は規模が 100×72㎝で深さが 12㎝、ＳＫ25 号土壙は規模が 214×138㎝で、深さが 30㎝、ＳＫ41 号土壙は規模が 114×93㎝で深さが 20㎝である。

堆積土はすべて人為堆積土である。出土遺物はない。

Ⅳ Ａｂ類　平面形が円形を呈するもので、5 基検出された。規模、深さとも最大がＳＫ128 号土壙で 120×118㎝で、深さが 117㎝、最小がＳＫ60 号土壙で規模が 76×76ｍ、深さが 30㎝と最も浅い。これらの土壙にはすべて底面ほぼ中央に小ピットが検出されている。堆積土は自然堆積であると考えられる。出土遺物はない。

Ⅴ Ｂ類　3 基検出された。ＳＫ46・91・107 号土壙である。これらは上記の分類のいずれにも属さないものである。

堆積土は人為堆積、自然堆積の両方が認められた。出土遺物はない。

その地の遺構と出土遺物

［ＳＤ01 号溝跡］

第 18～21 トレンチで検出した。幅約 0.6～1ｍの北西から南東方向に延びる溝である。堆積土の上層に灰白色火山灰が認められたが、確認調査のため掘り下げは行っておらず、詳細は不明である。

［ＳＤ08 号溝跡］

土壙番号	規模（cm）（長軸×短軸）	深さ（cm）	長軸方向	平面形	分類	備考	土壙番号	規模（cm）（長軸×短軸）	深さ（cm）	長軸方向	平面形	分類	備考
SK 10	196×56	26	N－45°－E	長方形	ⅠAb		SK 50	194×65	24	N－27°－E	長方形	ⅠB	鉄製品出土
SK 11	176×76	22	N－17°－E	長方形	ⅠAb	直刀、縄文土器片出土	SK 51	180×51	34	N－11°－E	長方形	ⅠAb	底面に溝あり。
SK 12	164×36	8	N－72°－E	長楕円形	ⅡB		SK 52	116×54	79		円形	Ⅳ	
SK 14	180×68	40	N－88°－W	長楕円形	ⅡAb		SK 53	135×54	10	N－39°－E	長方形	ⅠAb	
SK 16	176×54	18	N－20°－E	長方形	ⅠAb	鉄鏃出土	SK 54	262×63	17	N－35°－E	長方形	ⅠAb	
SK 19	194×65	32	N－16°－W	長方形	ⅠAb		SK 55	114×39	21	N－24°－E	長方形	ⅠAb	
SK 20	220×112	34	N－43°－W	方形	ⅢAb	土師器坏出土	SK 56	188×64	54	N－1°－W	長方形	ⅠAa	段が四方につく。
SK 21	100×72	12	N－57°－W	方形	ⅢB		SK 57	188×66	26	N－49°－W	長楕円形	ⅡB	
SK 22	198×52	28	N－15°－E	長楕円形	ⅡB		SK 58	150×71	15	N－75°－W	長方形	ⅠB	
SK 23	168×36	24	N－77°－E	長楕円形	ⅡB		SK 59	103×86	67		円形	Ⅳ	
SK 24	270×68	20	N－31°－E	長方形	ⅠB		SK 60	76×76	30		円形	Ⅳ	
SK 25	214×138	30	N－16°－W	方形	ⅢB		SK 61	118×35	8	N－11°－E	長方形	ⅠAb	
SK 26	238×102	54	N－7°－E	長方形	ⅠAa		SK 62	182×59	32	N－66°－W	長方形	ⅠAb	
SK 28	108×40	24	N－15°－W	長楕円形	ⅡAb		SK 63	166×66	23	N－3°－W	長方形	ⅠB	
SK 29	190×54	48	N－90°－E	長方形	ⅠAb	須恵器坏底部出土、SK30を切る。	SK 64	152×56	30	N－84°－W	長方形	ⅠB	
SK 30	184以上×72	16	N－9°－E	長方形	ⅠAb	SK29に切られる。	SK 65	129×48	21	N－10°－W	長方形	ⅠAb	
SK 32	198×100	66	N－5°－E	方形	ⅢAa	土師器甕底部、刀？出土	SK 66	226×104	44	N－21°－W	長方形	ⅠAb	
SK 33	138×97	37	N－3°－E	方形	ⅢAa		SK 67	200×40	14	N－19°－W	長楕円形	ⅡB	
SK 34	140×112	42	N－3°－E	方形	ⅢAb		SK 68	184×52	20	N－59°－E	長楕円形	ⅡB	
SK 35	190以上×80	10	N－20°－W	長方形	ⅠAb	石鏃出土、北壁削平	SK 69	183×50	22	N－4°－W	長楕円形	ⅡAb	
SK 36	194×64	47	N－54°－E	長方形	ⅠAb	剥片石器出土	SK 70	167×57	21	N－29°－E	長方形	ⅠB	底面に溝
SK 37	194×78	35	N－33°－W	長楕円形	ⅡB	刀子？出土	SK 71	162×49以上	15	N－90°－E	長方形	ⅠB	水田により北壁削平
SK 38	223×105	52	N－43°－W	長方形	ⅠAa	須恵器高台付坏出土	SK 72	164×54	20	N－14°－E	長方形	ⅠB	
SK 39	194×70	45	N－35°－W	長方形	ⅠAa		SK 73	215×93	14	N－85°－W	長楕円形	ⅡB	刀子？出土
SK 40	136×40	12	N－10°－E	長方形	ⅠB		SK 74	215×100	21	N－20°－E	長方形	ⅠAb	
SK 41	114×93	20	N－8°－E	方形	ⅢB	SK42に切られている。	SK 75	140以上×60	10	N－74°－W	長方形	ⅠAb	
SK 42	194×58	32	N－80°－W	長方形	ⅠAb		SK 76	227×70	29	N－84°－W	長方形	ⅠB	
SK 43	180×55	18	N－8°－E	長方形	ⅠAb	刀子出土	SK 77	96以上×57	20	N－31°－E	長方形	ⅠAb	刀子出土、北壁削平
SK 44	176×40	24	N－49°－W	長楕円形	ⅡAb		SK 78	100×52	8	N－83°－W	方形	ⅢB	
SK 45	200×62	22	N－2°－W	長方形	ⅠAb		SK 79	130×55	22	N－38°－E	長方形	ⅠAb	
SK 46	105×80	20		不整形	Ⅴ		SK 80	182×72	17	N－74°－W	長方形	ⅠAb	
SK 47	214×76	22	N－38°－E	長方形	ⅠB		SK 81	184×54	26	N－54°－E	長方形	ⅠAb	
SK 48	212×43	39	N－63°－E	長方形	ⅠAb		SK 82	80以上×54	15	N－2°－E	長楕円形	ⅡB	北壁削平
SK 49	202×41	28	N－61°－E	長方形	ⅠAb		SK 83	168×56	35	N－16°－W	長楕円形	ⅡAb	土師器甕破片出土

第3表　土壙一覧表（1）

土壙番号	規模（cm）（長軸×短軸）	深さ（cm）	長軸方向	平面形	分類	備考
ＳＫ 84	140以上×48	10	Ｎ－37°－Ｅ	長楕円形	ⅡＡｂ	
ＳＫ 85	180×46	12	Ｎ－10°－Ｅ	長方形	ⅠＢ	
ＳＫ 86	238×74	47	Ｎ－3°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	鉄鏃、刀子出土
ＳＫ 87	150×65	20	Ｎ－13°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	
ＳＫ 88	200以上×88	21	Ｎ－1°－Ｗ	長楕円形	ⅡＢ	土師器坏出土、SK100 に切られ、SK93を切っている。
ＳＫ 89	176×42	20	Ｎ－83°－Ｅ	長楕円形	ⅡＢ	
ＳＫ 90	122×64	24	Ｎ－74°－Ｅ	方形	ⅢＡｂ	
ＳＫ 91	144×50	27	Ｎ－56°－Ｅ	不整形	Ⅴ	
ＳＫ 92	150×53	16	Ｎ－27°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	
ＳＫ 93	431×48	26	Ｎ－23°－Ｅ	長楕円形	ⅡＡｂ	SK88に切られている。
ＳＫ 94	125×60	31	Ｎ－36°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	
ＳＫ 95	102以上×80	22	Ｎ－38°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	釘出土、SK96を切っている、南壁削平
ＳＫ 96	176×124	25	Ｎ－90°－Ｅ	長方形	ⅢＡｂ	SK95に切られている。
ＳＫ 97	192×25	31	Ｎ－8°－Ｗ	長方形	ⅠＢ	
ＳＫ 99	246×106	43	Ｎ－23°－Ｅ	長方形	ⅠＢ	須恵器坏出土、底面に溝状の落ち込み。
ＳＫ100	80以上×48	9	Ｎ－13°－Ｅ	長楕円形	ⅡＢ	刀子出土、SK88を切っている。
ＳＫ101	222×67	37	Ｎ－63°－Ｗ	長方形	ⅠＡｂ	刀子？出土
ＳＫ102	189×68	27	Ｎ－74°－Ｅ	長楕円形	ⅠＢ	
ＳＫ103	143×62	25	Ｎ－61°－Ｗ	長方形	ⅡＢ	
ＳＫ104	220×87	28	Ｎ－67°－Ｗ	長方形	ⅠＡｂ	底面に溝
ＳＫ105	218×94	44	Ｎ－89°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	土師器甕破片出土
ＳＫ106	162×66	13	Ｎ－59°－Ｗ	長方形	ⅠＡｂ	
ＳＫ107	96×66	40		不整形	Ⅴ	
ＳＫ108	102×96	77		円形	Ⅳ	
ＳＫ109	92以上×75	27	Ｎ－48°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	南半削平
ＳＫ111	123×50	20	Ｎ－83°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	
ＳＫ112	196×48	31	Ｎ－82°－Ｗ	長楕円形	ⅡＡｂ	
ＳＫ113	148×77	42	Ｎ－88°－Ｅ	方形	ⅢＡｂ	
ＳＫ114	178以上×65	33	Ｎ－0°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	SD98b に切られる。
ＳＫ115	246×140	63	Ｎ－6°－Ｅ	方形	ⅢＡａ	
ＳＫ116	190×92	43	Ｎ－44°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	
ＳＫ117	227×55	13	Ｎ－9°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	
ＳＫ118	200×57	10	Ｎ－56°－Ｅ	長方形	ⅠＢ	
ＳＫ119	184×58	8	Ｎ－2°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	
ＳＫ123	124×43	30	Ｎ－78°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	SK110 を切っている。
ＳＫ124	112×40	20	Ｎ－10°－Ｗ	長方形	ⅠＢ	底面に溝状の落ち込み。
ＳＫ125	207×62	28	Ｎ－64°－Ｅ	長方形	ⅠＡａ	SK126 に切られる。
ＳＫ126	110×48	26	Ｎ－7°－Ｅ	長方形	ⅠＡｂ	SK125 を切っている。
ＳＫ127	111×80	22	Ｎ－65°－Ｗ	方形	ⅢＡｂ	
ＳＫ128	120×118	107		円形	Ⅳ	

第４表　土壙一覧表 (2)

Ｎ51～55、Ｅ2～4 区で検出した。幅約 1.2m、深さ約 10～30cm の南北に延びる溝である。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は１層のみでしまりのない暗褐色土である。

［ＳＤ09 号溝跡］

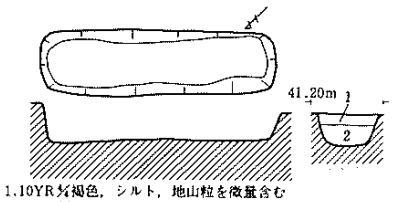
Ｎ57～58、Ｅ2～5 区で検出した。幅約 0.7m、深さ約 15～30cm で、断面形は「Ｕ」字形を呈する。調査区北端で「Ｌ」字状に東に折れ、調査区外に延びている。堆積土はしまりのない暗褐色土である。

［ＳＤ18 号溝跡］

第 40、41、42 トレンチで検出した。幅約 1.7m、深さ約 30～40cm の南北に延びる溝である。断面形は箱型を呈する。堆積土は５層認められ、黒褐色土を主体とした自然堆積土である。第２層に灰白色火山灰層が認められた。

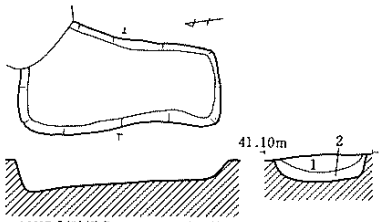
［ＳＤ98 号溝跡］

事前調査区南端近くで検出した。幅約 0.7～2.0m、深さ 15～75cm の東西に調査区を横断



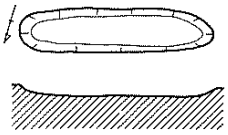
1.10YR⅔褐色，シルト，地山粒を微量含む
2.10YR⅔にぶい黄褐色，シルト，地山ブロックを含む

SK10号土壙

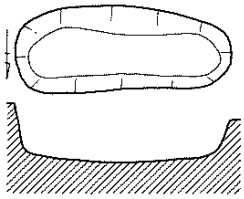


1．10YR⅔暗褐色，シルト，地山粒を微量含む
2．10YR⅔褐色，シルト

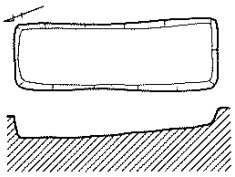
SK11号土壙



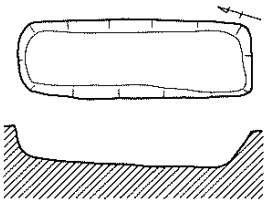
SK12号土壙



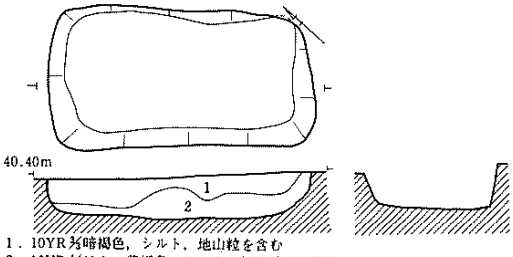
SK14号土壙



SK16号土壙

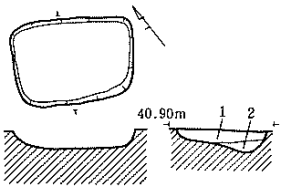


SK19号土壙



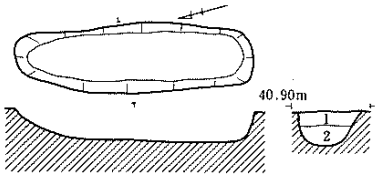
1．10YR⅔暗褐色，シルト，地山粒を含む
2．10YR⅔にぶい黄褐色，シルト，地山粒を多量含む

SK20号土壙



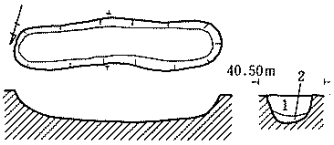
1．10YR⅔褐色，シルト，地山ブロックを含む
2．10YR⅔にぶい黄褐色，シルト，地山ブロックを多量含む

SK21号土壙



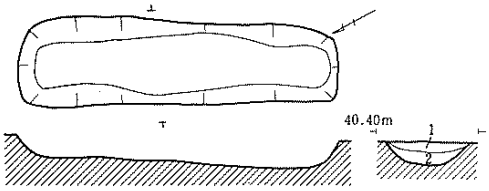
1．10YR⅔暗褐色，シルト
2．10YR⅔にぶい黄橙，シルト，地山ブロックを含む

SK22号土壙



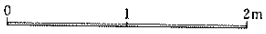
1．10YR⅔暗褐色，シルト，地山ブロックを含む
2．10YR⅔にぶい黄褐色，シルト

SK23号土壙

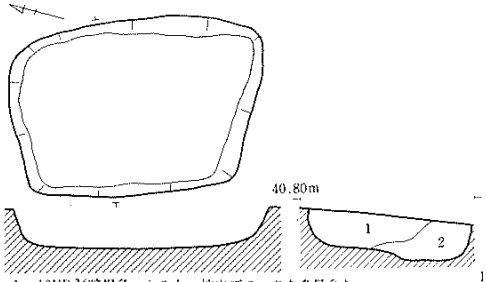


1．10YR⅔暗褐色，シルト，地山ブロックを含む
2．10YR⅔褐色，シルト，地山粒を多量含む

SK24号土壙

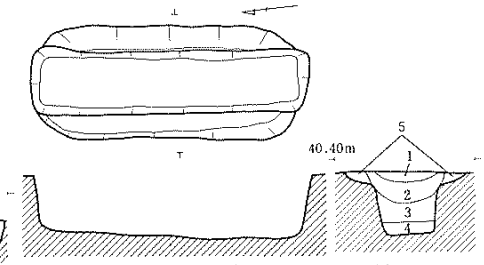


第13図　土　　壙（ＳＫ10～24号土壙）



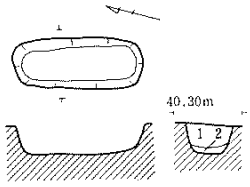
1．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山ブロックを多量含む
2．10YR 6/4明黄褐色，シルト，地山粒を多量含む

SK25号土壙



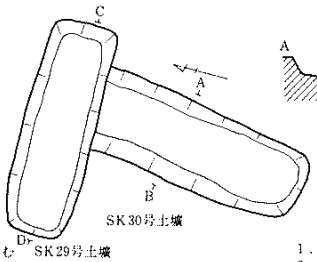
1．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒と地山ブロックを少量含む
2．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒と地山ブロックを含む
3．10YR 4/4褐色，シルト，地山粒と地山ブロックを多量含む
4．10YR 3/4黄褐色，シルト，地山粒と火砕流ブロックを多量含む
5．10YR 3/4褐色，シルト，地山ブロックを多量含む。火砕流のブロックも含む

SK26号土壙



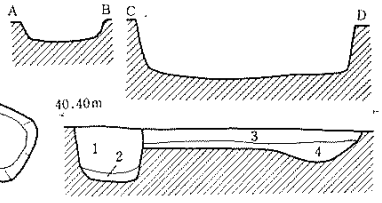
．10YR 3/4褐色，シルト，地山ブロックを含む
．10YR 4/4褐色，シルト，地山ブロックを多量含む

SK28号土壙

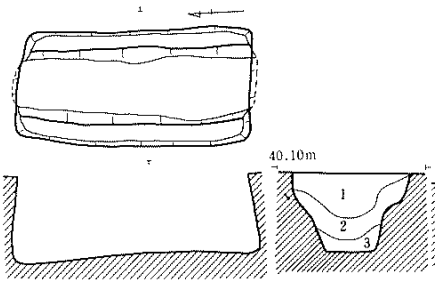


SK30号土壙

SK29号土壙

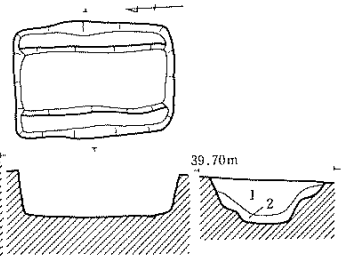


1．10YR 3/3黒褐色，シルト，地山ブロックを多量含む
2．10YR 3/4黄褐色，シルト，地山粒を多量含む
3．10YR 3/3黒褐色，シルト，地山粒を含む
4．10YR 3/3暗褐色，シルト，地山粒を多量含む



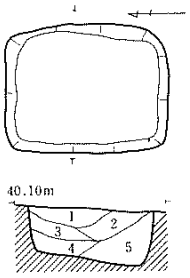
1．10YR 3/4褐色，シルト，地山ブロックを多量含む
2．10YR 3/3暗褐色，シルト，地山粒と地山ブロックを含む
3．10YR 3/4にぶい黄褐色，シルト，地山粒を含む

SK32号土壙



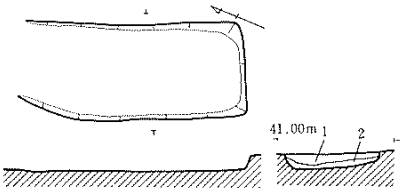
1．10YR 3/3暗褐色，シルト，地山ブロックを多量含む
2．10YR 4/4褐色，シルト，地山ブロックを含む

SK33号土壙



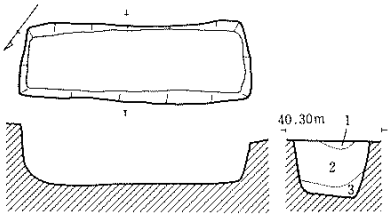
1．10YR 3/4褐色，シルト，地山粒を含む
2．10YR 3/4にぶい黄褐色，シルト，地山ブロックを多量含む
3．10YR 3/3暗褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを含む
4．10YR 3/4褐色，シルト，地山粒を含む
5．10YR 3/4黄褐色，シルト，地山ブロックを多量含む

SK34号土壙



1．10YR 3/3暗褐色，シルト，地山ブロックを少量含む
2．10YR 3/4黄褐色，シルト，地山ブロックを少量含む

SK35号土壙

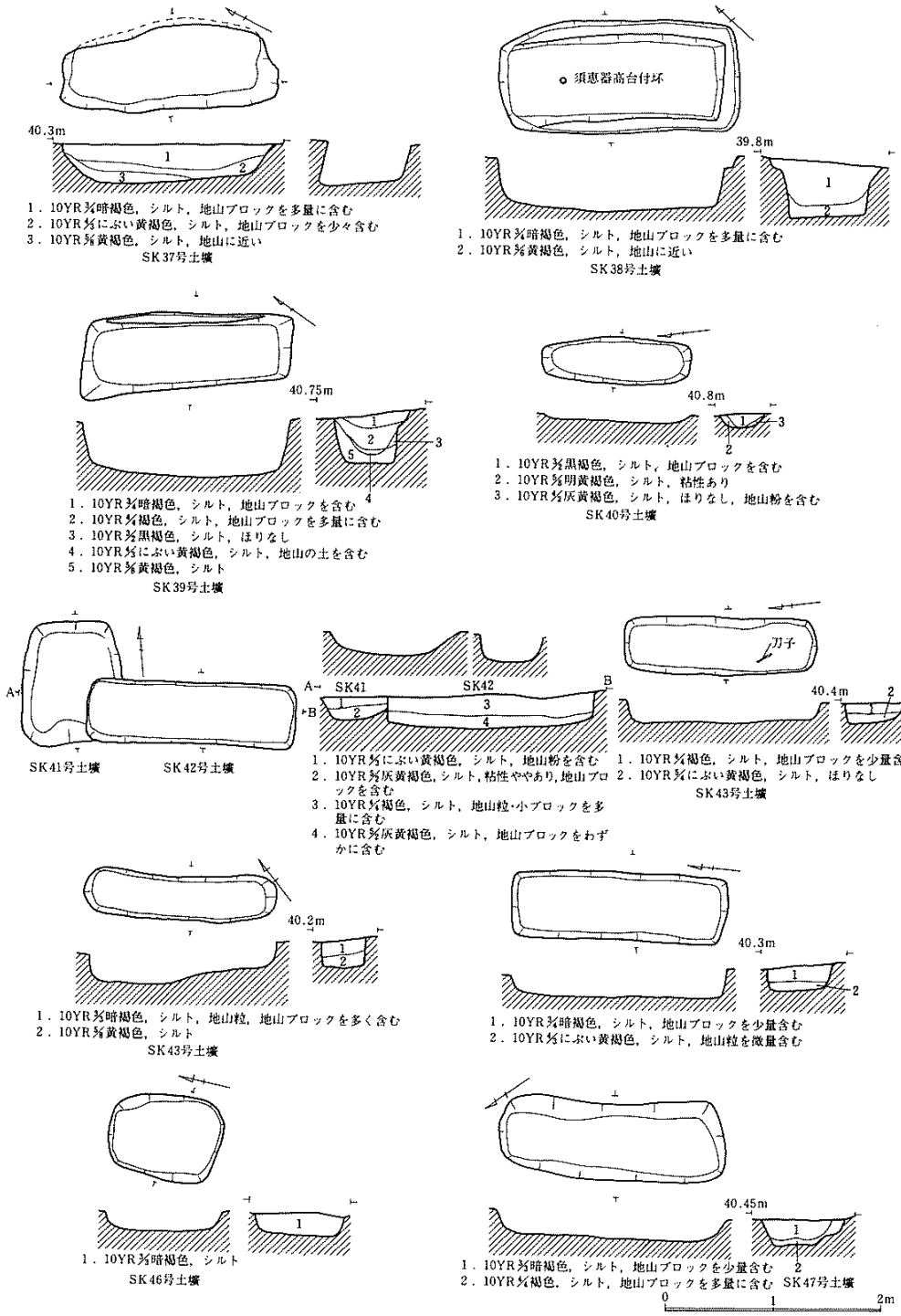


1．10YR 3/3黒色，シルト，炭化物を含む
2．10YR 3/3暗褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを多量含む
3．10YR 4/4褐色，シルト，地山ブロックを多量含む

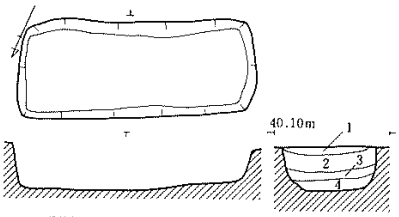
SK36号土壙

0　1　2m

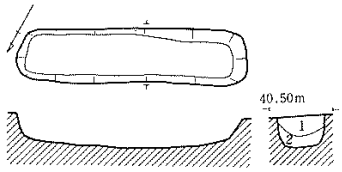
第14図　土　　壙（ＳＫ25～36号土壙）



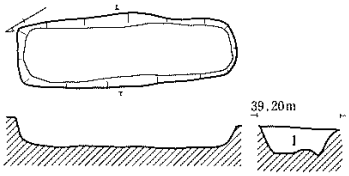
第15図　土　　壙（ＳＫ37～47号土壙）



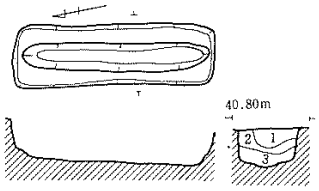
1．10YR 7/1黒色，シルト
2．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒を微量含む
3．10YR 3/4褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを微量含む
4．10YR 5/6黄褐色，シルト，地山粒を多量地山ブロックを少量含む
SK48号土壙



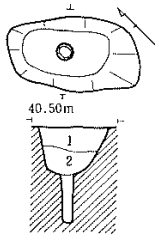
1．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山ブロックを多量含む
2．10YR 3/4褐色，シルト，地山ブロックを含む
SK49号土壙



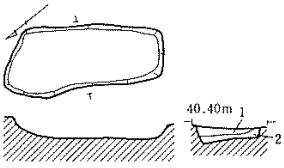
1．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒を含む
SK50号土壙



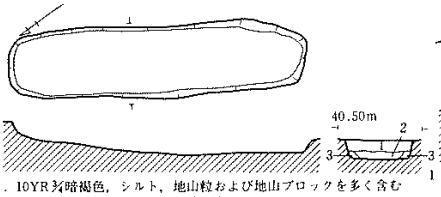
1．10YR 5/4にぶい黄褐色，シルト，地山ブロックを多量，
灰白色火山灰ブロックを少量含む
2．10YR 3/4褐色，シルト，地山ブロック，
灰白色火山灰ブロックを少量含む
3．10YR 5/6黄褐色，シルト，地山ブロックを含む
SK51号土壙



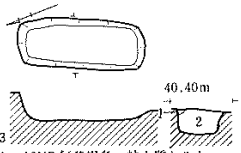
1．10YR 5/4にぶい黄褐色，シルト質粘土，
地山粒および地山ブロックを含む
2．10YR 5/6黄褐色，シルト質粘土，地山粒
および地山ブロックを含む
SK52号土壙



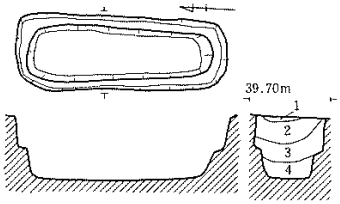
1．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒および地山
ブロックを含む
2．10YR 5/4にぶい黄褐色，シルト，
地山ブロックを多量含む
SK53号土壙



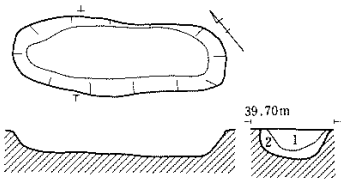
1．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを多く含む
2．10YR 3/4褐色，シルト，地山粒を含む
3．10YR 5/6黄褐色，粘土質シルト，地山ブロックを含む
SK54号土壙



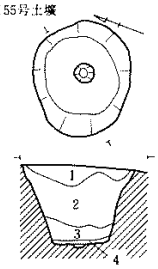
1．10YR 5/6黄褐色，粘土質シルト，
地山ブロックを含む
2．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒および
地山ブロックを含む
SK55号土壙



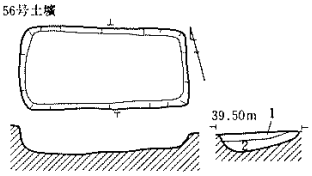
1．10YR 3/4暗褐色，シルト
2．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを多量含む
3．7.5YR 5/6明褐色，粘土質シルト，黒色土ブロックを含む
4．7.5YR 5/6明褐色，粘土質シルト
SK56号土壙



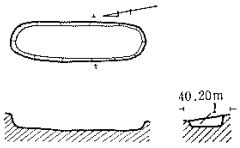
1．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを多く含む
2．10YR 5/4にぶい黄褐色，シルト，地山ブロックを多量含む
SK57号土壙



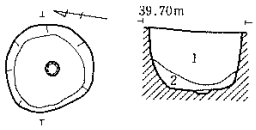
1．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒および炭化物を微量含む
2．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒および炭化物を少量含む
3．10YR 5/6黄褐色，シルト，しまりなし，地山に近い
4．10YR 5/4褐色，シルト
SK59号土壙



1．10YR 5/3黒色，シルト，地山粒を含む
2．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを含む
SK58号土壙



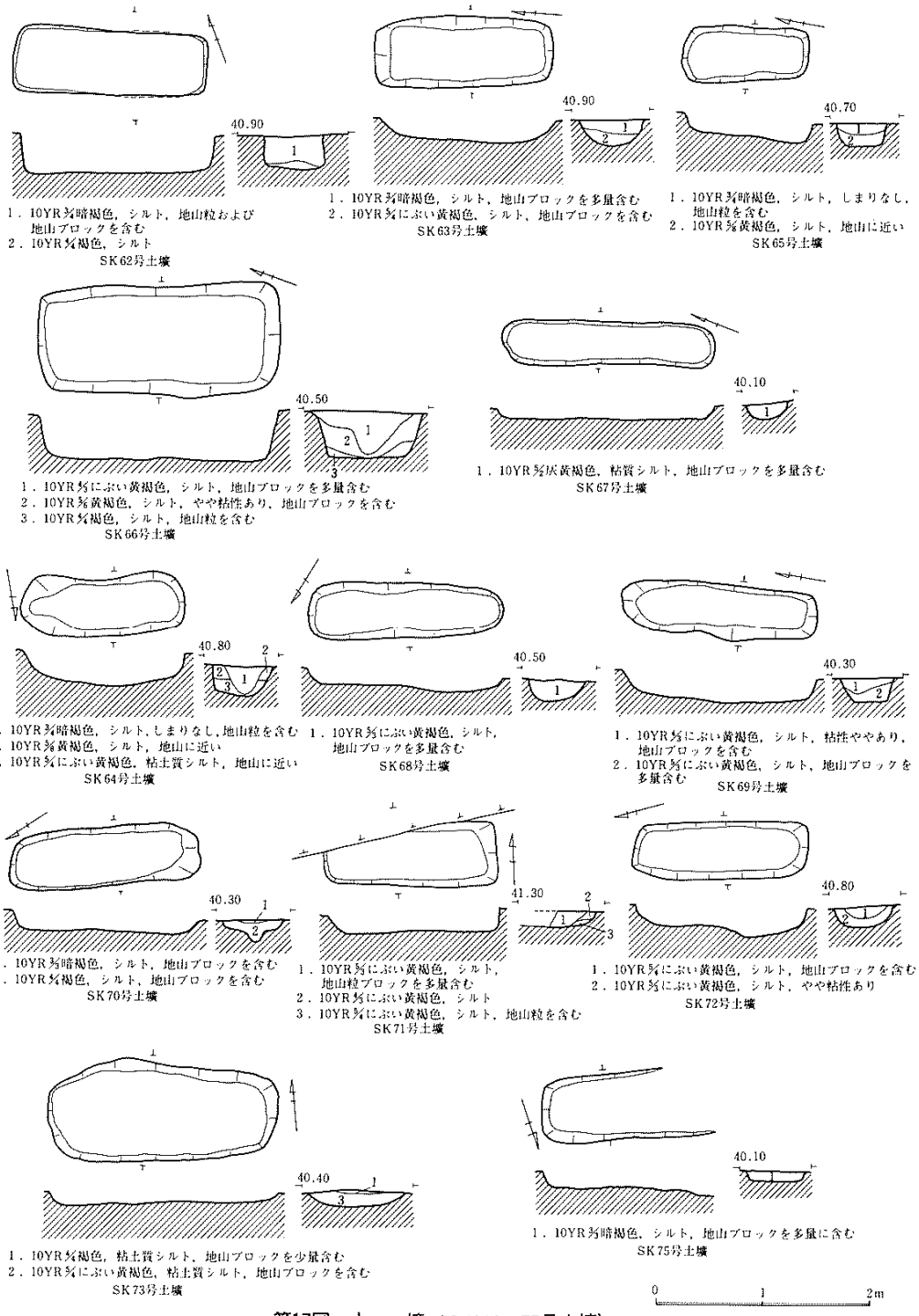
1．10YR 5/4褐色，シルト，地山粒および地山
ブロックを少量含む



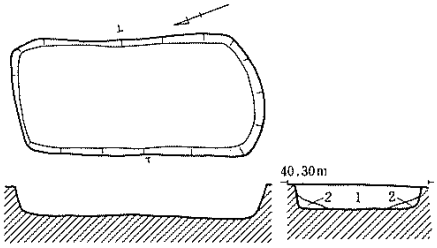
1．10YR 5/4褐色，シルト，地山粒および炭化物を少量含む
2．7.5YR 5/6明褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを少量
炭化物を微量含む
SK60号土壙

0　2m

第16図　土　　壙（ＳＫ48～60号土壙）

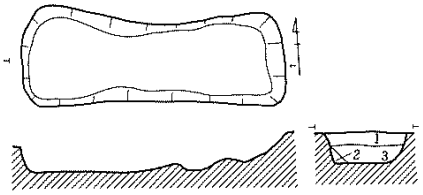


第17図　土　　壙（ＳＫ62～75号土壙）



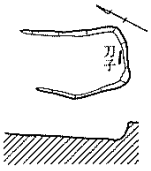
1．10YR⅔にぶい黄褐色，シルト，粘性あり
2．10YR⅔黄褐色，粘質シルト，地山に近い

SK74号土壙

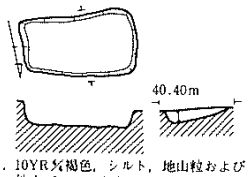


1．10YR⅔灰黄褐色，シルト，地山ブロックおよび灰白色火山灰のブロックを含む
2．10YR⅔にぶい黄褐色，シルト，地山ブロックをを多量含む
3．10YR⅔10YR⅔明黄褐色，シルト，地山に近い

SK76号土壙

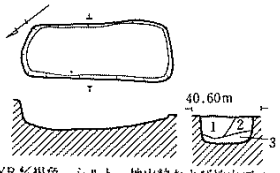


SK77号土壙



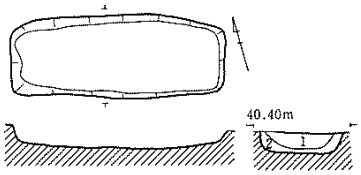
1．10YR⅔褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを多く含む

SK78号土壙



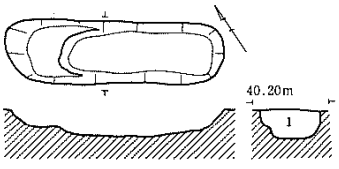
1．10YR⅔褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを多量含む
2．10YR⅔暗褐色，シルト，地山粒を含む
3．10YR⅔黄褐色，シルト，地山に近い

SK79号土壙



1．10YR⅔暗褐色，シルト，地山粒を少量および炭化物を微量含む
2．10YR⅔にぶい黄褐色，シルト，やや粘性あり

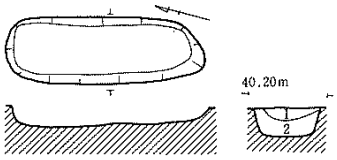
SK80号土壙



1．10YR⅔褐色，シルト，砂質の地山ブロックを含む

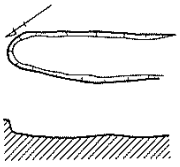
SK81号土壙

SK82号土壙

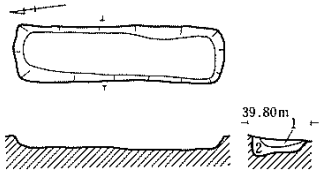


1．10YR⅔暗褐色，シルト，地山粒を含む
2．10YR⅔にぶい黄褐色，シルト，地山粒を含む

SK83号土壙

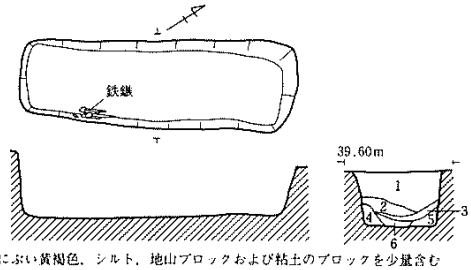


SK84号土壙



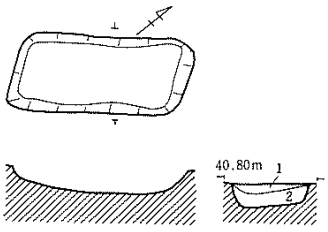
1．10YR⅔暗褐色，砂質シルト，地山粒を含む
2．10YR⅔褐色，シルト，地山粒を多量含む

SK85号土壙



1．10YR⅔にぶい黄褐色，シルト，地山ブロックおよび粘土のブロックを少量含む
2．10YR⅔黄褐色，シルト，しまりなし，地山ブロックおよび粘土のブロックを多量含む
3．10YR⅔黒褐色，シルト，しまりなし，地山粒を含む
4．10YR⅔にぶい黄褐色，シルト，しまりなし，地山粒を多く含む
5．10YR⅔褐色，シルト，地山ブロックを含む
6．10YR⅔褐色，シルト，しまりなし，地山ブロックを含む

SK86号土壙

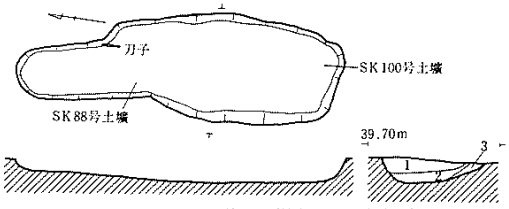


1．10YR⅔にぶい黄褐色，シルト，やや粘性あり，地山ブロックを含む
2．10YR⅔にぶい黄橙，シルト質粘土，粘性あり，地山ブロックを含む

SK87号土壙

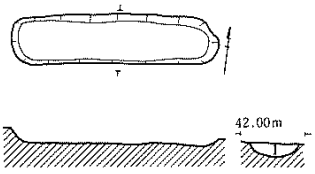
0　1　2m

第18図　土　　壙（ＳＫ74～87号土壙）



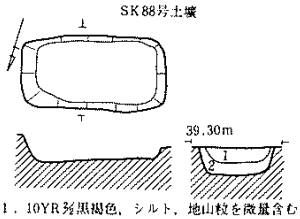
1．10YR 5/4褐色，シルト，地山粒および地山ブロック(小)を含む
2．10YR 3/4暗褐色，シルト，地山粒および地山ブロック(小)を含む
3．10YR 5/6黄褐色，シルト，地山に近い

SK88号土壙



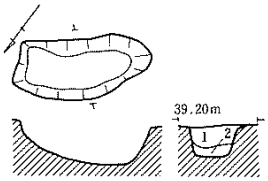
1．10YR 5/4にぶい黄褐色，シルト，地山粒を微量含む

SK89号土壙



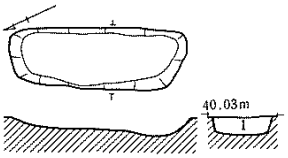
1．10YR 5/4黒褐色，シルト，地山粒を微量含む
2．10YR 5/4にぶい黄褐色，シルト，しまりなし，地山粒および地山ブロックを含む

SK90号土壙



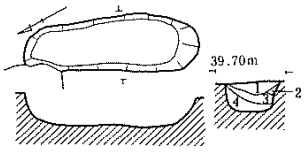
1．10YR 5/4黒褐色，シルト，地山粒を含む
2．10YR 5/4にぶい黄褐色，シルト，しまりなし

SK91号土壙



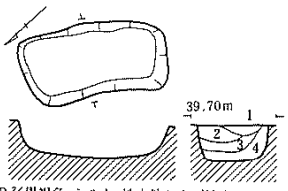
1．10YR 5/6黄褐色，粘質シルト，地山の土を多量含む

SK92号土壙



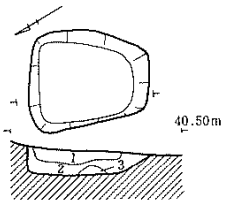
1．10YR 5/4黒褐色，シルト，地山粒を含む
2．10YR 5/4褐色，シルト，地山ブロックを含む
3．10YR 5/4黒褐色，シルト，地山粒を含む
4．10YR 5/4にぶい黄褐色，シルト，地山の土を多量含む

SK93号土壙



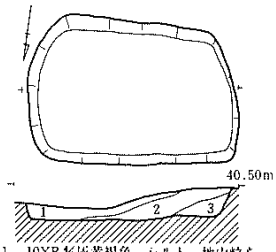
1．10YR 5/4黒褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを含む
2．10YR 5/4暗褐色，シルト，地山粒を多量含む
3．10YR 5/4暗褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを含む
4．10YR 5/4褐色，シルト，地山粒および地山ブロックを多量含む

SK94号土壙



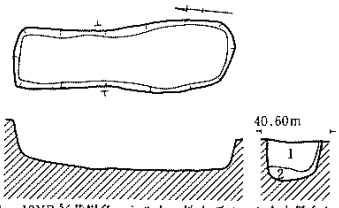
1．10YR 5/4褐色，シルト，地山ブロックを微量含む
2．10YR 5/4褐色，シルト，地山ブロックを多量含む
3．10YR 5/6黄褐色，シルト，地山ブロックを含む

SK95号土壙



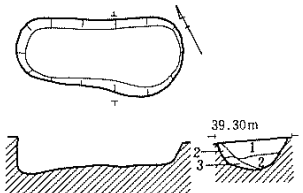
1．10YR 5/4灰黄褐色，シルト，地山粒を多量含む
2．10YR 5/4褐色，シルト，地山ブロックを多量含む
3．10YR 5/6明黄褐色，シルト，粘性あり

SK96号土壙



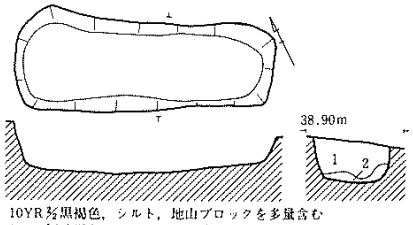
1．10YR 5/6黄褐色，シルト，地山ブロックを少量含む
2．10YR 5/6黄褐色，シルト

SK97号土壙



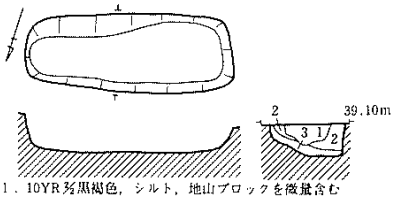
1．10YR 5/4暗褐色，シルト，地山粒を少量含む
2．10YR 5/4褐色，シルト，地山粒を少量含む
3．10YR 5/6黄褐色，シルト

SK103号土壙



1．10YR 5/4黒褐色，シルト，地山ブロックを多量含む
2．10YR 5/4暗褐色，シルト，地山粒を少量含む

SK101号土壙

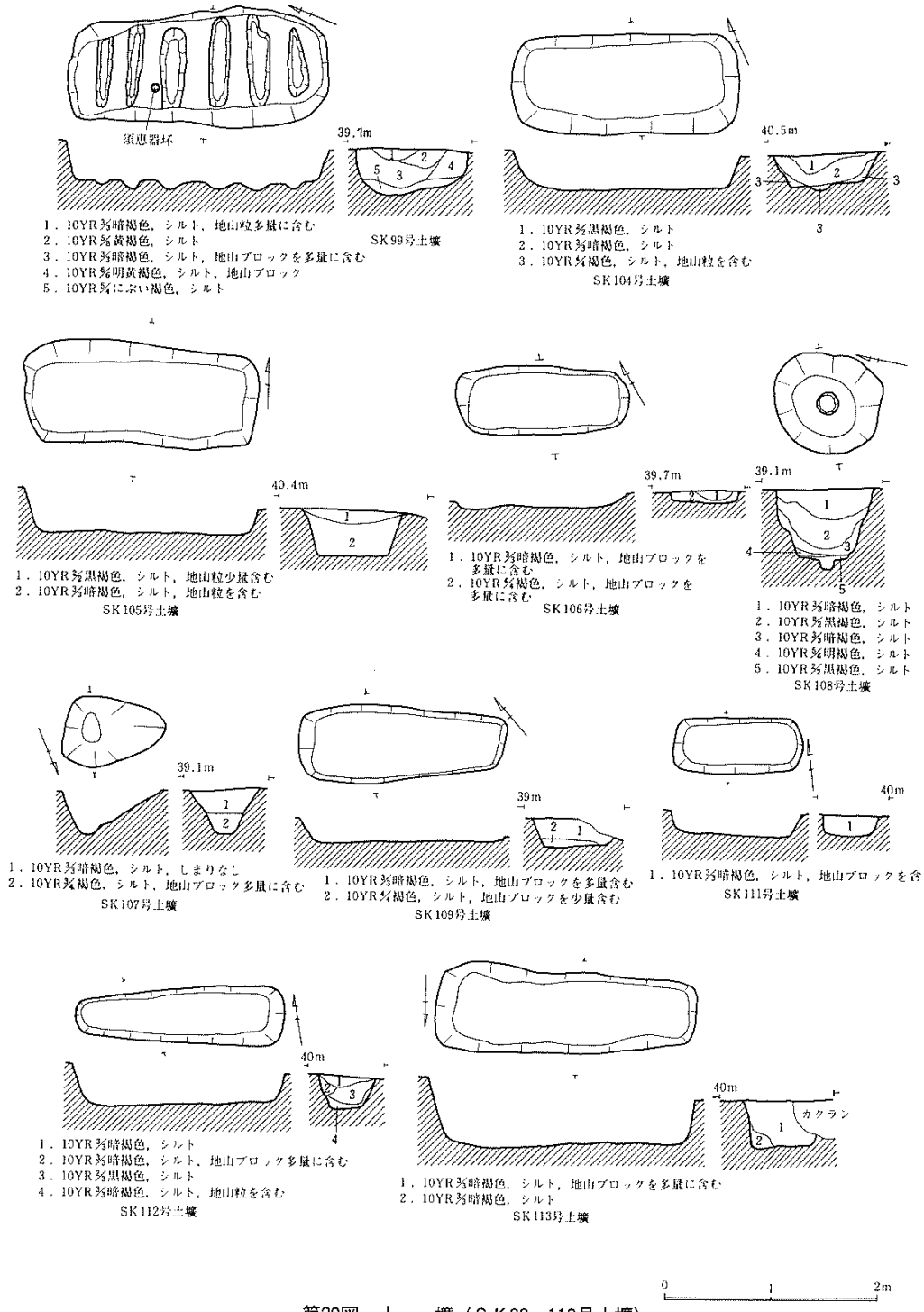


1．10YR 5/4黒褐色，シルト，地山ブロックを微量含む
2．10YR 5/4褐色，シルト，地山粒を少量含む
3．10YR 5/4褐色，シルト，地山粒を微量含む

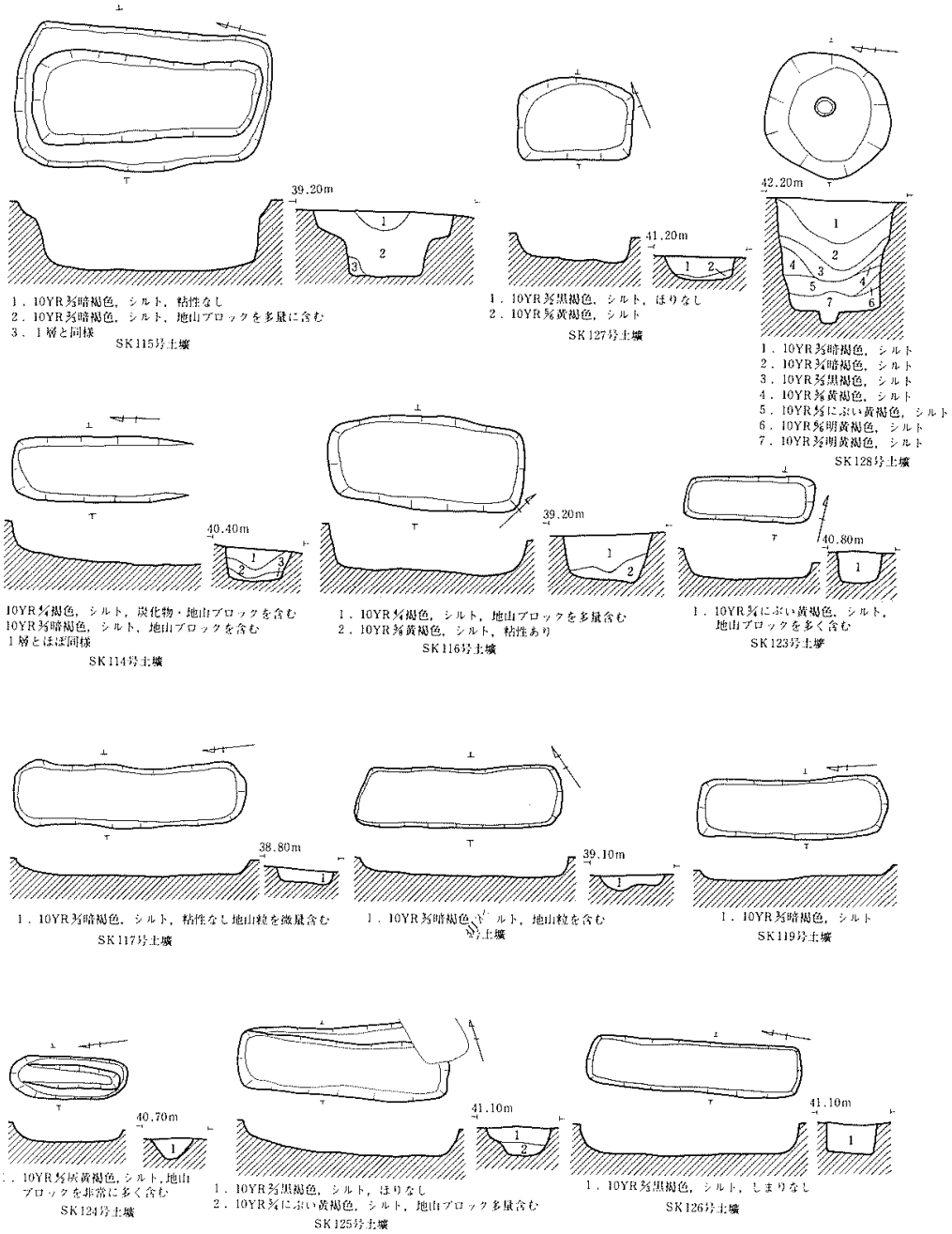
SK102号土壙

0　1　2m

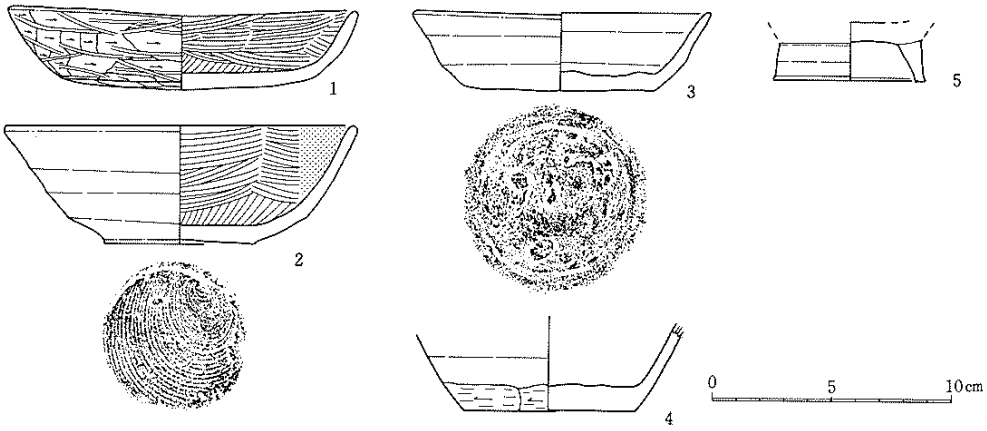
第19図　土　　壙（ＳＫ88～102号土壙）



第20図　土　　壙（ＳＫ99～113号土壙）



第21図　土　　壙（ＳＫ115～126号土壙）



No.	器種	器形	出土遺構	口	底	高	調整	図No.	登録	備考
1	土師器	坏	ＳＫ 20	14.8	10.6	3.4	外：ヘラケズリ→ヘラミガキ、内：ヘラミガキ、底：ヘラケズリ→ヘラミガキ	10－2	37	
2	土師器	坏	ＳＫ 88	14.8	8.2	5.0	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、黒色処理、底：回転糸切り	10－1	38	
3	須恵器	坏	ＳＫ 99	12.6	8.0	3.3	内・外：ロクロナデ、底：回転ヘラ切り	10－3	39	
4	土師器	甕	ＳＫ 32		7.2		外：体部下ヘラケズリ、内：マメツ、底：回転糸切り		40	
5	須恵器	高台付坏	ＳＫ 38		6.5				41	

第22図　土壙墓出土遺物（1）

して延びる溝である。W24 付近でやや東へふれるように作りかえが認められる。ＳＤ110 号溝跡と重複し、これに切られている。

堆積土は 2 層でしまりのない黒褐色土である。堆積土中から、土師器坏が出土している（第 25 図 2）。

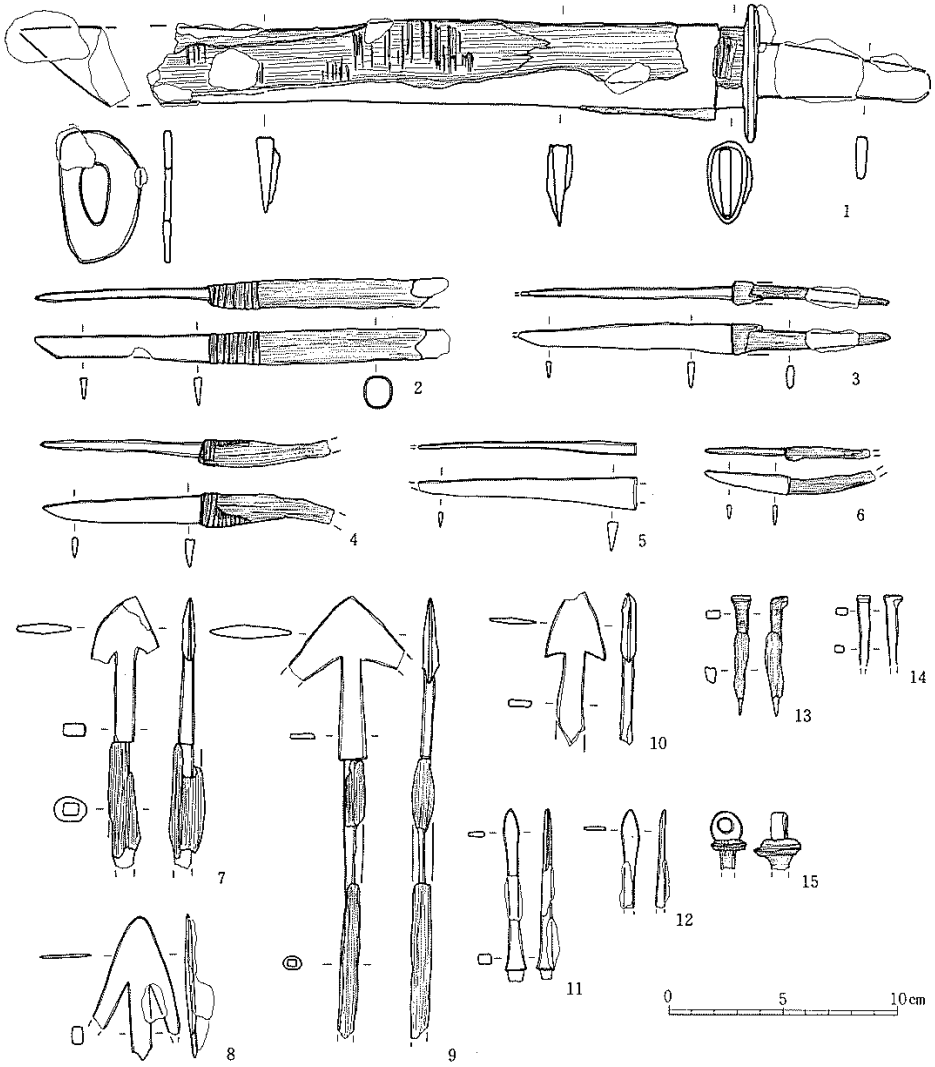
［ＳＤ110 号溝跡］

事前調査区東南端で検出した。幅約 1.3～2.0m、深さはもっとも残りのよいところで 85cm の南北に延びる溝である。底面は平坦で壁が直立気味に立ち上がり、途中段がついて立ち上がる。堆積土は 6 層あり、上層がしまりのない黒褐色土、4 層より下層が地山ブロックを含む黄褐色土である。第 2 層に灰白色火山灰が認められた。ＳＫ123 号土壙と重複しこれに切られ、ＳＤ98 号溝跡と重複しこれを切っている。確認面から土師器坏が出土している（第 25 図 3）。

［ＳＤ129 号溝跡］

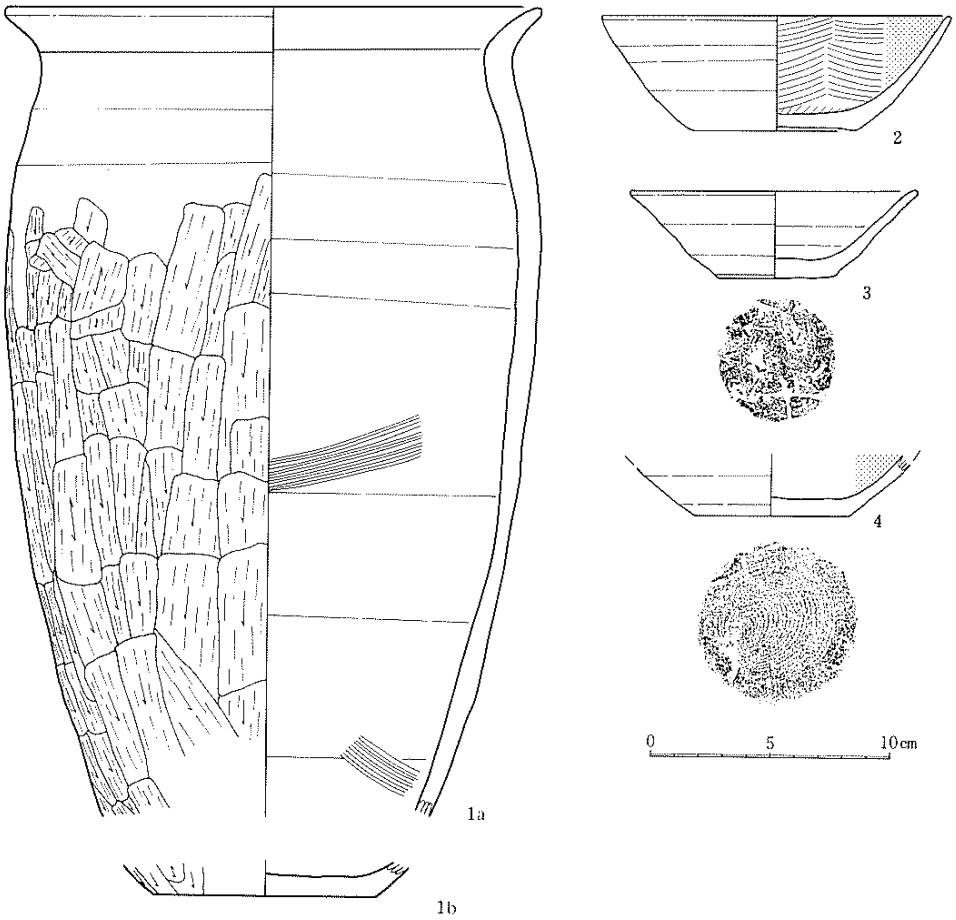
事前調査区の西端で検出した。幅約 0.4～1.2m、深さ約 20～40cm の南北に延びる溝である。調査区の南端近くで作りかえが認められ、さらに調査区外まで延びている。断面形は「U」字形を呈する。堆積土中から赤焼土器が出土している（第 25 図 4）。

なお、S65・W29 区付近の耕作土直下の黒土中から土師器甕（第 25 図 1）が出土している。



No.	種　類	出土遺構	特　徴	図No.	登録	備　考
1	直　刀	ＳＫ 11	平棟・平造り，カマス切先、両関、残存長34cm・茎長 7.5cm・元幅 3.8cm	9－1	42	木質（鞘？）付着
2	刀　子	ＳＫ100	残存長18cm、刃長 7.4cm、柄の部分に木の皮が巻いてある。	9－2	43	
3	刀　子	ＳＫ 43	残存長16.1cm、刃長 9.2cm	9－4	44	木質残る
4	刀　子	ＳＫ 16	残存長12.7cm、刃長 7.1cm	9－3	45	
5	刀　子	ＳＫ 37	刃残存長 9.4cm、両関	9－6	46	
6	刀　子	ＳＫ 77	残存長 7.3cm、刃長 3.6cm、両関	9－5	47	木質残存
7	鉄　鏃	ＳＫ 86	長頸式鏃、関箆被、両丸、長三角形式、残存長12cm、鏃身長 2.8cm	9－10	48	箆残存
8	鉄　鏃	ＳＫ 86	長頸式鏃、平、長三角形式、残存長 6.3cm、鏃身長 5.4cm	9－11	49	
9	鉄　鏃	ＳＫ 86	長頸式鏃、関箆被、両丸、長三角形式、残存長19.4cm、鏃身長 3.3cm	9－12	50	箆残存
10	鉄　鏃	ＳＫ 86	長頸式鏃、両丸、長三角形式、残存長 6.8cm、鏃身長 3cm	9－13	51	
11	鉄　鏃	ＳＫ 86	長頸式鏃、関箆被、平、鑿箭式、残存長 7.5cm	9－14	52	
12	鉄　鏃	ＳＫ 86	長頸式鏃、平、鑿箭式、残存長 4.3cm	9－15	53	
13	鉄　釘	ＳＫ 95	全長 5.3cm	9－9	54	木質付着
14	鉄　釘	ＳＫ 95	残存長 3.1cm	9－8	55	
15	不明鉄製品	ＳＫ 95		9－7	56	木質付着

第23図　土壙墓出土遺物（2）



No.	器種	器形	出土遺構	口	底	高	調整	図No.	登録	備考
1a	土師器	甕	遺構外	22.4		37	外：ロクロナデ→ヘラケズリ、内：ヘラナデ	10－6	57	
1b	土師器	甕	遺構外		9.4		外：ロクロナデ→ヘラケズリ、内：ヘラナデ		58	
2	土師器	坏	SD 98	14.6	8.8	4.8	外：ロクロナデ、内：ヘラミガキ、黒色処理、底：回転糸切り	10－4	59	
3	赤焼土器	坏	SD129	12.0	4.6	3.7	内外：ロクロナデ、底：ヘラ切り	10－5	60	
4	土師器	坏	SD110		6.4		外：ロクロナデ、内：マメツ、黒色処理、底：回転糸切り		61	

第24図　その他の遺構および遺構外出土遺物

V 考　察

(1) 土壙について

［土壙の性格］

今回の調査で、計 118 基の土壙が検出された。これらの土壙について前章で分類を行い、その結果 10 類に分類することができた。この中のⅣ類に関しては、平面形が円形ですべての土壙から底面に小ピットが検出されている点や、土壙内から遺物の出土はなかったものの、遺構外などから縄文土器の出土が見られることから、縄文時代に属する陥し穴である

と考えられる。また、Ｖ類に関しては、平面形が他の分類のいずれにも属さず、その堆積土は自然堆積で出土遺物もないため、その性格は不明である。

ここで問題とするのはⅣ・Ｖ類以外の、ＩＡａ類からⅢＢ類の土壙である。これらの分類に属する土壙は計 100 基検出され、その形態は基本的に長方形もしくは長楕円形を呈している。その規模について平均値を求めると、長軸が 170.2cm、短軸が 63.1cm という値が得られた。また、その堆積土は地山ブロックを含む人為堆積、または人為堆積＋自然堆積という状況を示している。

次にその出土遺物についてみて行きたい。これらの土壙から出土した遺物には、土師器坏、須恵器坏、直刀、刀子、鉄鏃などがある。このうち直刀、鉄鏃などの鉄製品の出土状況を見ると、ほとんどが土壙の底面がもしくは底面近くで出土している。この出土状況からは、土壙を埋め戻す際にそれらの遺物が紛れ込んだということは考えにくく、土壙を掘った直後に土壙底面に置いたものと考えられる。一般に直刀や鉄鏃は、副葬品として古墳からの出土例が多く見られるが、今回出土したものも、その出土状況から副葬品としての性格を持つものと考えられる。

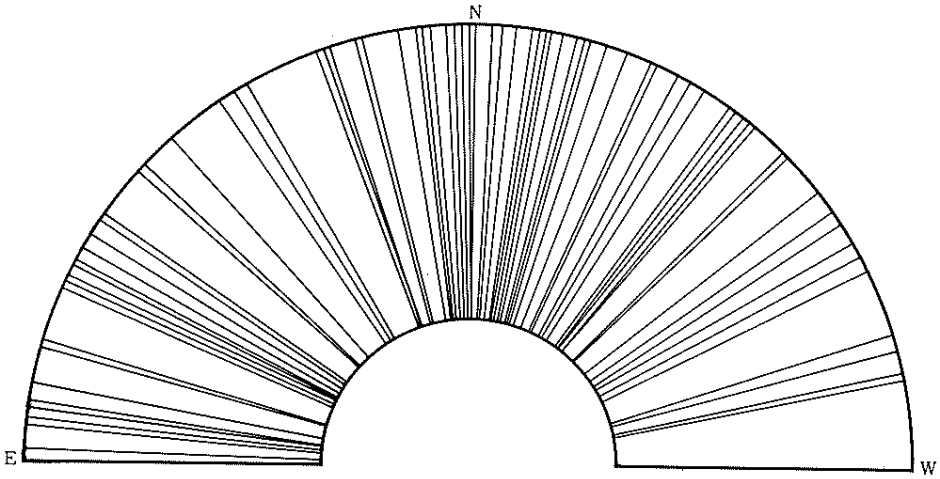
以上のような形態と規模、土壙内堆積土の状況、出土遺物およびその出土状況を考えあわせれば、この分類に属する土壙は、土壙墓と考えるのが最も妥当であろう。

［土壙墓群の立地と分布範囲］

前述したように今回の調査によって、計 100 基の土壙墓を検出した。これら土壙墓の分布範囲を見ると、その範囲内での濃淡はあるものの、南北方向は事前調査区のほぼ全域に、東西方向は調査区の東端から標高 38.6m付近の範囲に分布している。また、確認調査を行った事前調査区の北側にあたる第 5、6 トレンチからも土壙が 2 基検出され、概して確認調査部分での土壙墓の分布は希薄であるが、土壙墓群はさらに南北にのびているものと考えられる。

事前調査区内や確認調査を行った区域でも開田による削平を受けていると思われる部分が多々あり、今回検出された土壙墓の分布範囲が本来の分布範囲を表していると断定はできない。また、その分布は希薄であるものの、さらに東側の事前調査区外にも土壙墓の存在が想定され、土壙墓は今回の事前調査区で検出した区域を中心的な部分としてさらに広がるものと考えられる。

以上のように、今回検出した土壙墓はある範囲の中に群集し、その範囲内には、竪穴住居跡などの遺構は検出されず、そして、土壙墓群より上位の丘陵の尾根上には塚原古墳群が立地している。これらのことから、この地域は、今回の調査で検出された円墳も含めた高塚古墳の分布地域の縁辺部に土壙墓が集中して営まれた地域であり、このことから「墓



第25図　土壙墓長軸方向

域」として機能していたものと考えられる。

［土壙墓出土遺物とその年代］

土壙墓出土遺物には、前述したように土師器坏、須恵器坏、土師器甕、直刀、刀子、鉄鏃などがある。

ここでは、図示した土師器坏・須恵器坏、直刀について年代を検討し、土壙墓が営まれた年代を考えてみたい。

第 22 図 1 は土師器坏である。ＳＫ20 号土壙の人為堆積土から正位の状態で出土した。全面に朱彩が施されているもので、製作にロクロを使用せず、外面は全面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキで、底部は平底で手持ちヘラケズリ後ヘラミガキを施している。これらの特徴を有する非内黒坏は、関東周縁部、とくに千葉県から茨城県にかけて類例が多く見られるものである。下野国府跡のＳＤ111 でこれと同様の特徴を持つものが出土しており、8 世紀前半に位置付けられている（栃木県教育委員会：1988）ことから、ここでも同様の年代に考えたい。

第 22 図 2 は土師器坏である。ＳＫ88 号土壙の人為堆積土中から正位の状態で出土した。製作にロクロを使用し、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。口径に対して底径が比較的小さく、底部は回転糸切りで再調整はない。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。

これらの特徴を有する坏は東北地方の土師器編年における表杉ノ入式に比定され、平安時代の土師器として理解されている。今回出土した坏はその特徴から色麻古墳群第 14 号住居跡（古川：1983）、郷楽遺跡第 128 号住居跡（菊地・吉田・庄子:1990）出土の坏と並行

するものと考えられ、その年代は 9 世紀後半から 10 世紀初頭に考えられている。

第 22 図 3 は須恵器坏である。ＳＫ99 号土壙の底面から上向きの状態で出土した。底部は回転ヘラ切りで再調整はない。径に比して底径が大きく、体部が直線的に立ち上がる。

これらの特徴を有する坏は、8 世紀後半の年代が考えられている。

第 23 図 1 は直刀である。ＳＫ16 号土壙の底面から出土した。平棟・平造りで、切先はいわゆるカマス切先、関は両関で、把鏥が残っている。目針穴はない。また、刀身と把鏥の一部に木質が付着している。この直刀の年代については、その長さに比して幅が広いこと、鍔の形状が縦長であることなどの新しい要素が見られることから 7 世紀までは遡らずほぼ 8 世紀代、奈良時代のものと考えられる。

また、ＳＫ123 号土壙が灰白色火山灰を含むＳＤ110 号溝跡と重複しこれを切っており、このことから、土壙墓は 10 世紀の前半以降にも存続していたものと考えられる。

以上のことからこれら土壙墓は、8 世紀前半から 10 世紀の前半以降にかけて、長期間にわたって存続していたと考えられる。

［土壙墓の形態と規模］

土壙墓は 8 タイプに分類することができたが、ここではこれら形態と規模の違いが何に起因するのかということについて検討を加える。

まず、その規模の違いについては、ＩＡａ類に属する土壙墓が大きい傾向が認められるもののすべての形態において規模の大小が認められた。よってこのことは、被葬者の身長や年令などに起因していると考えられる。

形態の違いを生む要因としては、時期差もしくは階層差が考えられるが、このことについて出土遺物の面から検討していく。

遺物を出土した土壙墓は全部で 21 基、土壙墓総数の 2 割強である。分類別に見るとＩＡｂ類からの出土遺物が最も多い。しかし出土量は少ないものの、ⅢＢ類以外の土壙墓からも遺物の出土がある。この出土量の違いは、単にその分類に属する土壙墓の数に比例しているものであり、その他の要因に起因しているものではないと言えよう。

同じ分類に属する土壙墓の出土遺物には、土器類のみを出土するもの、刀子・鉄鏃などの鉄製品を出土するもの、土器片と鉄製品を出土するもの、遺物を出土しないものと様々あり、そこに一定のパターンは見い出せない。したがって形態の違いが社会的地位・身分秩序などの何らかの階層差によるものであるとは考えにくい。

前項で述べたように、この土壙墓群は 200 年以上にわたって長期間存続していたものである。それほどの長期間その形態が変化しないとは考えにくく、この形態の差は時期差と捉えるのが最も妥当であると考えられる。

出土遺物は土壙墓の数に比して非常に少なく、その形態の変遷については細かく述べることは難しい。しかし前項で検討した出土遺物の年代から、おおむね、断面形についてはＡａ類・Ａｂ類（前章でＡａ類とＡｂ類に分類を行ったが、この違いは削平されて段が無くなったものも考えられるので、本来的にこの土壙墓が持っている形態の違いとは言えず、ここでは区別せずに考えたい）からＢ類という変遷が考えられる。平面形については、いずれ近似した形態であり断定はできないが、その断面形との相関性からⅢ類からⅠ類、Ⅰ類からⅡ類へという変遷の可能性が考えられる。

なお、土壙墓の方位に対する長軸方向については、第25図に示した。おおむね北方向を向いているとも思えるが、ＳＫ29・30号土壙やＳＫ41・42号土壙のようにほぼ直角に切り合っているものもあり、そこに明らかな規則性は見い出せない。しかし、等高線に対する長軸方向については、ほぼ等高線に沿っているようである。よって土壙墓の長軸方向については、特に北を意識したものではなく、地形に沿ったものと考えられる。

［埋葬形態］

底面が平らで箱掘り状になるものについては、その形状から木棺の可能性が考えられたが、埋土の平面・断面観察から木棺の痕跡は確認できず、その他の土壙墓からも木棺の痕跡は確認できなかった。しかし、ＳＫ95号土壙の埋土から木質の付着した鉄釘が多数出土している。これらは木棺の蓋を止める際に使用されたものの可能性があるが、鉄釘の出土した土壙墓はこれ1基のみであり、このことから他の土壙墓についても、木棺が使用されたと断定はできない。

段の付く土壙墓に関しては木棺ではなく、その堆積状況から木の蓋だけを使用したものの可能性がある。その堆積土は前述したように人為堆積であり、堆積土の上層が落ち込んだような堆積状況を示している。これは、段の部分に木の蓋をして土壙を埋めていたものが、木の蓋が腐敗し上に盛った土が陥没し、このような堆積状況を示したという可能性が考えられる。

以上のことから、その埋葬形態については、一部木棺や木の蓋を使用したものがあると推定されるものの、基本的には無棺であった可能性が高い。

［被葬者の性格とその問題点］

今回の調査によって、計100基の土壙墓が検出された。これほど多数の土壙墓が検出されたのは県内には例がなく、ここに本遺跡の重要性があると言えよう。

東北地方において本遺跡のように100基以上もの土壙墓を検出した例はないが、土壙墓群として捉えられるものを検出した例はいくつか見られる。福島県石川郡玉川村の兎喰遺跡（紺野・山内：1986）で検出された土壙墓は19基で、平面形が長楕円形もしくは隅丸長方形

を呈し、平均で 1.98×0.87mの規模をもつものである。時代は副葬された坏の年代から、9 世紀前半に比定されており、被葬者の性格については、『兎喰遺跡の近辺には重要な官衙遺跡は見当らず、副葬品も一般的な竪穴住居跡から出土している坏とわずかな鉄製品類であるため、兎喰遺跡における被葬者は主に一般集落民』としている。また、秋田県秋田市湯ノ沢Ｆ遺跡（石郷岡誠一：1984）では 38 基の土壙墓が検出されている。その形態は隅丸長方形か長方形を呈し、土師器、須恵器、赤褐色土器の他に、鉄刀、鉄鏃、刀子、紡垂車、馬具、帯金具、漆皮箱などに至るまで、豊富な副葬品が出土している。その年代は赤褐色土器の特徴から、9 世紀中半頃から 10 世紀に至る年代が考えられている。また、明らかな木棺の痕跡が認められるものも検出されており、湯ノ沢Ｆ遺跡の土壙墓は、他の遺跡に見られるような無棺のものとは違い、基本的に木棺を使用しているようである。この土壙墓群の被葬者について、はっきりした性格付けはなされていないが、木棺を使用し、副葬品が豊富であることから、他の遺跡で考えられているような被葬者とは階層の異なる人々が埋葬された可能性がある。

なお、県内では古川市名生館遺跡の昭和 61 年の調査で 15 基の土壙が検出されている（柴原・鈴木：1987）。その形態は平面形が長方形もしくは隅丸長方形で、規模が約 1.5×1m、壁が直立気味に立ち上がり、堆積土には地山ブロックを多量に含んでいる。出土遺物は須恵器の小片が 1 点のみである。この土壙の年代は、他の遺構との重複関係から 8 世紀前半ないしそれ以前に位置付けられている。これらの土壙に対して報告者は土壙として扱っているが、本遺跡や兎喰遺跡などの土壙墓と平面形・断面形・堆積土の状況などいくつか共通点が見られるので、これも土壙墓である可能性が考えられる。

さらに、本遺跡の被葬者の性格を周辺の遺跡との関連性を考慮して考察したい。

大崎平野には、多賀城創建以前の 7 世紀末から 8 世紀初頭にかけて名生館遺跡に見られるような官衙的施設が存在し、大吉山瓦窯跡では多賀城創建期の瓦が焼成されるなど、当時この地方はすでに律令的支配体制が整えられ、このような施設が成立できる社会的・経済的基盤が確立していたものと考えられている。また、名生館遺跡からは関東系の土器が在地の土器と共伴して出土しており、当時の大崎地方には関東地方と強い関連を持つ人々が存在し、さらに色麻古墳群や朽木橋横穴古墳群などでも関東系の土器が副葬されていることから、これらの人々が古墳群形成の契機に関与したことが考えられている（本文「周辺の遺跡」参照）。前述のように、本遺跡においても関東地方の土器が出土していることから、本遺跡の被葬者についても、上記のような歴史的背景のもとで理解されよう。

しかし、本遺跡の土壙墓群と他の古墳群などとの間には、言うまでもなくその埋葬方法に明らかな違いがあり、それには何らかの要因が存在する筈である。

前述のように本遺跡の土壙墓は 8 世紀の前半から造営が開始されている。この造営年代という点で周辺の古墳群と比較すると、朽木橋横穴古墳群は 7 世紀末もしくは後半以前（佐々木・阿部：1983）に、日光山古墳群は 7 世紀後半頃（佐々木：1972）、塚原古墳群は 7 世紀末から 8 世紀初頭頃（佐々木：1970）にそれぞれ造営が開始されており、本遺跡の造営年代よりはやや先行している。また、今回の調査でも円墳が 1 墓検出されており、後述するが、この円墳も塚原古墳群とほぼ同様の年代が考えられ、塚原古墳群との位置的な関係からも塚原古墳群の一古墳と考えられる。この古墳と土壙墓との関係については後に詳しく述べるが、古墳が築かれた後土壙墓群が造営されている。これらのことから、本遺跡のような埋葬形態は、他の古墳群に後続する墓制の一形態という可能性が考えられる。

しかし、名生館遺跡では 8 世紀前半ないしはそれ以前と考えられる土壙が検出されている。前述したように、本遺跡や兎喰遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡などの土壙墓との共通点が見られることから、これらの土壙も土壙墓と考えることができる。これをふまえると、他の古墳群と土壙墓が時期的に重なる可能性もあり、土壙墓とその他の古墳群との埋葬形態の違いを時期差とは一概に考えられなくなる。

時期差以外に考えられるのは、土壙墓という簡易な埋葬方法、副葬品の少なさという点から、他の古墳群の被葬者との社会的地位・身分秩序の差といった何らかの階層差である。兎喰遺跡では一般集落民、湯ノ沢Ｆ遺跡ではそれとはまた違った階層の人といったよう性格付けがなされている。しかし、本遺跡の被葬者がどのような性格を有し、どのような位置を占めていたのか、それを決定付ける根拠も見い出せないため明確にすることはできず、この埋葬形態の違いを階層差とすることも難しい。

また、単に集団の違いによる埋葬形態の違いということも考えられるが、同じく被葬者の性格が明確でないため、これを断定することもできない。

いずれにせよ、その埋葬方法・出土遺物には、これら土壙墓群を形成していった集団や被葬者の性格を反映していると考えられる。これらの埋葬形態の違いには、前述のように時期差、あるいは被葬者の階層差によるもの、あるいは単に集団差によるものなどが考えられるが、このような土壙墓群はまだ類例が少ないためここではそれらの可能性を指摘するに留め、類例の増加を待ち、今後の問題点としたい。

(2)古墳について

古墳については、出土遺物からその年代を検討し、また、土壙墓との関連についても若干の検討を加える。

［古墳周溝出土遺物および古墳の年代について］

古墳周溝から出土した遺物には、土師器坏、須恵器壷・甕などがある。これらの出土状況は、底面、堆積土中の二者があるが、これらに接合関係にあるものも見られるので一括遺物として扱い、また、周溝南側部分という入口周辺部で出土していることから、これら土器の年代が古墳の造営年代を示していると考えられる。

第 11 図 1～4 は土師器坏である。1 は外面の器下位に軽い段がめぐり、さらに段に対応する内面にも稜がめぐっている。外面の調整は口縁部から段までが横ナデ、段から底部がヘラケズリ、内面の調整はヘラミガキで黒色処理されている。底部は平底風の丸底で、段から内湾気味に外傾しながら立ち上がるものである。

2 は外面の下半部に軽い段がみられ、さらに段に対応する内面には稜がめぐっている。外面の調整は口縁部から段までが横ナデ、段から底部がヘラケズリ、内面の調整はヘラミガキで黒色処理されている。底部は丸底で、段からやや直立して立ち上がるものである。3 は口縁部から体部にかけての破片で、外面の調整がヘラケズリ後ヘラミガキ、内面の調整がヘラミガキで黒色処理されているものである。

4 は口縁部が直立気味に立ち上がる、やや器高の高いものである。外面の調整は口縁部が横ナデ、体部から底部がヘラケズリ、内面の調整は横ナデで黒色処理されていない。

1～3 の在地の土器の系統に属するものについては、その器形的特徴から、観音沢遺跡第 12 号住居跡（加藤・阿部：1980）、色麻古墳群第 205 号墳（古川：1983）などから出土の坏と並行するものと考えられる。これらには、7 世紀末～8 世紀前半の年代が考えられている。

4 の非内黒の坏に関してはいわゆる関東系のものであり、これに類似した土器は、御駒堂遺跡の 9 世紀前半ごろとしている第 2 群土器のなかにみられる。

以上のことから、本古墳の造営年代は 7 世紀末から 8 世紀の前半に位置付けられる。

なお、古墳と土壙墓との関係を見ると、ＳＫ99 号土壙が古墳周溝を切っており、さらに、古墳の内部には土壙墓が検出されていない。したがって、土壙墓群はこの古墳が築かれたのち、古墳のまわりに造られ、この丘陵一帯が墓域として機能していったものと考えられる。

(3)竪穴住居跡について

［出土遺物の特徴］

出土した土器には土師器坏 12 点・高台坏 1 点・土師器甕 4 点・須恵器坏 2 点・須恵器壷 1 点、赤焼土器 3 点・高台付坏 3 点がある。これらの遺物について製作技法と形態面から検討を加える。

〈土師器〉
坏：12 点ある。いずれも製作に際してロクロを使用し、内面はヘラミガキ、黒色処理されたものである。底部から緩やかに内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部に至るもので、端部で外反するものもいくつかみられる。底径は口径に対して小さめのものが多く口径底径比は 35～40％の範囲にある。底部の切り離しはすべて回転糸切りで再調整はない。
高台付坏：1 点のみである。坏部は内湾気味に立ち上がり口縁部で外反する。台は付け高台である。内面はヘラミガキ、黒色処理され、外面はロクロナデである。底部には回転糸切り痕がみられる。
甕：4 点ある。製作に際しロクロを使用したものと使用しないものがある。
ロクロを使用したものには、大型と小型のものがある。前者は口縁が短く外反し、ずん胴で胴部下半で急激にしぼむ。外面上部から底部にかけてヘラケズリが加えられている。後者は口縁部が短く外傾し端部で上方につまみだされ、底部には回転糸切り痕が見られる。
ロクロを使用しないものは、大型のもので口縁部内外面の調整はヨコナデ、胴部はハケ目、ヘラケズリ、内面はハケ目である。
〈須恵器〉
坏：2 点ある。いずれも底径が口径に対して小さく、口径底径比は 35～40％の範囲におさまる。底部の切り離しは回転糸切りで再調整はない。
壷：1 点ある。口縁部～頚部の破片で、頚部から外反気味に外傾し口縁部は外反する。
〈赤焼土器〉
坏：3 点ある。歪みが激しいものもある。細部は内湾気味に外傾するものと、直線的に外傾するものがあり、いずれも口縁部でやや外反する。内外面の調整はロクロナデである。底部の切り離しは回転糸切りで再調整はない。
高台付坏：3 点ある。高台の破片で全体の形状のわかるものはない。付け高台である。
［出土土器の編年的位置付け］
　出土遺物の概要は前項のとおりであるが、ここでは土師器坏 9 点、土師器高台付坏 1 点、土師器甕 1 点、赤焼土器 1 点のほか、須恵器坏 1 点、須恵器壷 1 点と共伴関係の明らかな、遺物の比較的まとまっているＳＩ120 号住居跡の土器を中心に年代の検討を加える。
　まず、出土した土師器坏は製作に際しいずれもロクロを使用し、内面がヘラミガキで黒色処理されているものであり、東北地方南部地域の土師器編年における「表杉ノ入式」（氏家：1957）に比定され、平安時代に位置付けられる。
　「表杉ノ入式」については、その後の土師器坏を中心としてさらにいくつかの段階に細分されることも明らかになってきている。

ＳＩ120 号住居跡の土師器坏の特徴をまとめると以下のようになる。

体部は内湾気味に緩やかに底部から立ち上がり、口縁部の端部で軽く外反するものもいくつかみられる。底径は口径に対して 35～40％と小さく、底部の切り離しは回転糸切りで再調整は加えられていない。

こうした土師器坏を中心とする土器群としては、五輪Ｃ遺跡第 5 号住居跡（小野寺:1979）、手取遺跡第 3 号住居跡（早坂・阿部：1979）、色麻古墳群第 14・31 号住居跡（古川：1983）などがあげられる。次に、それらの遺跡の土器と比較すると、五輪Ｃ遺跡 5 住、色麻古墳群 14・31 住の土師器坏には切り離し後の再調整がみられるものも含まれており、ＳＩ120 号住居跡のものよりやや古い段階のものと考えられる。一方手取遺跡 3 住については土師器坏の口縁部が外反したものがほとんどで、また須恵器坏に変わって赤焼土器が主流をしめ、須恵器坏が 1 点も出土していないなど、ＳＩ120 号住居跡のものより新しい要素が見られる。

以上のことから、ＳＩ120 号住居跡の土師器坏は、五輪Ｃ遺跡第 5 号住居跡、色麻古墳群第 14・31 号住居跡と手取遺跡第 3 号住居跡との間の時期に位置付けられ、その年代は 9 世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

また、ＳＩ121 号住居跡など、他の住居跡の土器もほぼ同様の特徴を示すもので、ほぼ同時期のものと考えられる。

なお、住居跡の堆積土中から出土した土器についても同様の特徴を示すものが多い。

Ⅵ　まとめ

1. 今回の調査では多数の土壙墓、古墳、竪穴住居跡および溝跡が検出された。
2. 土壙墓は、事前調査区のほぼ全域に分布しており、この丘陵一帯が古墳時代からの墓域であることが推定された。
3. 土壙墓は、その形態の違いによりいくつかのタイプに分類されたが、その形態の違いは時期差であると考えられる。
4. その規模の違いは被葬者の身長や年令、埋葬姿勢などに起因するものと考えられる。
5. 土壙墓群は、その出土遺物および重複関係から 8 世紀の前半から 10 世紀前半以降にかけて長期間にわたって存続していたと考えられる。
6. 被葬者の性格については、具体的に明らかにすることはできなかった。しかし、土壙墓からの出土遺物に関東地方の土器が見られることから、この土壙墓群の形成に関東地方の人々が何らかの形で関係していたものと思われる。
7. 今回検出された土壙墓群は、色麻古墳群、朽木橋横穴古墳群などの群集墳とはその埋

葬形態において、顕著な違いをみせている。これには時期差、被葬者の社会的地位・身分秩序の差、集団差などが考えられるが、今回そのことについては十分な検討を加えられなかった。

8. 古墳については、出土遺物から 7 世紀末～8 世紀前半の年代が考えられ、その重複関係から、古墳が築かれたのち、長期間にわたって土壙墓群が築かれていったものと考えられる。

9. 事前調査を行った2軒の住居跡については9世紀末～10世紀初頭のものと考えられる。

なお、直刀の年代観については東北大学大学院菊地芳朗氏にご教示をいただいた。

引用・参考文献

石郷岡誠一（1984）：「湯ノ沢Ｆ遺跡」秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財調査報告書

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」　『歴史』第14輯　東北史学会

小野寺祥一郎（1979）：「五輪Ｃ遺跡」宮城県文化財調査報告書第61集

加藤・阿部（1980）：「観音沢遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書(4)

菊地・吉田・庄子他（1990）：「利府町郷楽遺跡Ⅱ」宮城県文化財調査報告書第143集
利府町文化財調査報告書第5集

小井川・小川（1982）：「御駒堂遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ

紺野・山内（1986）：「(1)兎喰遺跡」福島県文化財調査報告書第163集「母畑地区遺跡発掘調査報告21」

佐々木茂槙（1972）：「日光山古墳群」宮城県古川市文化財調査報告書第2集

佐々木茂槙（1970）：「塚原古墳群」宮城県古川市文化財調査報告書第1集

佐々木・阿部（1983）：「朽木橋横穴古墳群」宮城県文化財調査報告書第96集

栃木県教育委員会（1988）：「下野国府跡Ⅷ」栃木県埋蔵文化財調査報告書第90集

西口陽一（1990）：「畿内の群集土壙墓」考古学研究

古川一明（1982）：「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書

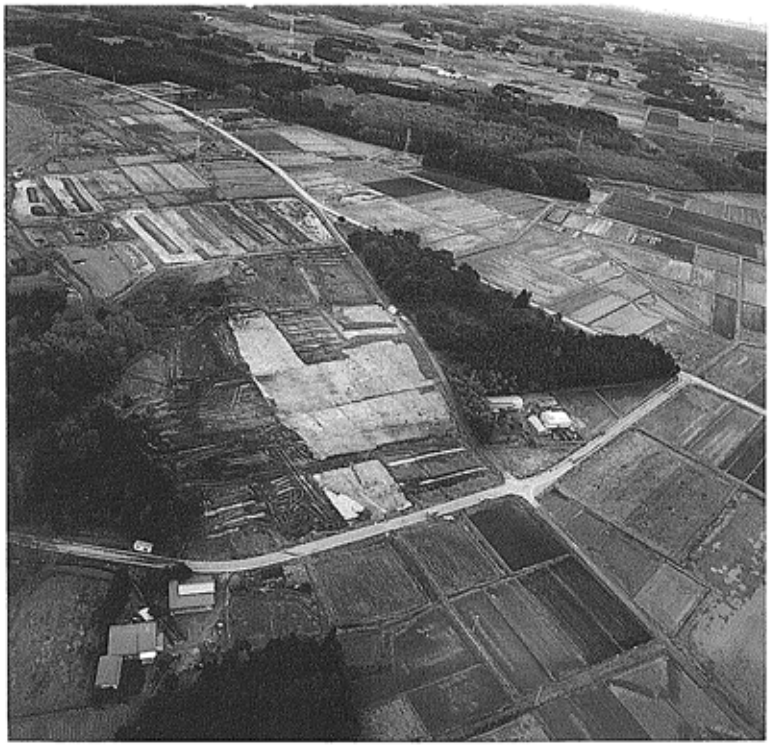
〃　（1983）：「色麻古墳群」　〃

〃　（1984）：「色麻古墳群」　〃

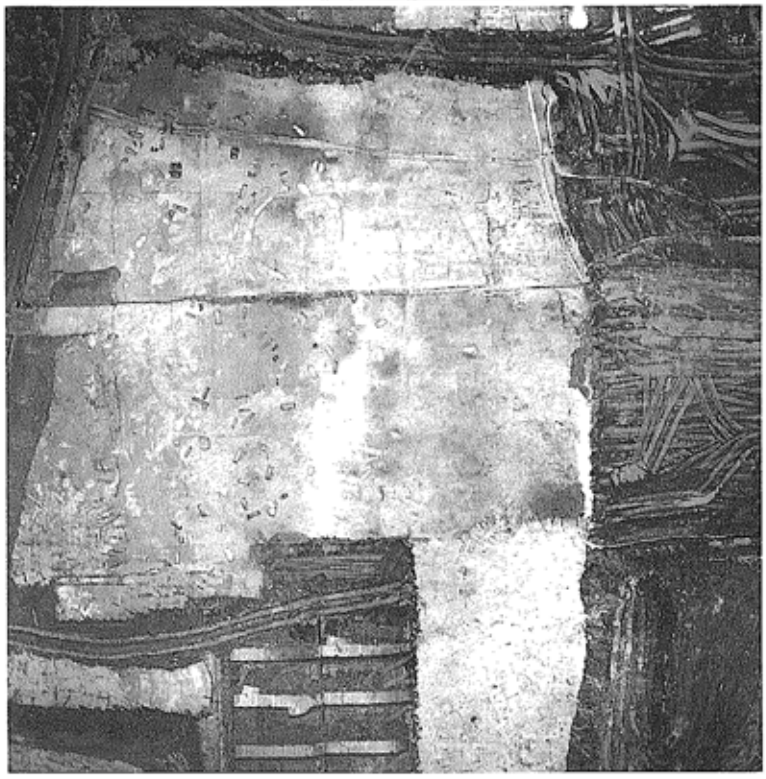
古川市教育委員会（1986）：「名生館遺跡Ⅶ」昭和61年度発掘調査概報　宮城県古川市文化財調査報告書第6集

写　真　図　版

遺跡全景

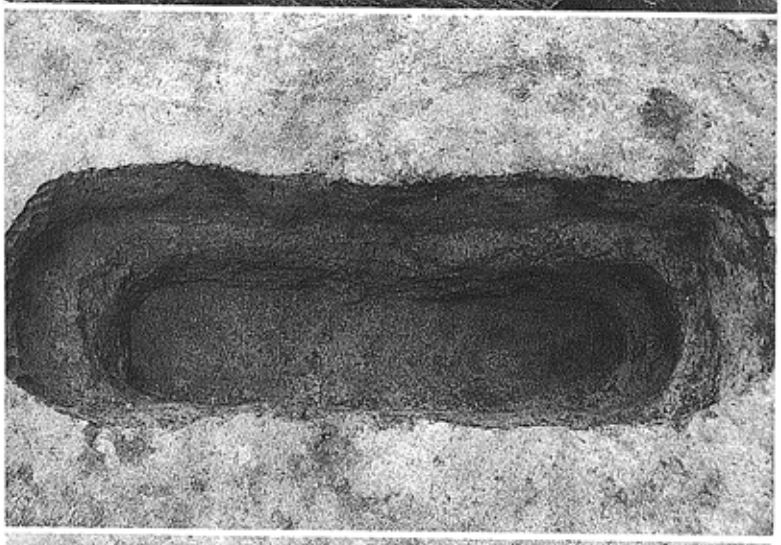


調査区全景

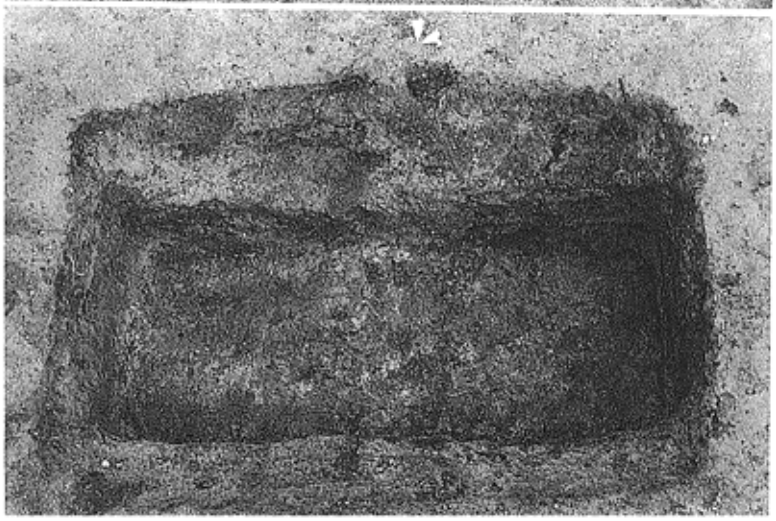


図版 1

調査風景



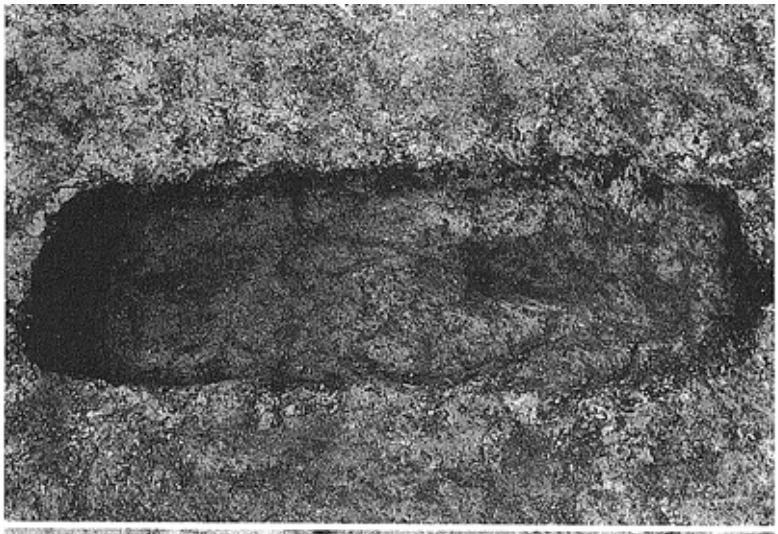
ＳＫ56号土壙



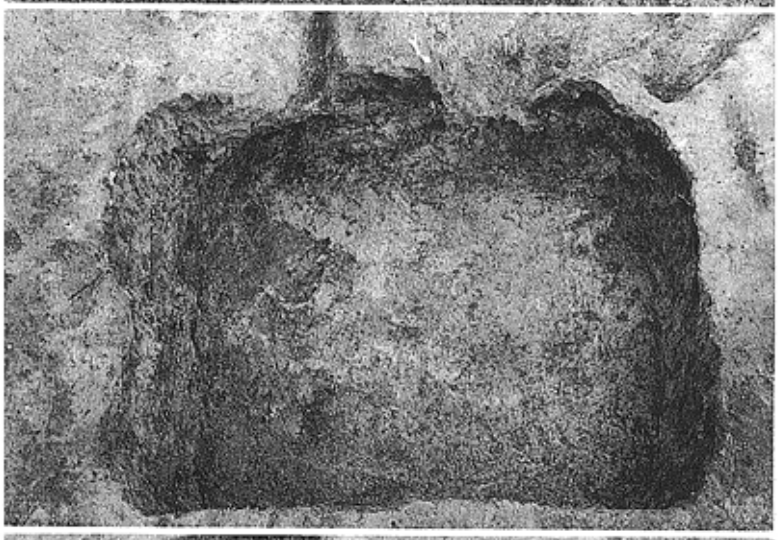
ＳＫ33号土壙

図版２

ＳＫ70号土壙

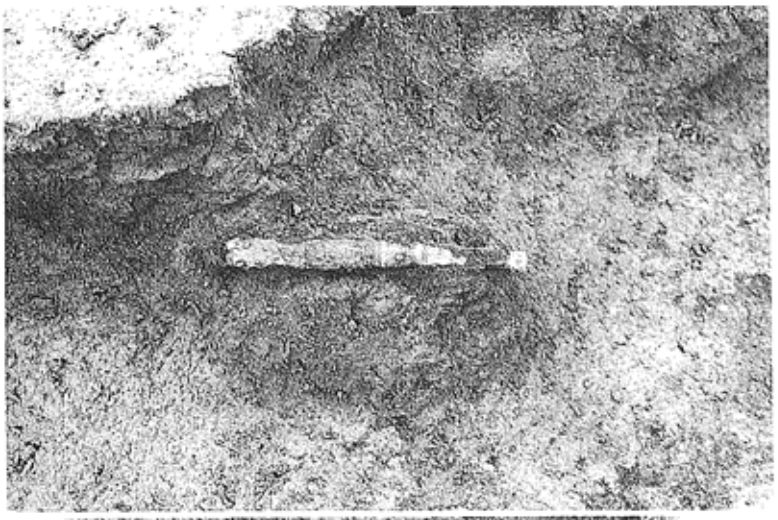


ＳＫ34号土壙

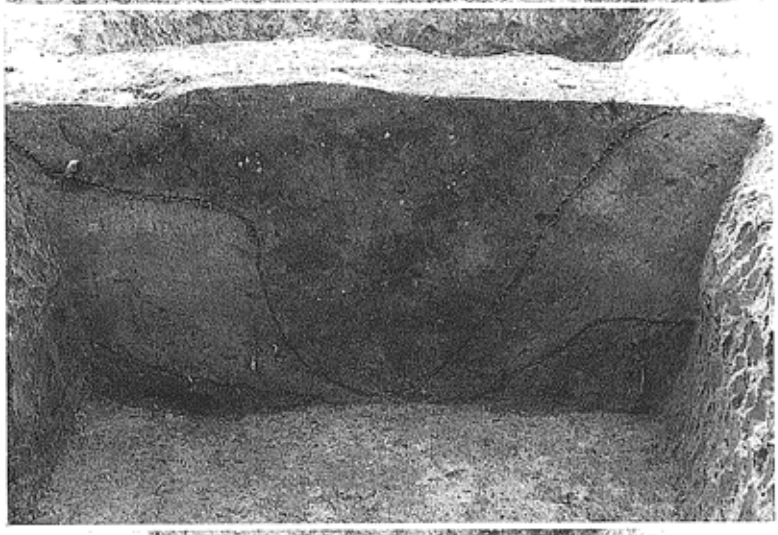


ＳＫ29、30号土壙

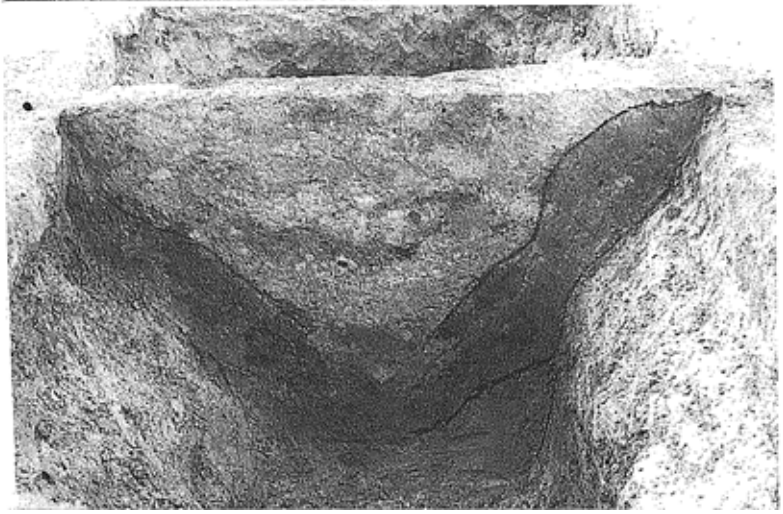
図版３



刀子出土状況
（ＳＫ100号土壙）



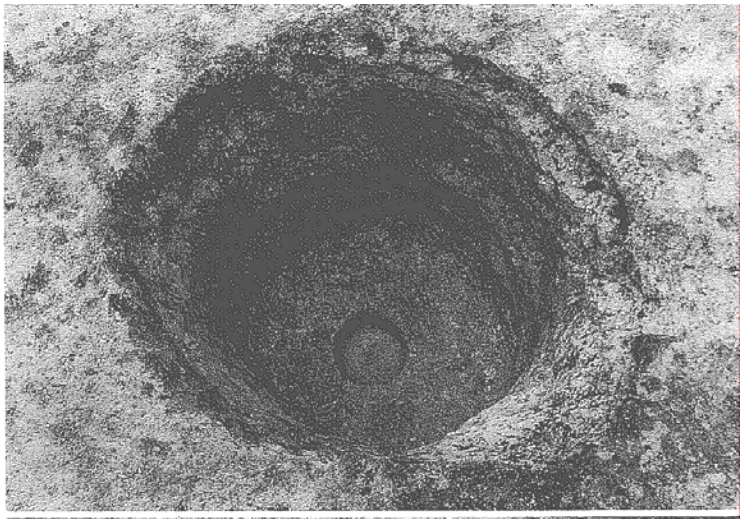
ＳＫ66号土壙断面



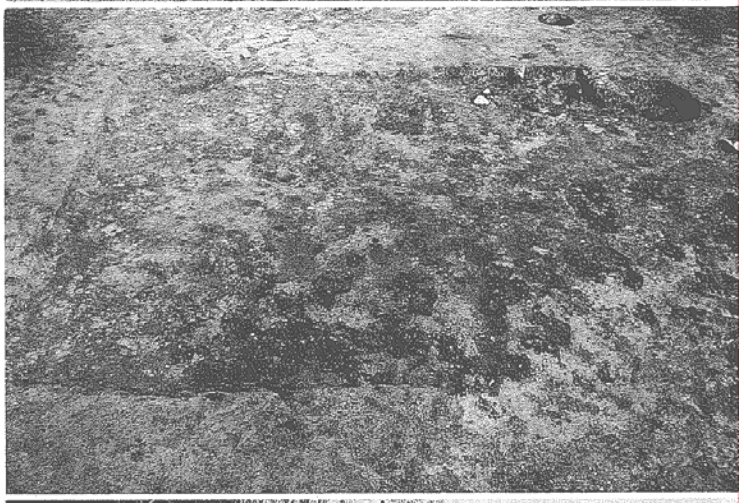
ＳＫ32号土壙断面

図版４

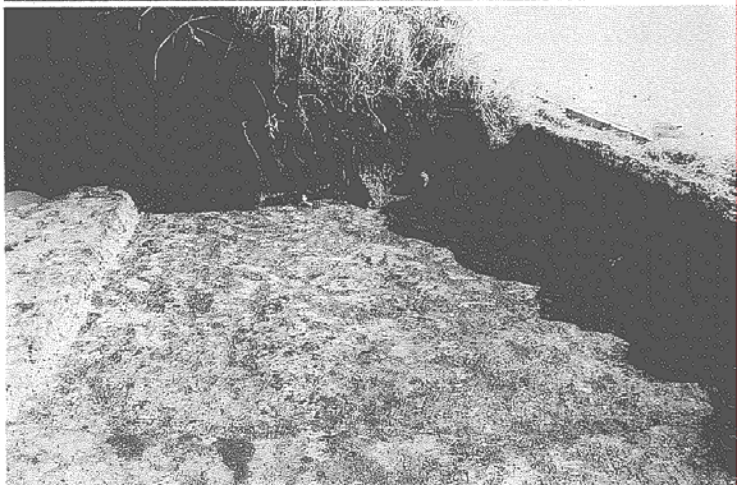
ＳＫ108号土壙



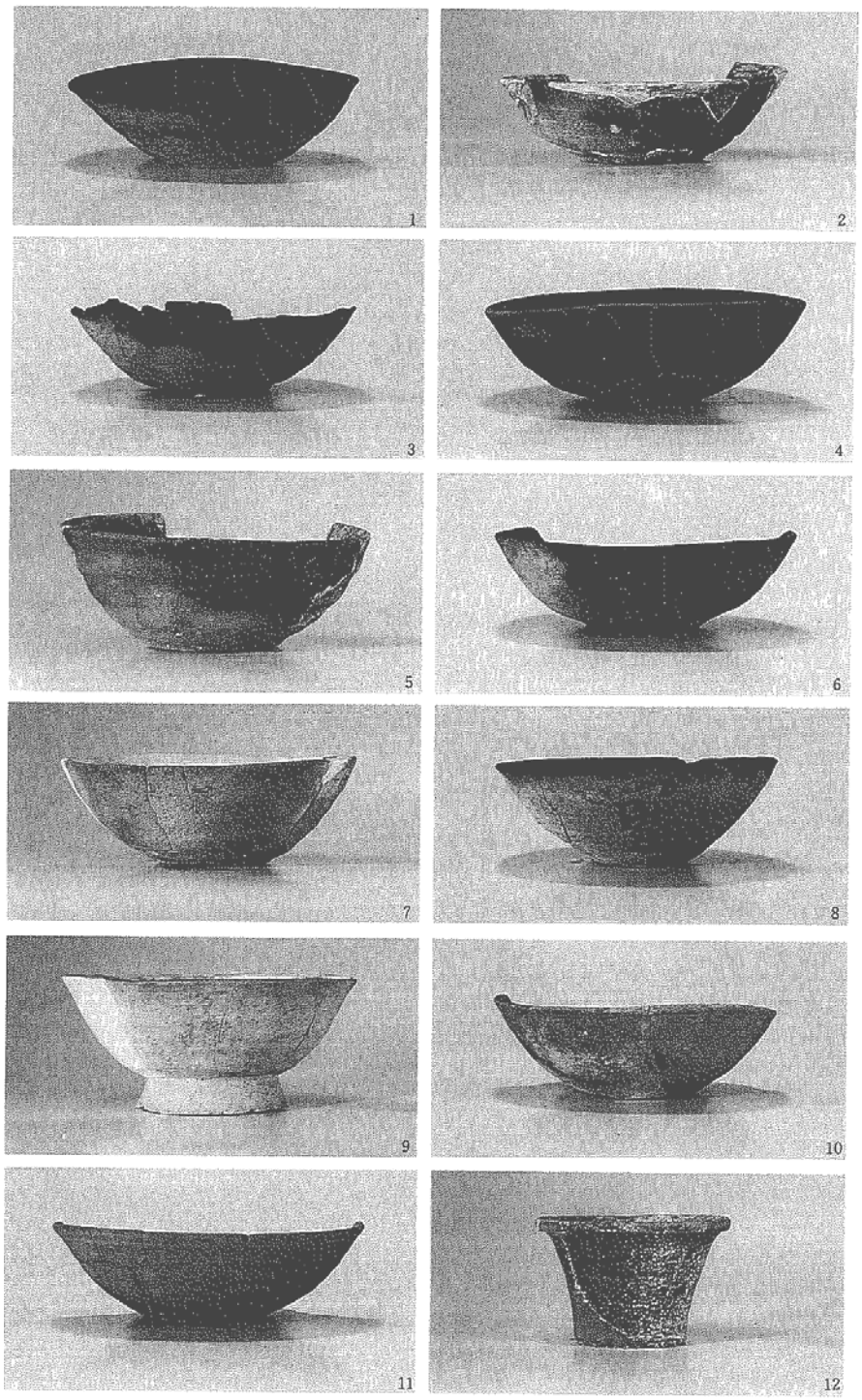
ＳＩ120号住居跡



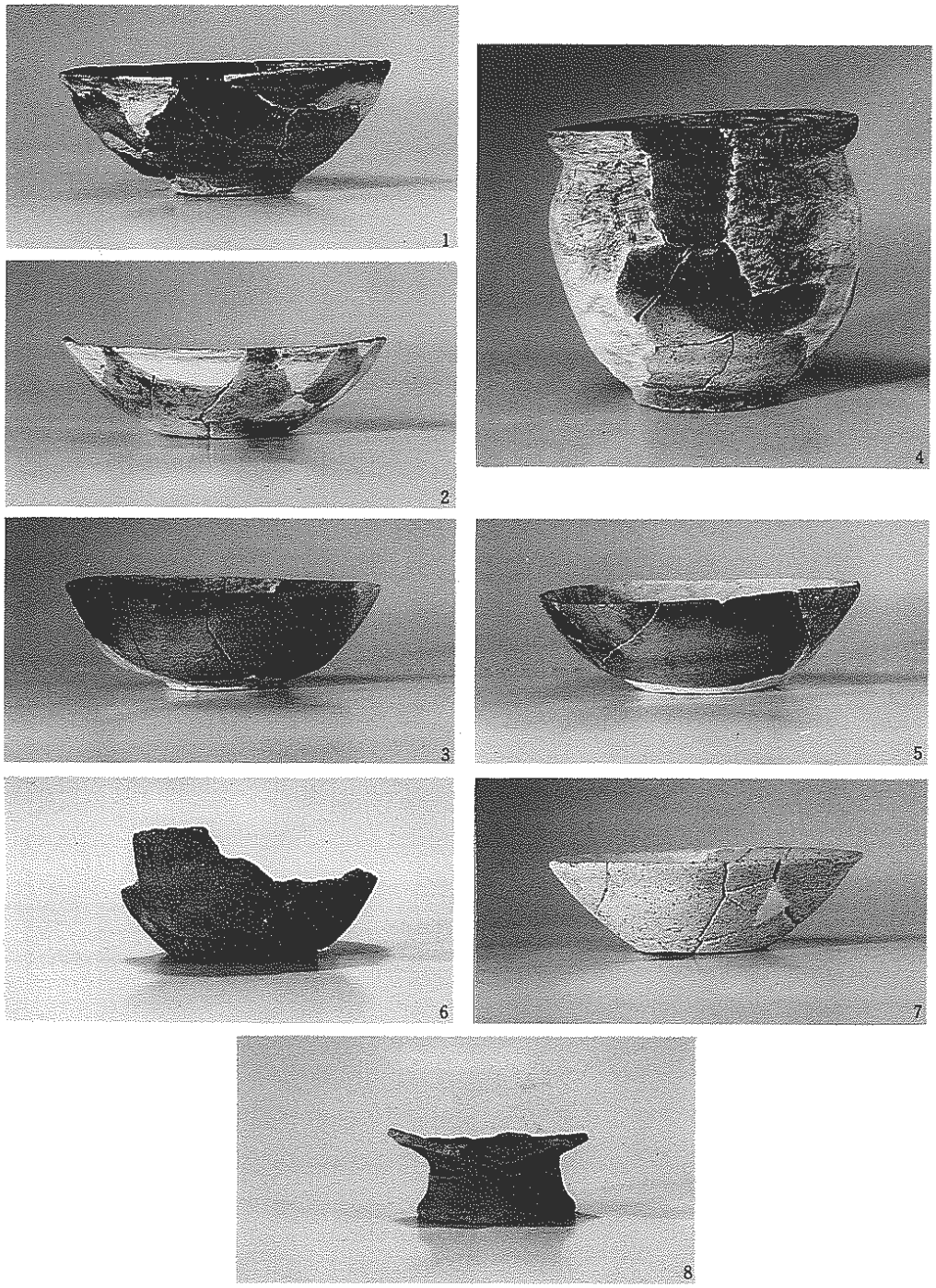
ＳＩ121号住居跡



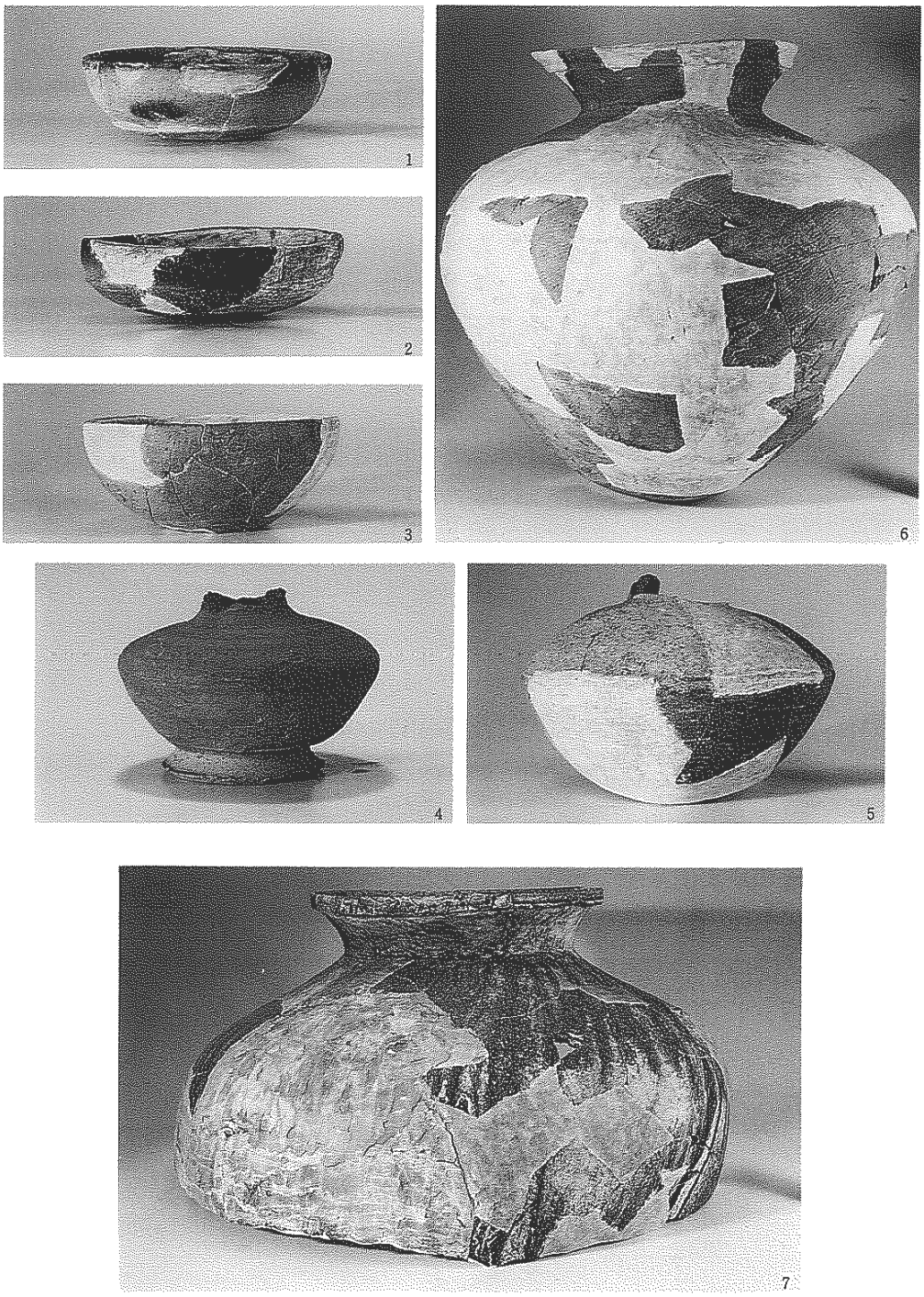
図版５



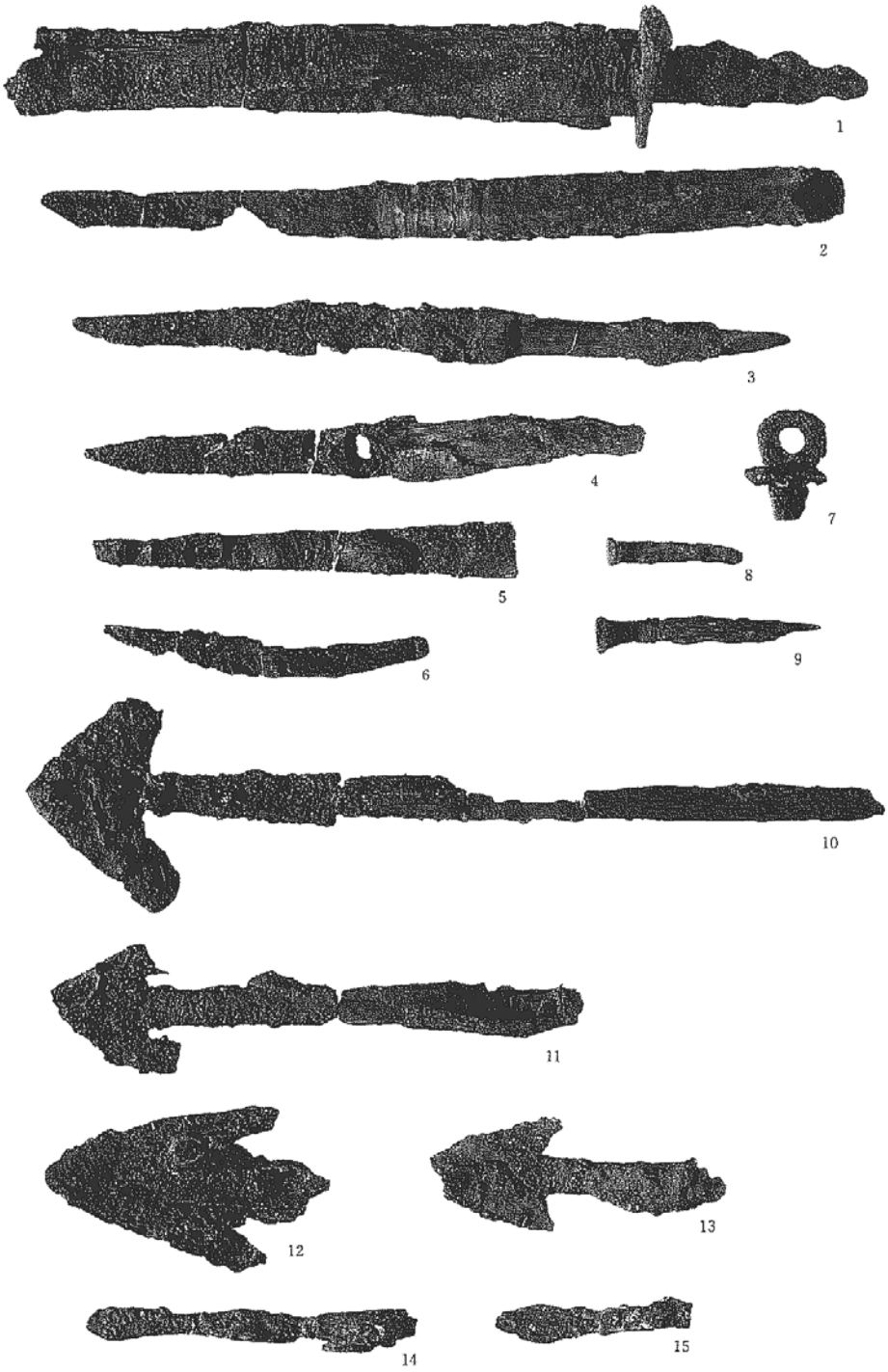
図版６　ＳＩ－120号住居跡出土遺物



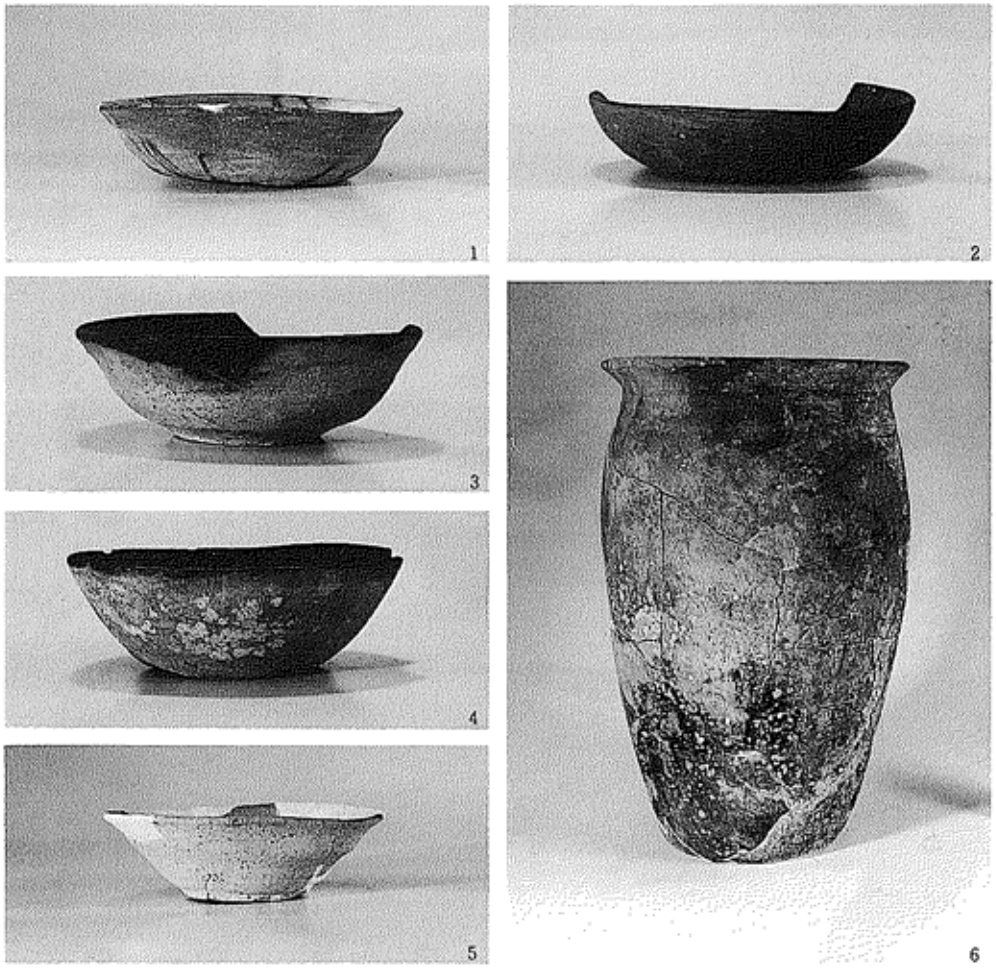
図版７　ＳＩ－121・122号住居跡出土遺物



図版８　古墳周溝出土遺物



図版 9　土壙出土遺物



図版10　土壙、その他の遺構出土遺物

尾 田 峰 貝 塚

目　　次

1　はじめに ……105
2　発見された遺構と遺物 ……106
3　まとめ ……113
引用・参考文献 ……113
写真図版 ……115

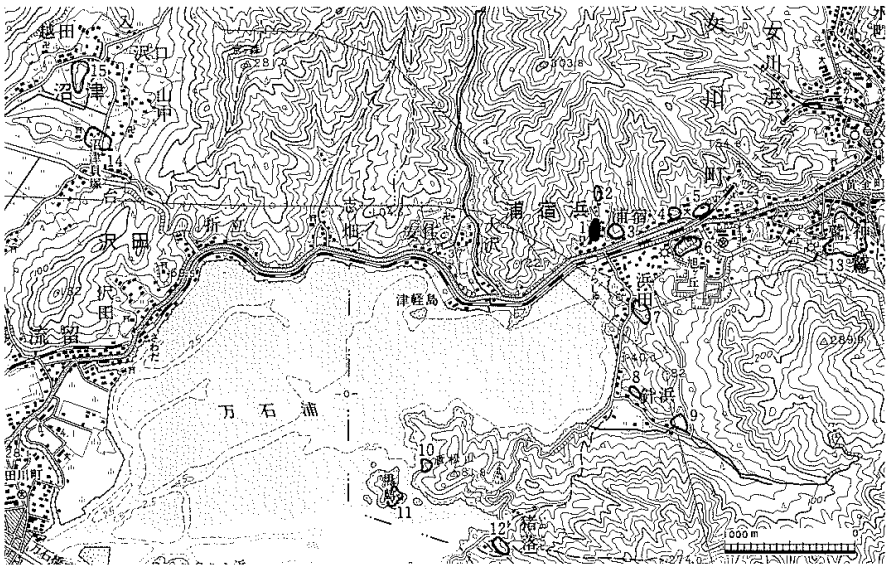
調 査 要 項

遺 跡 名：尾田峰貝塚（宮城県遺跡地名表登載番号 73001）
遺跡記号：ＵＲ
所 在 地：宮城県牡鹿郡女川町浦宿字尾田峰
調査面積：約 200 ㎡
調査期間：平成 3 年 9 月 28・29 日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課・女川町教育委員会
調 査 員：平塚英一（女川町教育委員会）・茂木好光（石巻工業高校）
　　小井川和夫・阿部博志・菅原弘樹（文化財保護課）
調査協力：勝又孝夫（土地所有者）

尾田峰貝塚（おだみねかいづか）

1　はじめに

尾田峰貝塚は宮城県牡鹿郡女川町浦宿字尾田峰に所在し、ＪＲ石巻線の浦宿駅の北 200ｍにある。万石浦湾の北岸最奥に位置し、南東に開いた沢地形の斜面から低地にかけて立地している(標高 5～10m)。この沢の北側の台地上には浦宿Ｃ遺跡(後期)、東側の丘陵端部には浦宿Ｂ遺跡（前期～奈良・平安）があり、沢地およびそれをとりまく丘陵上が長い間人々の生活の場として利用されていた様子が窺える。遺跡西側の丘陵を越えた古稲井湾沿岸には、沼津貝塚や南境貝塚などの大規模な貝塚が点在している。本遺跡は三宅玄雄氏によって昭和 26 年に調査が行われ、後・晩期の土器や骨角製品が多数採集されている（三宅・楠本・樋口：1967、三宅：1967）。また、昭和 34 年には平重道・加藤孝氏らを中心とする東北大学教育学部歴史研究会により、竪穴住居跡のほかに大型の遮光器土偶(大洞ＢＣ式期)等の遺物が発掘されている（加藤・木村：1960）。遺跡の周辺は現在宅地化等の開発が進んでおり、これまでにも町教育委員会によって遺跡保存のための調整が行われてきたが、今回の調査は宅地造成の計画に対応して緊急に実施したものである。



番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	尾田峰貝塚	後・晩	6	十二神遺跡	前	11	黒島遺跡	晩・弥・古・奈・平
2	浦宿Ｃ遺跡	後	7	小浦遺跡	前・中・後	12	裏猪落遺跡	前・中
3	浦宿Ｂ遺跡	前～晩・奈良・平安	8	針浜墓地下遺跡	縄文・平安	13	内山遺跡	前～晩・弥・奈
4	門前一小前遺跡	縄文	9	花坂遺跡	縄文・奈良	14	沼津貝塚	前～晩・弥・古・奈・平
5	門前ガード脇遺跡	中	10	唐松山下遺跡	前・晩・弥・奈・平	15	越田古遺跡	中・奈

第１図　周辺の縄文時代遺跡　国土地理院石巻１/50,000より転載

2　発見された遺構と遺物

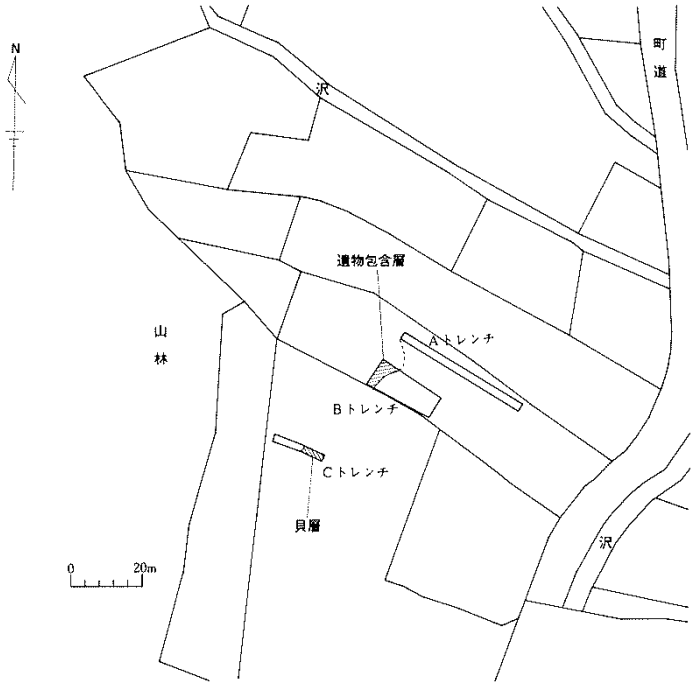
調査は、宅地造成の予定地内（沢の中央低地部分）に東西トレンチを２本（Ａ・Ｂトレンチ）と、その南側で南東に延びる丘陵の端部に東西トレンチを１本（Ｃトレンチ）設定して行った（第２図）。その結果、遺物包含層および貝層が検出され、これらの堆積層からは土器、石器、骨角製品、動物遺存体が出土した。

(1)遺物包含層と出土遺物

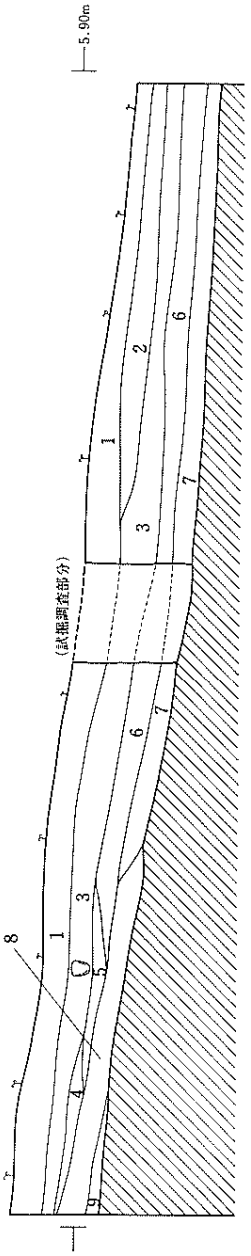
遺物包含層はＢトレンチの西端で検出された。ただし、より沢の深い場所に位置するＡトレンチやＢトレンチ東半部の斜面下方においては認められないことから、遺物包含層は西側の斜面上方から広がりをもつ層の末端部分にあたるものとみられる。層の堆積状況は、Ｂトレンチ北側断面で見ると以下のようである（第３図）。1 層は褐色土の無遺物層である。2～5 層は黒色土で遺物が混在しているが、量的に少ないことや小破片が多いこと、小礫を多く含んでいることなどから二次堆積層と思われる。6 層は赤茶けた小礫層で水平堆積層である。7 層は遺物を含まない粘性の高い黒色土である。8 層は遺物包含層で、遺物を多く含む黒色土層である。9 層は旧表土と思われる褐色土層である。

出土遺物（第４図）

出土遺物の主体をなすのは土器で、2～5 層出土のものと 8 層出土のものとがあるが、調査



第２図　発掘調査区



第3図　Bトレンチ北側セクション図

面積が少ないこともあって量的に少なく、また破片資料が大半であり、以下では文様の施されているものを中心に紹介する。なお、周辺から数点の石器も採集されている。

①2～5 層出土の土器（1～19・23）

深鉢・皿・壷形土器がある。

深鉢形のものには、明瞭な屈曲をもたずに口縁部に至るもの（1・4・5）と頚部で屈曲し口縁部が外反するもの（2・3・6・17・19）とがある。いずれも口縁部には刻目や小波状の彫去が施されている。前者には口縁下に 2～4 条の沈線を巡らし､その間に 1 条の刻目帯を配しているもの（1・4）がある。後者にも頚部に沈線と刻目帯を巡らすもの（2・3）があり、ほかに丁寧に磨かれたままの無文のもの（17～19）もある。

皿形土器（7～10・13～16・23）は小片であり様相の知れるものは少ない。13～16 は胴部に磨消縄文文様が施されている。23 は底部に四つの脚をもつものである。11・12 は壷形土器である。

②8 層出土の土器（20～22）

鉢形土器 3 例がある。20 は胴部から内湾しながら立ち上がるもので、口縁部には大小の山形突起が交互に配され、また突起間の口縁上端には細い刻目が刻まれている。21・22 は肩部で屈曲しその部分に隆帯を巡らしているものである。いずれも隆帯以下の胴部には磨消縄文文様が施されている。

以上の土器は量的に極めて限られたものであり、その時期の比定は困難であるが、田柄貝塚（阿部・手塚他：1986）、摺萩遺跡（阿部・柳沢他：1990）、梁瀬浦遺跡（小井川：1967）等の類例からみて、2～5 層出土の土器は大洞Ｃ1 式から大洞Ｃ2 式期に、8 層出土の土器は大洞Ｃ2～Ａ式期に属するものであろう。

(2)貝層と出土遺物

貝層は破砕貝を多く含む層厚約 15cm の混土貝層で、Ｃトレンチのほぼ中央部で検出さ

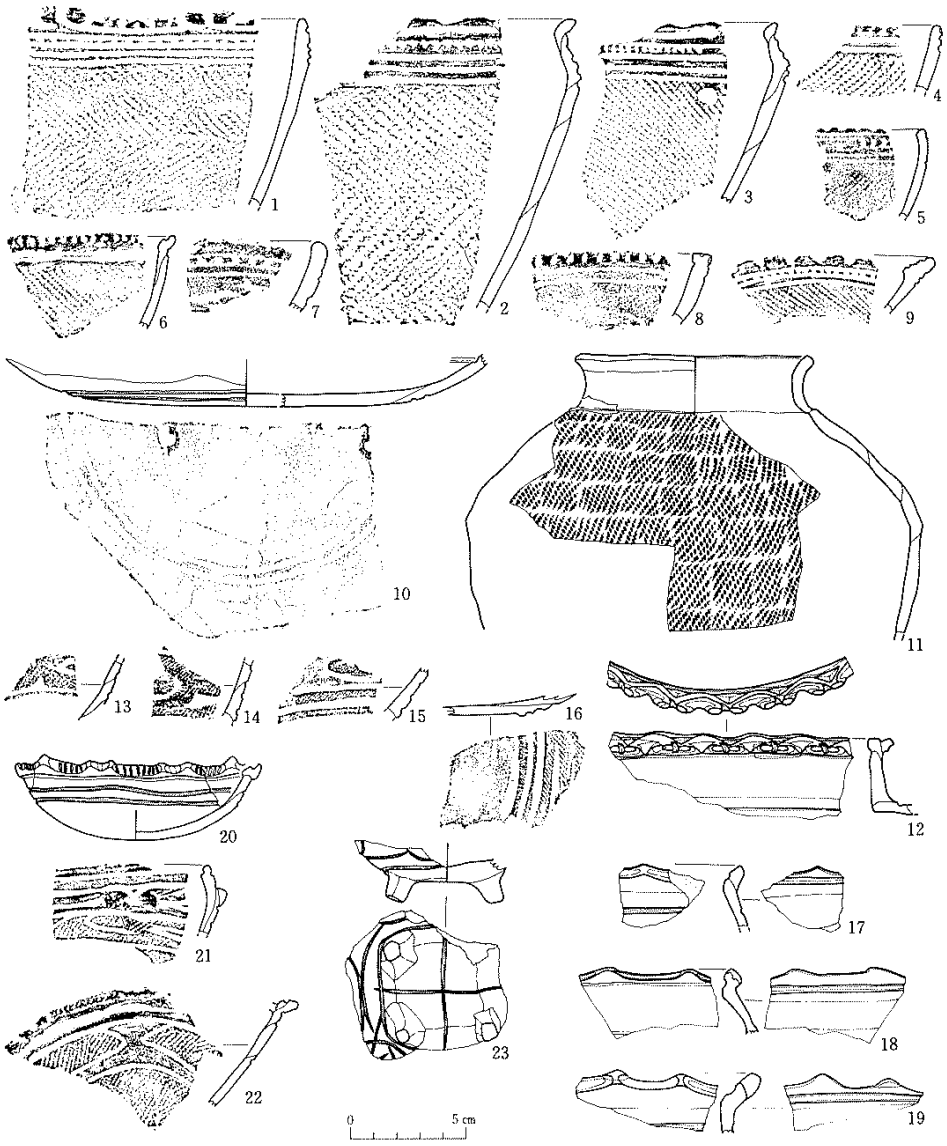
れた。丘陵裾部の平坦面から東側の沢に向かって傾斜する落ち際に位置し、表土下 40～50cm で確認された。

出土遺物

貝層からは土器、石器、骨角製品のほか、若干の動物遺存体が出土した。

①土器（1～10）

土器には、深鉢・鉢・注口土器がある。



第４図　遺物包含層出土遺物

深鉢形土器（1〜3、7〜9）には、口縁部に文様体を有し、その内部が無文の磨消帯のもの（1）、弧状の磨消縄文文様が描かれるもの（2）、沈線による三叉状文が描かれるもの（3）がある。また、7 では 3 条の平行沈線が巡らされている。8・9 は全面に縄文が施されるものである。

10 は縄文施文の鉢形土器である。

注口土器（4〜6）には、頚部から内傾して立ち上がる口縁部のもの（4・5）のほかに、口縁部で大きく開くもの（6）がある。この土器は注口土器としての類例が少なく器形的な疑問点も残るが、内面調整の状況からみて注口土器とした。口縁部に三叉状文による文様帯を巡らし、広い口縁上端にも文様が施されている。

以上の貝層出土の土器は、晩期初頭の大洞Ｂ式に一括されるものと思われる。

②石器（11・12）

11 は石棒の破損資料である。現存長 11.5cm、幅 3.4cm で、断面が偏平である。粘板岩製である。12 は敲き石で、全体に丁寧な整形がなされ、先端部には使用痕が見られる。長さ 10.1cm、幅 3.8cm の粘板岩製である。

③骨角製品

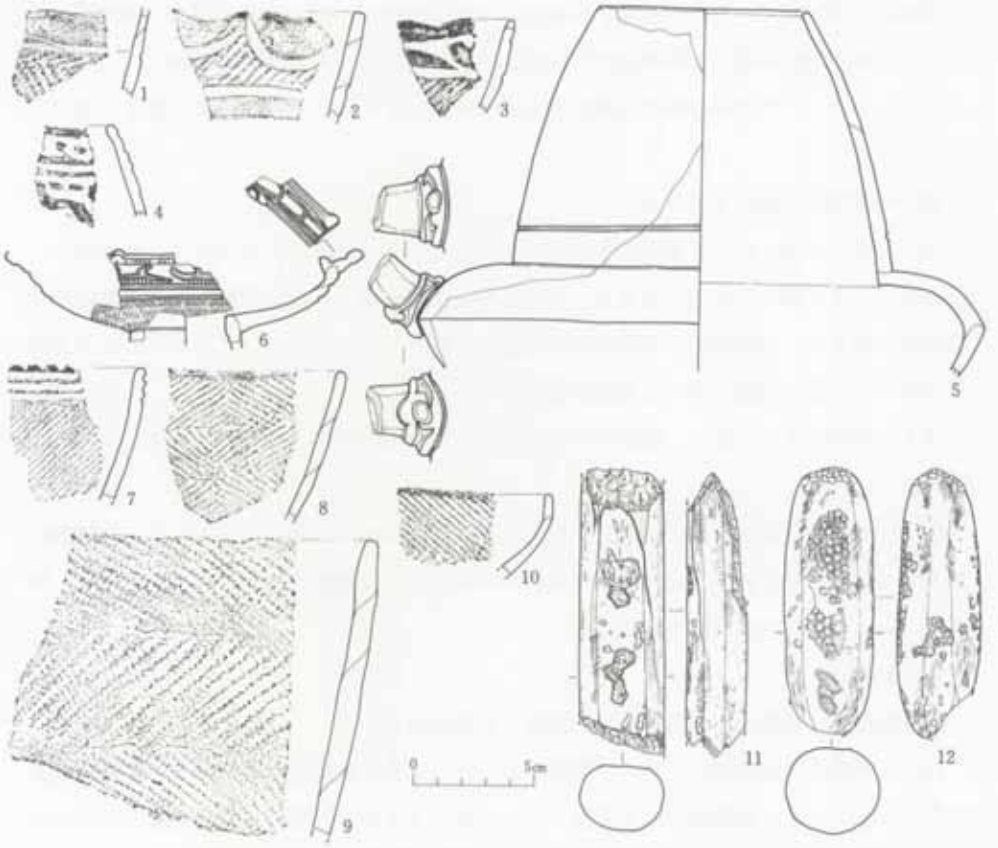
骨角製品には根挟み、弭形角製品、銛頭、骨篦がある。

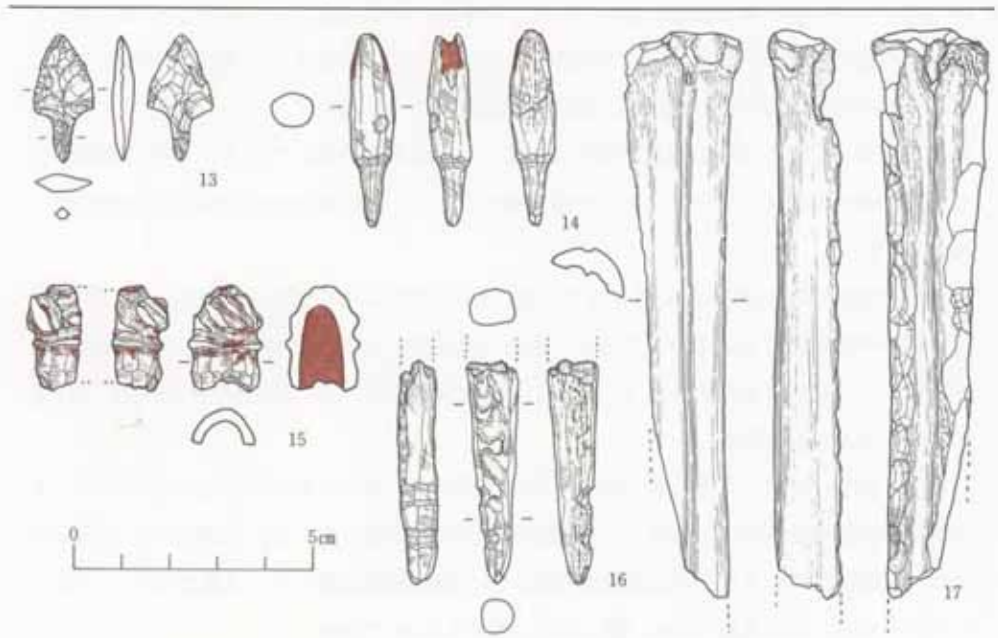
14 は先端部に石鏃装着のためのＶ字状のスリットを持つ鹿角製の根挟みで、茎部を明瞭に作り出している。先端部は若干破損しているが、スリット内部には石鏃を固定するためのアスファルトの付着が顕著に認められる。現存長 4.0m、幅 1.0cm、厚さ 0.8cm である。

15 は用途不明で、一般的には弭形角製品と呼ばれるものである。半割状の破損品で、先端および末端部も若干欠けている。鹿角幹の髄質部をくり抜いてソケット状に加工し、外面には横および斜め方向に数条の溝を巡らすといった装飾を施している。盲孔の内部全面と外面の溝を中心にアスファルトの付着が認められる。現存長 2.2cm、幅 1.5cm、厚さ 0.4cm である。

16 は基部末端の片側に 2 条の溝を有するが、溝の反対側に着柄用加工が施されていないことや器体が直線的であることなどから、銛頭（単純銛）の基部とみられる。溝は索綱を結び付けるための加工と考えられる。一面には自然面が残っている。現存長 4.7cm、幅 1.0cm、厚さ 0.8cm である。

17 は骨篦で、ニホンジカの左中手骨を前後に半截した前面を素材としたものである。近位端側の関節面を基部として残し、遠位端側に刃部を形成している。一縁辺および先端部は大きく破損しているが、残る縁辺の状況から打割後調整剥離によって整形されていることが知られる。現存長 11.9cm、幅 2.2cm、厚さ 1.3cm である。





第5図　貝層出土遺物

④動物遺存体

今回検出した動物遺存体の同定結果は、第１表に示すとおりである。

第1表　尾田峰貝塚出土動物遺存体種名一覧

Ⅰ 軟体動物	Ⅱ 節足動物	マダイ
1 腹足綱	1 蔓脚亜綱	サバ属
スガイ	チシマフジツボ	カツオ
ウミニナ	フジツボ科	フサカサゴ科
アカニシ	2 甲殻綱	アイナメ
キセルガイ科	トゲクリガニ	ヒラメ
オカチョウジガイ	カニ類	3 爬虫綱
ホソオカチョウジガイ	Ⅲ 棘皮動物	ヘビ類
ヒメコハクガイ	海胆綱	トカゲ類
ヒメベッコウマイマイ	ムラサキウニ	4 鳥綱
2 二枚貝綱	Ⅲ 脊椎動物	カモ類
カリガネエガイ	1 軟骨魚綱	5 哺乳綱
イガイ	エイ目	アシカ科
ウチムラサキガイ	2 硬骨魚綱	イルカ科
オニアサリ	マイワシ	イノシシ
ウラカガミガイ	カタクチイワシ	ニホンジカ
アサリ	サケ科	
ヒメシラトリガイ	ボラ	
オオノガイ	スズキ	

ただし、今回得られた資料については、第２表に示すように、量的に少なく、貝塚全体の特徴について論じることはできない(註 1)。よって、ここでは動物遺存体からみた特徴を二、三列挙するにとどめる。先ず、貝類はアサリが 77.7%と圧倒的に多く、オニアサリが 13.7%でこれに次ぐ。このほかスガイ・ヒメシラトリガイ・オオノガイなども目立っており、大半は内湾の砂泥および砂礫底に棲息する貝によって構成されている。魚類はマイワシが多く、これに次いでスズキ・フサカサゴ科・アイナメといった内湾性魚類が目立っている。こうした特徴は本貝塚が内湾の湾奥に位置していることとも一致しており、漁撈活動がおもに集落のすぐ近くの浜で行われていたことを示しているといえる。このほか、アシカ科・イルカといった海獣類の存在やサンプル量に比してウニが多いことも特徴的であり、周辺の自然環境や捕獲方法、季節性などを考える上でも注目される。

註１　今回分析した貝層は、混貝率および貝の完形率がともに低いことや貝層の主体をなすアサリとオニアサリの数が左右で大きく異なっていることなど、層としての一括性に乏しく、層の成因が二次堆積(二次廃棄・地滑り etc)によるものであった可能性もある。

スガイ(フタ)	15	2.3%	キセルガイ科	1
ウミニナ	2	0.3	オカチョウジガイ	7
アカニシ	1	0.2	ホソオカチョウジガイ	15
カリガネエガイ	L 0 R 1	0.2	ヒメコハクガイ	7
イガイ	0 3	0.5	ヒメベッコウマイマイ	3
マガキ	2 0	0.3	合　計	33
ウチムラサキガイ	1 1	0.2	チシマフジツボ フジツボ科種不明	破片 11 破片 51
オニアサリ	66 91	13.7		
ウラカガミガイ	0 1	0.2	トゲクリガニ カニ類種不明	鉗脚破片 3 鉗脚破片 1
アサリ	410 516	77.7	ムラサキウニ 中間骨76 上生骨(RL不明)4-6 顎骨？(RL不明)32-31 棘 171 殻破片2.2g	MIIE[3] 26
ヒメシラトリガイ	15 13	2.3		
オオノガイ	15 13	2.3		
合　計	664[2]	100.4		

ブロックサンプルにおける貝種組成と節足・棘皮動物遺体

トカゲ類 ヘビ類	＊脊椎骨1. ＊脊椎骨1.
カモ類 種不明鳥類	尺骨(R)1.大腿骨(R)1. 鳥口骨(R)1.尺骨(R)1.橈骨(L)1.脛骨(R)1.
ニホンジカ イノシシ アシカ科 イルカ 種不明哺乳類	鹿角3.下顎骨(L)1. 胸椎1.腰椎3.胸骨1.上腕骨(L 1.中手骨 (RL不明)2. 大腿骨(R)1. 脛骨(R)1(L) 1.中 足骨(R)1. 距骨(R)1. 基節骨 (指・RL不明)1. ＊種子骨？(RL 不明)1. 大腿骨(R)1. 1^{3}？(R)1.C(下顎・L)1. 脊椎骨1. 脊椎骨1.

＊印は、ブロックサンプル出土資料

貝層および遺物包含層出土の爬虫・鳥・哺乳類遺体

魚種・部位名		L R	MIIE
エイ目	脊椎骨	1	1
マイワシ[4]	基後頭骨 主上顎骨 舌顎骨 主鰓蓋骨 第1脊椎骨 第2脊椎骨 腹椎 尾椎 尾部棒状骨 下尾軸骨	1 0 1 0 1 2 0 2 3 72 118 3 1	7[5]
カタクチイワシ	尾椎	4	1
サケ科	脊椎骨	破片1	1
ボラ	腹椎 尾椎	1 11	1
スズキ	前上顎骨 主上顎骨 歯骨 方骨 上舌骨 主鰓蓋骨 擬鎖骨 上擬鎖骨 第1脊椎骨 腹椎 尾椎	1 0 0 1 0 4 0 2 3 0 1 1 1 2 1 0 2 4 10	4
マダイ	前上顎骨 耳石	0 1 1 1	1
サバ属	腹椎 尾椎	2 17	1
カツオ	尾椎	1	1
フサカサゴ科	副蝶形骨 前上顎骨 主上顎骨 後側頭骨 上擬鎖骨 肩甲骨 尾椎	1 0 1 3 1 0 1 1 0 1 0 12	3
アイナメ	副蝶形骨 前上顎骨 主上顎骨 方骨 腹椎 尾椎	1 1 0 0 1 2 0 2 4	2
ヒラメ	歯骨 尾椎	0 1 1	1
種不明魚類	脊椎骨	4	
合　計			24

ブロックサンプルにおける魚種組成

1)今回ブロックサンプル中より検出した動物遺存体は、悉皆的に採取した約15,000ccのサンプルを10mm・4mm・2mm・1mmの4種類のフルイを用いて水洗選別し、抽出したものである。
2)“合計 664”は採取の対象となった貝の総数を示したもので、陸産貝類5種を除いた数である。各貝の右欄の“%”はその中で占める割合を表す。
3)ムラサキウニの最小個体数（MIIE）は、1個体あたり中間骨の数(5)を基準として算出した。
4)マイワシと同定したものの中には、カタクチイワシを除くマイワシ以外の種不明のニシン科を含んでいる可能性もあるが、今回はこれらについても一括して集計した。
5)マイワシのMIIEは、1個体あたりの尾椎数（19～20）（高橋：1962）を基準として算出した。

第2表　貝層出土の動物遺存体

3　まとめ

①今回の調査で確認された遺物包含層は、縄文時代晩期中葉の大洞Ｃ2 式期から末葉の大洞Ａ式期にかけてのものである。なお、これを覆う二次堆積層からは、これよりも古い大洞Ｃ1～Ｃ2 式期の遺物が出土しており、西側上方の斜面上には該期の遺構あるいは堆積層が分布しているものと思われる。

②貝層の時期は、晩期初頭の大洞Ｂ式に一括されるもので、骨角製品・動物遺存体もこの時期に属するものと考えられる。ただし、今回確認された貝層は、二次堆積（二次廃棄・地滑り etc）によって形成された可能性もある。

引用・参考文献

阿部博志・柳沢和明他（1990）：「摺萩遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第132集　宮城県教育委員会

阿部恵・手塚均他（1986）：「田柄貝塚Ⅰ－遺構・土器」『宮城県文化財調査報告書』第111集　宮城県教育委員会

岡村道雄・笠原信男他（1986）：『里浜貝塚Ⅴ』　東北歴史博物館

岡村道雄・笠原信男他（1987）：『里浜貝塚Ⅵ』　東北歴史博物館

加藤孝・木村敏郎（1960）：「女川町浦宿尾田峰貝塚調査概報」『女川町誌』

金子浩昌・忍澤成視（1986）：「骨角器の研究－縄文篇Ⅰ・Ⅱ」『考古民俗叢書』22・23　慶友社

小井川和夫（1967）：「梁瀬浦遺跡」『宮城県角田市文化財調査報告』第1集

小井川和夫（1983）：「里浜貝塚Ⅳ」『東北歴史資料館資料集』13　東北歴史資料館

高橋善弥（1962）：「瀬戸内海とその隣接海域産硬骨魚類の脊梁構造による種の査定のための研究」『内海区水産研究所報告』16

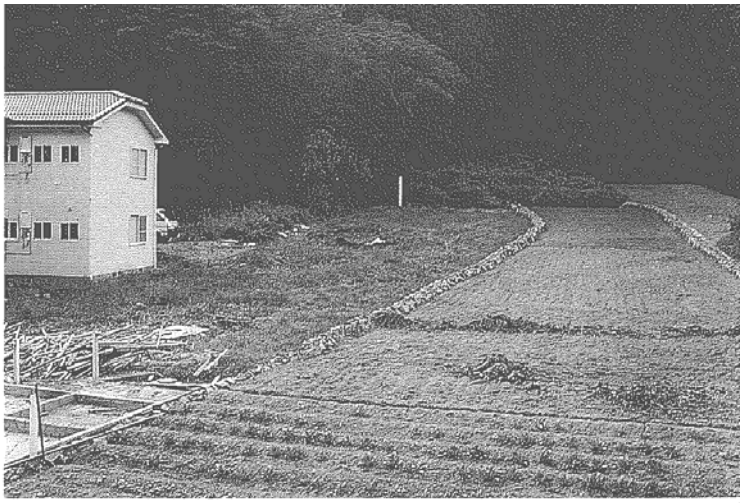
松島義章・前田保夫（1985）:「先史時代の自然環境－縄文時代の自然史」『考古学シリーズ』21 東京美術

三宅宗議・楠本政助・樋口侃（1967）：『尾田峰貝塚出土遺物』石巻古代文化研究会

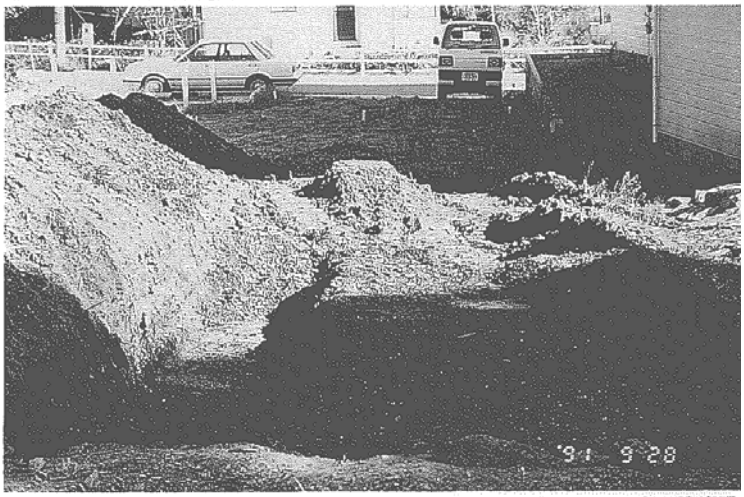
三宅宗議（1967）：『尾田峰の縄文文化』石巻古代文化研究会

写　真　図　版

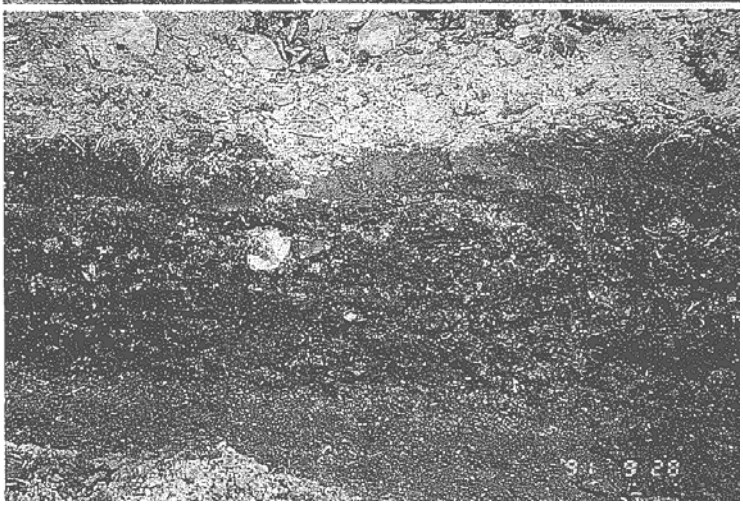
遺跡近景（東より）



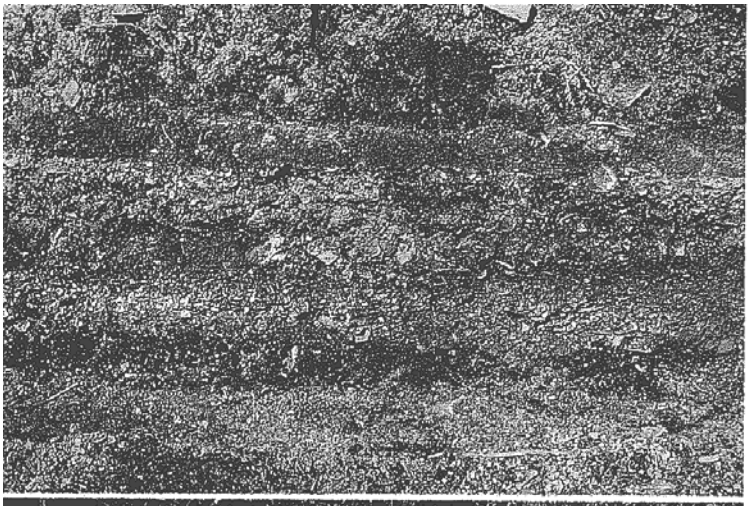
Ｂトレンチ全景
（西より）



Ｂトレンチ北側断面

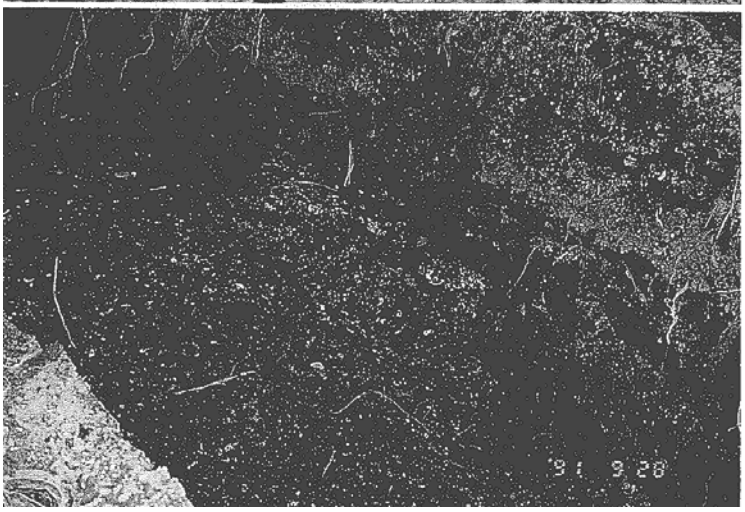


図版１



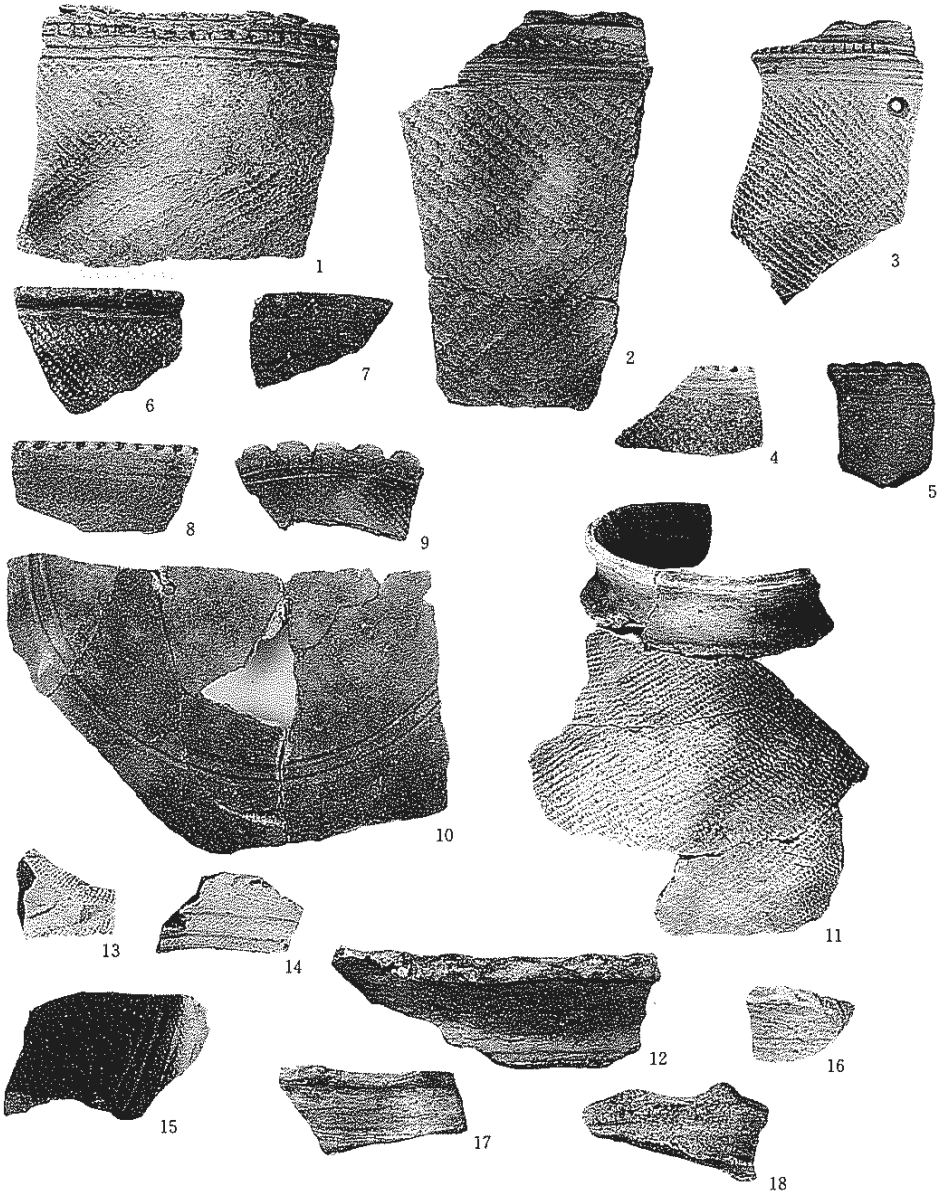
Bトレンチ北側断面

Cトレンチ全景（東より）



Cトレンチ貝層検出状況

図版 2



（1～18：2～5層出土）

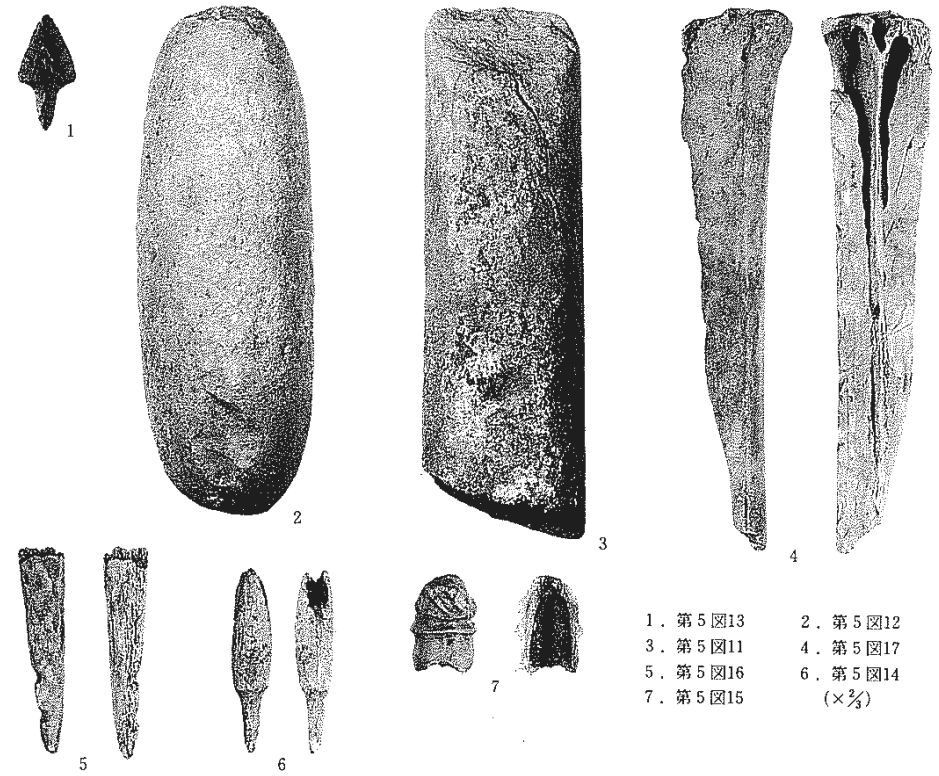
1．第4図1	2．第4図2	3．第4図3	4．第4図4	5．第4図5
6．第4図6	7．第4図7	8．第4図8	9．第4図9	10．第4図10
11．第4図11	12．第4図12	13．第4図14	14．第4図15	15．第4図16
16．第4図17	17．第4図18	18．第4図19		

図版3　遺物包含層出土遺物

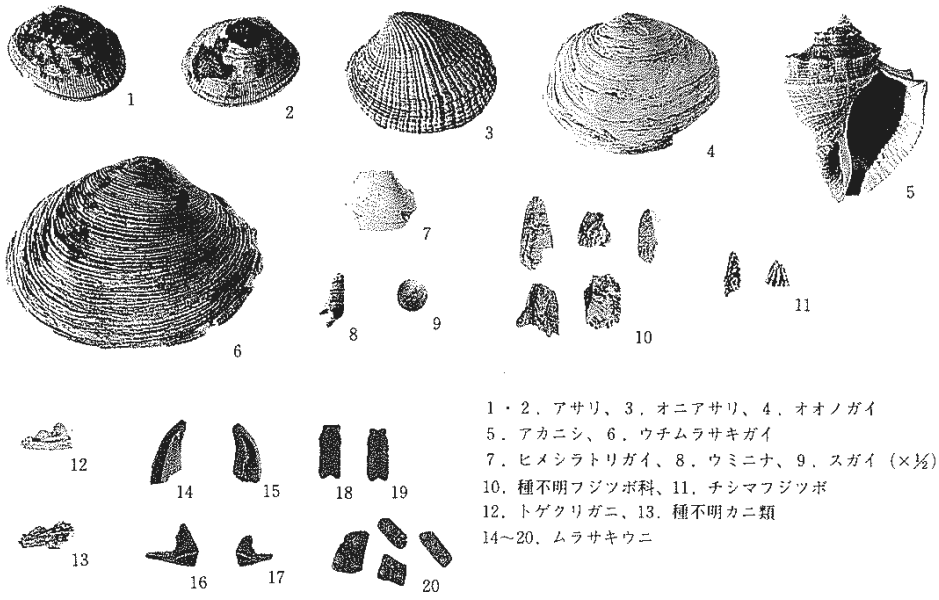
（1～3：8層出土　4：2～5層出　5～14：貝層出土）

1．第4図22	2．第4図21	3．第4図20	4．第4図23	5．第5図1
6．第5図2	7．第5図3	8．第5図4	9．第5図5	10．第5図6
11．第5図7	12．第5図8	13．第5図9	14．第5図10	

図版4　遺物包含層および貝層出土遺物

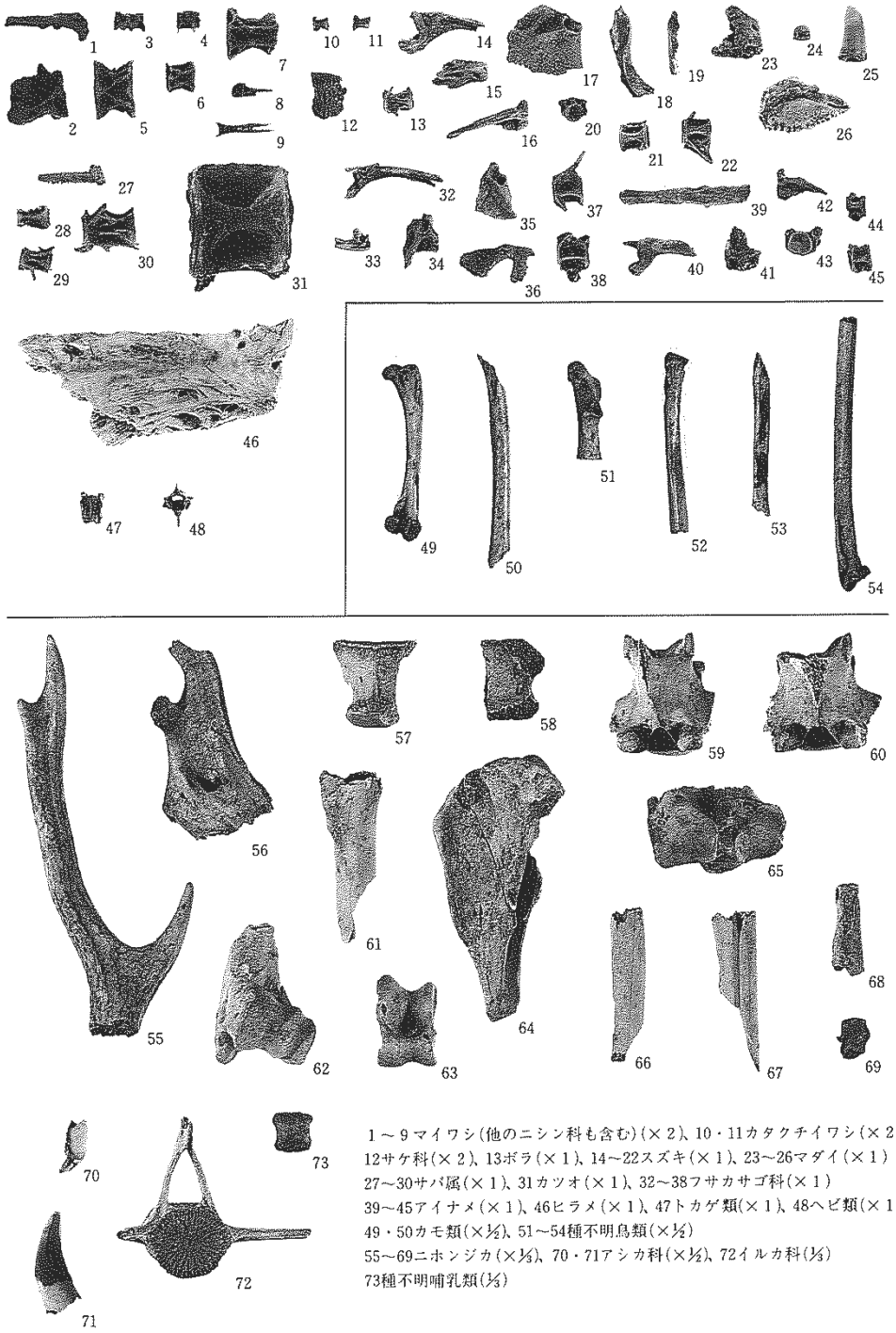


1．第5図13　2．第5図12
3．第5図11　4．第5図17
5．第5図16　6．第5図14
7．第5図15　(×⅔)



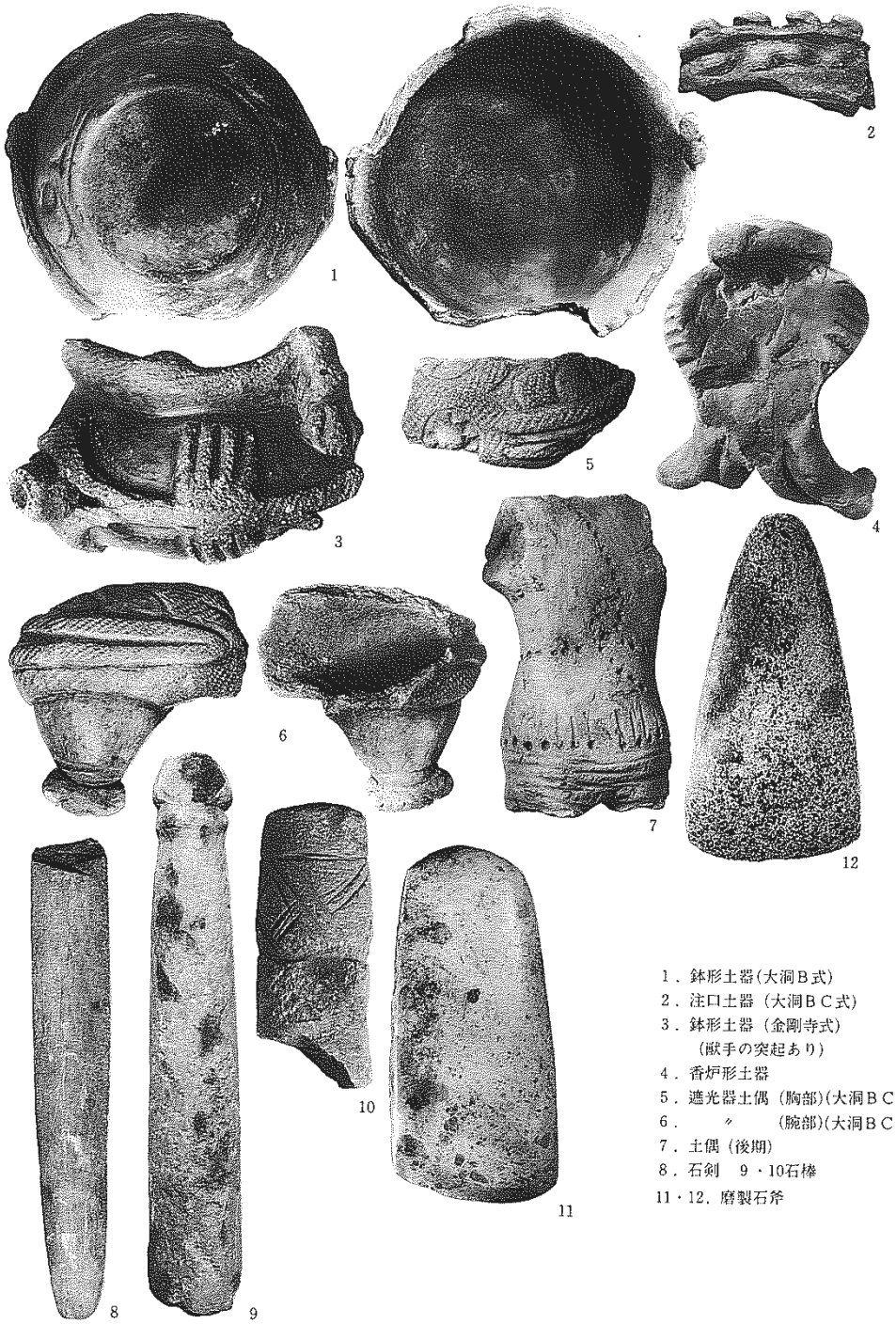
1・2．アサリ、3．オニアサリ、4．オオノガイ
5．アカニシ、6．ウチムラサキガイ
7．ヒメシラトリガイ、8．ウミニナ、9．スガイ（×½）
10．種不明フジツボ科、11．チシマフジツボ
12．トゲクリガニ、13．種不明カニ類
14～20．ムラサキウニ

図版5　遺物包含層および貝層出土遺物（2）



1～9マイワシ(他のニシン科も含む)(×2)、10・11カタクチイワシ(×2)
12サケ科(×2)、13ボラ(×1)、14～22スズキ(×1)、23～26マダイ(×1)
27～30サバ属(×1)、31カツオ(×1)、32～38フサカサゴ科(×1)
39～45アイナメ(×1)、46ヒラメ(×1)、47トカゲ類(×1)、48ヘビ類(×1)
49・50カモ類(×½)、51～54種不明鳥類(×½)
55～69ニホンジカ(×⅓)、70・71アシカ科(×½)、72イルカ科(⅓)
73種不明哺乳類(⅓)

図版6　遺物包含層および貝層出土遺物（3）



1．鉢形土器(大洞B式)
2．注口土器（大洞BC式）
3．鉢形土器（金剛寺式）
（獣手の突起あり）
4．香炉形土器
5．遮光器土偶（胸部)(大洞BC式)
6．　〃　（腕部)(大洞BC式)
7．土偶（後期）
8．石剣　9・10石棒
11・12．磨製石斧

図版７　表採遺物（勝又孝夫氏所蔵品）

椿 貝 塚

目　　次

第一章　はじめに ……127
　Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境 ……127
　Ⅱ　調査の概要 ……129
第二章　貝層出土の精査と出土遺物
　Ⅰ　貝層断面の精査 ……131
　Ⅱ　出土遺物 ……133
　　①　土器 ……133
　　②　土偶 ……133
　　③　石製品 ……133
　　④　骨角製品 ……143
　　⑤　動物遺存体 ……144
第三章　考察
　Ⅰ　出土遺物について ……148
　Ⅱ　貝層について ……148
　Ⅲ　古環境 ……148
　Ⅳ　貝塚が形成された環境 ……150
第四章　まとめ ……150
　　引用・参考文献 ……151
　　写真図版 ……153

調 査 要 項

遺 跡 名：椿貝塚（つばきかいづか）

遺跡記号：ＴＢ（宮城県遺跡地名表登載番号：13001）

所 在 地：宮城県亘理郡亘理町逢隈上郡字椿

調査原因：崩落防止のための崖面保護

調査面積：約 150 ㎡

調査期間：平成 3 年（1991 年）9 月 24 日～9 月 26 日

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 員：菅原弘樹、天野順陽

調査協力：亘理町教育委員会

椿貝塚（つばきかいづか）

第一章　はじめに

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境

椿貝塚は、宮城県南部の亘理町の中心部から北へ約 2km の地点にあたる、亘理郡亘理町蓬隈上郡字椿に所在する（第 1 図）。

亘理町の地形は大きく東西に二分される。東部には沖積平野が開け、西部には標高 200m前後の阿武隈山地が南北に走っている。沖積平野は南の山元町を経て福島県境まで続き、内部には海岸線に平行して数列の浜堤が発達している。また、沖積平野には西部の山地から派生する数條の丘陵がのびている。椿貝塚はそうした派生丘陵の一つである雁田丘陵の先端部（標高約 12m）に位置する。

貝層は丘陵先端部を取り囲むように 5 か所に確認されており、全体としては環状を呈しているといえる（第 2 図）。規模は長径 150m、短径 100mに達し、仙台湾南部における代表的な貝塚である。これまでの調査で、貝層は汽水性のヤマトシジミを主体貝としていることが知られている。

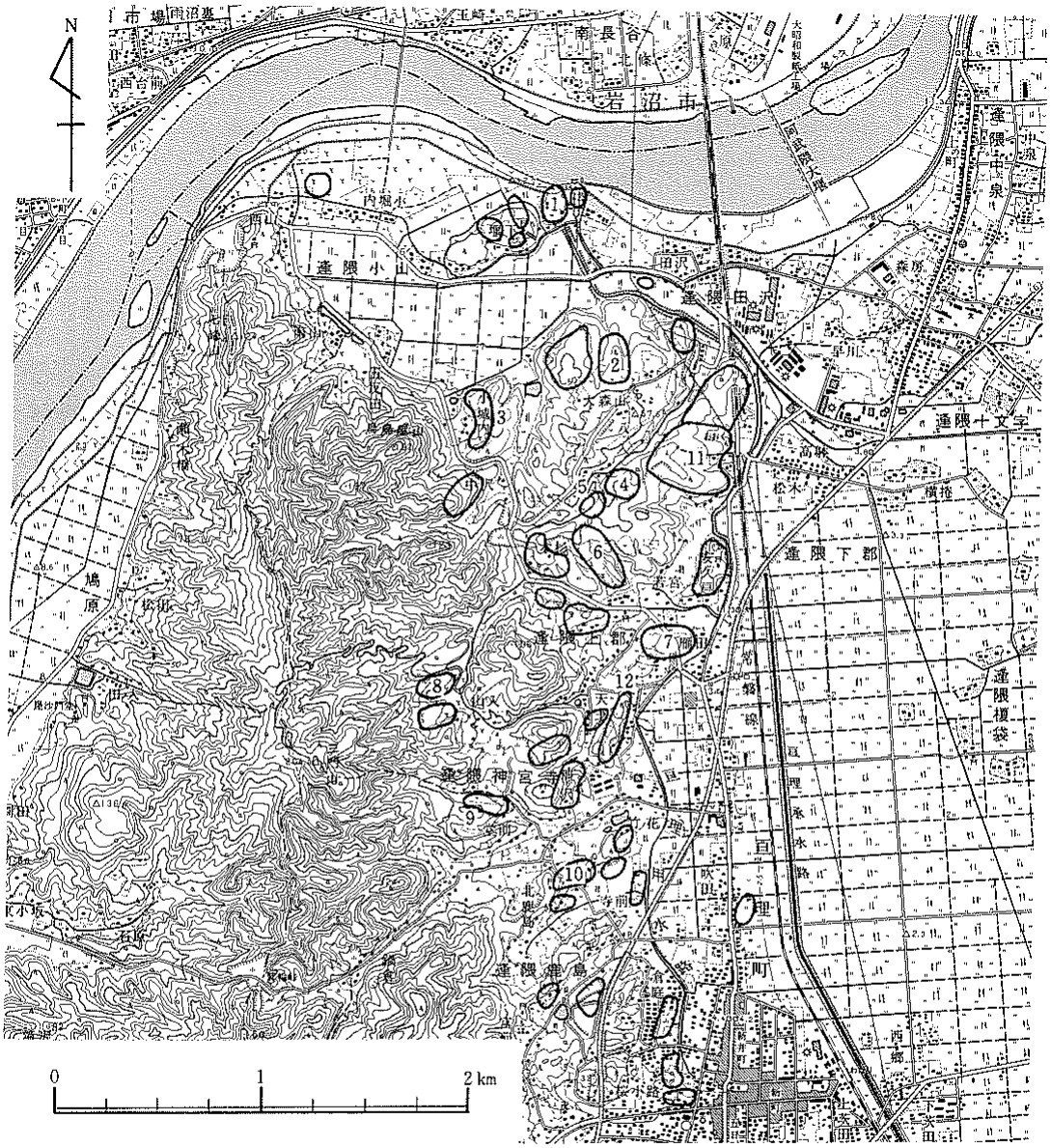
亘理町内では、縄文時代の遺跡は 19 ヶ所知られているが、椿貝塚と同時期の遺跡は、山入遺跡、一の坂遺跡、畑中貝塚の 3 遺跡である。貝塚に限ってみると、畑中貝塚のみである。また、阿武隈川河口以南における同時期の貝塚は、山元町の中島貝塚のみである。

椿貝塚の本格的な調査は、昭和 36 年に亘理町郷土史研究会が南東部の貝塚を発掘したことに始まる。この時に、縄文後期から晩期にかけての土器、石器、骨角器などが多数出土し、注目されるようになった。

その後、昭和 42 年には丘陵北部、46 年には丘陵中央部の畑が開田工事に伴う調査によって、宝ヶ峯式の土器を多量に含む貝層が確認された。

昭和 48 年 3 月には、貝塚中央部を縦断する町道の拡幅工事に伴う事前調査によって、晩期後半（大洞A’式）の貝層が確認された。貝層下土層からは晩期中頃（大洞C_2式）の遺物が多数出土した。また、丘陵上からは、後期後半の竪穴住居跡も発見された。（志間：1976）。

亘理町付近を含む阿武隈川流域は、縄文時代早期後半には、いわゆる縄文海進により阿武隈川河口から 20km も内陸の柴田町槻木付近まで海が入り込み、内湾（旧槻木湾）化していたが、前期以降、阿武隈川の沖積作用により潟湖化していたことが明かになっている（笠原：1986）。椿貝塚はそうした環境下で営まれた貝塚である。



番号	遺跡名	立地	時代	番号	遺跡名	立地	時代
1	堰下囲遺跡	分離丘陵	縄文前期	7	山入遺跡	丘陵斜面	縄文
2	田沢遺跡	丘陵	縄文前・中期	8	山入南遺跡	丘陵斜面	縄文
3	小城内遺跡	丘陵	縄文前・中期	9	オフロ遺跡	丘陵斜面	縄文後・晩期
4	小松堂遺跡	丘陵中腹	縄文中期	10	北鹿島遺跡	丘陵麓	縄文中期
5	小松堂囲遺跡	丘陵	縄文中期	11	三十三間堂遺跡	丘陵	弥生、古代
6	椿貝塚	丘陵麓	縄文後・晩期	12	雁田横穴古墳群	丘陵斜面	古墳後期

第1図　周辺の遺跡

Ⅱ　調査の概要

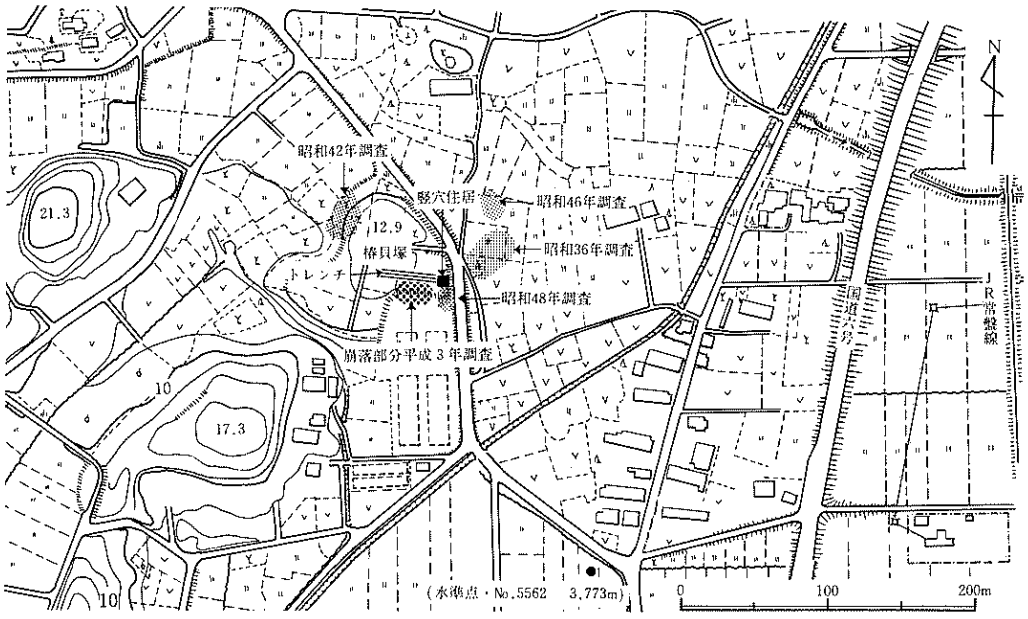
椿貝塚の５ヶ所の貝塚のうち、南端に位置する貝層部分が、平成２年（1990 年）８月の大雨によって崩落し、崖面に貝層が露出した。その後少量づつの崩れはあったものの小康状態にあったが、平成３年夏に崖上に亀裂が見つかり、再崩落の危険性が考えられた。このため貝層を保護するために崖面に盛土工事を行なう必要が生じた。

本調査は、この工事に先立つ確認調査で、平成３年（1991 年）９月 24 日～26 日に実施した。

調査は、貝層の内容確認を目的としたものであり、調査範囲は、崩落部分に限定した。

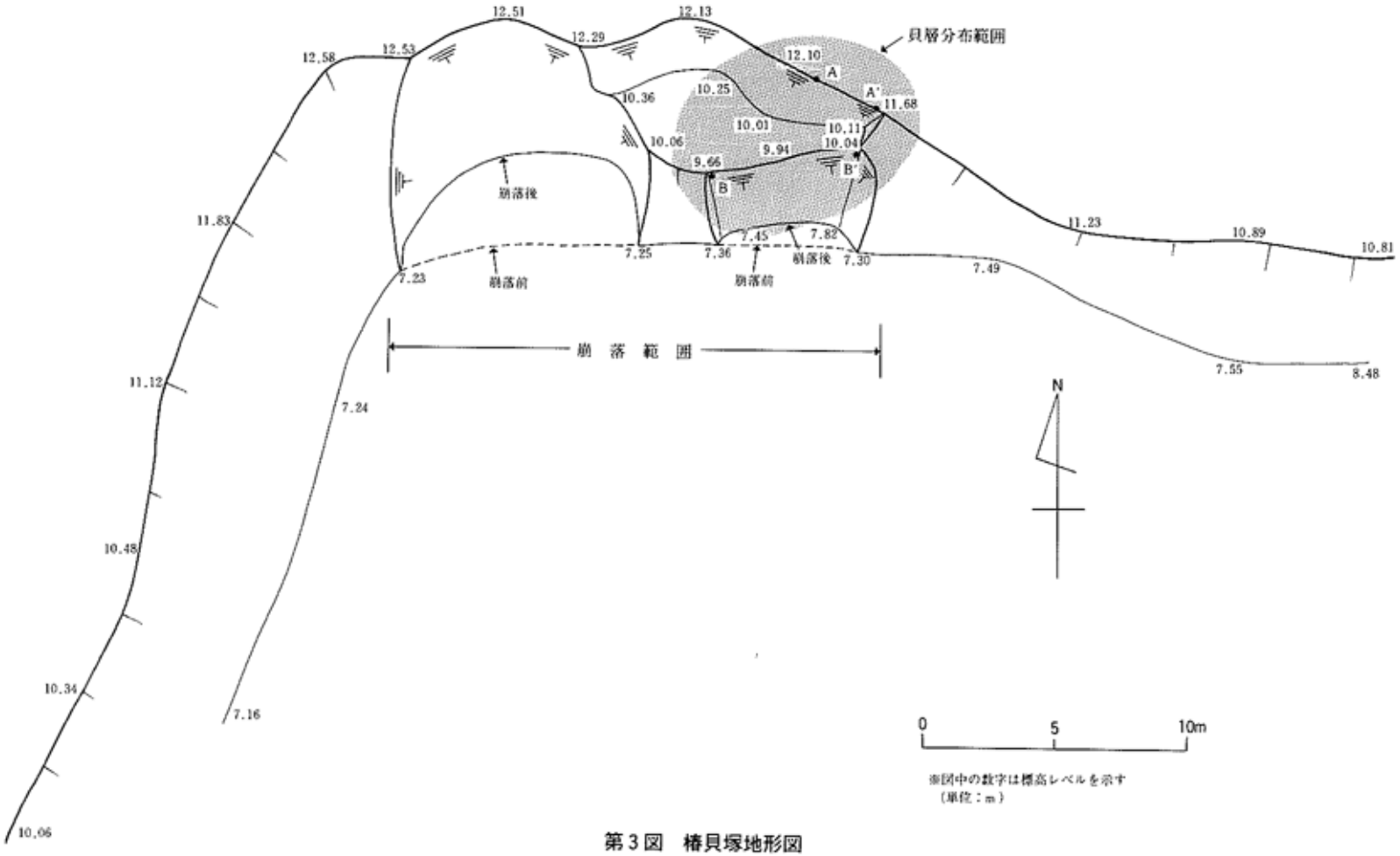
まず、重機を使用して崩落土を除去し、その際崩落土中に含まれた遺物を採集した。ついで、貝層断面を露呈し、その状況を断面図作成・写真撮影によって記録化した。その後分層した貝層の各層ごとに土のう袋一袋を目安に土壌サンプリングを行った。

調査終了後、直ちに盛土工事を行った。



第２図　椿貝塚貝層分布範囲と周辺の地形

※トレンチ調査（２ｍ×40ｍ）は昭和42～46年の間（年度は不明）に行なわれ数個のピットが検出された（志間泰治氏教示）。


貝層分布範囲
崩落後
崩落前
崩落後
崩落前
崩落範囲
N
0
5
10m
※図中の数字は標高レベルを示す
（単位：m）
12.51
12.13
12.29
12.53
12.58
12.10
A
A'
11.68
10.25
10.36
10.01
10.11
10.06
9.94
10.04
9.66
B
B'
7.45
7.82
7.25
7.36
7.30
7.23
7.24
7.16
7.49
7.55
8.48
11.23
10.89
10.81
11.83
11.12
10.48
10.34
10.06

第３図　椿貝塚地形図

第二章　貝層とその出土遺物

Ⅰ　貝層断面の精査

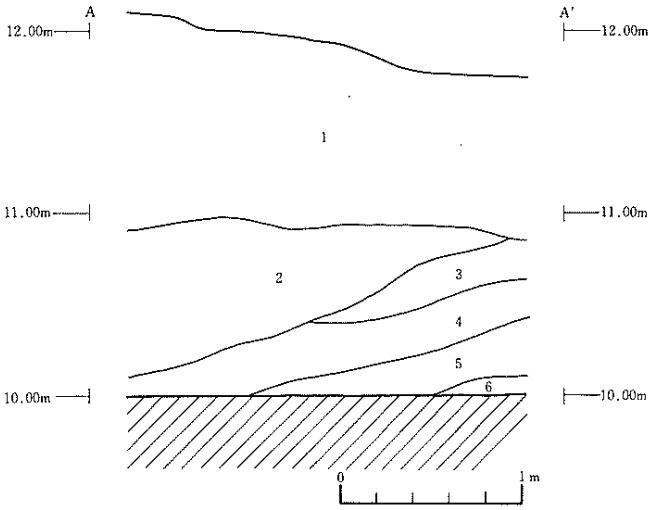
今回の精査範囲は、東西約 6mの部分で、(第 2 図)、貝層最下層と崖面上面との比高は約 4.5～5.0mである（第 3 図）。

崩落は崖の上半分で生じたもので、その土砂が下半分の裾に堆積していた。その結果、中間部には階段状に平坦部が形成されており、この平坦部をはさんで上下に深層が確認された。それぞれ上部貝層群、下部貝層群としたが、正確なつながりは把握できなかった。

しかしながら、上部貝層群と下部貝層群との関係については、(1)上部貝層群の下層に下部貝層群がある。(2)上部貝層群のうえに下部貝層群が覆っている。(3)下部貝層群は崩落により上部貝層群がスライドしたものである、などの可能性が考えられる。

① **上部貝層**（第4図）

上部貝層群は表土（第 1 層）下に約 2mの厚さで認められ、貝層と貝層下土層からなる貝層は 4 層（第 2～第 5 層）に大別され、さらに細分可能である。第 4 層はほぼ純貝層といえる層である。



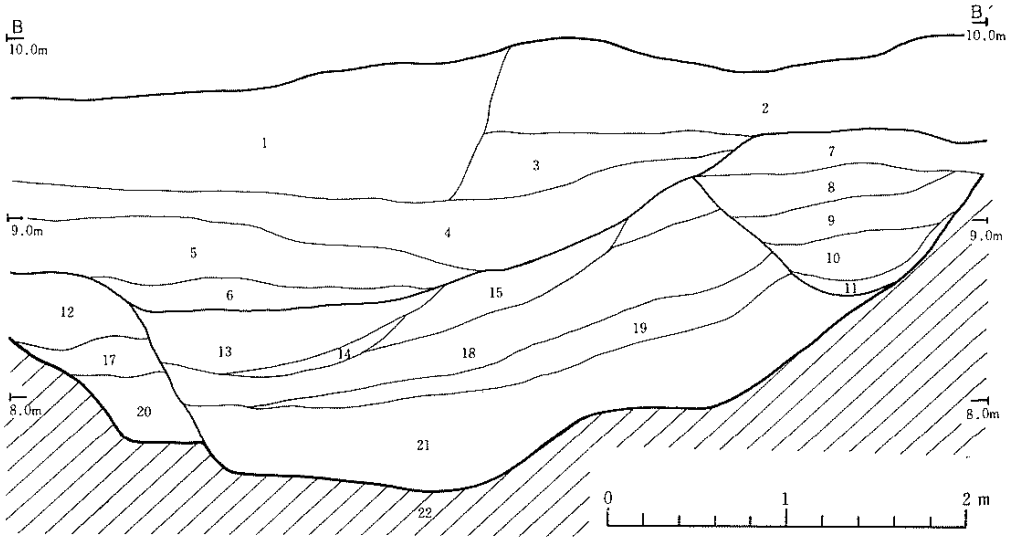
番号	層名	土色	土性	備考
1	土層	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	盛土＋表土
2	混土貝層	暗褐色(10YR3/3)	シルト	シジミが主体。ハマグリを若干含む。混貝率は低い。貝の入り方がバラバラである。しまりあり。
3	混土貝層	黒褐色(10YR3/2)	シルト	シジミが主体だがハマグリをブロックで含む。混貝率は高い。炭化物を多量に含む。
4	純貝層	黒褐色(10YR3/2)	シルト	シジミとハマグリが主体。焼土と灰のブロックを部分的に多量に含む。遺物が多い。
5	混土貝層	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	シジミが主体だがハマグリも含む。炭化物・灰・焼土を多量に含む。遺物が多い。
6	貝層下土層	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物を多量に含む。

第 4 図　上部貝層群断面図

② **下部貝層群**（第５図）

下部貝層群の精査範囲は東西約 3m、高さ約 2.6mである。貝層は次の 22 層に大別され、上部貝層群と同様にさらに細分が可能である。

第１層～第６層は崩落土、第７層～第 11 層が土壙状の穴に堆積した貝層、第 12 層～第 18 層は貝層、第 19 層～第 21 層は貝層下土層、第 22 層は地山漸移層である。なお、第 13、18、21 層は、それぞれ第 12、17、20 層が地滑り的にスライドしたものと思われる。



番号	層名	土色	土性	備考
1	土層	明黄褐色 (2.5YG/6)	シルト	盛土。しまりなし。粘性なし。
2	土層	黒褐色(10YR2/2)	シルト	しまりなし。粘性なし。
3	土層	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	しまりなし。粘性なし。
4	土層	黒色(7.5YR3/1)	シルト	しまりなし。粘性なし。
5	混土貝層	黒色(7.5YR3/1)	シルト	シジミ主体。貝（シジミ）と土器を多量に含む。
6	混土貝層	黒褐色(5YR2/1)	シルト	シジミ主体。炭化物・焼土・灰を多量に含む。
7	混土貝層	黒色(10YR2/2)	シルト	シジミ主体。混貝率が高い。
8	混土貝層	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	シジミ主体。粘性多少あり。
9	混土貝層	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	シジミ主体。混貝率が高い。
10	混土貝層	黒褐色(5YR3/1)	粘質シルト	シジミ主体。混貝率が高い。上面に焼土と灰が面をなす。炭化物を多量に含む。粘性強い。
11	土層	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物を多量に含む。
12	混土貝層	黒褐色(10YR2/2)	シルト	混貝率は低いがブロック状にシジミを多量に含む。炭化物と焼土を多量に含む。灰をブロック状に含む。
13	混土貝層	黒褐色(10YR2/2)	シルト	12層がスライドしたものと思われる。
14	混土貝層	黒色(7.5YR3/1)	シルト	炭化物と焼土を多量に含む。15層よりしまり、粘性がない。
15	土層	黒色(7.5YR3/1)	シルト	炭化物と焼土を多量に含む。遺物（土器）が多い。
16	混土貝層	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物と焼土を含む。しまりあり。粘性あり。
17	混土貝層	黒褐色(7.5YR3/1)	粘質シルト	混貝率が高い。炭化物を多量に含む。焼土、灰をブロック状に含む。しまりあり。粘性強い。
18	混土貝層	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	17層がスライドしたものと思われる。
19	土層	黒色(7.5YR3/1)	粘質シルト	炭化物と焼土を多量に含む。遺物を多く含む。しまりあり。粘性強い。
20	土層	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物と焼土を多量に含む。遺物を多い。しまりあり。粘性なし。
21	土層	黒褐色(10YR2/2)	シルト	20層がスライドしたものと思われる。
22	土層	暗褐色(7.5YR3/1)	シルト	地山漸移層。しまりあり。粘性なし。

第５図　下部貝層群断面図

Ⅱ　出土した遺物

①　土器

出土した土器は、上部貝層群、下部貝層群とも出土状況によって次の 3 通りに分けられる。まず、貝層断面清掃時に出土した土器**(上部貝層、下部貝層)**、各層ごとに行なった土壌サンプリングで選別された土器**(上部貝層第 2 層～5 層、下部貝層 7～19 層)**、そして崩落土から採取した土器**(上部貝層崩落土、下部貝層崩落土)**である。

《文様による土器の分類》

土器の文様は、次のＡ～Ｄに分類できる。また、各層ごとの文様の片寄りは認められなかった。

Ａ：区画沈線＋縄文（磨消縄文）　（第 6 図 2～8、第 7 図 1～5、第 8 図 1～8、第 9 図 2、3、9、12、16、18、19、第 10 図 4、6、11、15、17、第 11 図 1～8）

深鉢で器形が分かるものには、胴部が直線的に外傾する長胴形で、頚部はくびれ、口頚部は外傾し平口縁のもの(第 7 図 1)、胴部が筒形で口頚部が開いて外傾あるいは外反し、口縁部は 5 単位の大波状口縁のもの(第 8 図 1)、胴部下半は筒形で上半でふくらみ、口頚部は開いて外傾し 5 単位の大波状口縁のもの(第 7 図 2)がある。

鉢では、胴部が張り口頚部で内傾し平口縁のもの(第 10 図 15)がある。

Ｂ：区画沈線＋櫛歯状沈線　（第 6 図 1、第 9 図 1）

深鉢で器形が分かるものには、胴部が直線的に外傾する長胴形で、頚部はくびれ、口頚部は外傾し平口縁のもの（第 6 図 1）がある。

Ｃ：櫛歯状沈線文　（第 6 図 11、12）

Ｄ：地文（第 6 図 13～15、第 7 図 6～9、第 8 図 9～16、第 9 図 4～7、10、17、20、第 10 図 4、6、11～14、16、18～20）

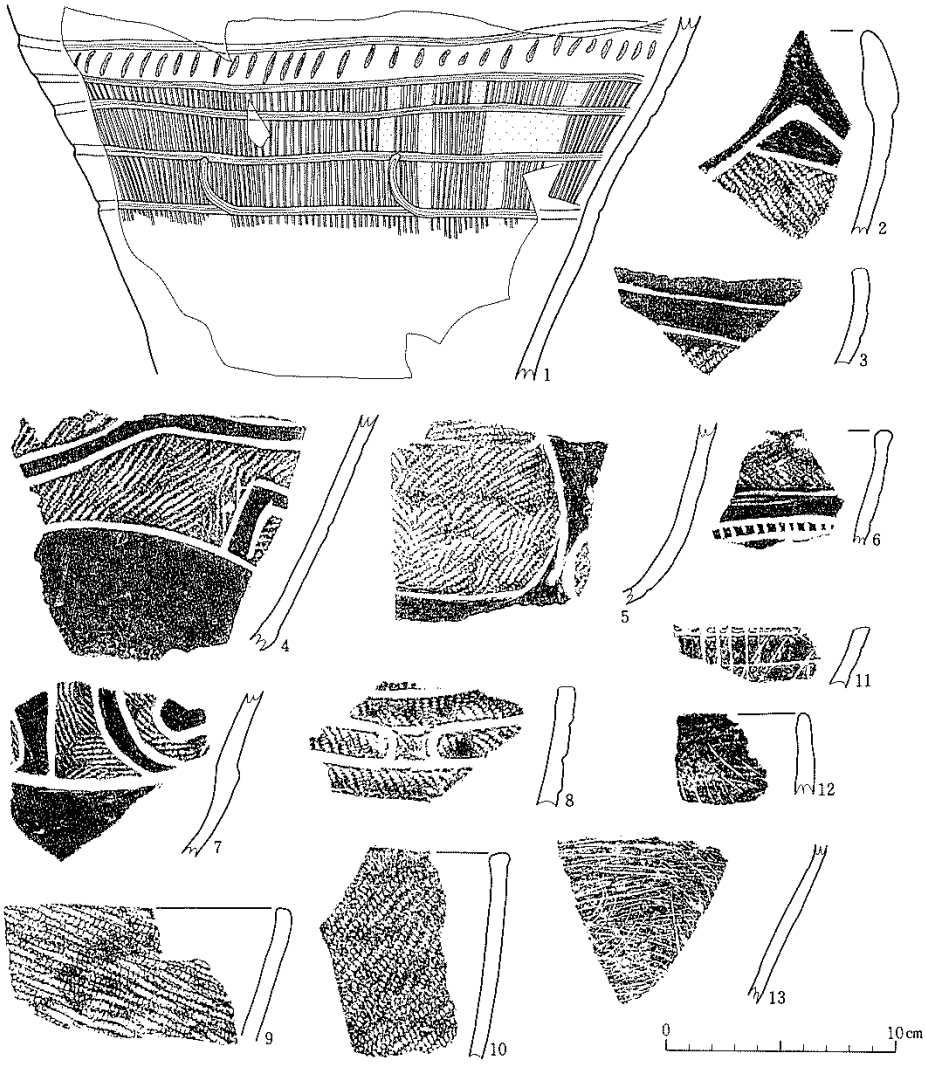
器形の分かるものは、胴部でくびれることなく口縁部まで立ち上がり平口縁のもの（第 9 図 20）がある。

②　土　偶（第 13 図 1～3）

土偶は 3 点出土しており、完形品はなくすべて破損品である。これらは他の遺物と一緒に貝塚の堆積層から出土したもので、特殊な状態で出土したものではない。

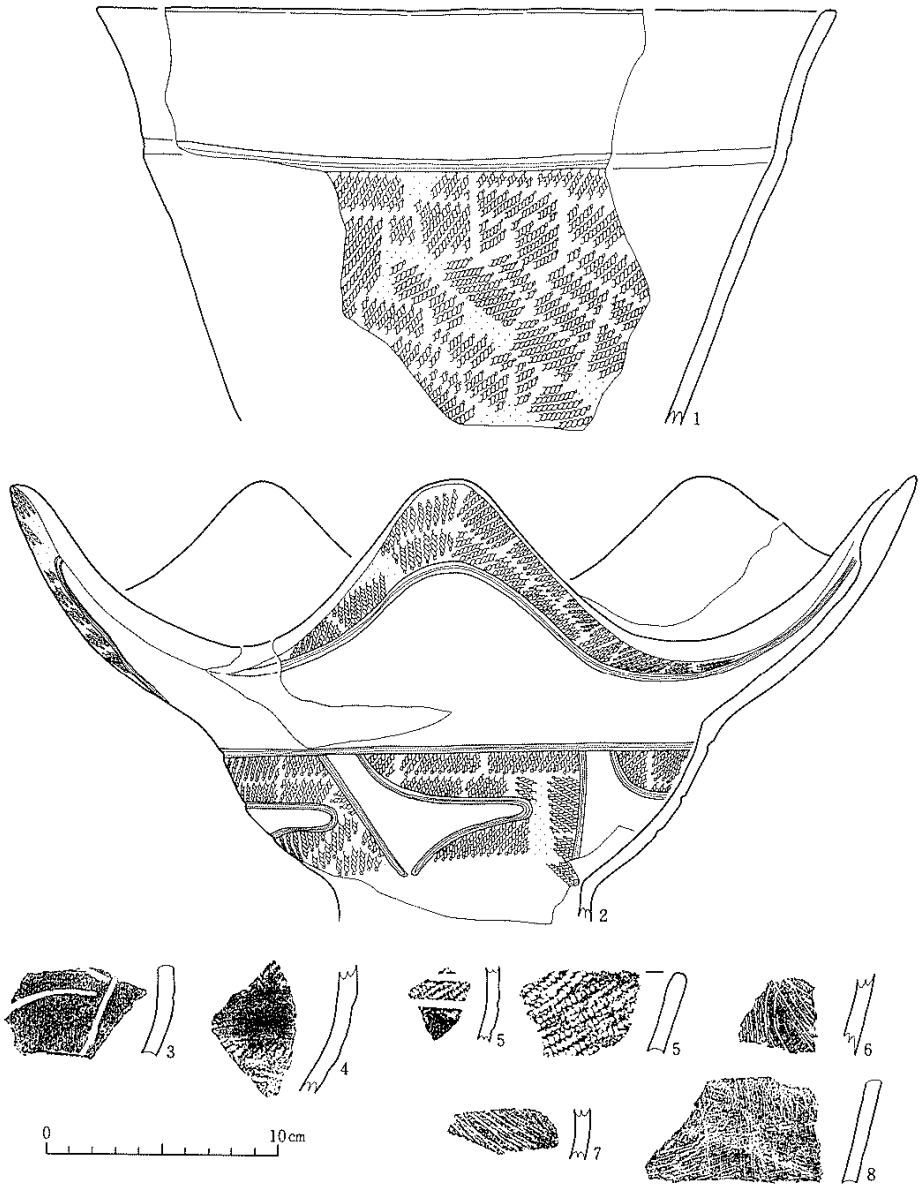
③　石製品（第 13 図 4、第 14 図）

今回出土した石製品は、不定形石器 1 点、磨石 2 点、磨石＋凹石 1 点、フレーク、チップ 20 点である。



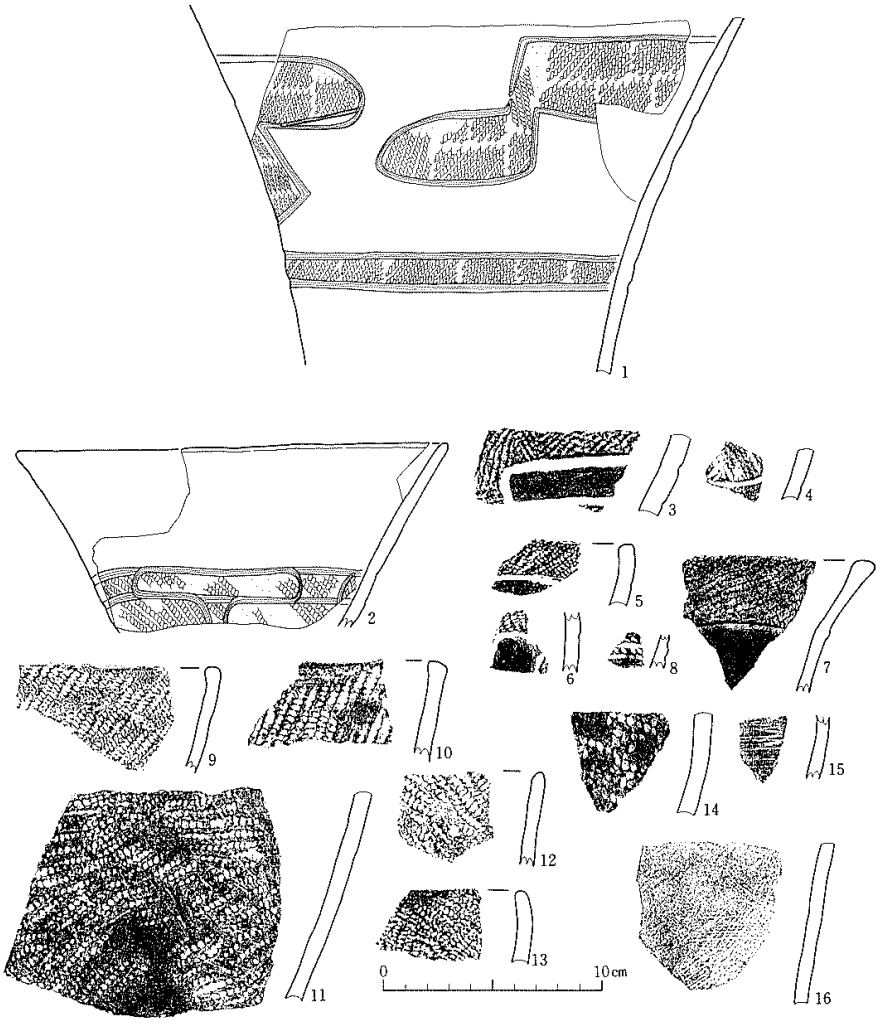
番号	層位	器形・分類	文様の特徴他	図版
1	上部貝層	深鉢 B	区画沈線、櫛歯状沈線充填、刻目充填	2－1
2	上部貝層	深鉢 A	縄文（RL）、区画沈線、磨消し。大波状口縁。	2－3
3	上部貝層	深鉢 A	縄文（LR）、区画沈線。	2－4
4	上部貝層	深鉢 A	縄文（LR）、区画沈線、磨消し。	2－5
5	上部貝層	深鉢 A	縄文（LR）、区画沈線、磨消し。	2－6
6	上部貝層	深鉢 A	縄文（RL）、区画沈線、磨消し。刻目充填。	2－8
7	上部貝層	深鉢 A	縄文（LR）、区画沈線、磨消し。	2－7
8	上部貝層	深鉢 A	縄文（RL）、区画沈線。	2－2
9	上部貝層	深鉢 D	地文（縄文（RL））。	2－10
10	上部貝層	深鉢 D	地文（縄文（LR））。	2－11
11	上部貝層	深鉢 D	地文（櫛歯状沈線）	2－13
12	上部貝層	深鉢 D	地文（櫛歯状沈線）	2－12
13	上部貝層	深鉢 D	地文（櫛歯状沈線）	2－14

第6図　上部貝層群出土土器（1）（上部貝層）



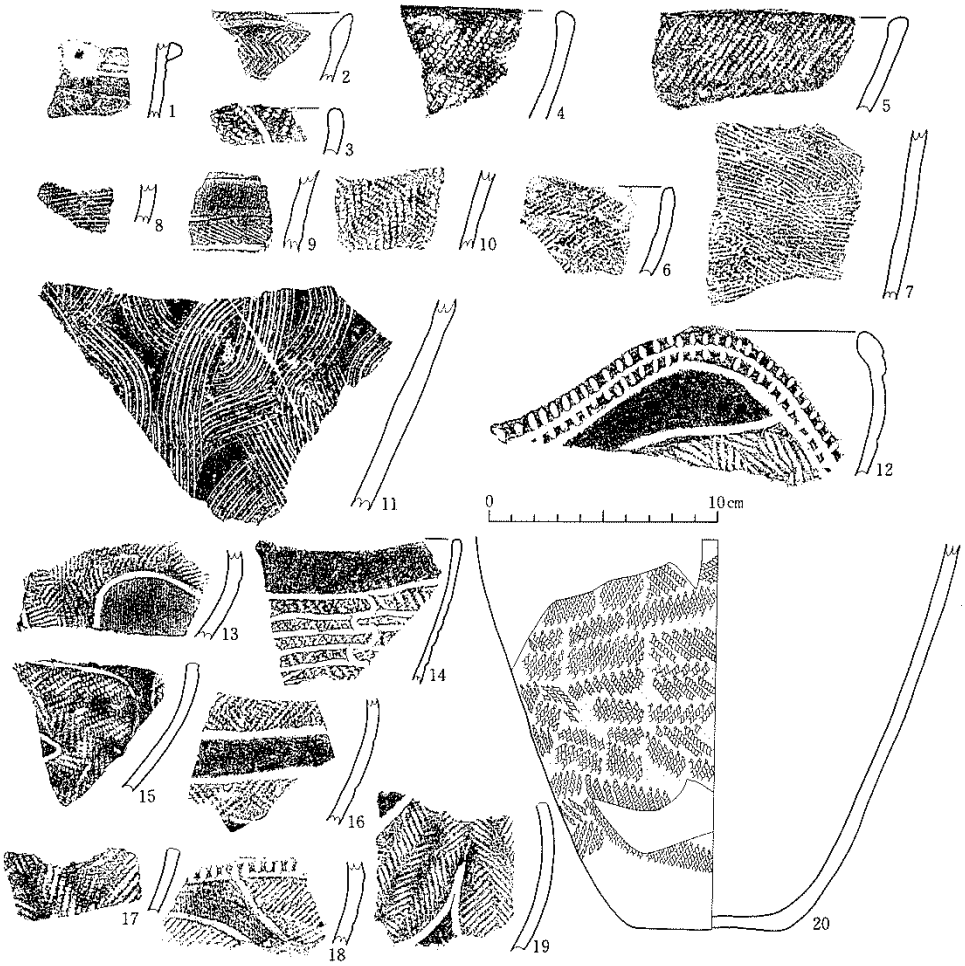
番号	層　位	器形・分類	文　様　の　特　徴　他	図　版
1	上部貝層	深　鉢　A	縄文（ＬＲ）。	２－９
2	上部貝層４層	深　鉢　A	縄文（ＬＲ）、区画沈線、磨消し、大波状口縁（５単位）。	３－１
3	上部貝層４層	深　鉢　A	区画沈線、磨消し。	３－２
4	上部貝層４層	深　鉢　A	縄文（ＬＲ）、区画沈線、磨消し。	３－３
5	上部貝層４層	深　鉢　A	縄文（ＬＲ）、区画沈線、磨消し。	３－４
6	上部貝層４層	深　鉢　D	地文（縄文（ＬＲ））。	３－５
7	上部貝層４層	深　鉢　D	地文（櫛歯状沈線）	３－６
8	上部貝層４層	深　鉢　D	地文（櫛歯状沈線）	３－７

第７図　上部貝層群出土土器（２）（上部貝層、４層）



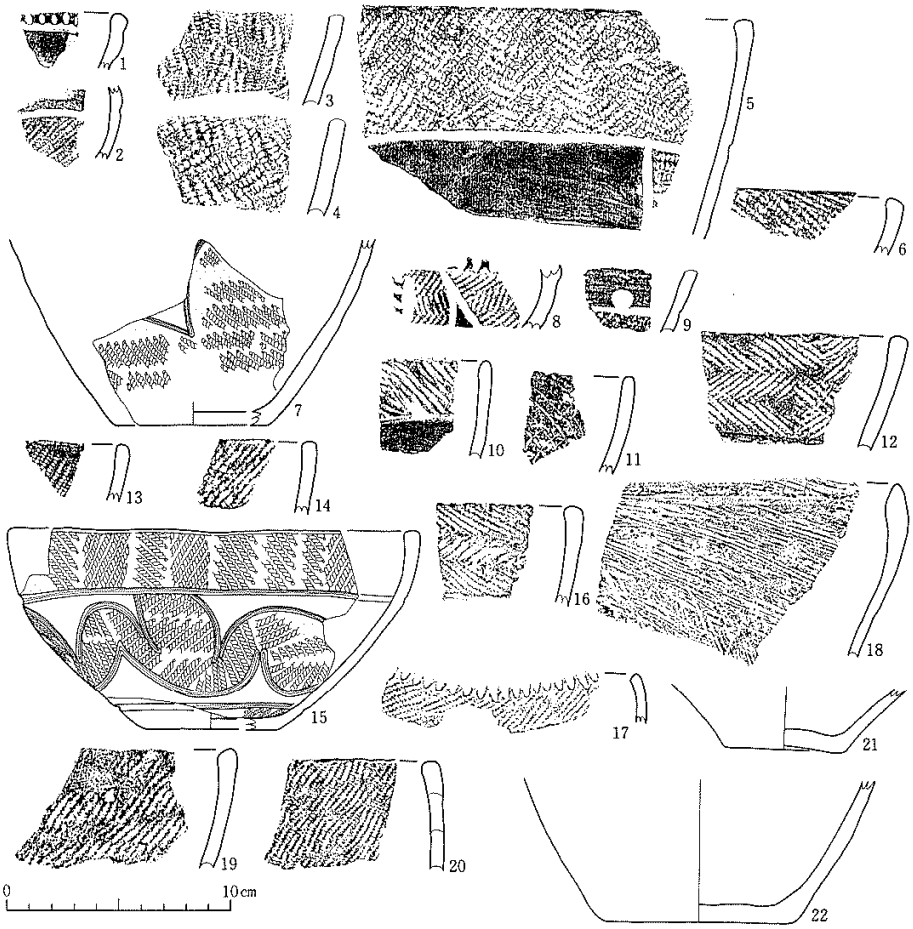
番号	層位	器形・分類	文様の特徴他	図版
1	上部貝層崩落土	深鉢 A	区画沈線、縄文充填。	3－8
2	上部貝層崩落土	深鉢 A	区画沈線、縄文（ＲＬ）。摩滅激しい。	3－9
3	上部貝層崩落土	深鉢 A	縄文（ＬＲ）、区画沈線、磨消し。	3－10
4	上部貝層崩落土	深鉢 A	縄文（ＲＬ）、区画沈線、磨消し。	3－16
5	上部貝層崩落土	深鉢 A	縄文（ＬＲ）、区画沈線、磨消し。	3－17
6	上部貝層崩落土	深鉢 A	縄文（ＲＬ）、区画沈線、磨消し。刻目充填。	3－11
7	上部貝層崩落土	深鉢 A	縄文（ＬＲ）、区画沈線、磨消し。	3－18
8	上部貝層崩落土	深鉢 A	区画沈線、磨消し、刻目充填。	3－19
9	上部貝層崩落土	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	3－12
10	上部貝層崩落土	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	3－7
11	上部貝層崩落土	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	
12	上部貝層崩落土	深鉢 D	地文（縄文（ＲＬ））。	
13	上部貝層崩落土	深鉢 D	地文（縄文（ＲＬ））。	3－13
14	上部貝層崩落土	深鉢 D	地文（縄文（ＲＬ））。	
15	上部貝層崩落土	深鉢 D	地文（櫛歯状沈線）	3－14
16	上部貝層崩落土	深鉢 D	地文（櫛歯状沈線）	3－15

第８図　上部貝層群出土土器（３）（崩落土）



番号	層位	器形・分類	文様の特徴他	図版
1	下部貝層	深鉢 B	区画沈線、櫛歯状沈線。瘤状小突起。	4－1
2	下部貝層	深鉢 A	羽状縄文、区画沈線。	4－2
3	下部貝層	深鉢 A	縄文（ＬＲ）、区画沈線。	4－3
4	下部貝層	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	4－4
5	下部貝層	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	4－5
6	下部貝層	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	4－6
7	下部貝層	深鉢 D	地文（櫛歯状沈線）	4－7
8	下部貝層７層	深鉢 C	櫛歯状沈線文。	4－8
9	下部貝層８層	深鉢 A	縄文（ＲＬ）、区画沈線、磨消し。	4－9
10	下部貝層９層	深鉢 D	地文（縄文（ＲＬ））。ふたつのＲＬ原体を使っている。	4－10
11	下部貝層10層	深鉢 C	櫛歯状沈線文。	4－11
12	下部貝層10層	深鉢 A	縄文（ＲＬ）、区画沈線、磨消し。刻目充填。	4－12
13	下部貝層11層	深鉢 A	縄文（ＬＲ）、区画沈線、磨消し。	4－13
14	下部貝層12層	深鉢 A	縄文（ＲＬ）、区画沈線。	4－14
15	下部貝層13層	深鉢 A	縄文（ＬＲ）、区画沈線、磨消し。	4－15
16	下部貝層13層	深鉢 A	羽状縄文、区画沈線、磨消し。	4－16
17	下部貝層14層	深鉢 D	地文（縄文（ＲＬ））。	4－17
18	下部貝層15層	深鉢 A	縄文（ＲＬ）、区画沈線、磨消し。刻目充填。	4－18
19	下部貝層15層	深鉢 A	羽状縄文、区画沈線、磨消し。	4－19
20	下部貝層15層	深鉢 D	地　文。	4－20

第９図　下部貝層群出土土器（１）（下部貝層、７～15層）

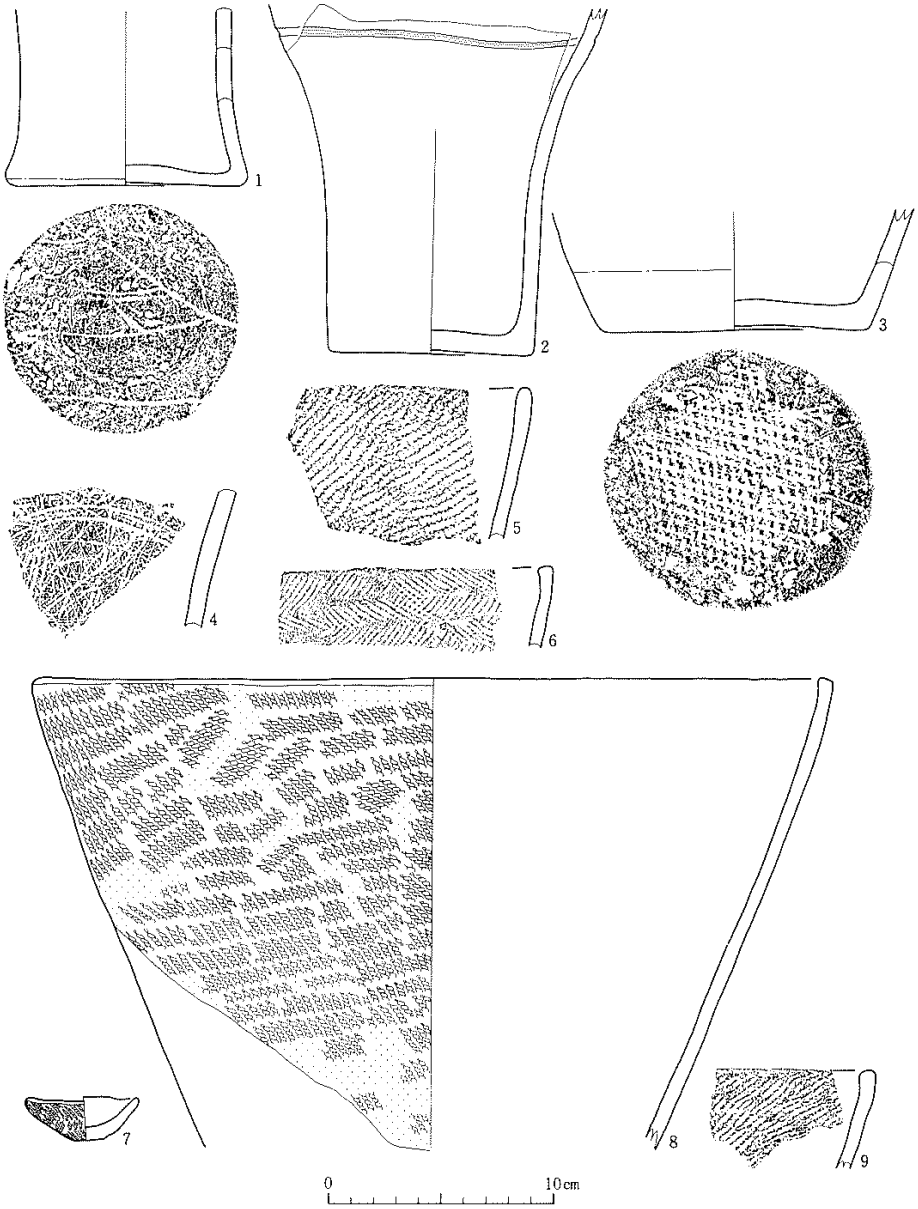


番号	層位	器形・分類	文様の特徴他	図版
1	下部貝層16層	深鉢 A	区画沈線、磨消し、刻目充塡。	
2	下部貝層16層	深鉢 A	区画沈線、縄文（ＬＲ）磨消し。	4 －21
3	下部貝層16層	深鉢 A	縄文（ＲＬ）、区画沈線、磨消し。	4 －22
4	下部貝層16層	深鉢 D	地文（羽状縄文）。	4 －23
5	下部貝層17層	深鉢 A	縄文（ＲＬ）、区画沈線、磨消し。羽状縄文状に施文。	4 －24
6	下部貝層17層	深鉢 D	地文（縄文（ＲＬ））。	5 － 1
7	下部貝層18層	深鉢 A	縄文（ＲＬ）、区画沈線、磨消し。	5 － 3
8	下部貝層18層	深鉢 A	縄文（ＬＲ）、区画沈線、磨消し。刻目充塡。	5 － 2
9	下部貝層18層	深鉢 A	縄文（ＬＲ）、区画沈線、磨消し。穴あり。	5 － 4
10	下部貝層18層	深鉢 A	縄文（ＲＬ）、区画沈線、磨消し。	
11	下部貝層18層	深鉢 C	櫛歯状沈線文。	5 － 6
12	下部貝層18層	深鉢 D	地文（羽状縄文）。	5 － 7
13	下部貝層18層	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	5 － 8
14	下部貝層18層	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	5 － 9
15	下部貝層崩落土	鉢 A	区画沈線、縄文（ＬＲ）充塡。	6 － 7
16	下部貝層崩落土	深鉢 D	地文（羽状縄文）。	6 － 8
17	下部貝層崩落土	深鉢 D	縄文（ＲＬ）、刻目充塡。	6 － 9
18	下部貝層崩落土	深鉢 D	地文（櫛歯状沈線）。	6 －13
19	下部貝層崩落土	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	6 －10
20	下部貝層崩落土	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	6 －12
21	下部貝層崩落土	深鉢	無文	6 －14
22	下部貝層崩落土	深鉢	無文	6 －15

第10図　下部貝層群出土土器（２）（16～18層、崩落土）

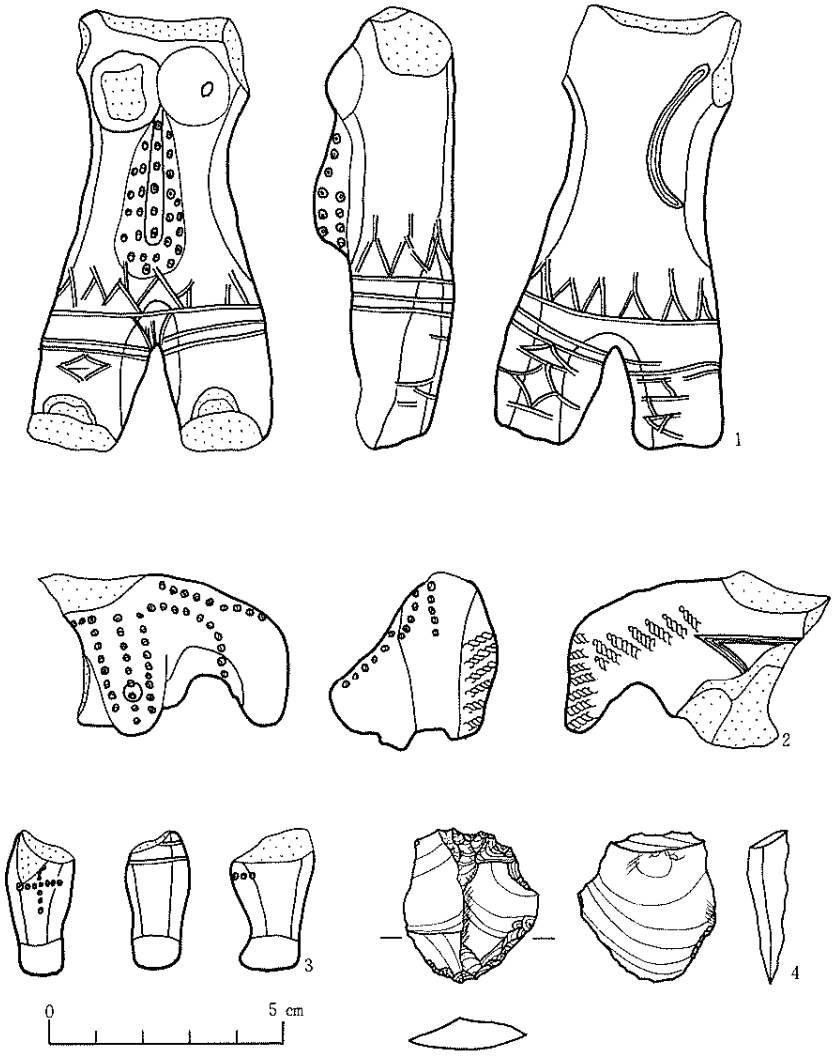
番号	層位	器形・分類	文様の特徴他	図版
1	下部貝層19層	深鉢 A	区画沈線、磨消し。大波状口縁。	5－10
2	下部貝層19層	深鉢 A	縄文（LR）、区画沈線、磨消し。	5－11
3	下部貝層19層	深鉢 A	縄文（LR）、区画沈線、磨消し。	5－12
4	下部貝層19層	深鉢 A	縄文（RL）、区画沈線（不明瞭）、磨消し。	5－13
5	下部貝層19層	深鉢 A	縄文（LR）、区画沈線、磨消し。	5－14
6	下部貝層19層	深鉢 A	羽状縄文、区画沈線、磨消し。	
7	下部貝層19層	深鉢 A	縄文（LR）、区画沈線、磨消し。	5－15
8	下部貝層19層	深鉢 A	縄文（RLとLR）、区画沈線。	5－16

第11図　下部貝層群出土土器（3）（19層）



番号	層位	器形・分類	文様の特徴他	図版
1	下部貝層19層	深鉢 A	無文。木葉痕あり。	5－18
2	下部貝層19層	深鉢 A	区画沈線、縄文は摩滅激しく不明。	5－19
3	下部貝層19層	深鉢 D	無文。網代圧痕あり。	5－17
4	下部貝層19層	深鉢 D	地文（櫛歯状沈線）。	6－1
5	下部貝層19層	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	6－2
6	下部貝層19層	深鉢 D	地文（羽状縄文）。	6－3
7	下部貝層19層	ミニチュア土器 D	地文（縄文（ＬＲ））。	6－5
8	下部貝層19層	深鉢 D	地文（縄文（ＬＲ））。	6－6
9	下部貝層19層	深鉢 D	地文（縄文（ＲＬ））。	6－4

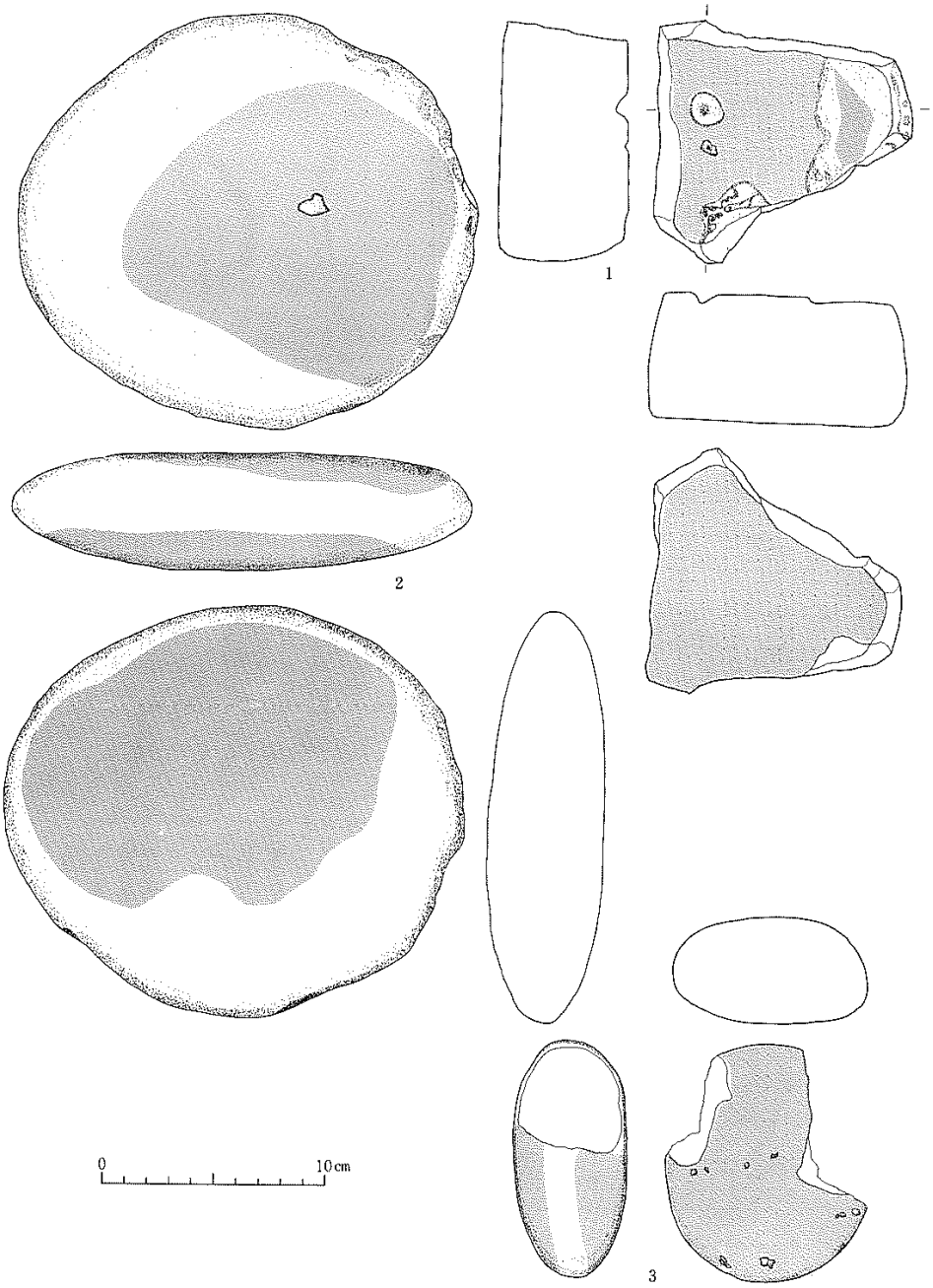
第12図　下部貝層群出土土器（４）（19層）



番号	出土層位	残存部位	備考	図版
1	上部貝層	肩～脚部	隆帯による正中線が下腹部まで延び刺突が施されている。腰に鋸歯文、脚に平行沈線文・弧状沈線文、背中右側に弧状沈線文。右乳房欠損。	7－4
2	下部貝層19層	左肩～腕、左胸	左肩～腕・左胸に刺突文、左胸裏に縄文（RL）、背中に沈線文。背中の縄文は摩滅が激しい。左乳房あり。	7－5
3	下部貝層11層	右脚？	弁慶の泣き所に十字の刺突文、ふくらはぎに平行沈線文。	7－6

番号	出土層位	分類	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	石材	備考	図版
4	下部貝層15層	不定形石器	32	28	6	珪質頁岩	スクレイパー	7－7

第13図　土偶・石器



番号	出土層位	分類	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	石材	備考	図版
1	下部貝層	磨石＋凹石	115	106	56	石英安山岩	火を受けている	7－1
2	下部貝層12層	磨石	206	185	52	石英安山岩		7－2
3	下部貝層19層	磨石	106	86	46	安山岩		7－3

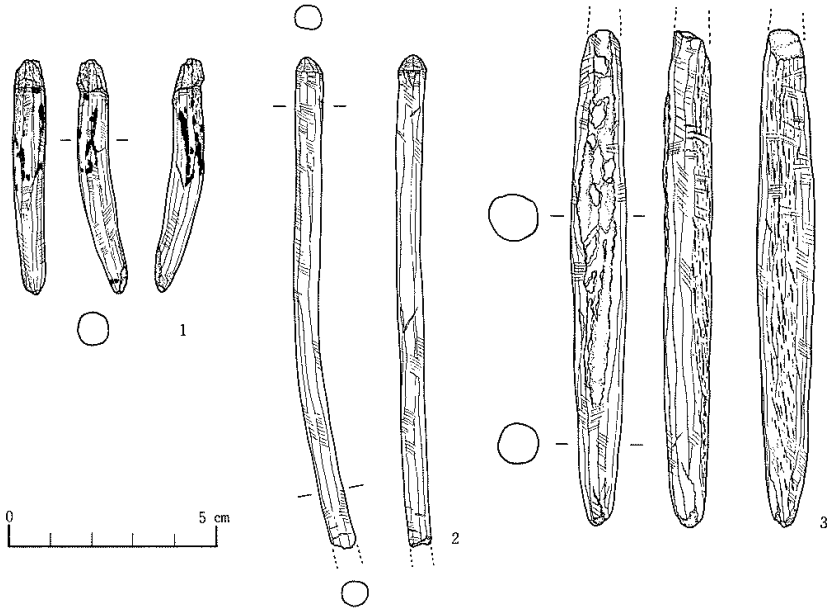
第14図　石製品

④　**骨角製品**

骨角製品にはヤス、棒状角製品がある。

1（上部貝層 - 層位不明）は挟み込み式ヤスの鐵先である。鹿角を素材として、いわゆる「ノ」の字に整形している。先端部は若干破損しているが、丸みを持つ頭部を有するタイプのものとみられる。軸部との結合部分は横断面が円形を呈し、アスファルトの付着が顕著に認められる。残存長 5.6cm、幅 1.2 cm、厚さ 0.8cm である。なお、この種の挟み込み式ヤスは、鐵先の装着された軸部を 2 本対にして柄先に組み合わせて固定し、2 本の軸部で獲物を挟み込んで捕獲するものと考えられている（新庄屋・阿部：1986）。類例としては、陸中海岸から仙台湾沿岸にかけての地域で多くみられ、後期後葉から晩期初頭にかけての時期に普及したものと考えられており（金子・忍沢：1986）、本貝塚出土の例はこの種のタイプのヤスとしては最も古い時期のものと思われる。

2・3 はいずれも用途不明のもので、一般的には棒状角製品と呼ばれるものである。2（下部貝層 19 層）は鹿角を細長い棒状に仕上げたもので、かなり湾曲している。一端は欠損しており不明だが、一方は丸みを持つ端部を有する。残存長 11.8cm、幅 0.6cm、厚さ 0.6cm である。3（上部貝層 - 4 層）は鹿角を板状に割ったものを棒状に仕上げたもので、一面には自然面が残っている。一部欠損しているが、先端部が丸みを持つタイプのものとみられる。先端部近くには器体と直交する方向に、機能時に付いたとみられる荒いキズが認められる。残存長 11.9cm、幅 1.4cm、厚さ 1.2cm である。



第15図　骨格製品

⑤ 動物遺存体

今回検出した動物遺存体は、断面精査および崩落土中から採集した大型資料（発掘時採集資料）と貝層のブロックサンプルを水洗して得た資料からなる。ブロックサンプル資料は各層から土のう袋で 1 袋を基準として悉皆的に採取したものを、10mm・4mm・2mm・1mm の 4 種類のフルイを用いて水洗選別し、抽出したものである。ただし、ブロックサンプルについては時間的な制約もあり、採取した 19 袋の中で同定・分析まで完了したのは上部貝層が 2 袋、下部貝層が 1 袋の計 3 袋のみである。また、今回認識された層は断面のみの観察によるものであることから、貝層全体の中でどのような意味を持つものなのか、あるいは採取されたサンプルが貝層全体を反映したものなのか、明らかではなく、今回の分析結果はこの地点貝塚における動物遺存体の分析としては部分的なものである。

a　同定結果

今回同定した動物遺存体は、第 1 表に示す腹足綱 5 種類、二枚貝綱 3 種類、甲殻綱 1 種類、軟骨魚綱 1 種類、硬骨魚綱 14 種類、両生綱 1 種類、爬虫綱 1 種類、鳥綱 2 種類、哺乳綱 5 種類である。

第 1 表　椿貝塚出土動物遺存体種名一覧

I 軟体動物	III 脊椎動物	
①腹足綱	①軟骨魚綱	トラフグ
ウミニナ	エイ目	マフグ科
キセルガイ科	②硬骨魚綱	③両生綱
ホソオカチョウジガイ	マイワシ	カエル類
ヒメベッコウマイマイ	フナ属	④爬虫綱
ヒメコハクガイ	ギギ科	ヘビ類
②二枚貝綱	ウグイ属	⑤鳥綱
ヤマトシジミ	ウナギ	※カモ類
ハマグリ	サケ科	※キジ
※ ウバガイ	ボラ	⑥哺乳綱
	スズキ	ネズミ科
II 節足動物	クロダイ	アナグマ
甲殻綱	ハゼ科	※イヌ科
カニ類	ヒラメ	イノシシ
	カレイ科？	ニホンジカ

※印は、発掘時採集資料のみの出土を示す。

b　貝類

貝類は8種類出土した。このうち採取の対象となったのは陸産貝類4種を除く、汽水性のもの（ヤマトシジミ）1種、鹹水性のもの（ウミニナ・ハマグリ・ウバガイ）3種である。量的にはヤマトシジミが圧倒的に多く、各層とも90%以上を占めており、下部貝層-18層ではヤマトシジミ1種のみからなる。これに次いで多いのがハマグリで、ブロックサンプル中（上部貝層-3・4層）の組成比はさほど高くないものの、上部貝層（2～6層）では各層とも比較的多く出土している。

次に採取の対象となった貝の大きさについて上部貝層-4層を例にみてみると、ヤマトシジミは殻高8～34㎜の幅広い範囲で、ほぼ平均値の16～24㎜に全体の65%以上が集中する正規分布を示している(第16図)。この中で大小の両極ほど頻度が低いのは、それぞれ大型貝が資源の自然状況、小型貝が採取側の人為的な選択を反映したものといえよう。しかし、それでもなお大型貝と小型貝が幅をもって混在している状況については、採取方法、すなわちヤマトシジミが幅広い範囲におよぶ大きさの個体を一網打尽にするような方法で採取されたことによるものと推測される。一方、ハマグリについては殻高30㎜以上の大型貝が全体の 90%以上を占めていることやハマグリと同じ生息環境下にある他種（アサリ、オオノガイ、シオフキ etc.）を含まないことなどからみて、集落から離れた鹹水域で選択的に大きい個体が採取されたものと推測される。なお、こうした状況は他のサンプルにおいても概ね同様の傾向にある(註1)。

註1　今回分析した貝層サンプルのうち、上部貝層（3・4層）については、いずれも計測可能な個体が多い（＝貝の完形率が高い）ことや左右の数が近似し、その度数分布も左右同様の傾向にあることなど、採取したサンプルが層としての一括性をもったものであることを示唆している。このことからこれらの層については比較的短期間に形成され、その後の撹乱を受けていないものと推測される。これに対して下部貝層（18層）は、殻高の度数分布という点においては概ね同様の傾向にあるが、混貝率および貝の完形率がともに低く、左右の数や度数分布にも偏りがみられるなど、層としての一括性に乏しく、層の成因が二次堆積（二次廃棄・地滑り etc）によるものであった可能性もある。

c　魚類

魚類は15種類同定された。量的にはフナ属が多く、各層とも最小個体数(ＭＩＩＥ)が5～6 であるが、他の魚種については検出部位・ＭＩＩＥとも少なく量的な評価を与えることはできない。そこで、これらの魚類を生態別に分類してみると、今回検出された魚類は、

Ⅰ群　純淡水魚…フナ属・ギギ科

Ⅱ群　季節によって淡水域と海を往復する魚…ウグイ属、ウナギ、サケ科

Ⅲ群　季節や成長段階において汽水域に侵入する海水魚
…マイワシ、ホラ、スズキ、クロダイ、ハゼ科、
Ⅳ群　純海水魚…エイ目、ヒラメ、カレイ科、トラフグ、マフグ科
の 4 群に分けることできる。すなわち、貝塚に運び込まれた魚は淡水域、汽水域、鹹水域といった異なる環境下で漁獲されたものが含まれる。

次にこれらの魚類の体長および漁獲時期についてみてみると、フナ属は現生標本と比較して体長 14cm 以下のものがほとんどであり、とくに 10cm に満たないものが多い。これをギンブナの成長速度(宮地ほか:1976)にあてはめてみると、産卵期が 3〜6 月で、1 年で 8〜10cm に成長することから、今回検出したフナ属がギンブナに由来するものとすれば、秋〜春に漁獲された可能性が高い。一方、ボラとスズキについてはいずれも 20cm に満たない小さい個体のみからなり、漁獲時期はマイワシの回遊と同じ初夏〜秋頃と思われる。Ⅳ群魚類については、春〜夏の時期に内湾の沿岸域に出現するものが多く、その頃が漁期と推定される。

これらの漁獲方法については、主体をなす魚類の大きさからみて、魞などを利用した囲い込み漁や網を使った漁(註 2)も盛んに行われていたものと思われる。なお、今回挟み込み式のヤスが 1 点出土したが、このヤスの対象魚として考えられる大型魚は今回出土した中ではサケ科のみである。この種の道具が必ずしも特定の魚種のみに使われた画一的な道具とは言えないが、田尻町中沢目貝塚（須藤ほか：1984）や岩手県花泉町貝鳥貝塚（金子・草間：1971）といった内陸性貝塚でも共伴して出土しており、サケ漁に使われたものである可能性が高い。

註 2　今回は出土しなかったが、これまでの調査(志間：1976)では有溝土錘が比較的多く出土している。

d　小結

以上のことから、椿貝塚を形成した人々の漁撈活動は、①集落周辺の沼や川におけるⅠ・Ⅱ群魚類の漁獲、②海水が混じるような川や河口域でのヤマトシジミの採取とⅡ・Ⅲ群魚類の漁獲、③内湾砂底の鹹水域でのハマグリの採取とⅢ・Ⅳ群魚類の漁獲といった異なる環境下での諸活動を組み合わせることによって成り立っていたものと推測される。これらの季節性については、上記のごとく魚類の体長組成や生態的な特徴からみて、大まかに①が秋〜春を中心とした季節、②と③が春〜秋を中心とした季節が想定される。

また、秋〜春の季節には集落周辺で、シカ・イノシシ猟を中心とした狩猟活動も行われていたものと思われる。

なお、淡水産魚類の同定にあたっては、奈良国立文化財研究所の松井章氏と東北大学大学院富岡直人氏に御教示頂いた。

		上部貝層3層 L R	MNIE	上部貝層4層 L R	MNIE	下部貝層18層 L R	MNIE
エイ目	脊椎骨	1	1	6	1	1	1
マイワシ	腹椎					1	1
フナ属	主上顎骨			1 0		1 0	
	歯骨	1 1				4 0	
	角骨	0 1				0 3	
	方骨			3 2		1 2	
	舌顎骨	1 3		0 2		1 0	
	前鰓蓋骨	2 2		2 0			
	主鰓蓋骨	2 4		4 4		0 1	
	間鰓蓋骨	0 1					
	下鰓蓋骨	2 3	6		4	1 0	5
	擬鎖骨	0 1					
	咽頭骨	3 4		3 (1)1		5 5	
	胸鰭棘	11		1		7	
	第1脊椎骨	1		1		1	
	第2脊椎骨	2				1	
	腹椎	23		19		34	
	尾椎	38		64		70	
	尾部棒状骨	1				1	
ウグイ属	咽頭骨		1	1 0	1	0 1	1
	尾椎	1				1	
ギギ科		1	1			1	1
ウナギ	前上顎骨	1 0				0 1	
	歯骨	1 0					
	角骨	1 2	2	0 1	1		1
	腹椎	4		2		6	
	尾椎	18		12		13	
サケ科	脊椎骨	破片3	1	破片4	1	破片2	1
ボラ	肩甲骨	1 0					
	腹椎		1			2	1
	尾椎	2					
スズキ	後側頭骨			1 0			
	上擬鎖骨		1	1 0	1		
	尾椎	1		1			
クロダイ	歯骨	0 1	1				
ハゼ科	尾椎					3	1
ヒラメ	尾椎	1	1				
カレイ科?	尾椎	1	1	2	1		
トラフグ	角上舌骨		1	1 1	1		
	脊椎骨	4		1			
マフグ科	歯骨			1 0	1		
種不明魚類	基後頭骨					1	
	主上顎骨			1 0			
	角骨			1 0			
	方骨					0 1	
	上舌骨					0 1	
	口蓋骨					1 0	
	涙骨	(1)					
	脊椎骨	4					
合	計	18		12		13	
その他の動物遺存体		ヘビ類脊椎 5		ヘビ類脊椎 3 カエル類脊椎 1 ネズミ類上腕L1		ネズミ類大腿L1 カニ類鉗脚 1	

＊各層のサンプル量は上部貝層-3層が14,500cc、上部貝層-4層が21,000cc、下部貝層-18層が18,000ccである。
＊（　）は、左右不明のものを示す。胸鰭棘については複数検出された場合、その1/2をもって個体数の基準とした。

第2表　ブロックサンプルにおける魚種組成

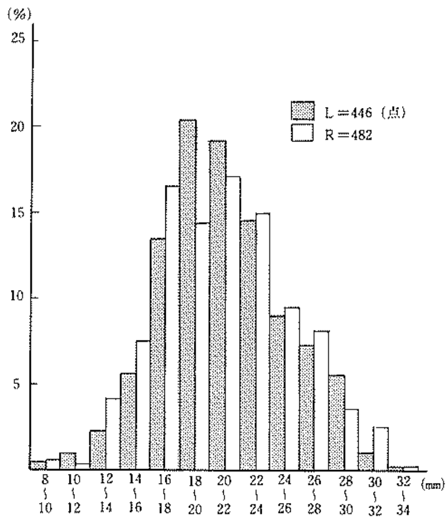
上部貝層-2層	イノシシ　＊下顎骨(R)1.
上部貝層-4・5層	イノシシ　上腕骨(R)1. カレイ科？　上舌骨(R)1.
上部貝層-5層	イノシシ　橈骨(L)1.
上部貝層～不明	ニホンジカ　肩甲骨(R)1. イノシシ　I 2(L)1.
上部貝層－崩落土	イノシシ　下顎骨(R)1. 橈骨(L)1.
Ⅱ-18層	ニホンジカ　鹿角2. M3(L)1. 頸椎(C6)1. ＊中手or中足骨(RL不明)1. イノシシ　下顎骨(I 1～P4・RL)1. 下顎骨(R)1. ＊大腿骨(L)1. ＊基節骨(指趾不明・L)1. イヌ科　上顎骨(M1～M3・R)1. アナグマ　＊下顎骨(R)1. ＊脛骨(L)1.
下部貝層-18・19層	ニホンジカ　鹿角2. 軸椎(C2)1. 腰椎(L6)1. 橈骨(R)1. 大腿骨(L)1.　基節骨(趾・RL不明)1. イノシシ　下顎骨（I 1～P 1・RL)1.　肋骨(R)1. 肩甲骨(L)1. 橈骨(L)1 大腿骨(L)1. カモ類　上腕骨(R)1. キジ　脛骨(L)1.
下部貝層－19層	トラフグ　歯骨(R)1. 種不明魚類　上擬鎖骨(R)1.
下部貝層～崩落土	ニホンジカ　鹿角（落角)1. 肩甲骨(R)1. 大腿骨(L)1. イノシシ　下顎骨（M3・R)1. 上腕骨(L)1. 橈骨(L)1. 尺骨(R)1(L)1. 第3中手骨(R)1. 大腿骨(L)1. カモ類？　中手骨(R)1. タイ科　腹椎1.

＊印は、ブロックサンプル出土資料を示す。

第3表　断面精査および崩落土中採集の動物遺存体

	上部貝層－3層 L R	%	上部貝層－4層 L R	%	下部貝層－18層 L R	%
ウミニナ	1	0.2				
ヤマトシジミ	380 389	92.6	525 532	98.0	78 98	100.0
ハマグリ	23 30	7.1	11 9	2.0		
合計	420	99.9	543	100.0	98	100.0
キセルガイ科	10					
ホソオカチョウジガイ	3					
ヒメベッコウマイマイ	5					
ヒメコハクガイ	1					
合計	19					

第4表　ブロックサンプルにおける貝種組成



第16図　上部貝層4層ヤマトシジミ殻高度数分布

第三章　考　察

Ⅰ　出土遺物について

今回の調査で出土、採集した遺物は、種類、量ともに少ない。土器類は小片が多く、器形、文様が判明するものについては図示してある。

器種は大半が深鉢で、他に少量の鉢、ミニチュア土器がある。深鉢、鉢に施される文様は、区画沈線と縄文（磨消縄文）を主文様とする一群、区画沈線、櫛歯状沈線などの沈線文を主文様とする一群とに大別できる。

これらは、気仙沼市田柄貝塚土器分類の第Ⅲ群、第Ⅳ群土器（阿部・手塚：1986）、亘理町畑中貝塚第5層出土土器（笠原：1986）に類例が見られ、縄文時代後期中葉から後葉の宝ヶ峯式に位置付けられる。

また、石器、土偶についても、土器と共伴関係からみて同時期に位置付けられる。

Ⅱ　貝層について

前章で述べたように、貝層は崖面中央部に形成された平坦部を境に、上部貝層群と下部貝層群に分けられ、それぞれ6層、22層に大別される。これらの中には、堆積後、二次的に移動していると思われるものも含まれているが、宝ヶ峯式期に形成されたものと考えられるものである。

各層は全体的に東から西に向かって傾斜しており、東側の丘陵上から南西方向に延びる丘陵斜面に貝殻を投棄することによって形成されたものと思われる。

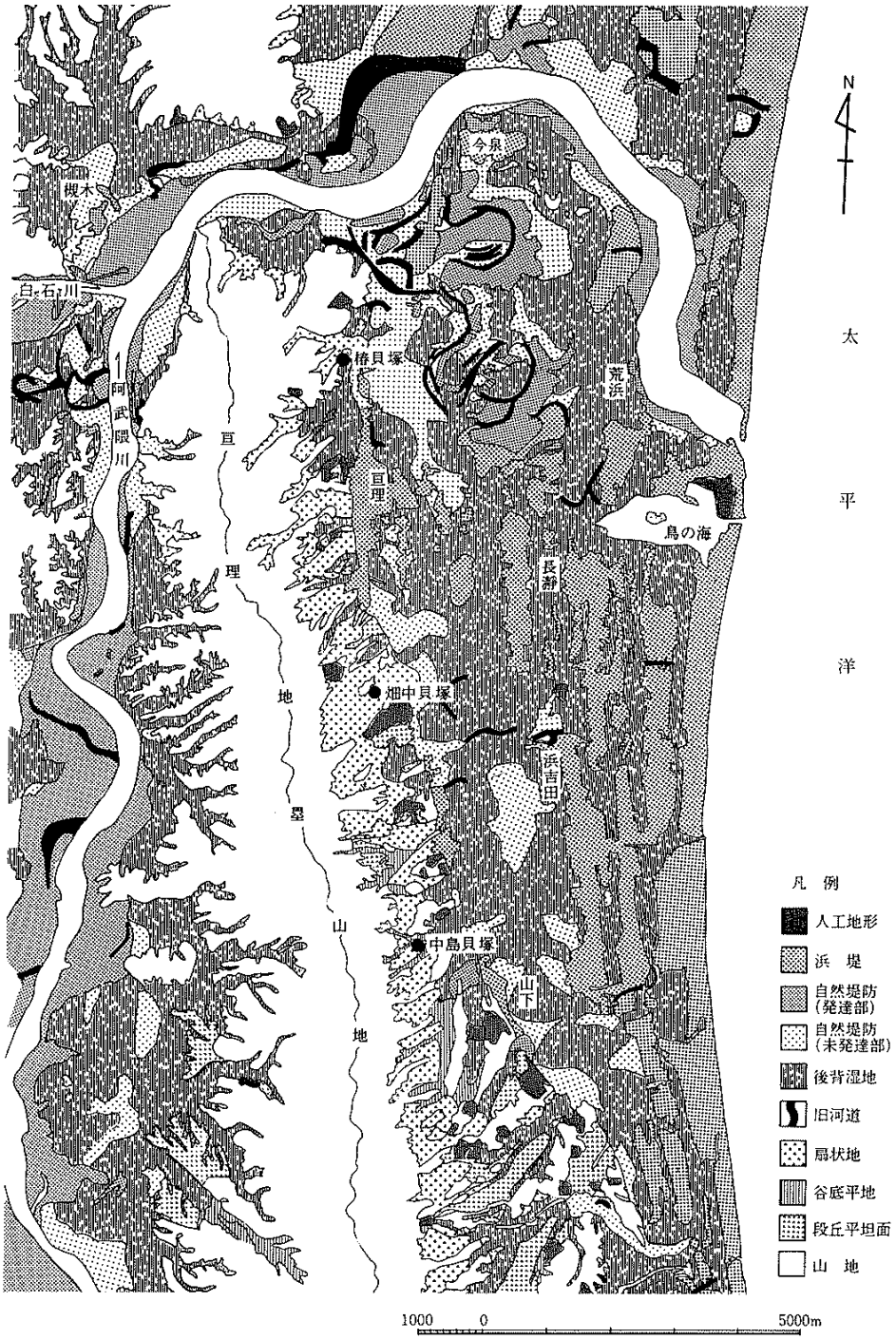
貝層は、上部貝層群、下部貝層群とも汽水性のヤマトシジミを主体としているが、上部貝層2～4層には、鹹水性のハマグリを含まれている。

Ⅲ　古環境

椿貝塚東方の沖積平野には、数列の浜堤が発達しているが(第17図)、その形成年代をもとにこの地域の古環境が復元されている。(松本：1981・1986、笠原：1987)。

最も内陸の浜堤列は、多賀城－下飯田－岩沼－亘理と連なるもので、地表下約 3m（現海水準から＋0.9m）における海浜砂層中のヤマトシジミの貝殻から 4470±120 年Ｂ．Ｐ．の年代が得られている。このことから、この浜堤列付近が、約4500年前のおおよその海岸線の位置と考えられる。中間の浜堤列は、新浜－仙台空港－長瀞と連なり、約2600～1700年前に形成され、同様に約2600～1700年前の海岸線の位置と考えられる。現在の海崖線に沿う浜堤列群は最も新しいものである。また、河武隈川河口付近には、旧河道が顕著に認められる。

約4500年前、椿貝塚のすぐ東側の浜堤付近が海岸線であった。そして、約2600～1700年



第17図　遺跡周辺の微地形分類図（宮城県：1985を加筆修正）

前に形成された長瀞付近の浜堤まで海退する約 3000 年間、亘理－今泉－荒浜－長瀞－山下－亘理を結ぶ地域（東西約 3km、南北約 17km）には旧河道の沖積作用も加わり、ラグーン（潟湖）が形成されていた。このラグーンに流入する河川の河口付近は汽水域となり、ヤマトシジミが生息する環境になった。

Ⅳ　貝塚が形成された環境

前項で述べたように、この地域の縄文時代の概括的な古環境は明かになっている。そこで、その成果と今回の調査結果に基づき本貝塚を取りまく地形環境を推測してみる。

貝の主体が汽水性のヤマトシジミであること、淡水域のフナの骨が含まれていることから貝塚の東方にはラグーンが広がっていた。また、イノシシ、ニホンジカの骨が少量出土していることから、背後には、山地、丘陵が迫っていた。さらに、上部貝層群にのみ鹹水性のハマグリ、カレイ、ヒラメ、フグの骨が若干含まれていることから、多少距離をおいて鹹水域が存在していたことが想定できる。

第四章　まとめ

1　椿貝塚は、亘理郡亘理町逢隈上郡字椿に所在し、阿武隈山地から北東に延びる雁田丘陵の先端部（標高 12m）を取り囲むように 5 ヶ所に点在している。

2　出土した土器は文様、器形の特徴から縄文時代後期中葉～後葉、宝ヶ峯式に位置付けられる。石器、土偶も同時期に位置付けられる。

3　貝層は全体的に東から西に傾斜し、上部貝層群 6 層と下部貝層群 22 層に大別され、さらに細分が可能である。これらには、二次堆積したものも含まれる。

4　貝層の主体は汽水性のヤマトシジミであるが、上部貝層群にのみ鹹水性のハマグリやカレイ科、フグ科の魚骨が若干含まれている。また、両貝層群にニホンジカ、イノシシの獣骨が含まれている。

5　貝塚を形成した人々は、東方に広がるラグーンとそこに注ぐ河川周辺の淡水域、汽水域を主な生活域とし、時々、鹹水性や山地、丘陵にまで生活域を拡大していたことが推測できる。

参考・引用文献

阿部恵・手塚均（1986）：「田柄貝塚I」『宮城県文化財調査報告書』第111集

井関広太郎（1989）：『沖積平野』東大出版会

貝塚　爽平（1989）：『東京の自然史』紀伊國屋書店

笠原　信男（1986）：「畑中貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第115集

笠原　信男（1987）：「阿武隈川下流域の生態系と領域」『東北歴史資料館研究紀要』13

金子浩昌・草間俊一（1971）：『貝鳥貝塚』花泉町教育委員会

金子浩昌・忍沢成視（1986）：「骨角器の研究－縄文篇Ⅰ・Ⅱ」『考古民俗叢書』22・23　慶文社

小宮孟（1984）：「貝層出土の自然遺物」『石神台貝塚・戸ノ内貝塚』印旛村史編纂委員会

小宮孟（1987）：「自然遺物」『主要地方道成田松田線Ⅴ－中台貝塚』千葉県埋蔵文化財センター

志間泰治（1976）：「亘理町の原始・古代」『亘理町史上巻』亘理町史編纂委員会

新庄屋元晴・阿部恵（1986）：「骨角牙製品と貝製品」『田柄貝塚Ⅲ』宮城県教育委員会

須藤隆ほか（1984）：『中沢目貝塚』東北大学文学部考古学研究会

松本　秀明（1977）：「仙台付近の海岸平野における微地形分類と地形発達」『東北地理』29－4

松本　秀明（1981）：「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』　52－2

松本　秀明（1986）：「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸変化」『宮城の研究1　考古学編』清文堂

宮城県（1985）：「宮城県地震地盤図作製調査報告書」

宮城県教育委員会（1986）：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第125集

宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦（1976）：『原色日本淡水魚類図鑑』保育社

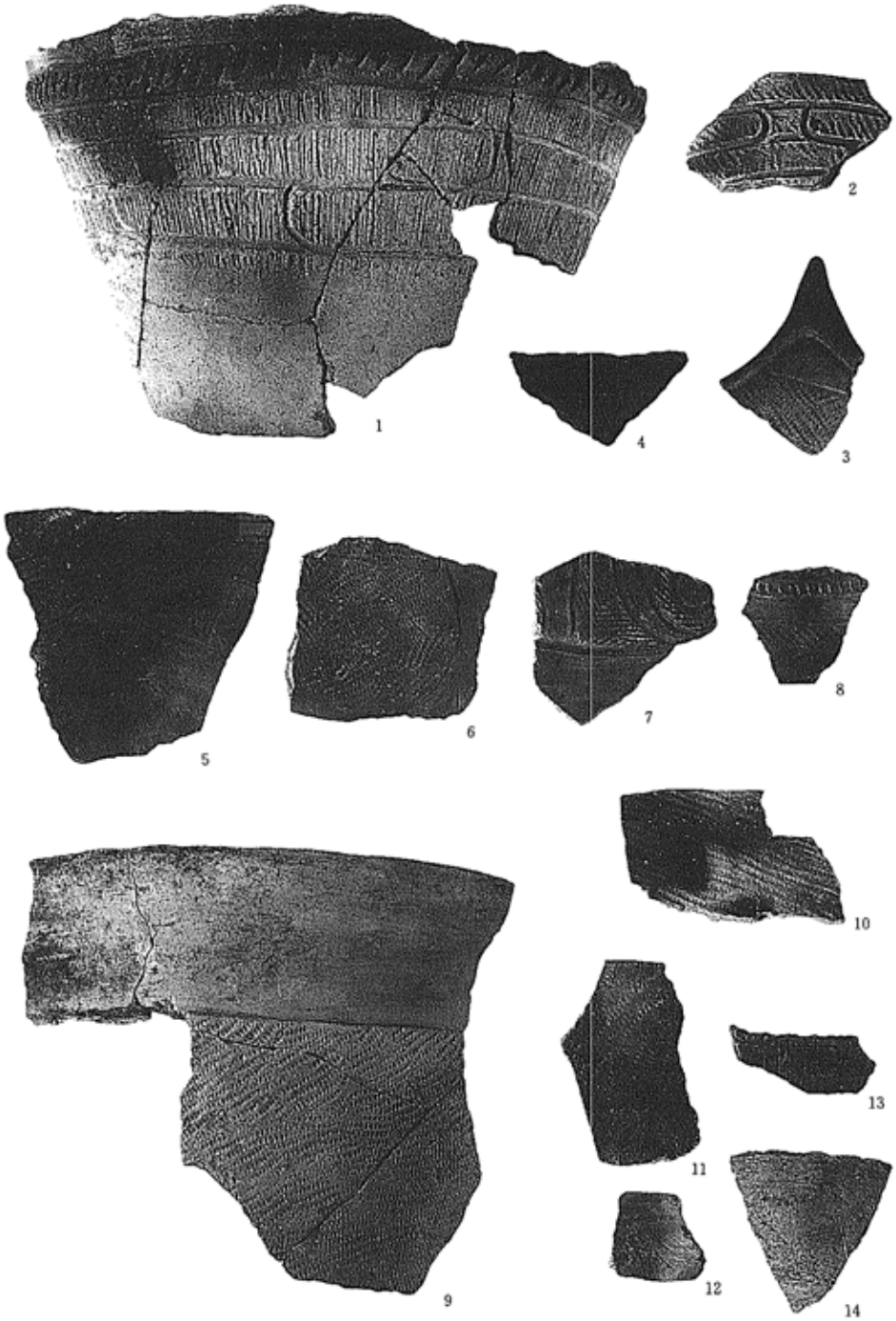
写　真　図　版

調査区遠景
（南西から）

上部貝層群
（南から）

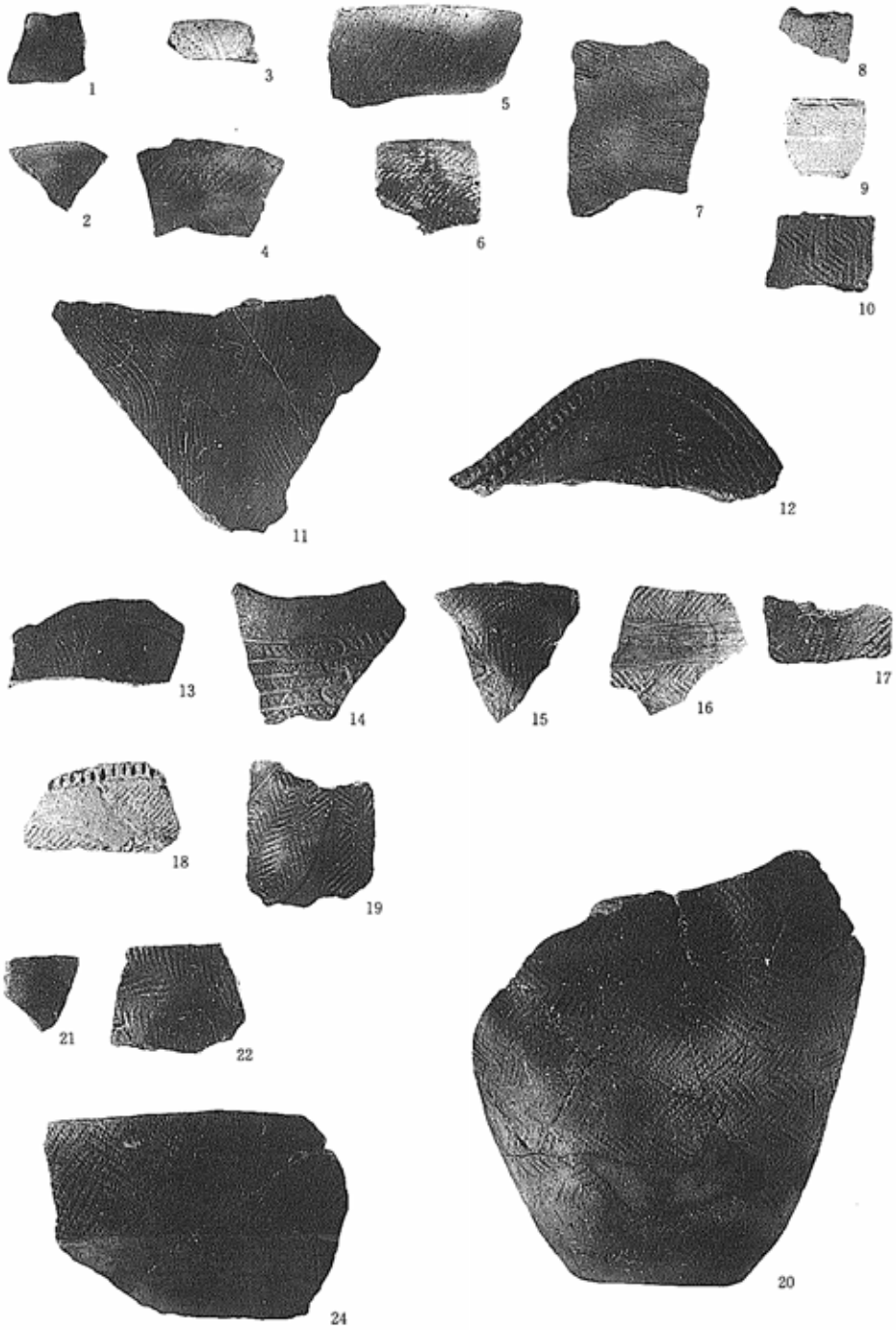
下部貝層群
（南から）

写真図版 1

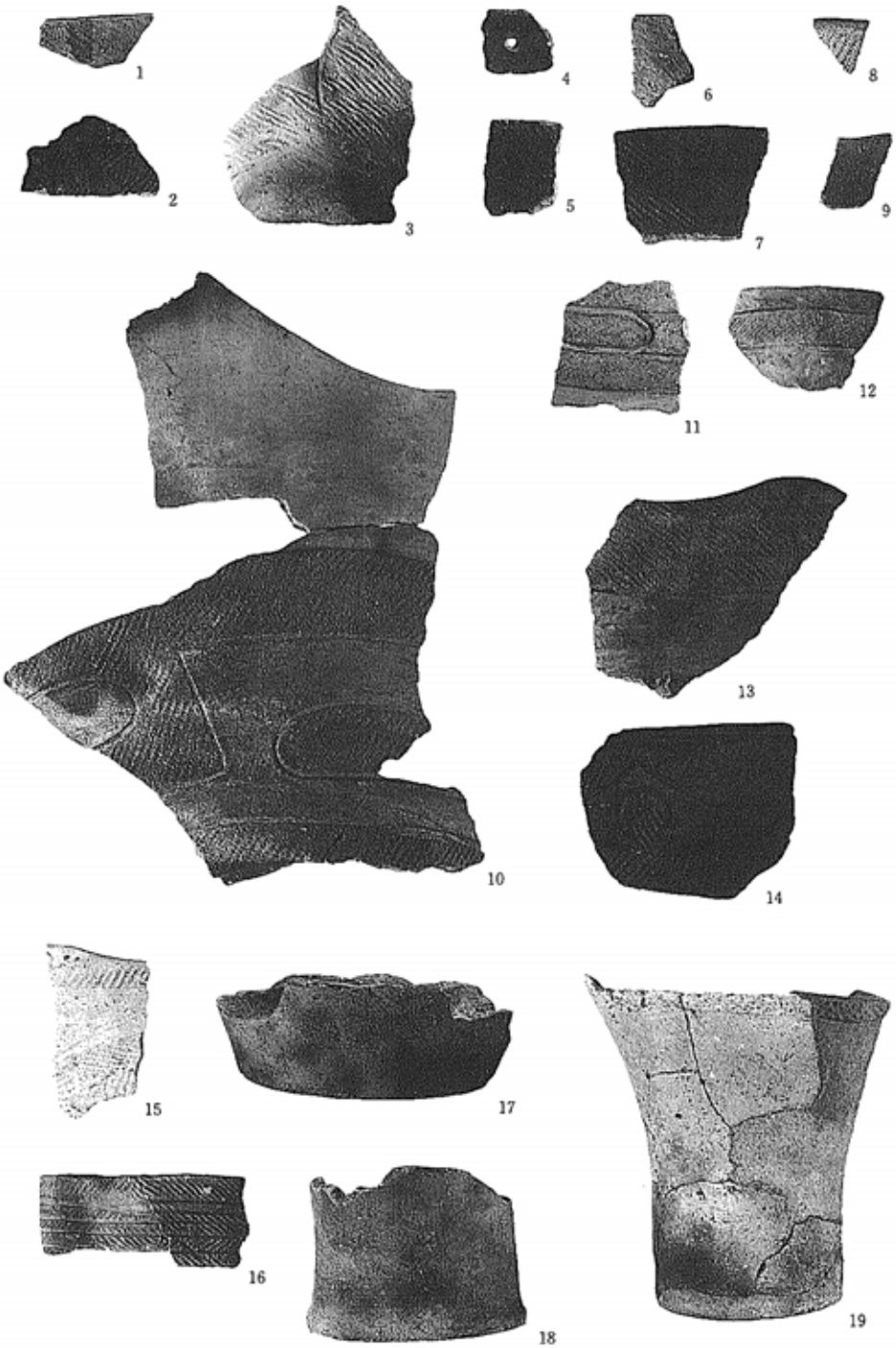


写真図版２　上部貝層群出土遺物（上部貝層）

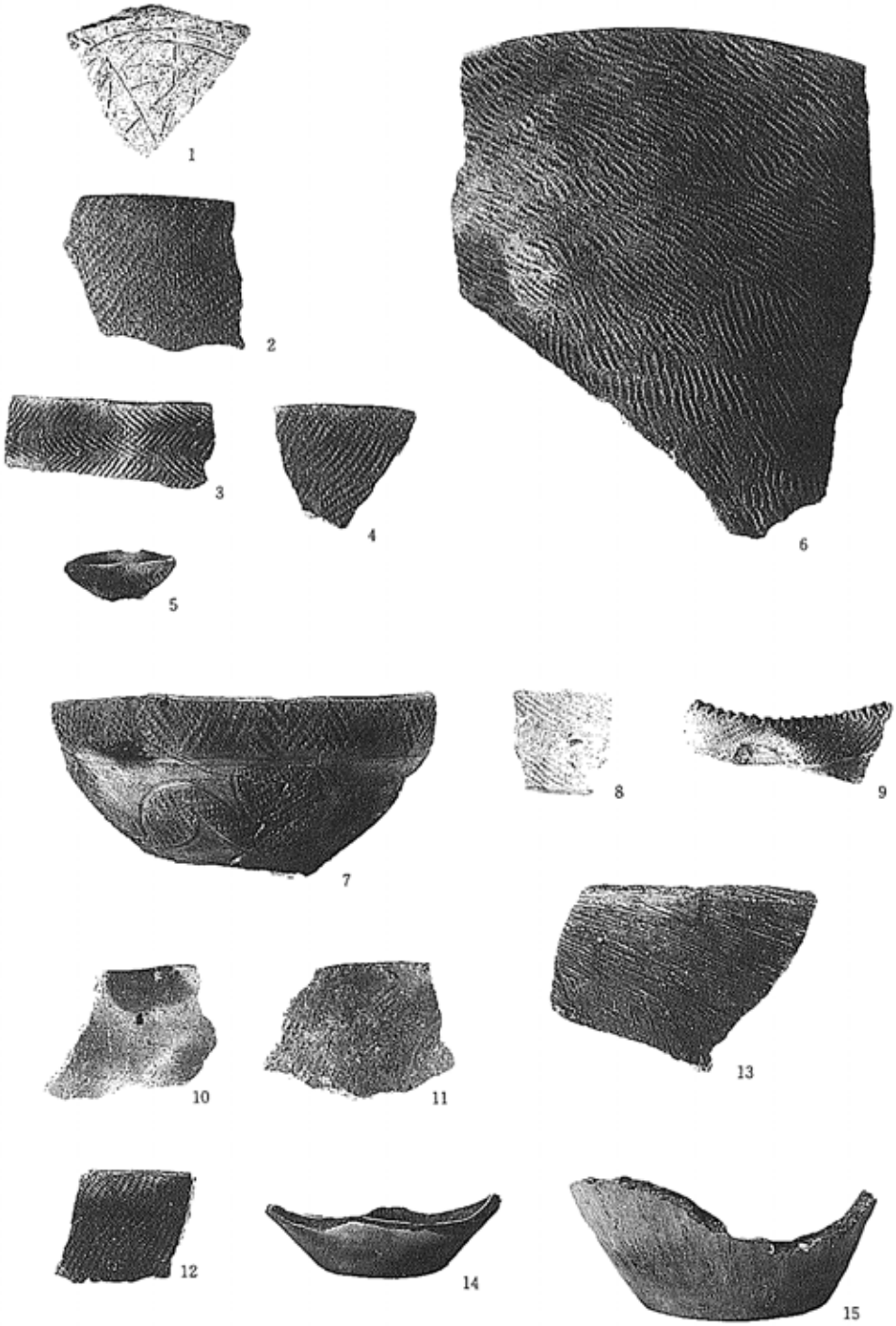
写真図版３　上部貝層群出土遺物（４層、崩落土）



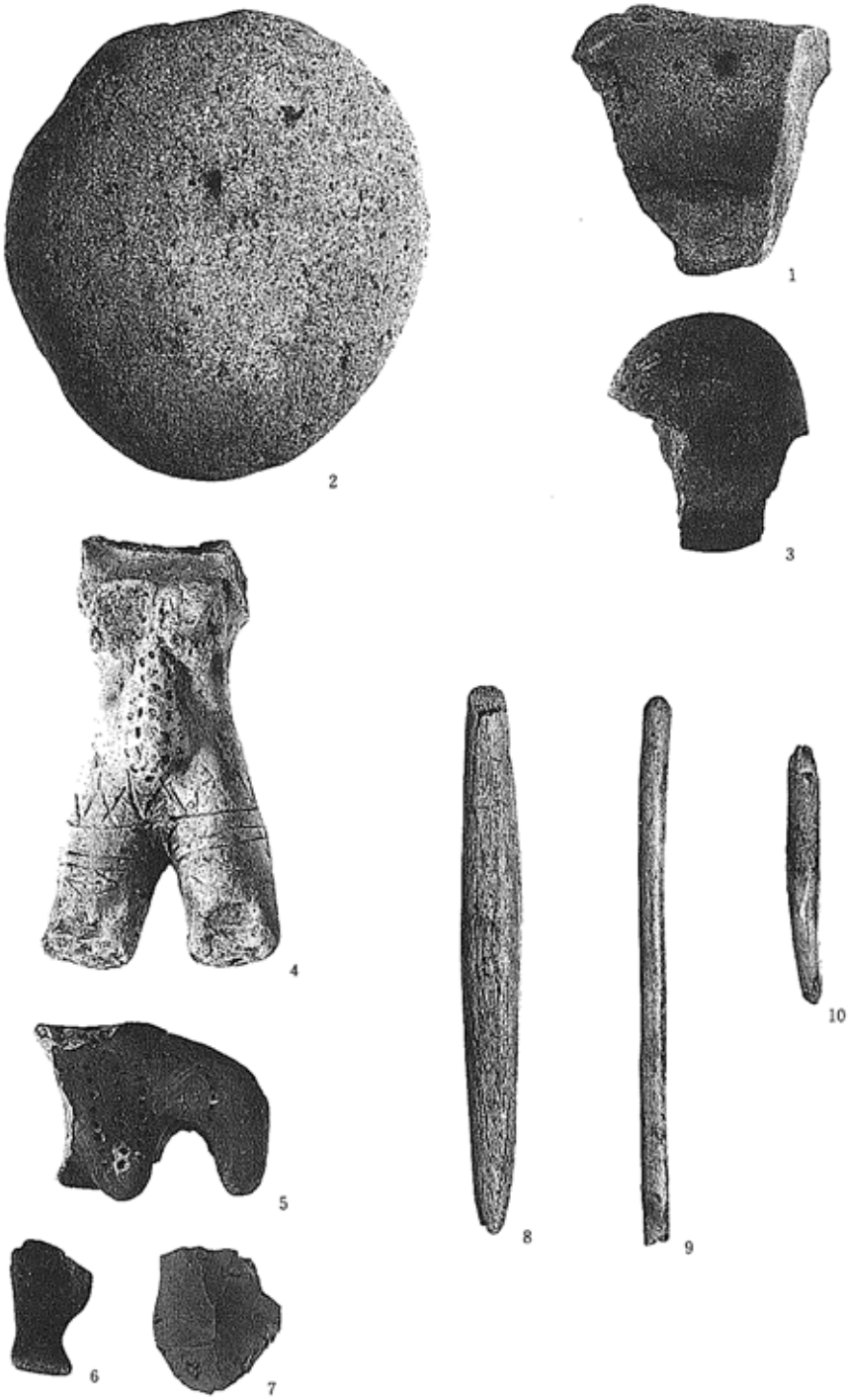
写真図版 4　下部貝層群出土遺物（下部貝層、7～16層）



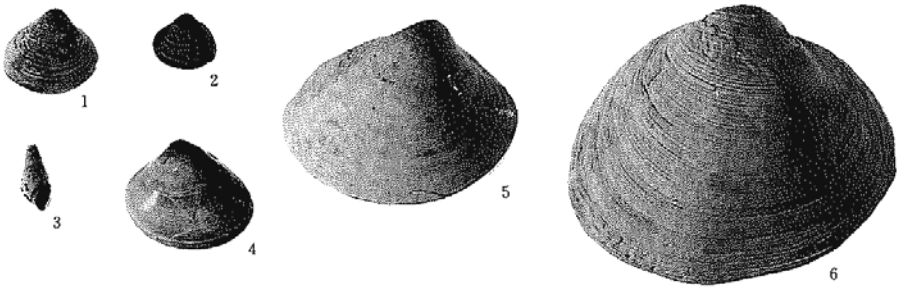
写真図版５　下部貝層群出土遺物（16～19層）



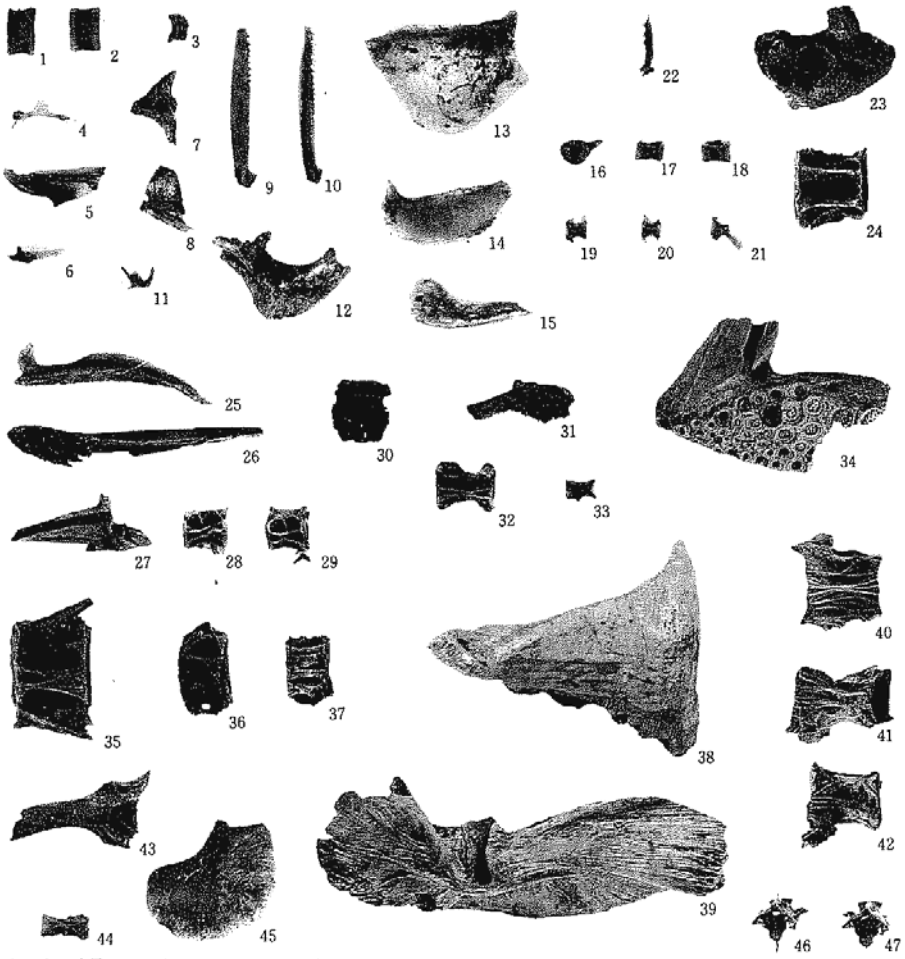
写真図版 6　下部貝層群出土遺物（19層、崩落土）



写真図版７　石製品、土偶、骨格製品

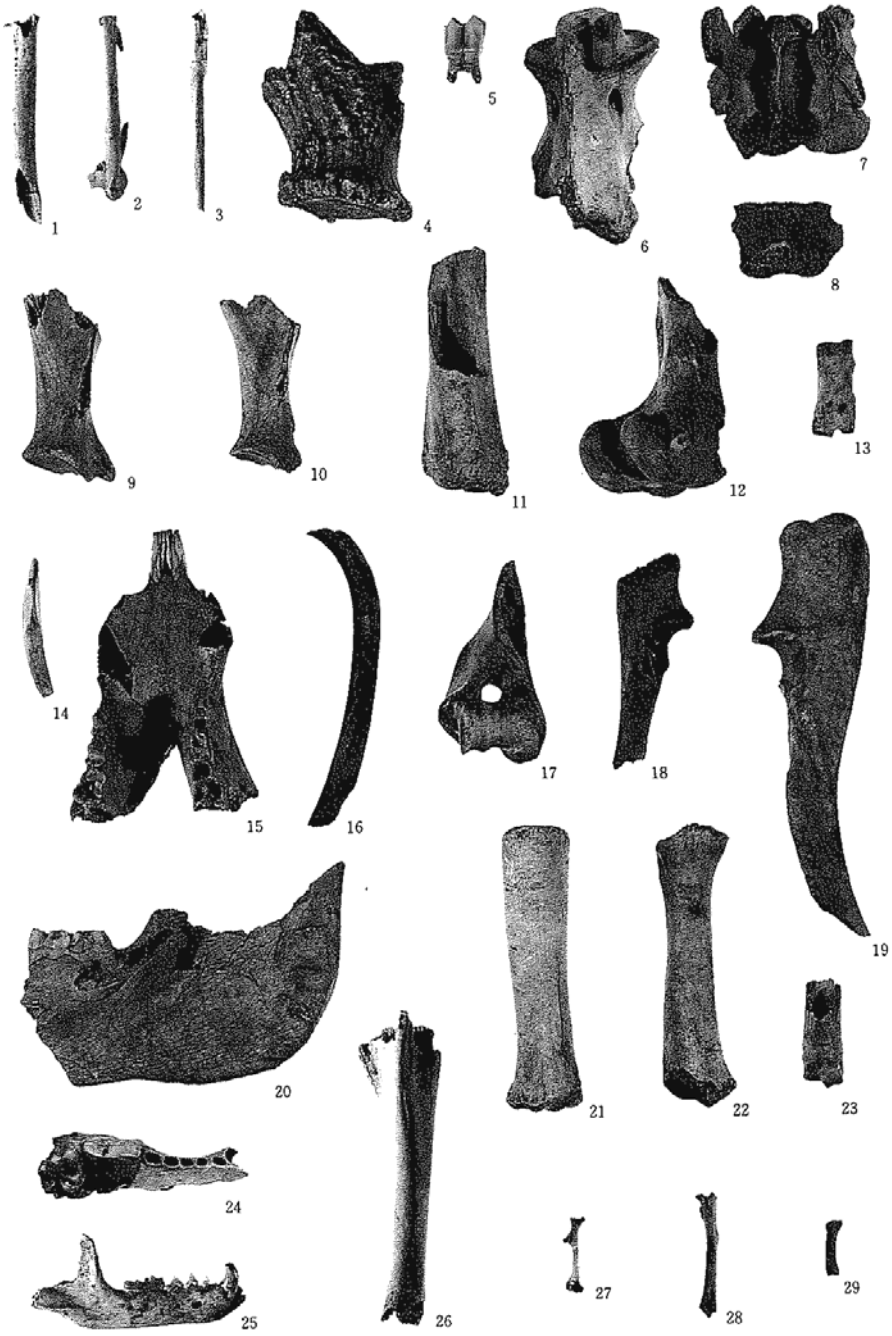


1・2ヤマトシジミ、3ウミニナ、4・5ハマグリ、6ウバガイ（×½）



1・2エイ目、3マイワシ、4～21フナ属、22ギギ、23・24ウグイ属、25～29ウナギ、30サケ科、31～33ボラ、34クロダイ、35ヒラメ、36・37カレイ科？、38～42トラフグ（×1）、43～45種不明魚、46・47ヘビ類（×2）

写真図版8　貝類・魚類・爬虫類



1・2カモ類(×½)、3キジ(×½)、4～13ニホンジカ(×⅓)、14～23イノシシ(×⅓)
24イヌ科(×½)、25・26アナグマ(×½)、27・28ネズミ類(×1)、29種不明

写真図版9　鳥類・哺乳類

諏訪館前遺跡（すわだてまえいせき）

目　　次

1. はじめに ……167
2. 調査の成果 ……167
3. まとめ ……171
引用参考文献
写真図版

調 査 要 項

遺 跡 名：諏訪館前遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 05014）
遺跡記号：ＫＤ
所 在 地：刈田郡蔵王町大字平沢上の台 9
発掘面積：約 254 ㎡
発掘期間：平成 3 年 12 月 17 日
調査主体：宮城県教育委員会・蔵王町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課・蔵王町教育委員会社会教育課
調 査 員：森　　貢喜・芦立　　敏彦

諏訪館前遺跡

1．はじめに

諏訪館前遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字上の台に所在し、蔵王町役場の北東方約 3.5㎞の丘陵上に位置している（第 1 図）。

町の大半は、蔵王火山地の東麓に伸びて広がる高館丘陵によって占められている。この高館丘陵の北西部に派生する丘陵は高木丘陵と呼ばれ、東端は円田盆地に接している。遺跡は、高木丘陵（円田盆地）に接するあたり、標高約 105m～109mの丘陵上に立地している。遺跡の立地している標高約 105～109mの丘陵は、北側から東側には籔川が流れ、その周辺は低地になっている。丘陵の東側も次第に傾斜していき円田盆地と接している。今回の調査地点は、丘陵頂部（標高約 109m）で、現在は畑地になっている（第 2 図）。

遺跡が立地している円田盆地周縁の丘陵上には、数多くの遺跡が確認されている。特に弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多い。古墳時代の遺跡として、大橋遺跡、伊原沢下遺跡、塩沢北遺跡等の集落跡があり、南側には宋膳堂古墳、天王古墳等の高塚古墳も所在している。

本遺跡の立地する丘陵北東・南西斜面の一部は、平沢幼稚園建設のため昭和 63 年に発掘調査が実施されている。その結果、竪穴住居跡 13 軒、土壙 2 基、掘立柱建物跡 2 棟、窯跡 1 基が発見され、その内事前調査した住居跡は、古墳時代前中期塩釜式南小泉式期の住居跡が確認されている。また、調査区内の堆積土中から縄文時代晩期の土器片等も発見されており、当遺跡は縄文時代～古墳時代の集落跡であることが判明している。

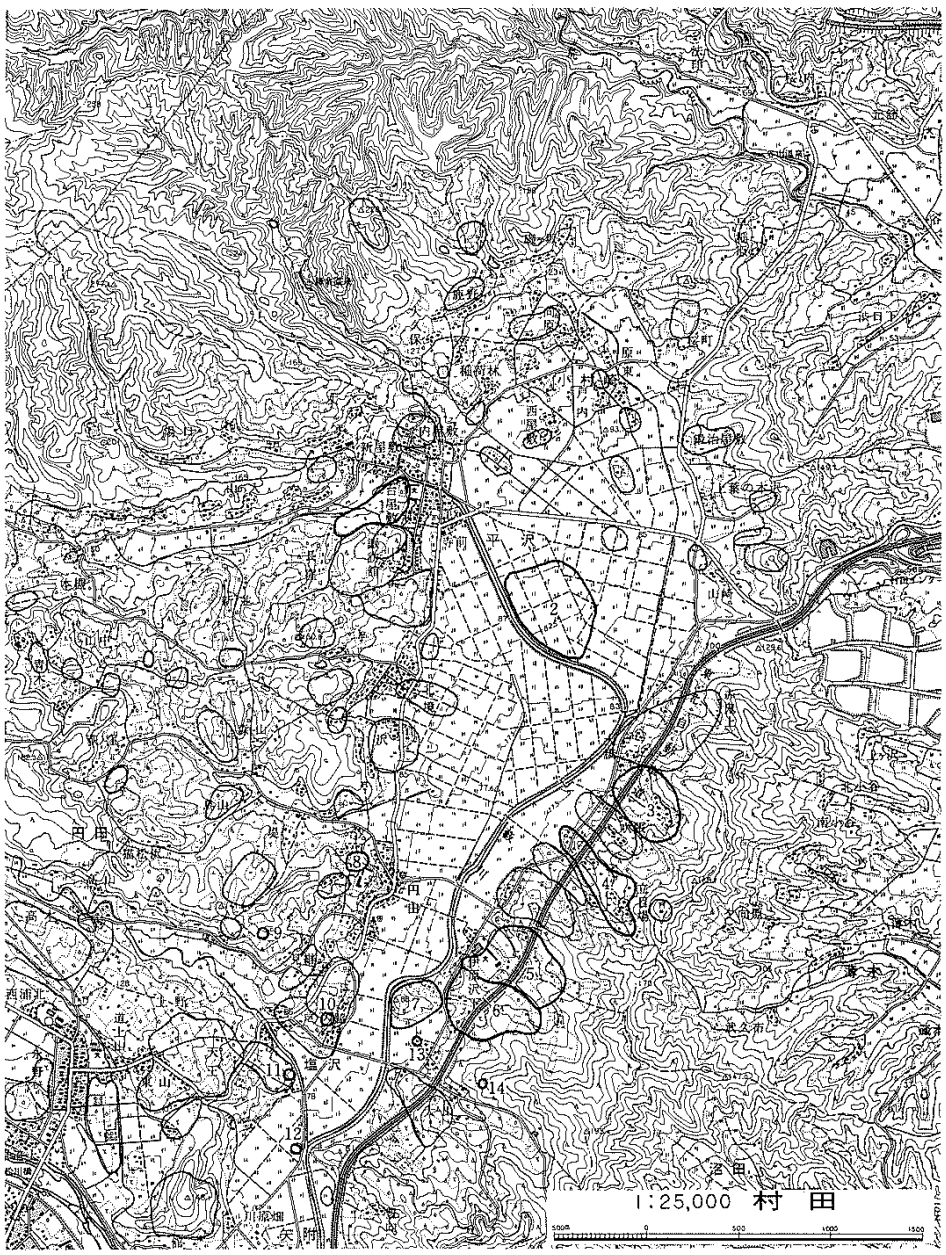
2．調査の成果

住宅建築用地約 900 ㎡が対象である。調査区は、南北に長いトレンチを 4 本設定した（第 3 図）。いずれのトレンチも表土（耕作土）下約 20㎝～50㎝で地山面に達する。また、攪乱が激しく地山面まで削平を受けている部分もある。トレンチ内からの出土遺物は、土師器の細片（器種不明）1 点のみである。発見された遺構としては、第 3 トレンチ南端で土壙 1 基が検出された。

(1)発見された遺構と遺物

土壙（第 4 図）

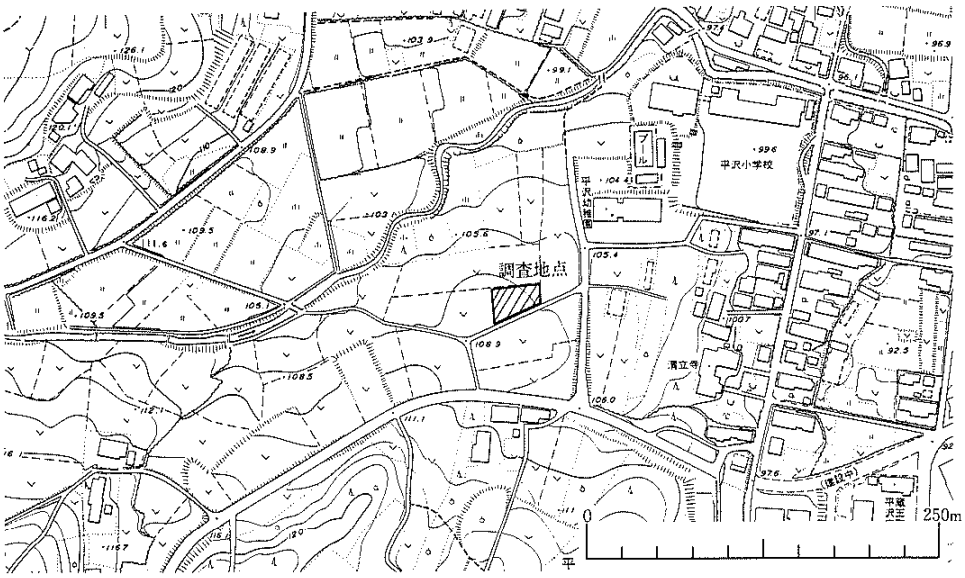
第 3 トレンチ南端の地山面で検出した。平面形は規模は 1.15m×0.5mで長方形を呈す



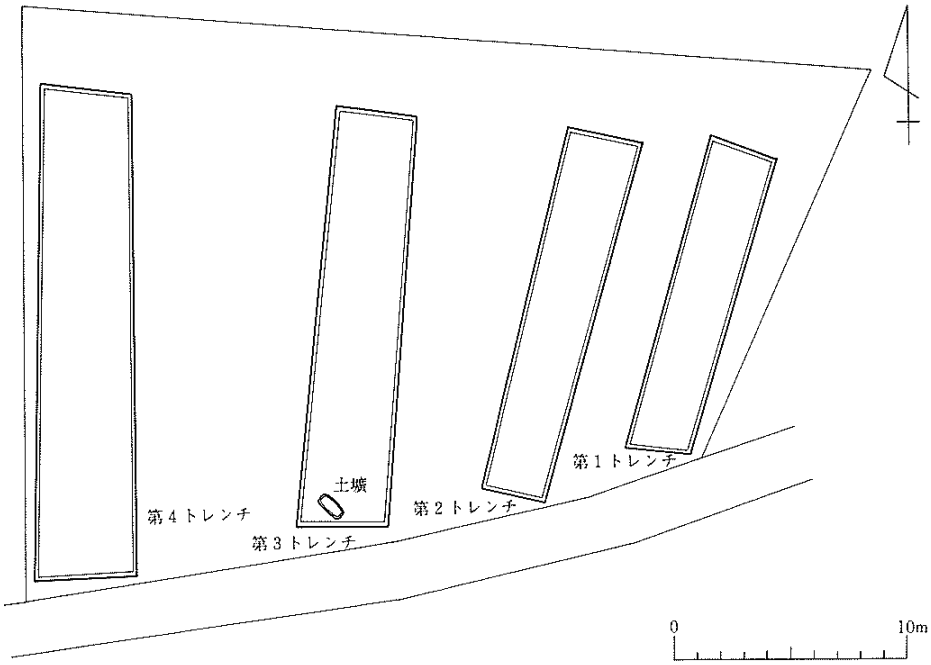
番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	郷土館前遺跡	集落跡	縄文晩期，弥生，古墳	8	堀ノ内遺跡	集落跡	縄文，古墳～平安
2	都遺跡	包含地	縄文後期，弥生，古墳，古代	9	八幡山古墳群	円　墳	古墳
3	大橋遺跡	集落跡	縄文後期，弥生，古墳，平安	10	宗勝窯古墳	円　墳	古墳
4	立目場遺跡	包含地	弥生，古墳	11	天王古墳群	円　墳	古墳
5	伊原沢遺跡	集落跡	古墳	12	鉾附神社古墳	円　墳	古墳
6	塩沢北遺跡	集落跡	弥生，古墳，平安	13	西脇古墳	円　墳	古墳
7	台遺跡	包含地	弥生，古墳～平安	14	中屋敷古墳	円　墳	古墳

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

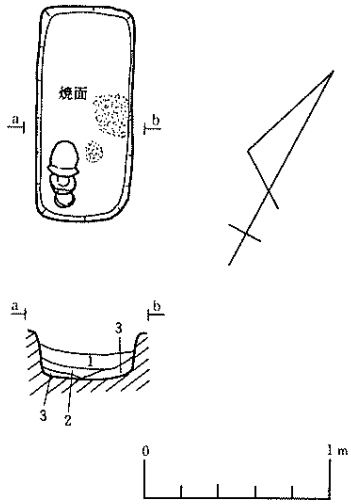
る。底面までの深さは約 30cm である。壁は地山でほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦であり、焼面が一部にみられる。土壙内堆積土は 3 層認められ自然流入土の可能性がある。底面近くの層には木炭が多く含まれている。土壙中央から東寄りの底面上近くで土師器坏 2 個体・甕 1 個体がそれぞれ重なり合って出土した。いずれも完形品である



第 2 図　周辺の地形と調査地点



第 3 図　トレンチ配置図



層No.	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	木炭，焼土多く含む
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	木炭，地山ブロック含む

第4図　土壙

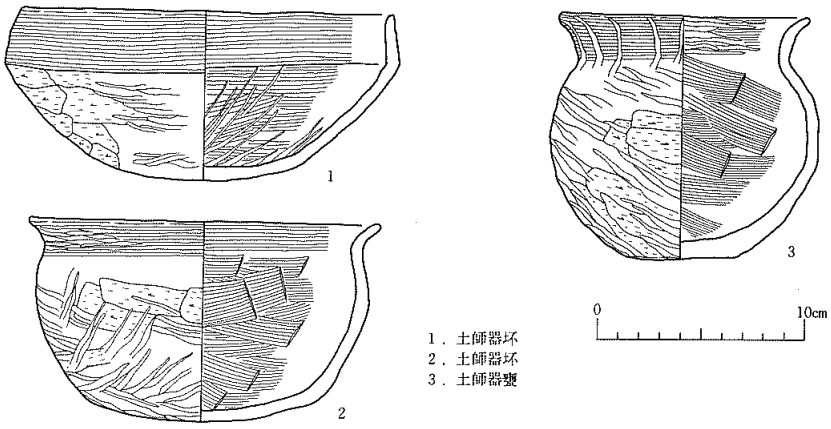
〔出土遺物〕

土師器坏（第5図1・2）

1は口径18cm、器高8.3cmある。底部は丸底である。体部は内弯して立ち上がり、上位で屈曲して口縁部は内傾する。外面の器面調整は底部から体部にかけてヘラケズリの後、ヘラミガキがみられる。口縁部はヨコナデである。内面は、底部から体部にかけてヘラナデが施され底部付近には一部ヘラミガキがみられる。口縁部はヨコナデである。2は口径17cm、器高9.8cmで椀状のものである。底部は丸底を呈する。体部は内弯して立ち上がり、口縁部は短く外反する。外面の器面調整は底部から体部にかけてヘラケズリの後、ヘラミガキがみられる。口縁部はヨコナデで一部にヘラミガキがみられる。内面は、底部から体部にかけてヘラナデ、一部ヘラミガキがみられる。口縁部はヨコナデである。

土師器甕（第5図3）

口径、器高とも12cmである。底部は平底を呈する。体部は内弯して立ち上がり、ほぼ球形を呈する。口縁部は外反する。外面の器面調整は底部から体部にかけてヘラケズリの後、ヘラミガキがみられる。口縁部はヨコナデの後一部縦方向にヘラミガキがみられる。内面は、底部から体部にかけてヘラナデ、口縁部はヨコテデの後、横方向のヘラミガキが施されている。



第5図　土壙内出土土器

(2)若干の考察

〔土師器について〕

土壙内出土の3個体の土師器は、出土状況等から共伴関係にあるものと考えられる。これらの土師器の中で特徴的な坏についてみてみる。

形態的な特徴は、底部は丸底である。体部は内弯して立ち上がり、口縁部は内傾するものと短く外反するものとがある。器面調整をみると、外面：底部～体部にはヘラケズリの後、ヘラミガキの痕跡がみられ、口縁部にはヨコナデの痕跡がみられる。内面：底部～体部にはヘラナデの後、一部ヘラミガキの痕跡がみられ、口縁部にはヨコナデの痕跡がみられる。このような特徴がある坏は、仙台市南小泉遺跡(結城他：1982)、亘理町宮前遺跡(丹羽：1983)、村田町新峯崎遺跡（阿部他：1991）等で近似したものが出土しており、大筋として古墳時代中期南小泉式（氏家：1957）の土器とされている。近年、南小泉式の土器の細分が試みられている（丹羽：1983・加藤：1989）が、当遺跡の場合、器種の不備等から総合的な吟味が加えられない。ここでは、大まかに南小泉式期の土器と捉えたい。また、坏と共伴関係にある甕も同様な年代が与えられる。

〔土壙について〕

調査区のほぼ中央部南端で1基のみ単独で発見された。確認は、地山面で周辺は後世の攪乱が激しい。形態は長方形(1.15m×0.5m)を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは約30cmである。底面の一部には焼面がみられ、底面上には木炭が検出された。また、東寄りの底面上で土師器坏・甕が重なり合って出土している。

機能については確証がなく判然としないが、底面の一部が焼けていること、土師器（完形品）の出土が注目される。そして、機能・廃棄された年代は出土土器から古墳時代中期南小泉式期頃と考えられる。

3．まとめ

(1)諏訪館前遺跡は刈田郡蔵王町平沢地区にあり、円田盆地周縁の東側の丘陵上に立地している。

(2)遺跡は、前回の調査（平沢幼稚園建設）の結果、古墳時代の集落跡であることが判明しているが、今回の調査地点からは住居跡は発見されていない。このことから遺跡の中核（住居が密集する所）は、丘陵の東・北東斜面にあるものと推定される。

(3)発見された遺構は、土壙1基のみである。調査区中央南端で検出されたが、単独で存在していたのか、群をなして機能していたのかは不明である。また、機能面についても確証がなく、判然としない。年代は出土土器から古墳時代中期南小泉式期頃と考えられる。

<引用・参考文献>

氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14

高倉　敏明（1981）：「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第2集

結城　慎一（1982）：「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第35集

丹羽　　茂（1983）：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集

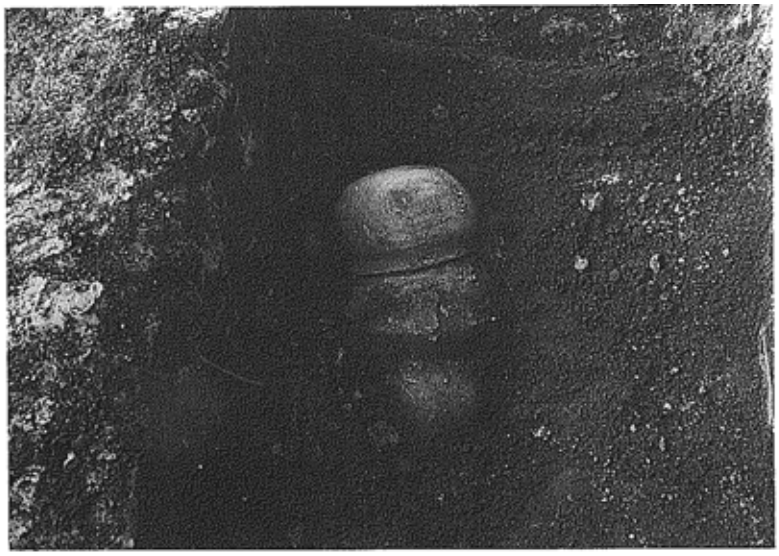
加藤　道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊

阿部　恵他（1991）：「新峰崎遺跡」『宮城県村田町文化財調査報告書』第9集

真山　　悟（1991）：「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第142集

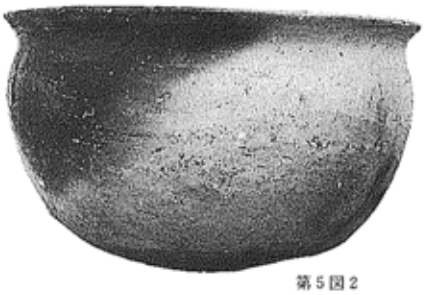
遺跡近景（東方より）
中央が調査区

図版１　土壙



土器出土状況

第5図1



第5図2

第5図3

土壙内出土土器

図版2

中屋敷前遺跡（なかやしきまえいせき）

目　　次

1. 遺跡の位置と環境 ……177
2. 発掘調査に至る経過 ……177
3. 発見された遺構 ……178
4. 出土遺物 ……181
5. まとめ ……184

調 査 要 項

遺 跡 名：中屋敷前遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 06036）
遺跡記号：ＦＺ
所 在 地：宮城県柴田郡大河原町字広瀬町
発掘面積：451 ㎡
調査期間：平成 3 年 4 月 15 日～6 月 1 日
調査主体：大河原町教育委員会
調査担当：宮城県教育委員会　　大河原町教育委員会
調 査 員：宮城県教育庁文化財保護課
佐藤則之　古川一明　小村田達也　天野順陽　窪田　忍
大河原町教育委員会社会教育課
佐々木安彦
調査協力：多賀城跡調査研究所　東北歴史資料館
小 野 豊 吉　藤 原 二 郎

1．遺跡の位置と環境

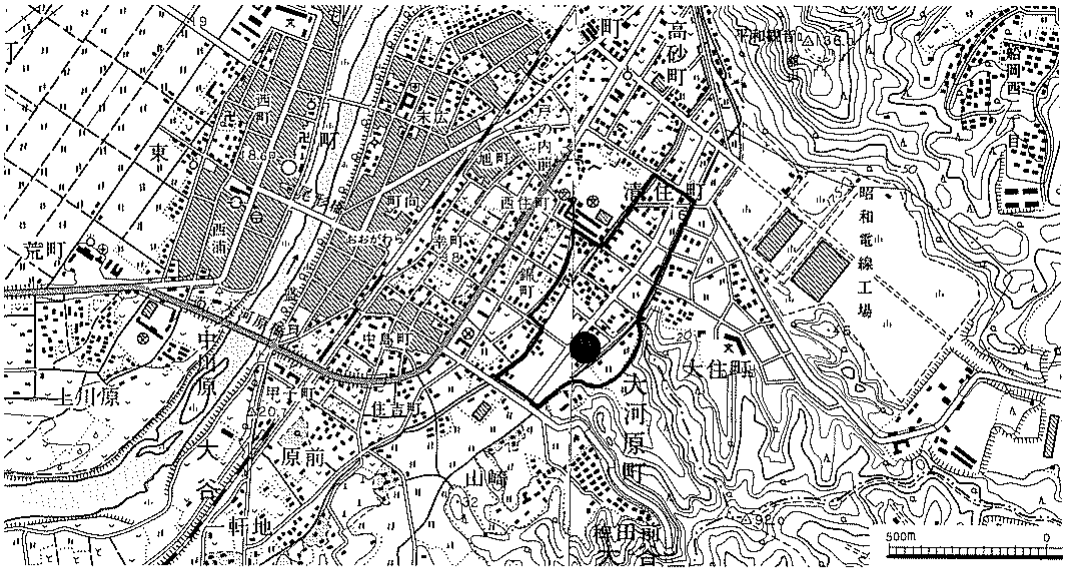
中屋敷前遺跡は、阿武隈川の支流である白石川右岸に形成された標高約 17mの自然堤防上に立地し、東北本線大河原駅から南東約 0.5km の位置にある。昭和 47 年には周辺一帯に区画整理事業が実施され、旧状を留めている場所は少ない。

本遺跡周辺の古代の遺跡をみると、南方約 0.5km には土師器・須恵器が散布している稗田前遺跡、北方約 1km には横穴式石室を主体部とする上野山古墳群、北西約 3km には古墳時代の集落跡と平安時代の掘立柱建物跡が検出された台ノ山遺跡などがある。

2．発掘調査に至る経過

中屋敷前遺跡は、1974 年（昭和 49 年）におこなわれた土地区画整理事業に伴う道路側溝掘削工事の際、多量の瓦や土器が出土したため遺跡であることが確認された。その後、1979・80 年（昭和 54・55 年）には遺跡地内での保育所建設・住宅建設に伴う発掘調査がおこなわれ、礎石や柱穴などが検出されている。

昨年、住宅建築予定地内の試掘調査を行ったところ、2 棟の礎石建物跡と基壇の縁石とみられる切り石列が部分的に確認された。これらの遺構の全容を把握するための遺構確認調査が必要であると判断し、平成 3 年 4 月 15 日から 6 月 1 日まで発掘調査を実施した。なお、今回調査をした地点の周辺地域では、他にも瓦の破片が出土している地点が確認されており、付属の建物跡が調査区以外の広範囲にわたって存在すると推定される。



第１図遺跡の位置　（建設省国土地理院発行1/25,000 大河原亘理を複製）
●印堀調査地点

3．発見された遺構

調査の結果、4 棟の礎石建物跡が発見された。

(1)第 1 号建物跡

調査区西側に位置する四面庇の礎石建物跡である。建物は切り石列によって縁取られた東西 18m前後、南北 12m前後の基壇上にあり、その外側には雨落ち溝がめぐる。建物の身舎は桁行 3 間×梁行 2 間の東西棟で、推定される柱間寸法は、梁行・桁行とも 3.2m（10 尺）、庇の出は 2.4m（8 尺）である。梁方向はほぼ磁北に一致する。

同位置・同規模での立替えがおこなわれており、各礎石の据え方に重複して古い礎石の据え方が検出された。古いものを第 1 a 号建物跡、新しいものを第 1 b 号建物跡とした。第 1 a 号建物跡は、礎石据え方が長辺約 1m前後の隅丸方形と考えられ、据え方には砂礫が充填されている。第 1 b 号建物跡は、礎石は原位置から移動しているものもあるが原位置をほぼ保っているものが七つある。いずれも一辺 1m弱の不整形な自然石である。礎石据え方は長辺約 1.2mの隅丸方形で、拳大の礫が充填されている。

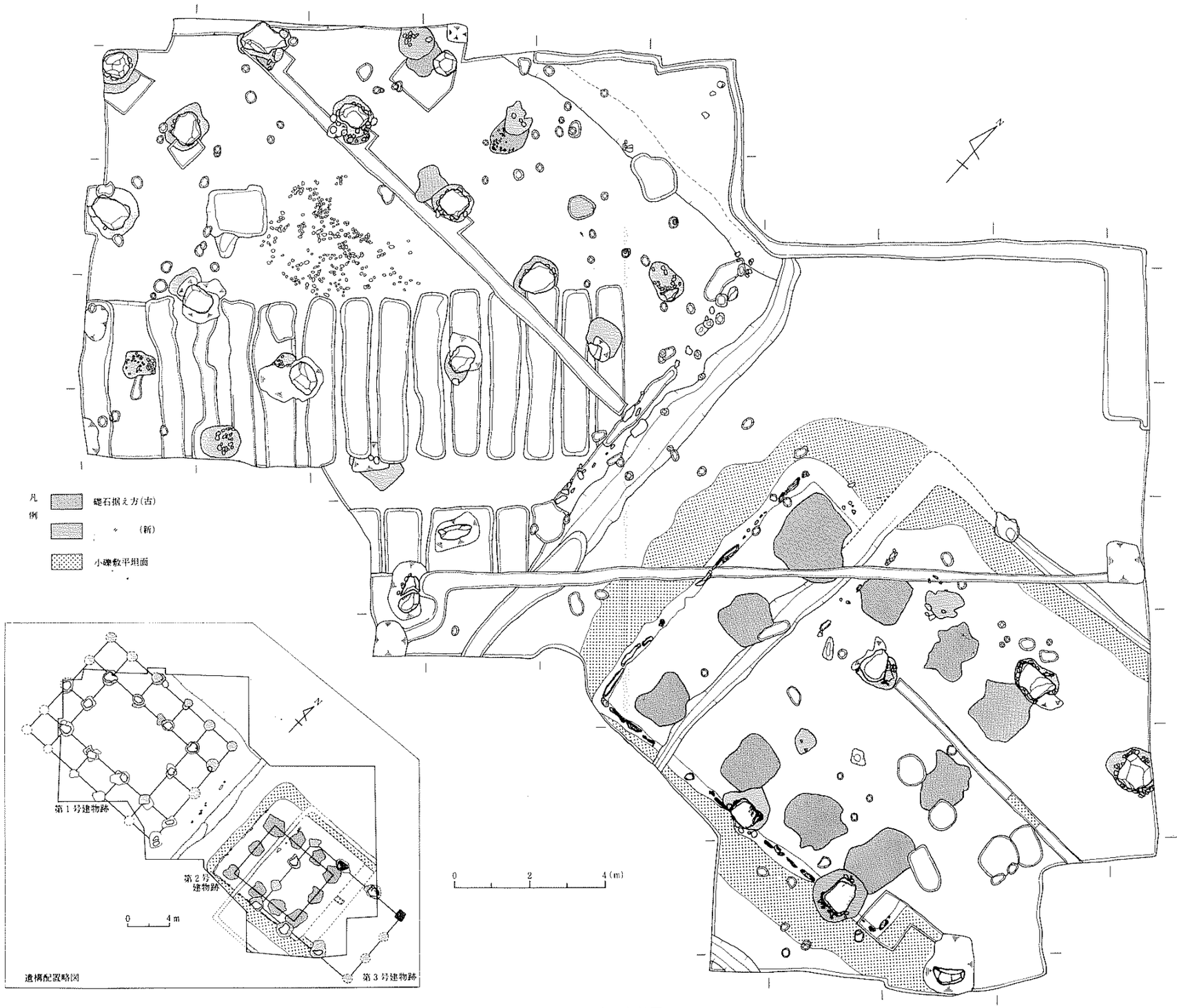
建物跡中央部の 3×3mほどの範囲には拳大の礫群がみられる。基壇の縁石列は、建物の東辺と北辺で部分的に確認されている。軟質の凝灰岩を板状に加工したもので風化が著しい。雨落ち溝は、建物の東、北辺で確認された。上幅は 50cm 前後、深さ 10cm 前後の浅い溝である。溝の底面近くには灰白色火山灰塊が混じる土層が堆積している。なお、切り石列の外側には多量の焼土と炭化物が混じる層が分布し、雨落ち溝はこの層により覆われていた。

(2)第 2 号建物跡

調査区東側に位置する礎石建物跡である。周囲が切り石刻によって縁取られた東西 10m、南北 8mの基壇上にあり、その外周に砂礫により舗装された平坦面がめぐる。建物は桁行 3 間×梁行 2 間の東西棟で、推定される柱間寸法は、梁行、桁行とも 2.4m（8 尺）等間である。梁行方向はほぼ磁北に一致し、桁行の柱筋は第 1 号建物跡とそろっている。

第 3 号建物跡と重複し本建物跡の方が古い。礎石は残っていないが、礎石据え方は平面形が長軸 2m前後の不整な楕円形で、堆積土は硬くしまった砂礫土である。

基壇の縁石列は第 3 号建物の礎石据え方により破壊された部分もあるが、建物の四周で断続的に確認されている。軟質の凝灰岩を板状に加工したもので風化が著しく、火を受けた痕跡も認められる。基壇外周の平坦面は幅が 1～1.2mで、砂礫により舗装されている。なお、本建物の東半は第 3 号建物の基壇盛土によって覆われていたが、サブトレンチを設定して掘り下げ、東辺にも縁石列と舗装された平坦面がめぐることを確認している。



第2図　調査区全体図

(3) 第 3 号建物跡

調査区東端に位置する礎石建物跡である。建物跡は切り石刻によって縁取られた東西 14m前後、南北 10m前後の基壇上にあり、その外周には雨落ち溝がめぐる。建物は桁行 3 間×梁行 3 間の東西棟で、推定される柱間寸法は、梁行 2.4m（8 尺）、桁行 3.2m（10 尺）で東西に長い。梁方向はほぼ磁北に一致し、桁行の柱筋は第 1 号建物跡とそろっている。なお、本建物の東辺は今回の調査区外にあるが、1979・80 年の保育所建設・住宅建設に伴う発掘調査の際に東北角の礎石を確認している。

第 2 号建物跡と重複し、本建物跡の方が新しい。原位置を保つ礎石は五つあり、いずれも一辺 1m前後の自然石である。礎石据え方は平面形が長軸 1.5m前後の不整な楕円形で堆積土には拳大の礫が充填されている。

基壇の縁石列は建物の西辺の一部のみが検出されている。軟質の凝灰岩を板状に加工したもので風化が著しく、火を受けた痕跡も認められる。雨落ち溝は南、北、西辺で確認された。上幅は 30cm 前後、深さ 10cm 前後、断面が浅い「U」字状の溝で、底面に灰白色火山灰塊が混じる層が堆積している。切り石列の外側には多量の焼土と炭化物が混じる層が分布し、雨落ち溝はこの層により覆われていた。

4. 出土遺物

瓦・土師器・須恵器・須恵系土器・鉄製の釘・土壁の一部と考えられるものなどがある。

第 1 号建物跡の西側で瓦破片、土師器・須恵器破片、鉄製の角釘などがまとまって出土し、完形の須恵系土器 2 点が重なった状態で出土している。第 2 号建物跡内と第 3 号建物跡周辺からも少量の瓦破片や土師器・須恵器・須恵系土器破片が出立している。

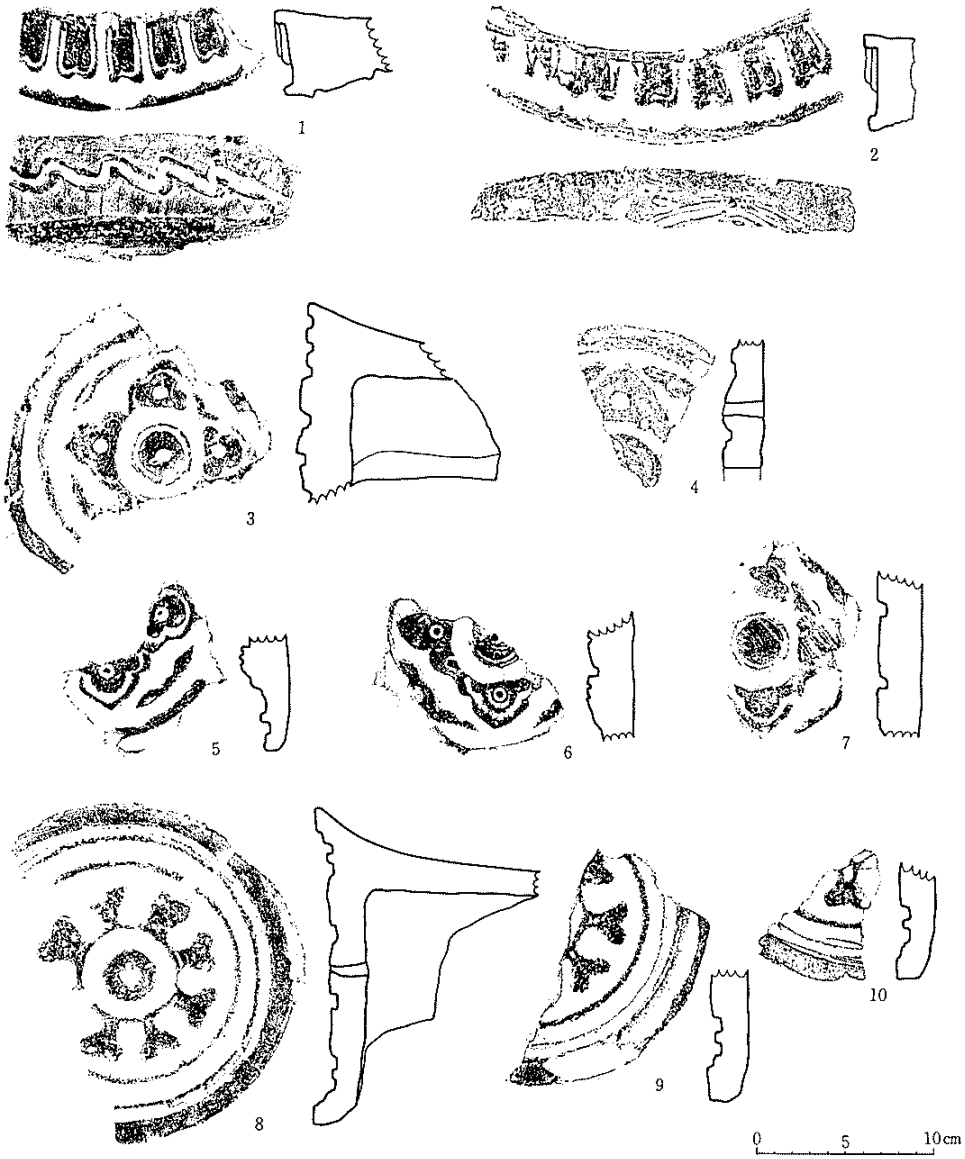
［瓦］軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦がある（第 3・4 図）。

軒平瓦の瓦当文様は 1 種類のみである（第 3 図 1・2）。花弁を配した文様で、凸面側の顎部には波状の沈線文が施され、平瓦部との境は段をなしている。

軒丸瓦の瓦当文様は 2 種類ある（第 3 図 3〜10）。

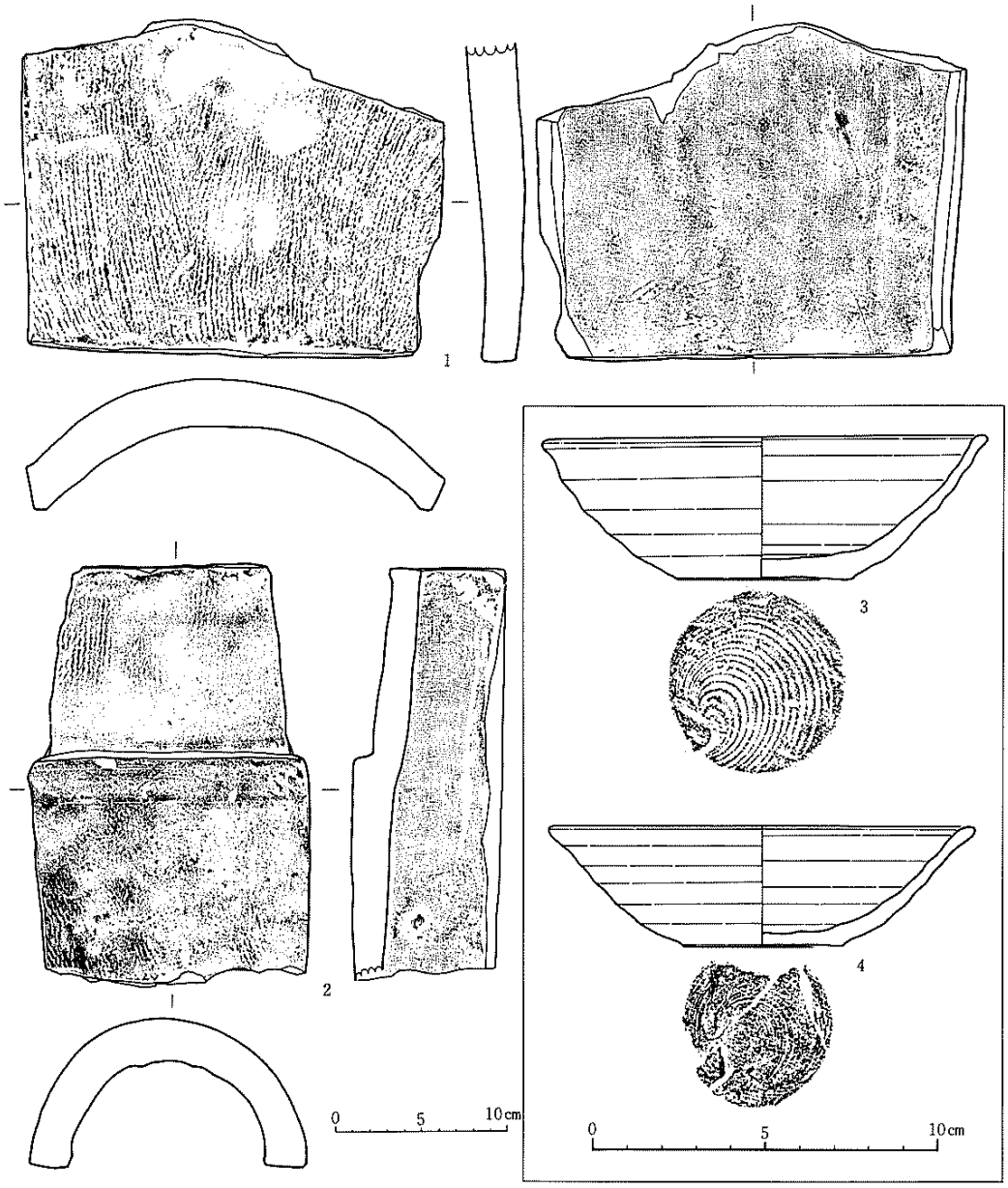
3〜7 は、中房部が段の付く円形の高まりで、その周囲に 4 枚の花弁が配されるものである。弁間の上部にはリボン状の文様が配され、その外側に太い圏線が巡っている。花弁や中房の中央に竹管による円形の刺突文を加えたもの（3〜6）と、それが無いもの（7）がある。さらに同じ部分が貫通孔となっているもの（4）もある。この種の文様は多賀城跡出土の宝相華文軒丸瓦 422 などの宝相華文の花弁や弁間の文様が形骸化したものと考えられる。

8〜10 は、中房部が大きな円形の高まりで、中房を画す一重の圏線に接して 8 枚のハー



	種　別	出土地点・層　位	文様・製作技法など
1	軒平瓦		瓦当文様：蓮花文。顎上面に一本の波状文。
2	〃		〃　　。顎上面に多条の波状文。
3	軒丸瓦		瓦当文様：法相花文、花弁中央に竹管刺突
4	〃		〃　　、花弁・中房中央に貫通孔
5	〃		〃　　、花弁中央に竹管刺突
6	〃	西側・焼土炭化物層	〃　　、花弁・中房に竹管刺突
7	〃	1号建物跡礎石掘方	〃
8	〃		：蓮華状法相花文、中房中央に貫通孔
9	〃	1号建物跡南側旧表土	〃
10	〃		〃

第3図　出土遺物 (1)



	種　別	出土地点・層　位	特　　徴
1	平瓦		凸面：縄タタキ目。凹面：布目。
2	丸瓦		凸面：縄タタキ目。凹面：布目。
3	土器	1号建物跡南側旧表土	須恵系土器。口径12.8、底径 5.1、器高 4.1
4	〃	〃	〃　。口径12.4、底径 4.6、器高 3.5

第4図　出土遺物 (2)

ト状の花弁が歯車状に配され、その外側に太い圏線が巡るものである。中房の中央に貫通孔があるもの（8）がある。この文様も個々の花弁の形状は宝相華文の花弁に類似しているが、文様構成は多賀城跡出土の歯車状文軒丸瓦 427 に近い。

平瓦はいずれも一枚つくりで、凹面は布目痕、凸面には縄タタキ目がみられるものである（第 4 図 1）。丸瓦は、玉縁の付くもので、凹面が布目痕、凸面に縄タタキの後ナデ調整を施したものがある（第 4 図 2）。なお、建物跡周辺から出土した瓦の中には、火熱を受け表面が剥離したものも認められる。

［土師器］坏・甕の破片がある。全体形のわかるものはない。

坏は、内黒で、底部は回転糸切りによる切り離しで無調整のものがある。

甕は、ロクロ調整で底部付近にかけてヘラケズリが施された長胴のものなどがある。

［須恵器］坏・甕・蓋の破片がある。全体形のわかるものはない。

坏は、底部が回転糸切りによる切り離しで無調整のものである。

［須恵系土器］坏がある（第 4 図 3・4）。

内外面ともナデ調整で、底部が回転糸切りによる切り離しで無調整のものである。

［鉄製釘］長さ約 8cm、太さ約 0.6cm の角釘である（写真図版 6）。

5. まとめ

(1) 検出された遺構は 4 棟の礎石建物跡で、いずれも東西棟である。

(2) 調査区画側の第 1 a ・ b 号建物跡は四面に庇がつき身舎が桁行 3 間×梁行 2 間の建物、東側の第 2 号建物跡は桁行 3 間×梁行 2 間、第 3 号建物跡は桁行 3 間×梁行 3 間の建物である。

(3) 西側の第 1 a ・ b 号建物跡と、東側の第 2・3 建物跡はそれぞれ重複していて、第 1 a 号建物跡と第 2 号建物跡が古く、第 1 b 号建物跡と第 3 号建物跡が新しい。

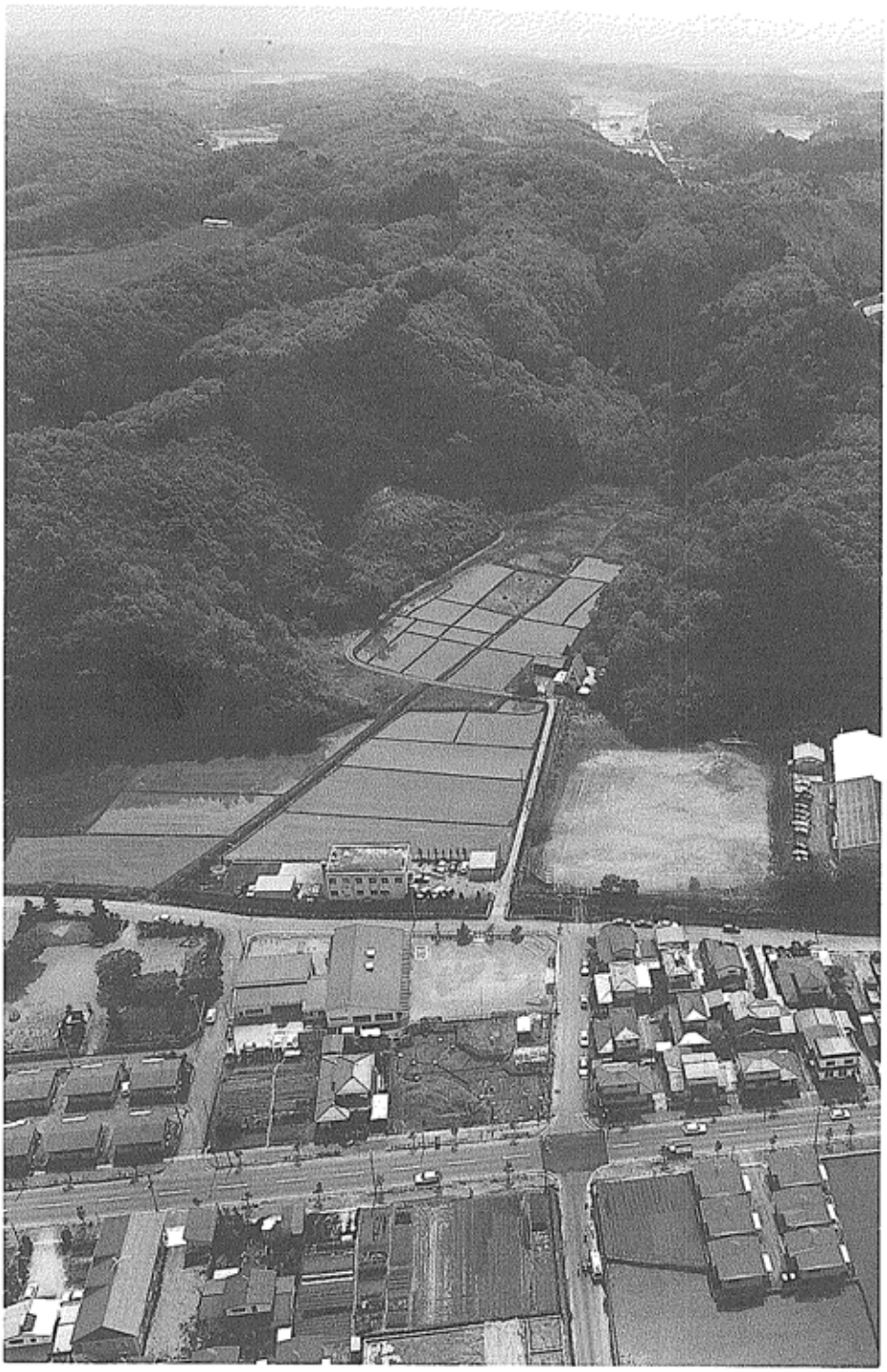
(4) 第 1 号建物跡と第 3 号建物跡の雨落ち溝の底面近くには 10 世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰のブロックが混じる土層が堆積している。

(5) 建物跡周辺からは、土師器・須恵器・須恵系土器・瓦・釘等が出土し、土器や瓦は特徴から平安時代中頃のものと考えられる。

(6) 建物はいずれも火災にあった可能性が考えられる。

(7) 確認された建物跡は、平安時代中頃の寺院の一部を構成する建物と考えられ、第 1 号建物跡は金堂に相当する規模・構造を有している。

写　真　図　版



写真図版１　調査地点遠景（北より）

写真図版 2　　上　調査区全景
下　第 1 号建物跡

第１号建物跡
（南側から）

第１号建物跡
（東側から）

第１号建物跡
（北西隅部）

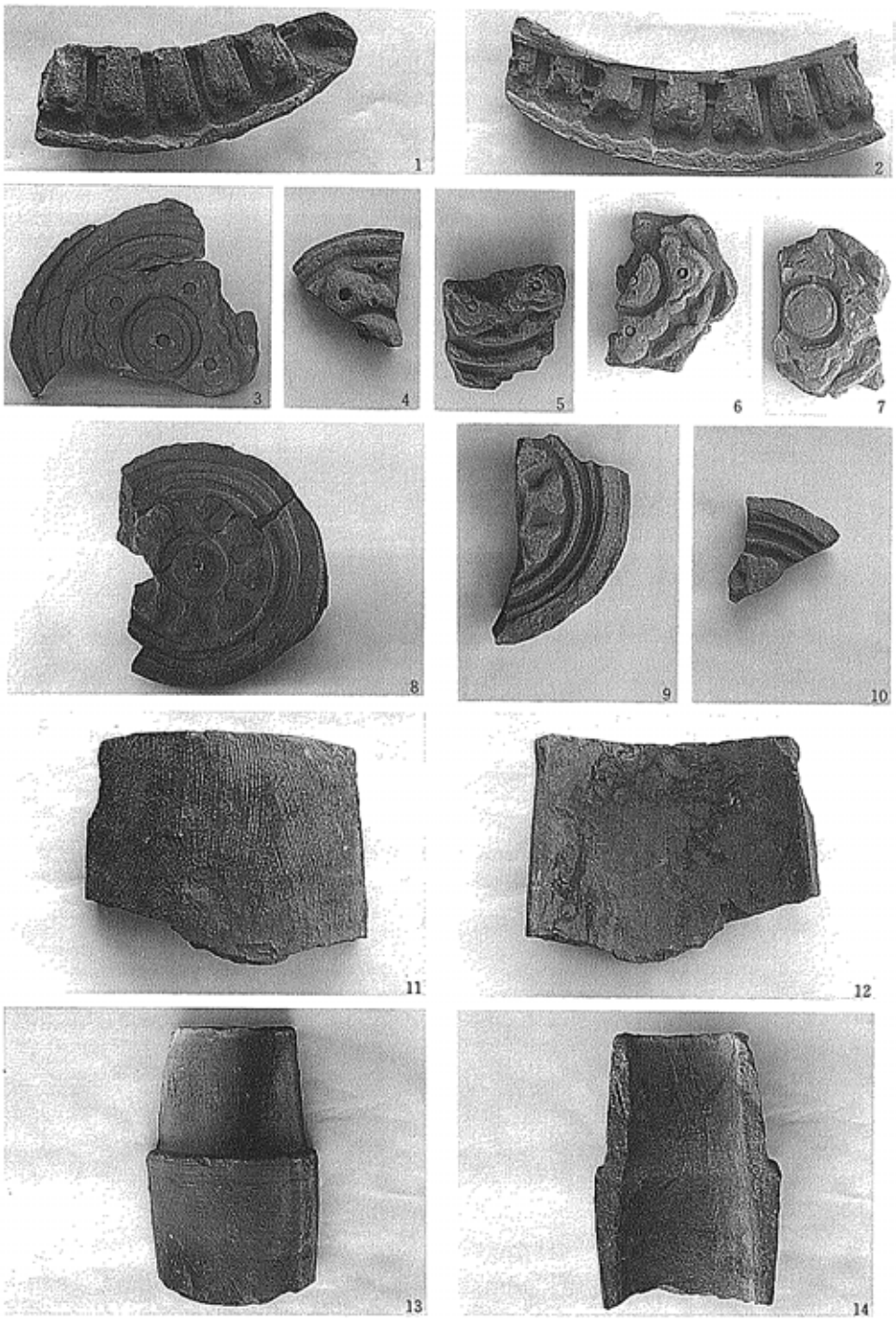
写真図版３

第２号建物跡
（北側から）

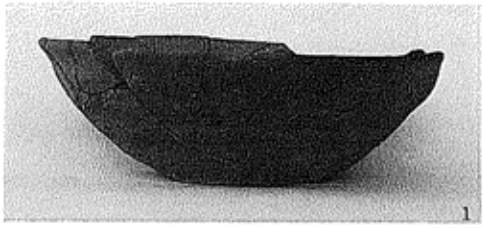
第３号建物跡
（北西側から）

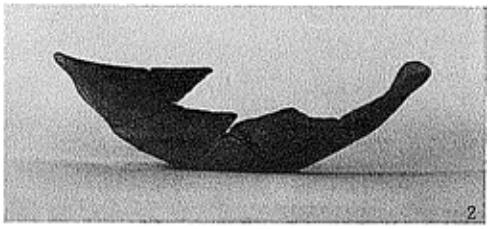
第１号建物跡周辺
遺物出土状況

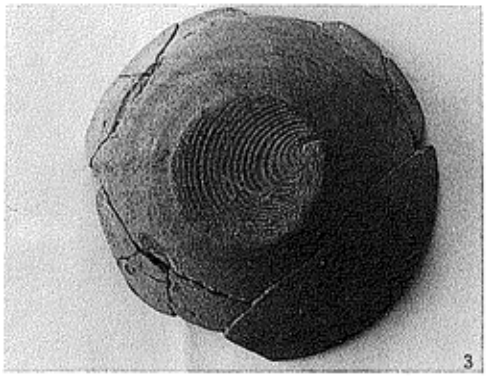
写真図版４

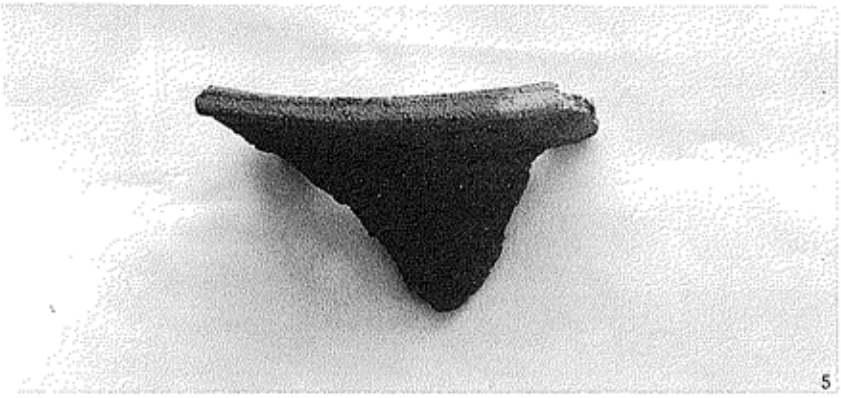


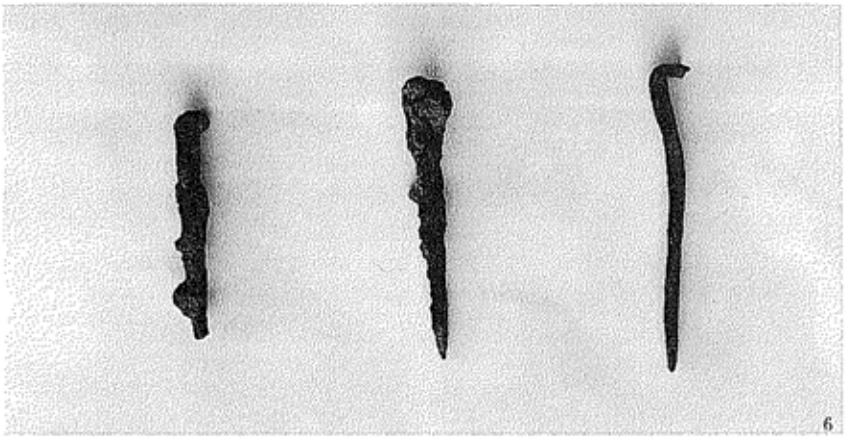
写真図版５　出土遺物（１）











写真図版６　出土遺物（２）

伊治城跡（いじじょう）

目　　次

1　はじめに ……195
2　発見された遺構と遺物 ……195
3　まとめ ……198

調査要項

遺　跡　名；伊治城跡（宮城県遺跡登載番号 41007）
遺跡所在地；宮城県栗原郡築館町字城生野
調査主体；宮城県教育委員会、築館町教育委員会
調査担当；宮城県教育庁文化財保護課、築館町教育委員会社会教育課
調　査　員；文化財保護課　白鳥良一、小井川和夫、阿部博志、佐藤則之
社会教育課　遠藤義勝、千葉長彦
調査期間；平成 3 年 11 月 19 日～12 月 2 日（伊治城跡第 18 次調査）
発掘面積；約 300 ㎡
遺跡記号；ＤＩＪ
調査協力；白鳥良知、富野小学校

伊治城跡第18次調査

1　はじめに

伊治城跡は宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。

本遺跡は古代の城柵跡として著名であり、毎年計画的に調査が実施されている。本調査はこれとは別に、個人住宅建築のための事前調査として緊急に実施したもので、伊治城跡の第 18 次調査にあたる。

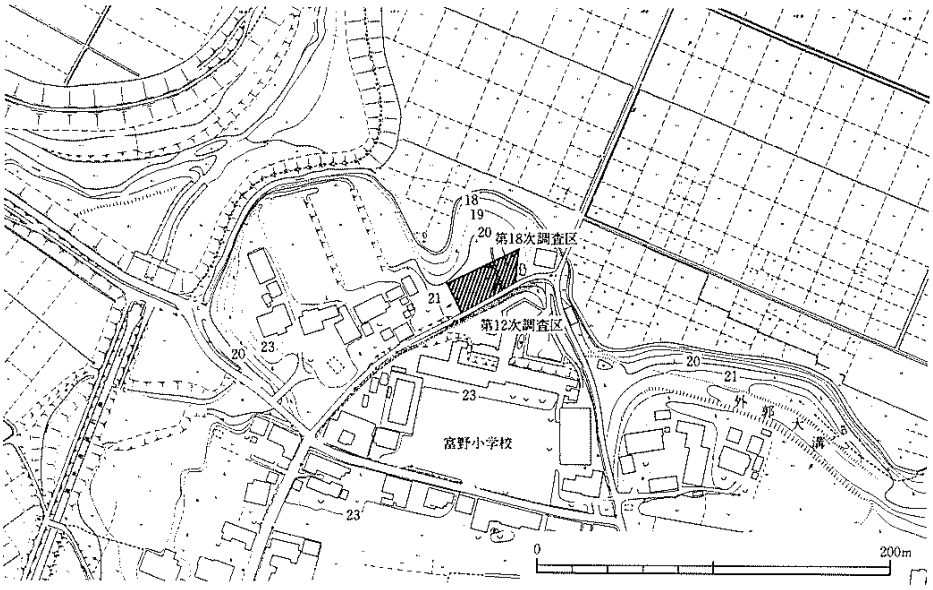
調査区は伊治城跡が立地する丘陵の北端部にあり、伊治城跡の外郭を区画する大溝の外側にあたる。また、町道改良工事にともなって実施された第 12 次調査区の北側に隣接している（第 1 図）。

なお、本書では調査の概要を記すに止め、詳細については本年度刊行予定の『伊治城跡』5 を参照して頂きたい。

2　発見された遺構と遺物

発見された遺構は、竪穴住居跡 1 軒、溝 7 条、土壙 6 基などである（第 2 図）。

このうちＳＤ－260･261 溝はＬ字形に折れ曲がる一連の溝で､断面形は逆台形である。方



第 1 図　調査区位置図

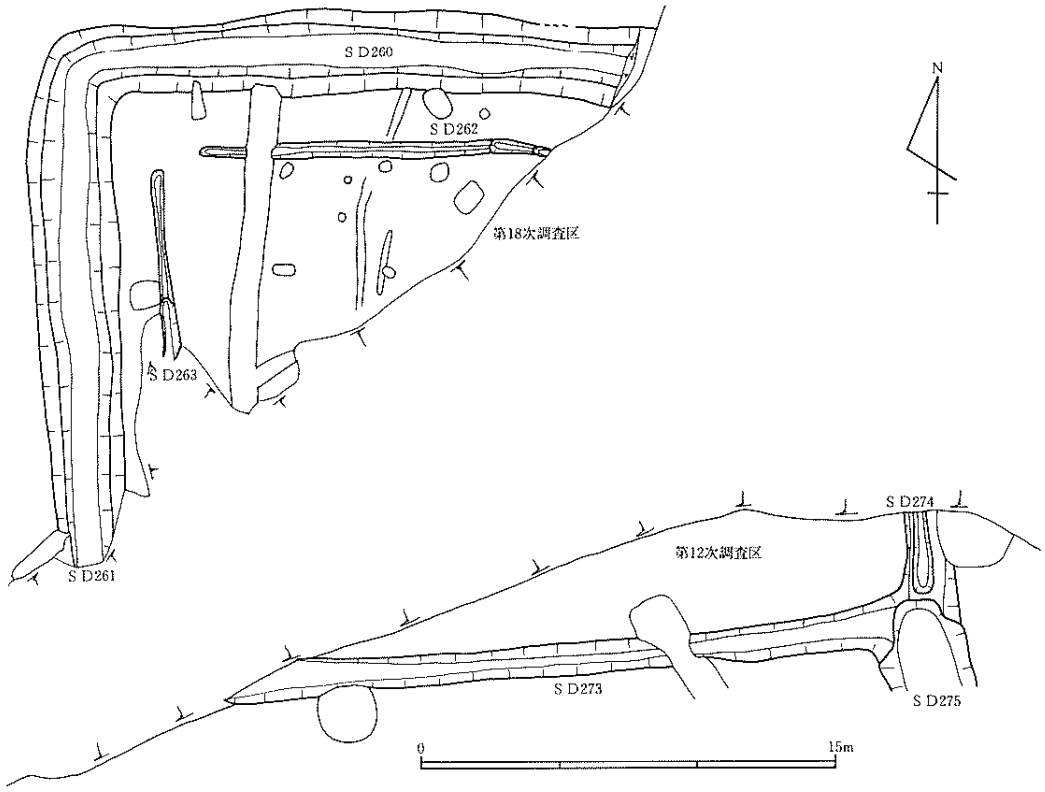
向はＳＤ−260 溝はほぼ東西であり、ＳＤ−261 溝はほぼ南北である。上幅はいずれも 3m程で、下幅は 1m前後であり、深さは 1m程である。

堆積土は 3 層に大別でき、第 1 層は黒色の自然堆積土で、第 2 層は地山ブロックを多量に含む崩落土であり、第 3 層は人為的に埋め戻された土で、堅く締まっている。

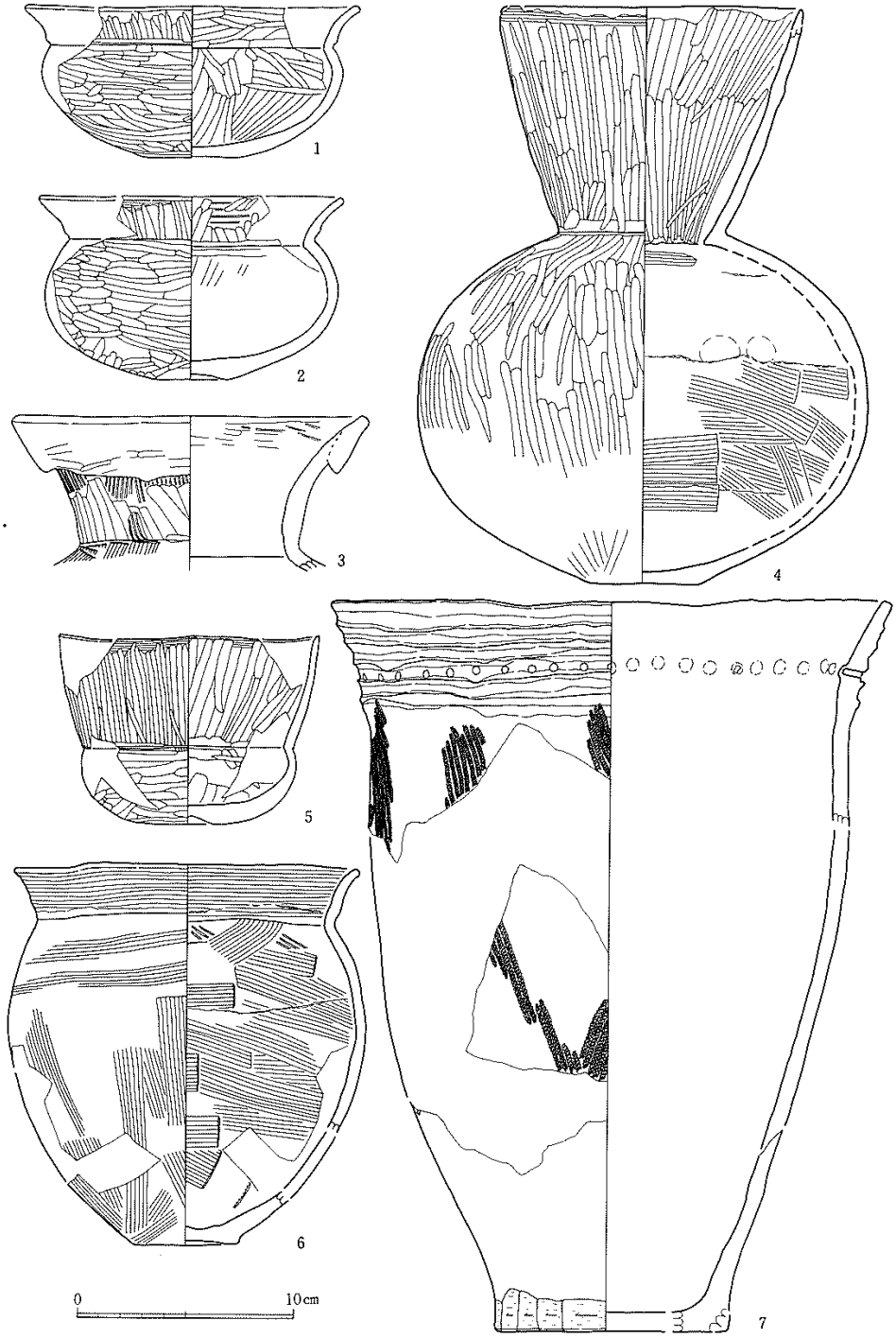
堆積土第 3 層の状況からこれらの溝が通路として使われた可能性が考えられる。

堆積土第 1 層の下面から第 2 層の上面で古墳時代前期の塩釜式と考えられる土師器と北大式土器が出土している(第 3 図)。土師器には坏、器台、壷、甕などがある。北大式土器は深鉢で、口縁部に並列微隆線文と突瘤文が施され、体部には斜交する帯縄文が施されている。

ＳＤ−262・263 溝はＳＤ−260・261 溝の内側にあり、それぞれ平行していることから、同時に機能していたと思われる。ＳＤ−262 溝はＳＤ−260 溝と約 2m、ＳＤ−263 溝はＳＤ−261 溝と約 1.5m離れている。いずれも断面形はＵ字形で、幅は 0.6m程であり、深さは最も深い部分で 0.3mである。底面は凹凸が激しい。堆積土は上層がしまりのない黒色土で、下層が地山ブロックを多く含む人為的に埋め戻された土である。



第 2 図　遺構配置図



第３図　ＳＤ260・261出土遺物

こういったことから、柱痕跡は確認できなかったが、これらの溝は柵あるいは塀の布掘りの可能性が考えられる。

ＳＩ-266 竪穴住居跡は 4 個の柱穴から推定したもので、壁や床面等は削平されている。位置関係からＳＤ-262 溝とは同時には存在できないと考えられるが新旧関係は不明である。柱間は東西・南北とも 3.5mである。

3　まとめ

調査の結果、Ｌ字形に巡る溝が検出された。一方、第 12 次調査では、ＳＤ-260・261 溝と同方向で堆積土の状況が酷似するＳＤ-273・274 溝が検出されている。これらの溝からは塩釜式の土師器が出土しており、ほぼ同時期のものと考えられる。したがって、この場所はＳＤ-260・261・273・274 によって方形に区画されていると思われる。規模は東西が約 28m、南北が約 20mである。内側の塀あるいは柵によって囲まれた部分は東西が 25m、南北が 16m程と推定される（第 2 図）。

こういった施設によって区画されるものは各地で発見されており、豪族の居館跡とされている（阿部：1990）。本調査で発見されたものも、第 12 次調査時に指摘されたように（菅原：1990）、豪族の居館跡と考えられよう。

また、方形に巡る溝からは塩釜式の土師器がまとまって出土しており、これらに北大式土器が共伴している。従来北大式土器は南小泉式に伴うとされてきたが(佐藤：1984)、今回塩釜式に伴うことが確認された。北大式土器の位置付けについてはさらに検討が必要であろう。

引用・参考文献

阿部義平（1990）：「宮殿と豪族居館」『古墳時代の研究』2

佐藤信行（1984）：「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究』1

菅原祥夫（1990）：「第 12 次調査」『伊治城跡－平成元年度発掘調査概報』

第18次調査区全景
（南より）

ＳＤ260溝
（西より）

ＳＤ261溝断面
（南より）

赤井遺跡（あかいせき）

調 査 要 項

遺 跡 名：赤井遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 67028）

遺跡記号：ＤＡＫ

所 在 地：宮城県桃生郡矢本町赤井字寺、照井中

発掘面積：434 ㎡（第 1 地点 96 ㎡、第 2 地点 158 ㎡、第 3 地点 180 ㎡）

調査期間：平成 3 年 12 月 16 日～18 日

調査主体：矢本町教育委員会

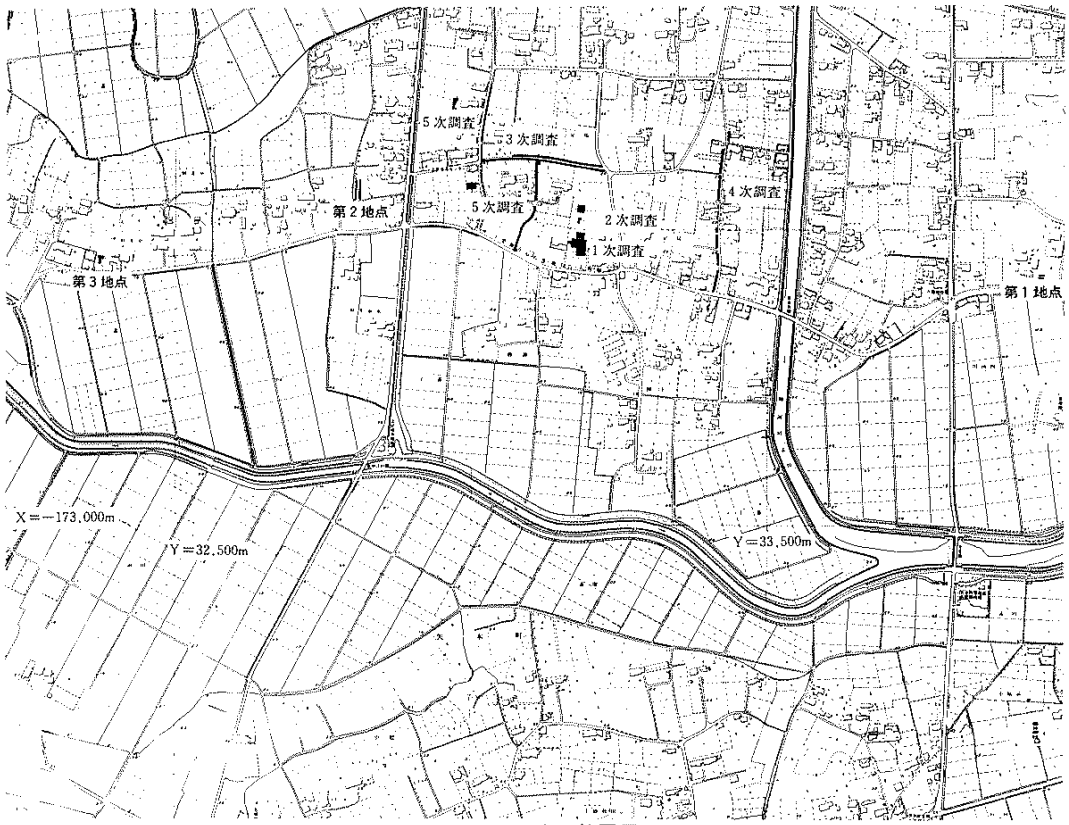
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 員：阿部博志、佐藤則之、佐藤憲幸

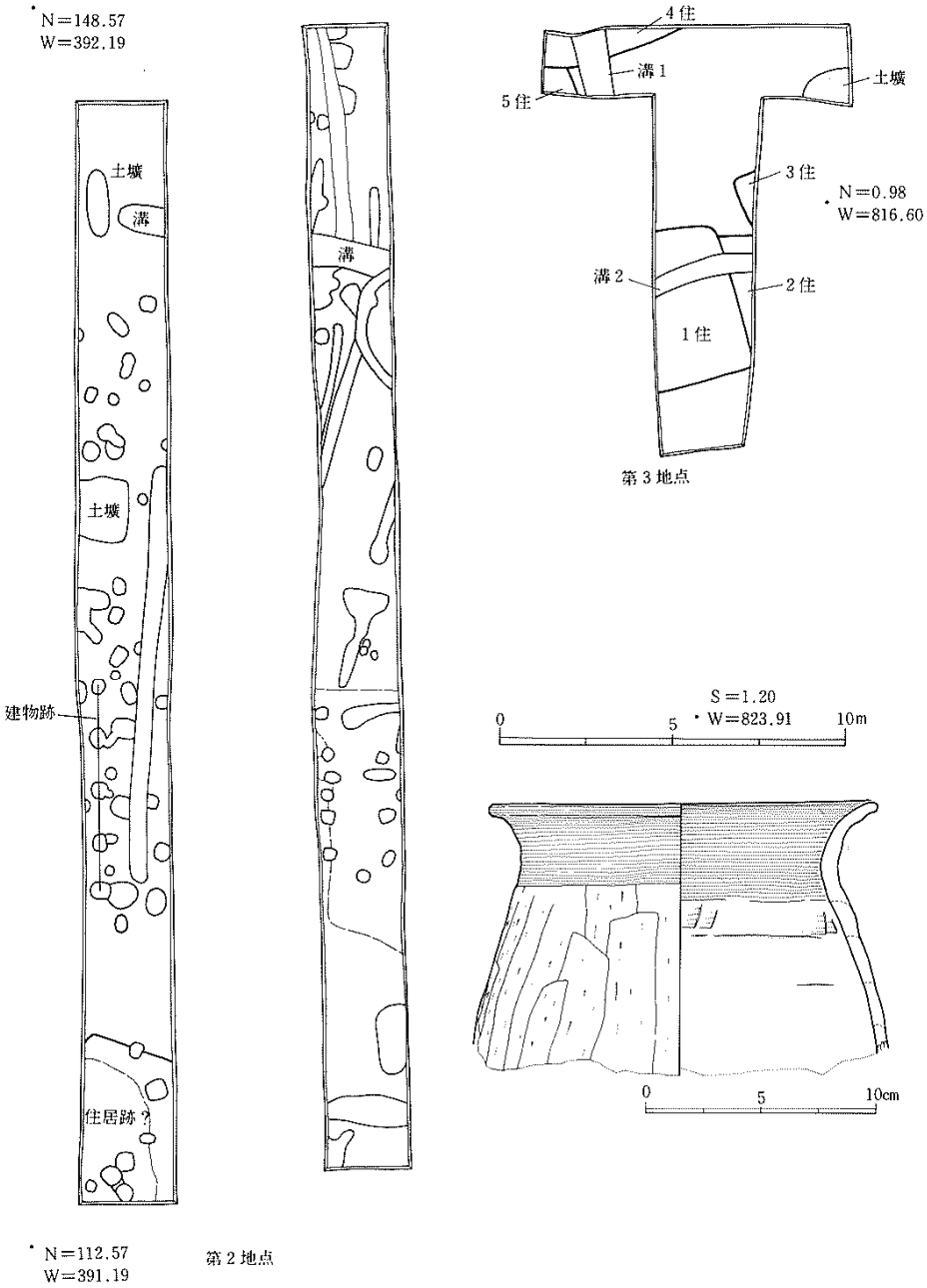
赤井遺跡（あかいせき）

赤井遺跡は矢本町赤井、通称上・中・下区赤井に所在し、石巻湾の単調平滑な砂丘海岸に沿って形成された浜堤群の中で最も内陸部にある浜堤上に立地している（第１図）。この浜堤は標高 3m前後の微高地でその周囲には沖積地が広がっている。現在はおもに宅地・畑地として利用されている。

本遺跡は古くから多くの研究者によって踏査が行われ多数の須恵器・土師器・平瓦、さらには土塁状遺構が発見されている。特に、平瓦、「舎人」とヘラ書きされた須恵器の出土や土塁状遺構が存在していることから古代の郡衙跡あるいは城柵跡の可能性が指摘されていた。その後、矢本町教育委員会による数次の本格的な発掘調査で掘立柱建物跡・溝跡・材木塀跡などが検出された。これらの遺構は古代官衙遺跡に見られる特徴を持つことから、赤井遺跡が牡鹿郡衙跡あるいは牡鹿柵跡であると推定されるようになった（三宅他：1987、



第１図　調査区位置図



第2図　第2・3地点遺構配置図と第1住居跡出土遺物

古川：1991）。

今回の発掘は個人住宅･蓄舎建設に伴う遺構確認調査である。調査は 3 地点で実施した。

第 1 地点（第 1 図）

遺跡東端に位置する住宅建設予定地を調査したが、耕作等によって地山面（黄褐色砂層）まで撹乱されており遺構・遺物等は発見されなかった。

第 2 地点（第 1・2 図）

官衙中心部分の西側の畜舎建設予定地を調査した。地山面は以前の畑地整備でかなり削平されていたが、表土下約 50㎝の地山面で多数のピット、溝跡、竪穴住居跡？等を検出した。ピット群の中には南北 4 間分の柱穴が確認されてたことから掘立柱建物跡の存在が考えられる。このほかのピット群は調査範囲が狭いためどのような建物を構成する柱穴かは不明である。

第 3 地点（第 1・2 図）

第 2 地点の約 400m西の住宅建設予定地を調査した。表土下約 80㎝の地山面で竪穴住居跡 5 軒、溝跡 2 条、土壙跡 1 基を確認した。住居跡は各点の居住間で重複し、調査区外に延びている。規模の明らかな 1 号住居跡は一辺が 9m程の方形をしている。堆積土上面でロクロ不使用の土師器甕が出土した。溝・土壙跡は調査区外に延びているため規模等は不明である。

遺構確認の際に第 2・3 地点から須恵器・土師器が平箱で 1 箱出土した。いずれも、細片で図化することができなかったが、観察結果から関東系の土師器坏やロクロ不使用の内黒土師器坏が僅かに出土している。このことから、今回発見された遺物はおおまかに古墳時代後期の栗囲式期から奈良時代の国分寺下層式期に位置づけることができる。

なお、今回検出された遺構は調査面積が狭いことや精査を行っていないため官衙施設に関連する遺構群か否かは特定することができなかった。

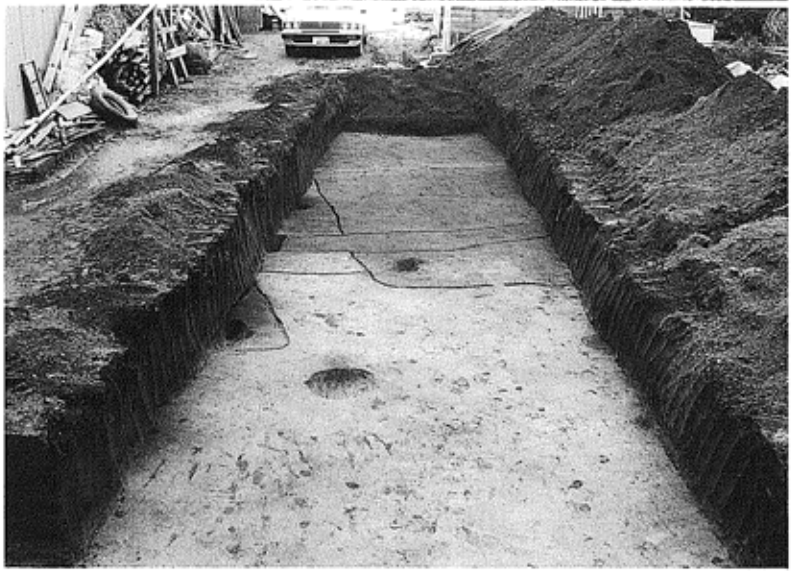
引用文献

三宅宗議他（1987）：「赤井遺跡－第1次発掘調査報告書」『矢本町文化財調査報告書』第1集

古川一明（1991）:「小松遺跡・赤井遺跡－牡鹿柵・郡衙擬定地」『矢本町文化財調査報告書』第2集

第２地点調査区
（南から）

第３地点調査区
（北から）



第１住居跡出土遺物